

協働の森づくり

一般試験研究（研究期間 平成 15 ～ 17 年度）

「道民参画による森林づくり活動運営支援システムの開発」報告書

平成 18 年 3 月

北海道立林業試験場



はじめに

近年、北海道では、「協働の森づくり」がキーワードとなり、森林づくりに道民の理解と自主性を促す施策が進められています。こうした動きを受け、北海道立林業試験場では、一般試験研究「道民参画による森林づくり活動運営支援システムの開発(研究期間:平成15～17年度)」に取り組みました。この研究は、道民の参加による森林ボランティア活動を具体的にサポートするため、優良な活動事例やアンケート調査などによって活動のモデルや運営のノウハウを提示することを目的にしています。本書はこの研究の成果をまとめた報告書です。本書の構成は以下の通りです。

第1章 団体・活動プログラム紹介

現地取材により、北海道内外で森林ボランティアに取り組む団体とその活動プログラムを紹介しています。さまざまな団体がさまざまな問題意識で森林ボランティアに取り組み、活動には森林づくりの作業ばかりではなく、森林・林業や活動運営に関する様々な学習会やレクリエーションも組み込まれています。

第2章 運営ノウハウ紹介

林野庁の調査によると、森林づくり活動では「資金の確保」と「参加者の確保」が主要課題となっています。道内外の団体への聞き取り調査をもとに、これらの課題への対応など、活動を運営するノウハウを紹介します。

第3章 課題を発見する

活動参加者、活動スタッフ、森林所有者を対象とするアンケート調査により、森林ボランティア活動の課題を考察します。

なお、本書は道民参加による森林ボランティアを1つのモデル(型)に押し込めようということは意図しておりません。活動の多様さ、柔軟さは市民活動の大きな持ち味です。そのため本書には、できるだけ多様な団体や運営手法を掲載してあります。

本書を参考に、掲載内容との相違点や類似点を発見することで、皆様の組織の個性を深め、組織にあったノウハウを選び取り、本書を活動運営の道しるべの1つとして役立てていただけると幸いです。

平成18年 3月

北海道立林業試験場
森林環境部 保健機能科
青柳かつら・佐藤 孝弘

目次

はじめに

第1章 団体・活動プログラム紹介

総説：森林ボランティアとは	2
北海道内事例	
チェンソー伐木技術研修：北の里山の会	4
クリーンウォーク：カッコウの里を語る会	6
風倒木処理・間伐：間伐ボランティア「札幌ウッディーズ」.....	8
下刈り・播種：石狩湾漁業協同組合女性部厚田地区	10
サクラマス放流・補植・食体験：いしかり森林ボランティア「クマゲラ」.....	12
間伐・枝打ち・学習会：コープさっぽろ 植樹みどりグループ	14
枝打ち・工作材料採取：北広島森林ボランティア「メイプル」.....	16
除伐・間伐・枝打ち：札幌南高等学校 学校林作業	18
草刈り・散策路づくり・炭焼き：空知森林サポーターの会	20
施設整備・草刈り・看板補修：レディース100年の森 林業グループ	22
北海道外事例	
フィールド案内・地ごしらえ：	
多摩の森大自然塾 鳩ノ巣フィールド連絡協議会	24
間伐：NPO法人 穂の国森づくりの会	26
間伐・枝打ち・薪割り：森林クラブ 横浜/丹沢	28
施設整備・紅茶・石けんづくり：NPO法人 埼玉森林サポータークラブ	30
拠点施設整備・クラフト：NPO法人 どんぐりネットワーク	32
岐阜県立森林文化アカデミー見学・ふどうの森での架線運搬体験：	
第13回全国雑木林会議'05inぎふ エクスカーション	34
下刈り・つる切り：NPO法人 樹木・環境ネットワーク協会 聚	36
堆肥づくり・竹林間伐・炭焼き：いばらき森林クラブ	38
草刈り・NPO設立準備勉強会：北本雑木林の会	40
補植・柵田管理：桜ヶ丘公園雑木林ボランティア	42

第2章 運営ノウハウ紹介

総説：森林ボランティア活動を運営する	46
人を集める	48
活動資金を確保する	52
フィールドを確保する	56
森林の管理目標を決める	60
情報を共有する	62
協力体制をつくる：協働	66
森林保全・利用を進める行政施策	70

第3章 課題を発見する

参加者の満足度を高める活動とは1	74
参加者の満足度を高める活動とは2	76
活動運営を評価する指標とは	78
指導者に求められる技術とは	80
森林所有者との連携を進めるには	82
補足：多変量解析結果	84

資料1 森林ボランティア参加者アンケート調査票

資料2 森林ボランティアスタッフアンケート調査票：活動評価

資料3 森林ボランティアスタッフアンケート調査票：重要度

資料4 森林ボランティア活動チェックリスト

資料5 札幌南高等学校学校林整備行事スタッフアンケート調査票

資料6 市民参加による地域森林管理に関する意識調査報告書：
森林所有者アンケート調査結果

引用文献 133

謝辞 135

1

団体・活動プログラム紹介



間伐作業（間伐ボランティア「札幌ウッディーズ」）

森林ボランティアとは

近年、地域の特性や要望にあったかたちで、森林を整備し、利用するために、市民参加による森林づくり活動が注目されています。この具体的な展開として、「森林ボランティア」という活動があります。森林ボランティアの定義はさまざまですが、ここでは「一般市民の参加により、造林、育林などの作業（森林や林業に関する普及啓発活動として行うものを含む）を、ボランティアで行うこと¹」とします。林野庁のまとめによると、こうした団体は全国に1,165団体あり、道内にも119団体が存在します（2003年10月現在）²。

森林ボランティア団体の活動領域は、実践を中心に多岐にわたります（図1）。この章では、森林ボランティアが道内外でどのように展開されているのかを紹介します。

実践（森林ボランティアの基本）

森林や自然環境に対して実際に作業を行うこと。森林整備、生息地の保全や復活、水源地の整備など。



普及啓発

活動参加者や社会一般に対して、森林や環境に対する意識、情報などをPRすること。シンポジウム、勉強会、観察会、募金活動など。



いろいろあります！ 森林ボランティアの活動領域



林産物の活用

地域の木材を利用した家づくり、間伐材の有効活用など、森林資源の活用に取り組むこと。

調査研究

森林生態系や生物種、森林管理方法、森林と社会の関係性などについて調査研究を行うこと。

政策提言

政府や自治体などが取り組むべき森林政策の方法、進路について提言すること。

他団体の活動支援

他の森林ボランティア団体に、情報、人材などを提供すること。

図1 森林ボランティアの活動領域

:(上野ら、2002)を参考に作成。

* 1 (社団法人国土緑化推進機構, 1998)より。この定義は、森林組合などが業として営む行為を除き、漁協や社会貢献活動として企業の構成員などが自発的に行う森林づくりを含むゆるやかなもの。

* 2 対象は造林・育林作業、林内の清掃などを自発的に行う団体。普及啓発のみを行う団体は除く(林野庁, 2004)。道内団体の数値は北海道庁による調査。2006年現在はこの数値を上回る団体が存在する。

森林整備に関する用語*3

人工造林

人為的な更新(伐採して樹木のなくなった場所を、樹木の生えた状態にする)手段によって目的とする森林を造成すること。

人工造林の作業の流れ(植え付け造林法)

地ごしらえ:

人工造林の準備のため、林地にある伐採木の枝条、葉や雑草木を取り除き、苗木を植え付けしやすい状態に整理します。

植え付け:

苗畑で養成した苗木を造林地に植え付けます。春植えと秋植えがあり、苗木が開葉する前の春季に行う春植えが一番安全とされます。

下刈り:

植栽した苗木の成長を助長するため、雑草や灌木を刈り払います。植栽後一定期間(苗木が雑草木の1.5倍の高さに成長するまで)植栽木の成長最盛期(6~8月)に行います。

つる切り:

幹をしめつけたり、光を遮るといった害を防ぐために、林木に巻き付いたツル類を切り離します。

除伐:

下刈り終了後、植栽木の成長を妨げる侵入木を切り捨てます。植栽木の枝葉が繁茂して林冠が閉鎖する(互いに近接して光が遮られる)までの間に、植栽木であっても被害木、不良木を切り捨てます。

枝打ち:

林冠が閉鎖して下枝が枯れ始めてから以後、枯れ枝や生き枝の一部を切り落とします。主に節のない完満な(幹の上部と下部の直径の差が小さい)良質材の生産のために行い、林内の風通しをよくし、森林火災防止、病虫害の防止なども目的とします。

間伐:

林の立木密度を下げるために木の本数を減らします。間伐は、形質良好な残存木の成長を促進することが主要な目的です。林冠の閉鎖後、数年が経過すると木の直径成長は低下してくるので、形質良好な木の成長を阻害している木や形質のよくない木を主体に伐採します。

なお、アマチュアによる主伐(収穫のための伐採)は危険を伴い困難とされます。

天然更新

植栽などによらず自然に散布される種子や樹木自身の繁殖力や再生力による更新。

萌芽更新:

クヌギ・コナラ林などで行われる天然更新の1つで、伐採後に切り株から成長を始めた萌芽を育てて更新する方法。その後は、萌芽した枝の中から発生位置のよい優勢なものを1株に3~4本残し、残りは「芽かき」をします。薪炭材やシイタケ原木の生産では皆伐萌芽更新が一般的で、10~15年のサイクルで皆伐が繰り返されてきました。

里山林

集落地近くに広がり、薪炭林として堆肥用の落葉、キノコ、山菜の採取などを通じて、地域住民によって維持、管理されてきた森林のこと。落葉広葉樹林、アカマツ林のほか、スギ、ヒノキなどの人工林を含む様々な森林から構成されています。



地ごしらえ*4



植え付け*4



下刈り*5



間伐*5



里山林での活動*6

*3 (北海道林業普及協会, 2001; 東京農工大, 1987; 文部科学省, 1993)

*4 いしかり森林ボランティア「クマゲラ」

*5 間伐ボランティア「札幌ウッディーズ」

*6 ふいどうの森クラブ(伐採木を利用したキノコ栽培)

チェーンソー伐木技術研修



北海道札幌市清田区

§ 北の里山の会

2000年、都市近郊林保全に関するワークショップに携わった造園・緑地計画分野のコンサルタント有志を中心に発足。「大人の林間学校」をテーマに、森林の手入れや観察、木工、野外料理などの「森での遊び」を通じて、森との上手なつきあい方を見つけていくことを目指している。会員数90名(2004年度)。

チェーンソーによる伐木を基礎から習得

激しい風雨は昨夜でおさまり今日は朝からさわやかな快晴です。
有明^{ありあけ}のフィールドでは、造林地に混じる広葉樹の葉が赤や黄に色づき始めています。今日は会主催「第1回技術研修会」で、札幌市森林組合から講師を招き、チェーンソーの扱い方、伐木の方法などを学びます。これまで会では、伐木は手鋸を使うほか数人のメンバーが経験的にチェーンソーを使用していました。今回基礎から技術を習得して皆が安全にチェーンソーを使用できるようにして、活動の幅を広げたいとこの研修会を企画しました。今日は会員以外の参加者もあり、昼食に芋煮会のお楽しみもあります。

会場は林内の散策路につながる広場です。挨拶の後、早速資料が配られ、講師増田さん、遣水^{やりみず}さんのお二人より、チェーンソーのエンジンは使用者皆が同じ方法で始動させること、キックバック^{*2}や待避遅れの危険、かかり木処理は確実にすることといった要点が解説されます。ついで伐木の実演があり、実技研修として全員がチェーンソーで玉切りを経験します。

簡単そうに見えた操作ですが、緊張した初心者はアクセル不足のままチェーンソーのバーを木に押しつけてしまったり、機械を十分保持できずバーがぐらぐらしてしまったり。しかし助言を受けながらも、自分の手でたちまち木が鋸断できることにはちょっとした感動があります。安全に留意しながら、回数をこなして徐々に機械に慣れることが大切なようです。一方、経験者はどんどん円盤をつくります。丸太の小口にチェーンソーで放射状に切れ目を入れてカラマツのキャンドルもできあがりました。

日程 : 2002年10月11日

挨拶・日程確認	10:10
研修	10:15
昼食	12:50
ベンチづくり	13:35
アンケート記入	14:30
次回連絡	14:45
解散	15:00

参加者14名

当日の分担・配置

会員：研修、ベンチづくり
代表：進行、日程確認、出欠確認
講師：札幌市森林組合（技術指導、機械・道具調達）

使用した主な道具、物品

鋸、鉋、チェーンソー、木登り用具、目立て用具、調理用具



ツルを残すと伐倒方向が定まります。



玉切り作業の実技研修。



カラマツキャンドル。

* 1 有明おくいずみ都市環境林。市有林6.3ha。会では主に40年生カラマツの間伐、ササ刈りなどを実施。

* 2 走行中のソーチェーンが木材や障害物に当たってガイドバーが跳ね上げられること（労働省，1998）。

チェーンソーの刃の目立て

安全で能率良い作業のために重要なのがチェーンソーの点検と整備です。今回はソーチェーンの目立てを教えてくださいました。目立てではチェーンソーを固定し、丸やすりは、やすりと手、腕が直線になるようにもち、カッタに密着させてまっすぐふらつかないように押します。刃をこする回数を決めて全てのカッタを均一に研ぐことがポイントです。目立ての終わったチェーンソーで再度玉切りを試みたメンバーからは「刃の食い込みの感じが全然違う」との声もあがります。

今回は高所の枝打ちを行うための枝打ち鋸や木登り用具の紹介もありました。木登りでは、交互に腰と足に体重を移動させることで幹に取り付けたベルトをずらしシャクトリムシのようにして上へ登ります。「意外と楽だね」「美容体操にもなりそう」とメンバーはすぐにコツをつかみ、すいすいと木に登っていきます。

昼食は山形県から取り寄せた材料で芋煮会です。会の野外料理はレパートリーも幅広く、活気ある活動に欠かせないものとなっています。皆で焚き火を囲み具沢山のお汁を味わい、和やかな時間が流れます。

午後のベンチづくりでは、講師のお二人に丸太をチェーンソーで2つ割りにしてもらい、メンバーは脚部となる材の玉きりを行います。できたベンチを焚き火の四方に配置すると、広場はすっかり憩いの空間に！浜田久美子さんを迎える次回の例会にむけ、これで活動場所の準備もばっちりです。最後に次回の準備を確認し、活動は終了しました。



「やすりはまっすぐ押して」「ピリヤードの感覚だね」



木登りをして枝打ち体験。

浜田久美子さんを迎えて

会では当年11/30～12/1に、フリーライターの浜田久美子さんを迎えて講演会と例会を行いました。講演会では「森の体験を日々のものにする」をテーマに、浜田さんの実践や取材に基づいて、都市住民が山村の森林整備に取り組む意義や鎌倉の谷戸での野外保育の事例が紹介されました。

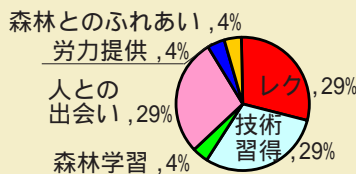
翌日のフィールド活動では、皮むき器で樹皮を剥き今回つくったベンチの仕上げをしたり、技術研修会の成果を試して間伐をしたり。浜田さんも現場のいでたちで参加し、メンバーと一緒に作業を進めました。お昼は北海道名物のジンギスカンで、にぎやかに交流会を行いました。



樹皮を剥く浜田さん（中央）

参加者の声から

参加目的は（複数回答2,N=24）？



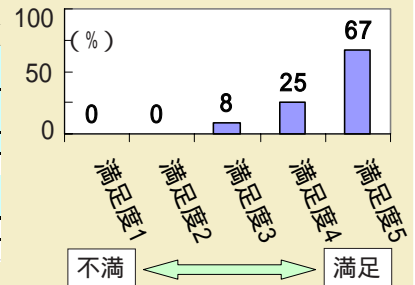
「道具を増し、作業の効率化を図りたい」
 「初めてチェーンソーの扱いを教わり勉強になった。より高度な技術を習得したい」
 「指導できる人材をもっと育てたい」

当日はレク、技術習得、人との出会いを目的とする参加者が多く、8～9割の参加者が中程度より高い（4以上）達成感、満足感を得たことがわかります。

今日の目的達成度は（同左）？
 [5段階評価]

項目	達成度	人数	(%)
レク	4	2	8
技術取得	5	5	21
	4	5	21
	5	2	8
森林学習	4	1	4
人との出会い	3	2	8
	4	2	8
	5	3	13
労力提供	2	1	4
森林とのふれあい	2	1	4
合計		24	100

今日の満足度は（N=12）？



目的達成度4以上比率：83%
 当日満足度4以上比率：92%

クリーンウォーク

§ カッコウの里を語る会

1998年、道路の拡幅問題をきっかけに自然環境保全に関心を持つ^{ときわ}常盤地区住民有志によって発足。自然や環境を考えたまちづくりを目的に、当地区周辺の森や川に焦点をあて、協定林(国・市)での育林作業、登山などのイベント、地区内の学校教育と連携した環境教育などを実践。会員数45名(2004年度)。



北海道札幌市南区

芸術の森周辺の森をきれいに

クリーンウォーク(ゴミ拾い)は、札幌芸術の森周辺の森林に見られる大量の不法投棄を何とかしたいと、会が発足して最初に取り組んだ行事です。以来、「芸術の森クリン・クリン・ウォーク」の名称で毎年継続し、今日は5周年記念行事にあたります。今日は同地区で活動する「アートパーク生ゴミ減らし隊」、芸術の森の職員の皆さんも作業に参加します。開会式では、会長から「ゴミのない森林は美しいもの。ウォークを通じて環境学習の輪をひろげていきましょう」と挨拶があり、事務局からは「自動車に十分注意して安全に作業を進めてください」といった呼びかけがあります。今回は、昨年のウォークが雪で中止となったため2年ぶりの開催で、ゴミの状況が気になるところです。子どもも大人もビニル袋を手に出発です!

コースは札幌市立高専前から芸術の森3丁目まで、芸術の森を取り巻く道路約3kmです。メンバーは縦列になって、道路とその沿線の森林のゴミをくまなく拾います。出発地付近で見つかるのは、主にペットボトルや缶、食べ物の包装紙や吸殻など街路のゴミです。歩道脇の芝生や、車道と歩道間の落ち葉の吹き溜まりの中にこれらのゴミが隠れています。

「あったぞー!」「そんなに集めて、やっぱり目がいいねー」とゴミ拾いに対するメンバーの意気込みには、ちょっとした競い合いの雰囲気すらあります。「まだゴミを1個も見つけてない」との子どもの声に、「ゴミはないほうがいいんだよ」とお母さんが答えます。やがて道路の両脇に民家が途切れ、コースが森へと進むにつれ、袋に詰めた空き缶、ゴミの詰まったダンボール箱など、計画的に梱包、投棄された大きなゴミが増えてきます。

日程

: 2003年10月12日

開会挨拶・日程確認	9:40
作業開始	9:50
休憩	11:25
作業再開	11:35
アンケート記入・休憩	12:15
閉会挨拶・感想発表	12:35
解散	12:40

参加者27名

当日の分担・配置

会員：ゴミ拾い

役員：進行、日程確認、物品調達、休憩準備(お茶など運搬)、市清掃局への連絡

使用した主な道具、物品

ゴミ袋、火鉢、受付テーブル



紅葉の美しい森にもゴミが隠れています。



コースが森に入るとゴミが増え始めます。

「ゴミ銀座」の大量のゴミを掃除

会が「ゴミ銀座」と呼ぶ芸術の森の裏手の界隈は、道路の片側が天然林の急傾斜地になっています。不法投棄をする人は、待避所や路肩が広い所に駐車をして、運搬してきたゴミを沢へと投げ落とすらしく、こうした箇所には特に多くのゴミが見つかります。林内からはビデオデッキや冷蔵庫などの家電、筆筒などの家具、タイヤなどのほか、事業者の投棄と思われる様々な資材も見つかります。「いやぁ、すごいわ」と、メンバーは驚きと犯人の無責任さを口にしつつも、道路と沢を往復して次々とゴミを引き上げ、市の清掃局が収集しやすいように路肩にまとめます。大量の飲料容器、雑誌、ビニルなどの小さなゴミも同様に袋にまとめます。結構な運動量に、メンバーの額には汗がにじみます。

路肩に連なるゴミの山はどうやら一昨年よりずいぶん多いようです。「それでもこれだけのゴミを取り除けたと思うと逆に爽快」「不法投棄禁止の旗はもっと目だったほうがいいね」といった声もあがります。

予定時間を1時間近く超過して作業は終了。子どもたちも今日の体験でゴミを拾う習慣が身につけ始めたようです。ゴミのない森、まちづくりに向けて、地道な実践の大切さを皆で実感しあった行事となりました。



パソコンのディスプレイも。



集めたゴミの山は10カ所以上。

常盤の歴史に触れる：元敷長菅原正二さんの講演会を開催

会では取り組みの原動力となる郷土への愛着を深めるため、常盤地区の歴史や文化に触れる活動も大切にしています。森林資源に恵まれていた当地区は古くから林業が盛んで、多くの人々が農業の傍ら、家計を補うため造材現場で働いて収入を得てきました*1。

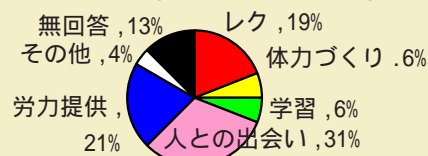
今回のクリーンウォークの前日は5周年記念行事として、林業の熟練者である菅原正二さん(91歳：取材当時)を迎えて講演会を開催しました。林業では、玉切りを終えた丸太を山の斜面から土場まで運ぶ作業を数出しといいます*2。菅原さんはこの数出し作業の指揮をとる敷長を務めていました。当日は馬を使った運材作業の様子や山頭とのやりとりなど、興味深いお話をたっぷりとうかがうことができました。



お歳を感じさせない熱弁ぶり。さすが山仕事のベテランです。

参加者の声から

参加目的は(複数回答2,N=48)?

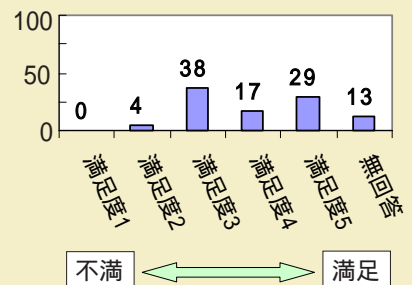


「不法投棄への認識は大人になってからでは遅すぎる。小学校との連携が必要」
 「今日の活動には満足。しかし市民、行政(含警察)が一体となり厳しい措置を求めたい」
 「不法投棄の実態を確認。参加の意義があった」
 当日は人との出合いを目的とする回答者が最多で、約半数が高い充足感を得ていました。

今日の目的達成度は(同左)? [5段階評価]

項目	達成度	人数	(%)
レク	3	3	6
	4	3	6
	5	3	6
体力づくり	3	2	4
	4	1	2
	5	1	2
学習	4	1	2
	2	1	2
	4	1	2
人との出会い	3	6	13
	4	6	13
	5	2	4
労力提供	3	1	2
	4	3	6
	5	5	10
環境美化運動	4	1	2
職場の環境化策	5	1	2
無回答		8	17
合計		48	100

今日の満足度は(N=24)?



目的達成度4以上比率: 52%
 当日満足度4以上比率: 56%

*1 札幌市南区芸術の森地区町内会連合会HP「芸森昔話」より。

*2 こうした集材作業は、他にも木寄せ、小出しなど様々な呼び方がある(林ら, 1980)。

風倒木処理・間伐



北海道札幌市南区

§ 間伐ボランティア「札幌ウッディーズ」

2001年、「森づくり技能研修会」の研修生を中心とする有志によって発足。「手入れ不足森林の間伐」を主旨に、チェーンソーなどの機械を積極的に使用した育林作業を活動の中心に据える。作業体験の指導、ツリー配布といった地域の子供達への教育活動や活動事例発表などの普及活動も実践。会員数58名（2004年度）

台風の爪痕残る林内で風倒木処理

今日は台風18号の通過直後の活動日です。当初、フィールド*1へ至る林道の通行の可否が心配されましたが、現地を気にかける会員が自主的に事前に付近を踏査。林道脇には倒木が多数見られるものの通行には支障がないこと、フィールド林内には倒木や折損木が見られること、作業時には足場や頭上への注意が必要なことなどが会メーリングリスト上で報告されました。

この情報を受け、今日は現地の被害状況の確認と風倒木処理、間伐作業を進めます。朝の打合せではメンバーを4班に分けて、特に安全に留意しながら作業を進めることを確認、また今日は会で購入したドイツ製のチェーンソーの使い初めの日でもあります。準備体操で筋肉をほぐしたところで現地へ出発！

到着した林内には根がえった木や幹折れした木、折れたり裂けたりした枝が散乱し、前回の活動時の静かなカラマツ林とは違って変わった無惨な光景がひろがっていました。目の当たりにした自然の猛威に畏怖を覚えつつも、メンバーは気を取り直して早速処理作業に取りかかります。



林内は被害木が散乱。



根がえりしたカラマツを鋸断。

道庁前庭の風倒木処理に協力

大型で強い台風18号は、当年9月8日に北海道の西海上を北上し、全道広範囲の森林や緑化樹木に幹折れ、根がえり等の被害を発生させました。この時、札幌市の道庁前庭では1,036本の樹木のうち、141本に被害が発生しました*2。当会は、道の要請を受けて9月26日に、この道庁前庭の風倒木の玉切り、市民への配布作業に協力しました。当会では、会と個人所有を合わせ8台のチェーンソーを活動で使用でき、会員6名が「チェーンソー特別教育」を修了しています（2004年）。この日の作業は面目躍如といった格好で、道からは「札幌ウッディーズなしではこの行事はできなかった」との感謝の言葉を頂きました。



市民の希望のサイズに材を切断。

日程		：2004年9月11日
挨拶・日程確認・体操		10:00
移動		10:03
作業開始		10:13
移動		12:00
昼食		12:10
移動		13:10
作業再開		13:18
移動		15:00
アンケート記入		15:10
振り返り・次回連絡		15:20
解散		15:28

参加者13名（会員11、指導スタッフ2）

当日の分担・配置
 会員：風倒木処理、間伐
 スタッフ：役員；進行、日程確認
 石狩森づくりセンター；道具調達支援、技術指導

使用した主な道具、物品
 鋸、鉋、チェーンソー、矢、トビ、フェリ
 ングレバー、ロープ、ワイヤ、ウィンチ

*1 札幌市黄金湯都市環境林、1.8ha。カラマツ61年生。

*2（道立林試，2004）

林床の倒木や落枝はチェーンソーや鋸で短く切断し、数力所に運搬して整理します。枝が絡まり中空で傾いたままの倒木は、ロープとウィンチを利用して、かかり木処理の要領で慎重に幹を動かして着地させ、完全に伐倒します。これならばいつもの間伐作業と勝手は同じと、メンバーはホイッスルとかけ声を飛び交わせながら、次々と処理を進めていきます。新品のチェーンソーの調子もなかなか良好、多量の鋸断には、やはり機械の機動力が威力を発揮します。

被害木は細い木とは限らず、当フィールドではもっとも太いクラスに当たる直径40cm程のカラマツが根がえりをしている状況も見られました*3。危険度の高い倒木を処理し終えたら、今回台風で損傷した木を対象木に置き換えるかたちで間伐作業*4を継続します。

今日は、会の技術指導にあたる石狩森づくりセンターと札幌市森林組合の職員が、風倒木被害関連の業務のため中座、欠席する中で活動を実施しましたが、市民ボランティアのチームワークで無難に作業をこなすことができました。会は発足して4年目、「会の技術が一人歩きできるレベルに達してきた（会長の言葉より）」手応えを感じた活動日となりました。



林床の倒木を整理。



ウィンチを使用した伐倒。

ナスの差し入れに感激：ご近所との交流

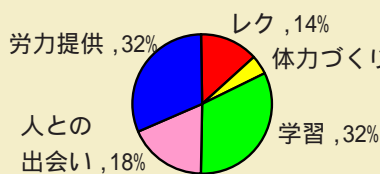
フィールドに着くと、林内の広葉樹が隣接する農地に大きく倒れこんでいるのが見つかりました。このままでは来年の農作業に支障がありそう、と会長ら1つの班はこの倒木の処理と運搬に取り組みました。これに気づいた農地の所有者さんが、午後になって作業中のフィールドを訪れ、倒木処理のお礼として、収穫したナスをメンバーの皆で分け合えるよう山ほど差し入れてくれました。所有者さんとは活動日に時折挨拶を交わすなど以前から顔見知りではありましたが、このように交流し、謝意を頂いたのは初めてのことです。



農地の倒木を整理。

参加者の声から

参加目的は（複数回答2、N=22）？



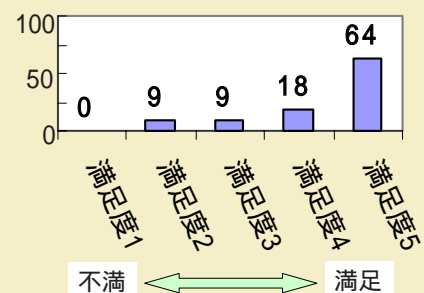
「台風の影響はすごい、自然の力は偉大」
 「風倒木処理作業が無事終了して良かった」
 「台風一過の惨状に自然のエネルギーに驚く、倒木整理後の風景と気分のすがすがしさ！」

当日は、学習と労力提供を目的とする参加者が多く、各目的について参加者のほぼ全員が達成できたとしたこと、8割が高い満足感を得たことがわかります。

今日の目的達成度は（同右）？
 [5段階評価]

項目	達成度	人数	(%)
レク	2	1	5
	4	1	5
	5	1	5
	5	1	5
	5	1	5
体力づくり	5	1	5
	4	5	23
	5	2	9
	4	1	5
	5	3	14
人との出会い	2	1	5
	4	2	9
	5	4	18
	5	4	18
	5	4	18
合計		22	100

今日の満足度は（N=11）？



目的達成度4以上比率：91%
 当日満足度4以上比率：82%

- *3 18号台風による森林被害の要因を解析した苫小牧市の調査では、南より斜面や尾根筋などの解放地といった立地、そして針葉樹は広葉樹よりも台風の被害を受けやすいこと、また、美唄市防風林の調査では、針葉樹は広葉樹よりも、そして直径が太く（樹高が高く）なるほど風倒被害が起きやすいことがわかった（2004、道立林試）。
- *4 当フィールドは、現況が林分密度540本/ha、材積276m³/haであった標準地調査の結果を踏まえ、目標を450本/haとして、二又木など形質の悪いカラマツ、広葉樹の間伐を計画（60ページ参照）。

下刈り・播種



北海道石狩市厚田区

§ 石狩湾漁業協同組合女性部厚田地区

1999年、全道で展開されていた「お魚殖やす植樹運動」の一環として植樹活動を開始。コンブなど海産物の加工・販売事業の傍ら、植栽した樹木の手入れを行い、海を汚さない石けん使用の推進、地域の子ども達との清掃活動など環境に配慮した取り組みも実践。部員数44名（2004年度）。

植栽場所の手入れ

厚田地区は通年漁があり、女性部では多忙な本業の合間を縫って活動日を設けています。森林づくり活動は年に一度の取り組みですが、部の行事として定着しており、今年も厚田公園ふるさと親水広場には多くのメンバーが集まりました。今日の活動は、植栽場所*1の下刈りと播種作業体験です。

公園の一角、市有林（旧厚田村有林）に隣接して女性部の植栽場所があります。

苗は植栽して5年目、中には背丈を越す程の高さに成長している木もみられますが、林床には、イネ科草本がびっしりと繁茂しています。

下刈りに鎌をふるうメンバーの背中には、北海道の9月には珍しく、夏を思わせる日差しが照りつけます。



開始の挨拶。
漁箱を持参してメンバーが集合。



小鎌で手際よく草を刈りとります。

「お魚殖やす植樹運動*2」

森林と海とのつながりに着目した北海道漁協女性部連絡協議会が、1988年に開始した植樹活動。「100年かけて100年前の自然の浜を」取り戻すことを目的に、全道各地の漁協女性部では、森林由来の有機物の重要性など森林が漁場環境保全に与える効用について学ぶ研修会と合わせ、地道な植樹を継続しています。活動は、北海道森林組合連合会、道林務部、森林管理局といった林業関係者との連携の上、コープさっぽろ、新聞社、地域住民などの幅広い参加を得て実施してきました。その成果は、2003年末までに60万本を越す針葉樹・広葉樹の植栽実績となっています。



記念の森植樹祭（当別町）

日程 : 2004年9月16日

挨拶・日程確認	13:35
下刈り作業開始	13:40
休憩・道より全国植樹祭PR	13:55
播種作業開始	14:05
アンケート記入	14:20
挨拶・解散	14:30

参加者28名（部員21、スタッフ5、ゲスト2）

当日の分担・配置

部員：下刈り、播種

スタッフ：

石狩湾漁業協同組合厚田地区；事務局
石狩支庁経済部林務課；組織間連絡調整
石狩森づくりセンター；進行、道具調達、
技術指導

使用した主な道具、物品

鎌、スコップ、漁箱、ポット、種子（管内
山林より採取）

* 1 市有地0.02ha。1999年度にトドマツ、シラカンバ、ミズナラ各20本を植栽し、植樹・育樹活動を開始。

* 2（国土交通省HP；齋藤，2003；柳沼，1993，1999）

* 3 採取した種子から鱗片の破片や枝葉等の混合物、しいな（内容物のない種）や虫害種子などの不良種子を除去すること（文部科学省，1993）。

播種作業を体験

播種作業は女性部にとって初めての体験です。「蒔きつけ前に種子は水や風を使った精選^{*3}が必要なこと」、「ナラ類のドングリは横にして地面から3cmくらいの深さに2個ずつ埋めること」といったポイントを、石狩森づくりセンター職員が資料やパネルを使って解説してくれます。今日はチシマザクラ、エゾヤマザクラ、ミズナラ、コナラ、オニグルミ、イチヨウ、クリ、トドマツの8樹種を使用、これらの種子は既に精選を終えています。

土は、窒素分の豊かなケヤマハンノキの根元の土を使います。メンバーはポットに土を盛り、思い思いの種子を選んで埋めていきます。播種を終えたポットは漁箱に収めて持ち帰り、自宅で手入れをして成長を見守ることになります。苗木が上手く育てば、また他所への植栽に役立てることが出来ます。

「お魚殖やす植樹運動」は、「1本でも、休み休みでも」気負わずできることから森林づくりを進めようという息の長い取り組みです。当女性部では現在は新しい植栽場所の確保が難しいため、育樹作業を主眼に活動しています。なかなか大きなことはできませんが、例えば商工会広報へ掲載されるなど、女性部の取り組みが村内でも認知され、地元の中学校が植樹行事を始めるなど、地域の中で森林づくりに取り組む動きが増えてきています。



播種のポイントを解説。



土は事前に採取場所を選定しておきます。

みんなで作る第58回全国植樹祭

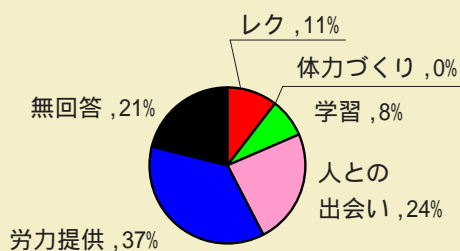
2007年に北海道で開催される第58回全国植樹祭は、「道民との協働：みんなで作る」をコンセプトの1つに掲げています。式典会場の苫小牧東部地域だけでなく北海道全体を植樹祭の舞台として、道内各地で道民が種から苗木を育て、植栽する取り組みが行われます。これを受け、今日は播種作業を体験するプログラムが組まれました。



大会テーマとシンボルマーク^{*3}。

参加者の声から

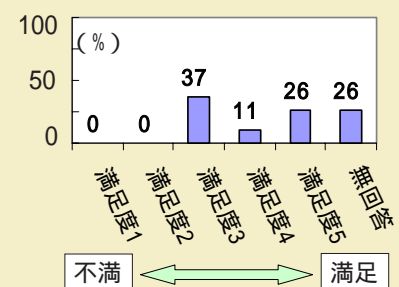
参加目的は（複数回答2、N=38）？



今日の目的達成度は（同左）？
[5段階評価]

項目	達成度	人数	(%)
レク	5	2	5
	4	1	3
	3	1	3
人との出会い	5	1	3
	4	1	3
	3	2	5
労力提供	5	2	5
	4	1	3
	3	2	5
無回答		28	74
合計		38	100

今日の満足度は（N=19）？



無回答が多いものの、当日は労力提供を目的とする参加者が最も多かったこと、参加者の約4割が高い（4以上）満足感を得たことがわかります。

目的達成度4以上比率：18%
当日満足度4以上比率：37%

*3 第58回全国植樹祭HPより。

サクラマス放流・補植・食体験



北海道石狩市五の沢・浜益区

§ いしかり森林ボランティア「クマゲラ」

2003年、地域課題検討委員会*1での討議を経て進められた森林ボランティア募集によって発足。「仕事7：遊び心3」をモットーに、地域の山林に手を入れて美しい森にする整備作業や、森に学び、森の恵みを体験する活動を実践。自然の大切さを市民へ伝える講習会も積極的に開催。会員数110名(2005年度)。

そか 遡河回遊魚サクラマスを卵埋没放流

今日の活動は、サクラマス受精卵の埋没放流、「21世紀市民の森」*2への山取苗補植、ドングリ食体験と盛りだくさんです。会が拠点施設として利用する五の沢ふれあい研修センターには、メンバーが車を乗り合わせて次々と集合*3しました。

放流に先だって、石狩森づくりセンターの職員より「サクラマスは河川渓流域での生育期間が長く、森林との関わりが深いこと*4」。「受精卵の放流は経費や運搬時の手間が少ない利点があること」といった解説と手順や道具の説明があります。

放流場所の浜益区濃昼川に到着すると、まずは身支度。手袋をはめ、河水が入らないよう長靴上部をテープでしっかり留めます。グループに配布された受精卵は、孵化を目前にして目玉が動いているようにも見えます。準備が整ったところで、道具と受精卵を手に、放流に適した場所を探して渓流内を移動。川底は滑り、石に足を取られて今にも転んでしまいそうです。

適地が見つかったらグループで川底をスコップで掘り、10cm程の小石を集めて敷きつめます。これが産卵床となるので中央に塩ビ管を立てて周囲に小さめの小石を積み上げます。管に卵をそっと流し込んだら埋没はほぼ完了、管を静かに外してすぐに小石のみで蓋をします。この時に卵を潰さないこと、砂を混ぜて卵を窒息させないことがポイントでしたが、難しい！

産卵床にはコップ1杯
約1,000粒の卵を埋没。

そっと卵を流し込みます。

日程 : 2004年11月6日

挨拶・日程確認	9:30
放流の概要説明	9:35
浜益区へ移動	9:55
埋没放流	10:40
五の沢へ移動	11:35
昼食	12:15
移動	13:00
山取苗採取・補植	13:15
移動	13:55
食体験	14:05
来月の打ち合わせ	15:00
アンケート記入	15:25
解散	15:35

参加者22名(会員18、指導スタッフ4)

当日の分担・配置

会員：放流、山取苗採取・補植、
コヒー・茹でドングリづくり
スタッフ：役員・事務局；進行、日程確認
石狩森づくりセンター；受精卵・道具
調達、技術指導

使用した主な道具、物品

スコップ、ゴム手袋、塩ビ管、受精卵
(15,000粒：道立水試より)、鍬、調理
器具(コップ、鍋、フライパン、ポット、コヒーミル等)、
ミズナラ・ツラジ(道立水試より)

*1 石狩市林務担当、市内の農協・漁協役員などを委員に石狩森づくりセンターにより設置。森林率が約14%と少ない石狩市(2003年当時)では、市民の森林への関心を高め、市民の参加によって森林を守り育てることが重要とされた。

*2 市有林0.01ha。当会は当地の地持えを受託し、10月の植樹祭にも参加。ナナカマド、ミズナラ各30本植栽。

*3 会では会員の出席率を高め、駐車スペースを減らすため、集合、移動時にはマイカー乗りあわせを推奨。

*4 河畔林には、日陰をつくり水温上昇を抑える、魚の餌となる昆虫類やその昆虫類の餌となる落ち葉などの有機物を供給する、隠れ場をつくるといった、サクラマスの生育にとって重要な働きがある(長坂, 1999, 2002)。

広葉樹の山取苗を補植

五の沢へ戻り、午後は「21世紀市民の森」への補植作業です。苗木は、会で間伐作業に取り組んでいる、隣接する市有林から調達します。この林は44年生のトドマツ林ですが、風や生き物が運んだ種によって広葉樹が混じっており、そうした稚樹を掘り取って苗に使用します。林内の広葉樹は落葉のために樹種の判別が難しいものも多くあります。ミズナラ、イタヤカエデ、ミズキといった苗木20本を選び、ビニル袋に詰めて「21世紀市民の森」へ運搬、補植に取りかかります。酷暑の中、背丈ほどのササを刈り払い、地拵えから取り組んできたフィールドへの植樹は、感慨もひとしおです。



かつては後方の様なササ原でした。

ドングリを味わってみよう

食体験では、道立林試のレシピに沿い、メンバーで手分けをして調理を進めます。コーヒーの材料となるミズナラはあらかじめ渋(タンニン)を抜き^{*5}乾燥させたものを使用します。フライパンで軽く焦げ目がつくまで煎ってミルで粉末にした後は、通常のコーヒーを入れる要領でドリップします。実際に試すと粉の粒子が細かすぎて紙のフィルターでは目詰まりが起きたため、ドリップには茶こしを使いました。香川県で入手したシイ類のドングリ、ツブラジイは渋が少ないため、そのまま茹でていただきます。

メンバーの感想は、コーヒーは「お茶のよう」、「麦茶の香りがある」、ツブラジイは「塩をかけるとうまみが増す」、「お米っぽい」、「白あんの豆みたい」とさまざま。コーヒーの焙煎方法には、まだ試行錯誤が必要のようです。メンバー皆でドングリを味わいながら、来月の計画について話し合い、今日の活動は終了しました^{*6}。



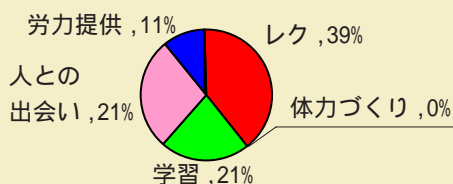
男性陣はコーヒーづくりを担当。



ツブラジイとコーヒー。

参加者の声から

参加目的は(複数回答2,N=28)?

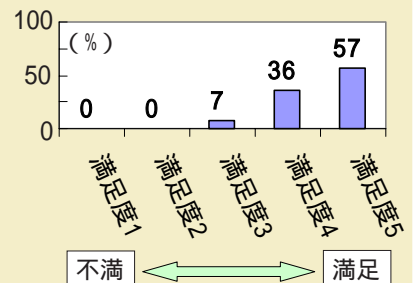


「サマスの親の気持ちになって産卵床を作った」
 「濃昼川に愛着を覚えました」
 「苗の山取りをやってみて木の見分け方を勉強しなければと思いました」

今日の目的達成度は(同左) [5段階評価]

項目	達成度	人数	(%)
レク	3	1	4
	4	5	18
	5	5	18
	3	2	7
	4	3	11
学習	5	1	4
	3	1	4
	4	3	11
人との出会い	5	4	14
	4	3	11
	5	4	14
労力提供	4	3	11
合計		28	100

今日の満足度は(N=14)?



目的達成度4以上比率: 86%
 当日満足度4以上比率: 93%

当日はレク目的の参加者が最も多く、かつその目的では高い(4以上)達成感を感じた参加者も多かったこと、参加者のほぼ全員が高い満足感を得たことがわかります。

*5 ミズナラは皮を剥いて1~2週間多量の水につけておくとタンニンを除去できる。道立林試の実験では、温水、牛乳、焼きミョウバンなどを使用するとより短時間にてタンニンの除去が可能。

*6 当日の様子は会 HP「活動記録と最近の出来事」に掲載。



北海道江別市西野幌

間伐・枝打ち・学習会

§ コープさっぽろ 植樹みどりグループ

環境問題に取り組む組合員のクラブ活動として発足し、1991年、「みどりの里親制度*1」に取り組み、森林保全・緑化に焦点をあてた「植樹みどりグループ」としての活動を開始。以来、全道規模の植樹活動、漁協女性部と連携した「お魚殖やす植樹運動」、協定林の整備などを実践。会員数20名（2004年度）。

台風通過後のトドマツ林を手入れ

今日は今年度最後のフィールド作業日です。集合場所はみらいの森*2の協定林。メンバーは毎回、入口より1km程の道のりを自然観察とウォーミングアップを兼ねて歩いて往復します。朝の打ち合わせでは、石狩管内の森林の台風被害状況、道有林施業検討会*3での議論が話題にあがります。今日は、協定林に隣接するトドマツ林（30年生、0.8ha）の間伐、枝打ち作業を行い、午後は隣の天然林で学習会を行います。

当会の間伐、枝打ちの作業経験は今年で二年目です。伐倒班は、台風18号で損傷を受け、傾いたままになっている風倒木を手鋸を使って伐倒したり、細い木や曲がった木、枯れた木などを選び、間伐をします。

枝打ち班は高枝鋸を最大に伸ばして、4mの枝打ちに取り組みます。熱中すると顔に降り落ちる鋸屑は保護眼鏡でガード。

林内作業の中でも、枝打ちは特に楽しい作業です。真っ暗で下枝が重く垂れ下がった林が、作業を終えて明るく見晴らしがよくなった時、「わあ、きれいになった」と実感します。森林づくりの楽しさは、こうした驚きとさわやかさ、とメンバーは口を揃えます。



林床に下草は殆ど見られません。



幹を傷つけないように慎重に刃を動かします。

日程

：2004年10月8日

集合・キノコ生育状況確認	10:00
挨拶・日程確認	10:10
作業開始	10:15
道具手入れ	11:50
昼食	12:00
学習会	13:00
アンケート記入・菌床搬出	14:10
移動・解散	14:30

参加者10名（会員7、スタッフ3）

当日の分担・配置

会員：枝打ち、間伐

スタッフ：

空知森づくりセンター；フィールド提供、技術指導

石狩森づくりセンター；進行、道具調達、技術指導、学習会クイズ作成

使用した主な道具・物品

手鋸、高枝鋸、バーナー、ブラシ、樹高測定器、輪尺、巻尺、回答用紙、下敷き

*1 募金と苗木育成を組みこんだ植樹活動。市民から寄付金（1口300円）の協力を得るとともに苗木を育ててもらい、3年後に苗木を回収、植栽する仕組み。

*2 隣接する国有林とともに「北海道立自然公園野幌森林公園」に指定される道有林で約55ha。このうち小班1.3haについて、当会は1999年度に道と「ボランティア活動による森林づくり協定」を締結。翌年より地拵え作業を開始し、現在までに広葉樹1,100本の植栽を終えており、下刈り、食害防除などの作業を継続（57ページ参照）。

*3 みらいの森など道有林の森林施業を検討。当会はこれに市民団体として参加し、これまでの作業経験から「風害などに強い林を育てるため植栽本数を減らした施業も大切では」と提言。

午前中の作業を終えたところで道具の手入れです。鋸刃にこびりついた松ヤニをお湯で溶かし、ブラシでこすり落とします。



お湯を沸かすためパーナーを持参。

学習会で森を見る目を養う

午後は隣の天然林で学習会です。この林は沢沿いの傾斜地であることもあり、原生的な北海道ならではの自然植生が残されています。スタッフが午前中の作業中にルート上に設置しておいた番号を目印に、クイズ形式で問題に回答します。問題は、森の生き物の痕跡や樹種の判断力、樹高や直径など測樹の感覚を試す内容で10問。

「このクロエゾマツの高さは？」

「100m じゃない？」

「え、40m もないでしょう？」

「わからない、25m」

野外の計測では、日頃より歩幅や手を広げた時の幅(一尋^{ひろ})など自分の体のサイズを知っておき、メジャーに使うことが大きなヒントになります。回答は実際に測定器等で測定して確認します。クロエゾマツの樹高は29m、ミズナラの直径は84cm ありました。

林内はカツラが甘い匂いをただよわせ、コクワは緑色の実を鈴なりにしています。豊かな森の恵みを満喫した秋の一日でした。



直径はどれくらい？

キノコの生育状況を確認

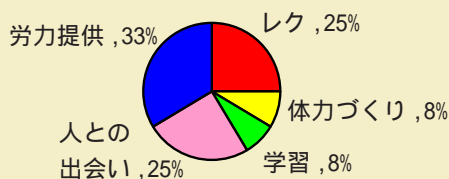
会では森の恵みを利用する活動としてキノコの植菌を行っています。今年5月にシイタケを植菌したミズナラのほだ木には、今日は残念ながら収穫は皆無でした。一方、昨年サンドイッチ方式でシラカンバやハンノキに植菌したナメコは、つやつやとしたカサをたくさん覗かせていました。このように樹木を利用して野外で栽培するキノコの風味は格別ですが、人気もまた抜群です。痕跡からどうやらメンバーに替わって収穫している輩もいるようです。

ナメコは市販のものより大きく、風味も格別。



参加者の声から

参加目的は(複数回答 2, N=12) ?

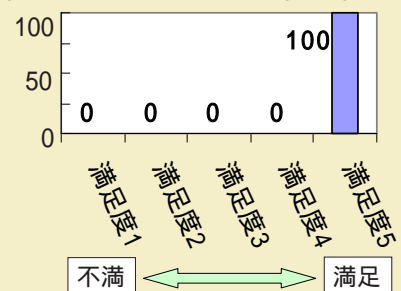


「良い汗をかいた」
「手つかずの森に入れて、良かった」

今日の目的達成度は(同左) ?
[5段階評価]

項目	達成度	人数 (%)
レク	3	1 8
	4	1 8
	5	1 8
	達成度	5 1 8
	学習	5 1 8
人との出会い	3	2 17
	4	2 17
	5	1 8
労力提供	3	1 8
	4	2 17
	5	1 8
合計		12 100

今日の満足度は(N=6) ?



目的達成度4以上比率: 67%
当日満足度4以上比率: 100%

当日は労力提供、レク、人との出会いを目的とする参加者が多く、目的達成度5、満足度5といった、特に高いレベルの充足感を得たとする回答が多かったことがわかります。

枝打ち・工作材料採取



北海道北広島市

§ 北広島森林ボランティア「メイプル」

2004年10月、石狩森づくりセンターと北広島市の共催で行われた「森林学習会」の参加者有志26名により発足。手入れ技術の基本について学習しながら市有林、一般民有林の枝打ち、間伐、つる切りといった整備作業、森林に親しむ講習会などを目下実践中。団体名は市の木「カエデ」に由来。

2回目の枝打ち作業に挑戦

今日は、会が発足して初めての定例作業日です。南の里市有林のフィールド*1にも20cm程の雪が積もっていますが、前日には役員が事前調査と除雪を兼ねた下見を終え、活動の実施を決定しました。今日は、枝打ち作業と翌月に開催予定の「かんじきづくり講習会」でかんじきの材料となるコクワ(サルナシ)のツルの採取に取り組みます。

雪に覆われた林道に残った足跡をそっくりたどりながらフィールドに到着。枝打ち作業は、先月の北広島市主催の学習会を含め、メンバーにとって2回目の経験です。

石狩森づくりセンター職員の説明により「樹皮等を傷つけないように、鋸を幹に平行に、平らに引いて枝を落とすこと」、「太い枝は一度枝の下から鋸を入れておくと、樹皮が剥がれず巻き込みもしやすくなること」といった留意事項を復習。一方、メンバーからは、高枝鋸の扱い方、除伐と間伐の違い、今日作業を仕上げる範囲などについて活発に質問が出てきます。

準備体操をして体を温め、筋肉をほぐしたところで、各自、鋸や高枝鋸を手元に作業に取りかかります。



作業前の準備体操。

日程

：2004年12月12日

集合・移動	10:05
挨拶・日程確認・体操	10:15
作業開始	10:30
コクワ運搬・移動	12:00
昼食	12:30
移動	13:10
コクワ採取	13:15
コクワ運搬・移動	13:40
アンケート記入	13:50
コクワ梱包・会員宅へ運搬	14:00
解散	14:40

参加者13名（会員11、スタッフ2）

当日の分担・配置

会員：枝打ち、コクワ採取・運搬

スタッフ：石狩森づくりセンター；進行支援、道具調達、技術指導

使用した主な道具、物品

鋸、高枝鋸、梱包用ビニル紐

森林ボランティア活動のイメージをつかむ：導入プログラム

当会の立ち上げに関連し、定例会開催までに以下の学習会、研修が実施されました。これらは会員や加入希望者が活動に具体的なイメージを持つことを目的に行われ、参加者の多くから高い評価*2が得られました。

市内の森林視察、施業解説[森林学習会]：38名参加
 「森林の取り扱いの違いが生育に大きく影響することがよくわかった」
 (屋内)森林づくりの基礎講義、森林ボランティア2団体による事例報告
 (台風18号被害により作業体験中止)[同上]：28名参加
 枝打ち作業体験・枝打ちロボット実演[同上]：22名参加
 「地元の山でいい汗を流す事ができた」、「樹の床屋になった気がした」
 森林ボランティア活動視察、樹種学習[当会研修]：会員9名参加
 「札幌ウッドーズ会員のプロの様な動きに感心した」



枝打ちロボット実演()。

*1 アカエゾマツ42年生、1.0ha。

*2 道立林試実施アンケートでは当日の満足度(5段階評価)を4以上とする回答(%)が 66、 38、 95、 89を占めた。なお本文中「」内は参加者の感想を転載。

フィールドのアカエゾマツ林は、植栽後、一度も手入れがされていません。林内は暗くツルが絡まり、張り出した下枝で歩行もままならない状態です。手入れを必要とする木は、まだ一面にひろがっています。黙々と鋸を動かしていると、寒さを忘れ、逆に汗がにじんできます。



徐々に見通しが良くなります。

講習会に向けて、かんじき材料を採取

枝打ちと併行してつる切りをすすめ、コクワを選んで採取します。「かんじきづくり講習会」は市民の参加を募っており、会のPRや会員募集の目的もあります。講習会を成功させるには、まずは定員50人分の材料をしっかりと確保しなくてはなりません。

昼食を挟み、午後は隣接するトドマツ林でさらにコクワのツルを採取します。コクワを地際から切断して引っ張りますが、枝に絡まったツルは簡単には外れません。しかし、そういうときこそチームワーク。数人がかりでかけ声とともに、体重をかけてカーブツルを引き寄せます。うまくツルが枝から外れると、尻もちとともに歓声があがり、メンバーは童心に返ったようです。



「あの枝に巻き付いてるね」
「よっしゃ、まかせて」

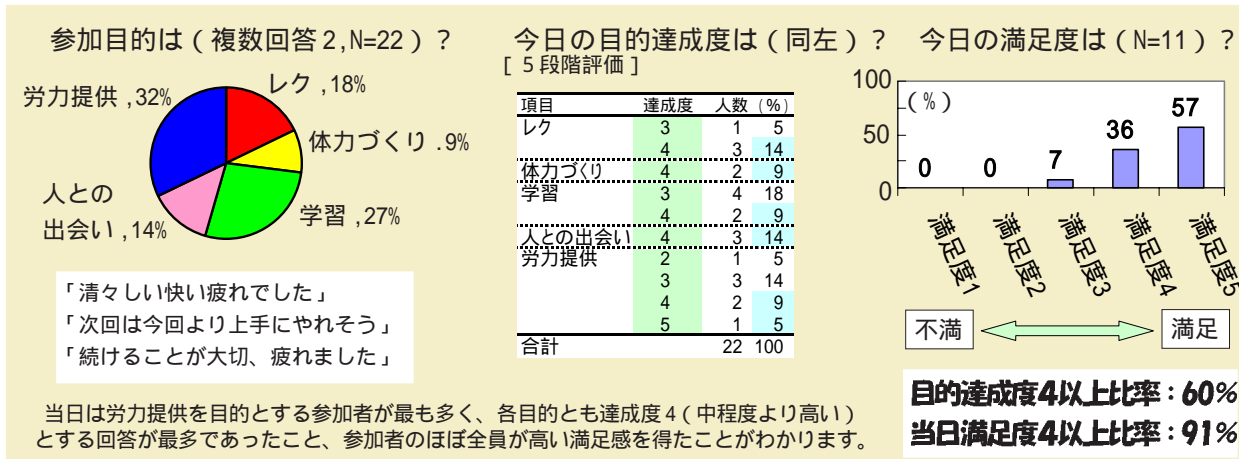
コクワは手分けして車まで運搬して選別し、同心円状に束ねて梱包します。コクワは直径2cm程のものがかんじき用には最適です。今日の作業でなんとか必要量を集めることができたようです。

材料は当日まで事務局宅の庭先に保管することで了解。車での運搬、メンバー皆での搬出を終えて作業完了です。メンバーの親睦も深まり、第1回の定例会は無事終了しました*3。



集めた材料をビニル紐で梱包。

参加者の声から



*3 この後、翌年1/30に当会が開催した「かんじきづくり講習会」には、一般市民25名、会員15名が参加。この時、一般参加者に対して「入会のおさそい」をしたところ、9名の申し出があり、会員は35名に増加。

除伐・間伐・枝打ち

§ 札幌南高等学校 学校林作業

1911年に生徒の修練や生徒会基金の蓄積等の目的で取得された学校林を手入れする札幌南高の学校行事。取得当初から毎年1回、生徒が植栽、下刈り、枝打ち等の作業を継続。2003年度より、市民ボランティアや森林組合、行政等、複数組織のメンバーを指導者に起用し、地域と連携して行事を行う現在の形へと移行¹⁾。



北海道札幌市清田区

地域の連携で学校行事をサポート

夏休み明けの8月最終週、札幌は見事な快晴に恵まれました。到着したグループ指導スタッフは所属組織ごとに集まり、フィールド^{*2}の全体地図で自分の担当班と伐区を確認します。伐区は、生徒の到着前に踏査して、林床の状態やハチやウルシなどの危険の有無、作業の対象木などを把握しておきます。

今日の行事は1年生の宿泊研修の日程の一部であり、作業体験は正味50分間。わずかな時間ですが、こうした林内作業は道内屈指の進学校、都市部育ちの生徒達にとって、ほぼ初めての体験です。一方、市民スタッフ側も、例えばいしかり森林ボランティア「クマガラ」では今回12名が指導者役を務めますが、殆どの会員にとって、こうした指導は初の体験です。

林道に到着した生徒達をスタッフの代表が誘導します。2班合同の説明では、ケガへの注意、道具の扱い方、枝打ちや間伐の目的についての解説と作業の実演があります。

班に分かれて作業開始です。配布された枝打鋸の大きな刃に「おーっ」と低い歓声があがります。生徒達は早速高枝打ちに挑戦しますが、懸命に鋸を動かすものの、カシャ、カシャと軽い音がしてなかなか刃が枝に食い込んでいかないようです。しかし、スタッフの「もっと刃を長く使って」、「鋸は引くときにグッと力を入れてみて」といったアドバイスを聞いて、鋸の音が変化。ジャリッ、ジャリッという音とともに枝がどさりと落ちました。「上手、上手！」スタッフの言葉に、生徒に笑顔が広がります。



節のある板とない板を使って枝打ちの目的を解説。



力の入れ方を工夫します。

日程 : 2005年8月24日

道具搬入	7:00
スタッフ集合	8:30
生徒到着・移動	8:50
班活動開始・挨拶・説明	9:20
作業開始	9:30
作業終了・生徒移動	10:20
後かたづけ	10:50
スタッフ移動・昼食・スタッフ紹介	11:10
自由解散	11:30

参加者 390名 (生徒 320、スタッフ70)

当日までの準備

道具調達、指導者確保、各組織間の連絡、作業道草刈、道具運搬、伐区設定、選木

当日の分担・配置

生徒(1班10名、32班): 除・間伐、枝打ち
スタッフ: 14組織・機関^{*3}
グループ指導(64名); 担当班活動進行、安全・技術指導、道具配布・回収
巡回指導(6名); 指導者支援、スタッフ統括

使用した主な道具、物品

鋸・高枝鋸(1班11本) \ \ ムット(人数分)

* 1 (岡ら, 2005)

* 2 今回行事で取り組む林分は4小班約2ha。トドマツ、カラマツ44～56年生。32に区画し、1伐区は約600m²。

* 3 いしかり森林ボランティア「クマガラ」、北広島森林ボランティア「メイプル」、間伐ボランティア「札幌カデイズ」グループ さつぼろ植樹・みどりグループ、当別森林ボランティア「シカガ」、藻岩山きのご観察会、札幌市森林組合、札幌南高教職員、札幌南高等学校林理事、札幌市みどりの保全課、石狩・空知森づくりセンター、石狩支庁経済部林務課、道庁水産林務部森林活用グループ。

間伐では、直径14cm、高さ12m程のトドマツを伐倒します。「生木なのでとても重く、倒れてきたときに誤ってぶつくと大きなケガになるよ」とスタッフが生徒に注意を促します

生徒は次々と伐倒を交代しますが、なかなか切り口は広がりません。簡単そうに見えた受け口の斜め切りも、実際にやってみると鋸の角度を45度に保つのに四苦八苦です。「もっと刃を斜めにして、」
「角度が緩いと切る長さが増えるよ」とスタッフが声をかけます。

追い口切りでは「私もやってみたい」と学校の先生も鋸を交代。「先生頑張れー、先生頑張れー！」と生徒達の声援が起こります。「よーし、倒れるよー、離れてー！」

たくさんのメンバーの交代で鋸を入れられた木をスタッフと男子生徒が揺すりますが、枝が隣の木に引っかかって倒れません。「それでは」とスタッフが追い口に鋸を入れ、ツルを切り離れたところで、「せーのっ」とかけ声をかけて、幹の下部を伐倒の反対方向へと引っ張ります。

「もういい、もういい」

無我夢中で幹を抱えて動く男子生徒をスタッフが引き留めます。ズーンという鈍い音。

「わー、倒れたー！」自然に拍手が湧き起こります。

倒れた木は枝を払い、2mの長さに玉切りをします。興奮気味だった生徒達もおしゃべりを忘れ、辺りには鋸を動かすシャリ、シャリという音が響きます。

伐区内の枝打ちと2本程の伐倒を終えたところで、時間はほぼ終了。道具を回収してお別れの挨拶です。「みんなで協力して1つの作業をすると仲間になれるよね」とスタッフ。生徒達からは「思ったより楽しかった」、「玉切りは職人のような気分になった」、「疲れたー」との感想も漏れます。生徒、市民スタッフ共々、心に残る思い出ができたようです。



伐倒用の鋸を使うのは初めて。



「せーのっ」



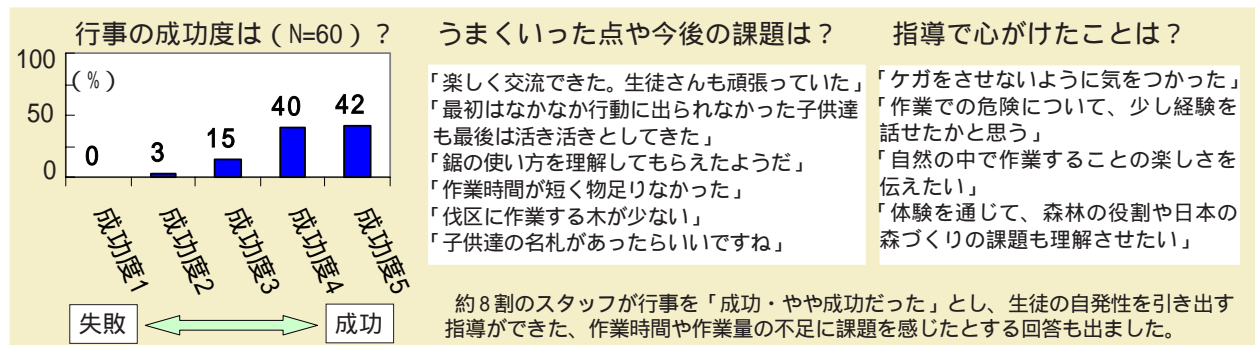
2m毎に玉切り。

学校林の活用：生徒が自然に触れる接点に

本校の学校林は、全日制、定時制の総合学習の学習テーマの1つとなっており、森林の働きや日本の林業の現状・学校林の歴史や植生等を学ぶ、この行事の事前・事後学習も行なわれています。その他、年2回、校内やOBの希望者を募り、山菜やキノコを楽しむ散策会が開催されています。全道でも学校林を持つ高校は少数ですが、このように本校では、学校林を生徒が自然に触れる接点と位置づけ、環境教育等の用途での活用にも力を入れています*1。



スタッフの声から





北海道滝川市江部乙

草刈り・散策路づくり・炭焼き

§ 空知森林サポーターの会

2005年4月、空知森づくりセンター主催の「森林サポーター養成講座*1」の受講生有志11名によって発足。道有林「江部乙交流の森*2」をフィールドに、当地を森林に学び親しむ場、森林づくりを介した交流の場として整備をすすめ、地域の青少年を対象とした森林教室、野草や野鳥の調査などを実践中。

ワークショップの開催を準備

交流の森では7月20日に「げんきの森ワークショップ*3」が開催され、地元江部乙の小・中学校の児童・生徒が炭焼きの体験に訪れます。今回の活動では、当会は空知森づくりセンターと連携して、この開催の準備にあたり、子ども達への指導を支援します。炭焼き作業は20～21日にかけて行い、20日の夕刻には会員と森づくりセンター職員との交流会も企画しました。

20日当日は、まず夏期に継続して取り組んできた草刈りを仕上げ、ワークショップの会場となる広場をきれいな状態に整えます。草は繁茂状態の回復を妨げるため、なるべく地際から刈りとることを確認しあいます。野外学習用の椅子とテーブルも移動させて、隠れた草も丹念に刈り取ります。作業をしていると広場の木々の幹にはアブラゼミの抜け殻が見つかり、ヤマゲワやエゾヤマザクラの実が黒く色づいているのに気づきます。

午後からは皆で炭材づくりです。材は窯の大きさに合わせて80cmに切りそろえ、4つ割りにします。昔懐かしい薪割り作業ですが、マサカリの刃を狙い通りに幹の中央に落とすには結構な技術が必要です。「こりゃあ、^{たぐみ}匠の世界だね」、「節がある材は難しい」、「小口に既に入っている裂け目に刃を当てると割れやすいよ」といった声があがります。

メンバーが薪割りに四苦八苦しているうちに、ワークショップにやってきた子ども達の声が聞こえてきました。



刈った草は一輪車で搬出。



昔懐かしい薪割り作業。

日程 : 2005年7月20日～21日

集合	20日 9:00
日程・作業内容確認	9:30
草刈り・炭焼き窯補修	10:00
ミーティング	11:20
昼食	12:00
炭材づくり	13:10
げんきの森ワークショップ：江部乙小	13:30
散策路づくり・買い出し	14:00
げんきの森ワークショップ：江部乙中	15:30
立て込み・燃材準備	16:30
窯点火・交流会	17:00
窯密閉	21日 8:00
解散	10:00

参加者88名
(会員6、スタッフ6、児童21、生徒50、引率5)

当日の分担・配置

会員：草刈り、散策路づくり、炭焼き準備、児童・生徒指導

スタッフ：空知森づくりセンター；日程確認、ワークショップ進行、炭焼き準備、炭焼き技術指導

使用した主な道具・物品

刈り払い機、鎌、一輪車、マサカリ、チェーンソー、缶容器、アルミホイール、針金、鑑賞炭素材、燃材、炭材

*1 自立した森林づくり活動や森林愛護の核となる地域リーダーの育成を目的とする。空知森づくりセンターでは、受講生34名を対象に、苗畑づくりや育苗、植栽といった実践活動、キノコ植菌、炭焼き技術等を学習する講座を3年間開講。2004年度末には20名が当講座を修了した。

*2 43～46年生のカラマツ疎林で約6ha。従来より採種圃として利用される。今回の活動の中心となった広場は当フィールド内の「苗畑・キノコ・炭焼きゾーン」に該当し、約0.1ha。

*3 「げんきの森」で行われる森の体験活動や森遊びの達人との交流会。「げんきの森」は、地域の児童・生徒が体験活動の場として活用するために、各地の森づくりセンターが道内市町村に設定した森林。「地域活動」「地域交流」をキーワードに当地を活用し、子ども達が森林体験学習に取り組む環境づくりを進める。

鑑賞炭づくりと炭材の立て込みを指導

江部乙小学校の3年生が鑑賞炭の素材が入った缶を手元に到着です。素材は大小の松ぼっくりやドングリ、カボチャなど、缶は菓子容器などを各自が工夫して持参しました。グループに分かれて、素材をアルミホイルで包んで缶に入れ、蓋をした缶に針金を巻く作業に取り組みます。サポーター会員は各テーブルで作業手順を指導します。作業しながら子ども達は森の生き物に興味津々。スタッフが午前中にフィールドで見つけておいたセミの抜け殻に「すごーい」「服にくっつくよ」「見せて、見せて！」と歓声が上がります。生きたセミ、クワガタには黒山の人だかり、「初めて見たー!」、「逃げる、逃げるー!」と大歓声があがります。

缶の準備が整ったら、窯へ炭材を詰め(立て込み)ます。子ども達はまず窯の内部を観察し、次に窯内部に入ったスタッフに炭材と缶を手渡します。初めて見る炭窯と「全部土を固めて作ったんだよ」「かまどで木を燃やすと800位になる」といった解説に、「まじ、すげー」との声があがります。ワークショップでの体験は炭材の立て込みまでで、約1週間後にできあがる鑑賞炭は、後日スタッフが学校に届けます。終わりの挨拶では「炭焼き期間中は窯が非常に高温になっているので、決して近づかないでください」といった注意があります。

20日はこの後、江部乙中学校の1年生と工芸部の生徒達も交流の森を訪れ、同様の内容でワークショップが開催されました。

ワークショップ終了後は、いよいよ点火です。炭窯の通風口、煙道口の密閉は21日早朝を予定しており、今晚はスタッフが泊まり込みで火の番に当たります。火の調整をしながら、メンバーは焼き肉交流会で親睦を深めます。会での炭焼き経験は2回目、今回新しく補強された炭窯にメンバーの期待が集まる中、静かに夜が更けていきます。



素材は缶の中で蒸し焼きになります。



窯の中はちょっと怖そう。



通風口を残して焚き口を塞ぎます(21日1時頃撮影)

散策路づくり：利用者が森と触れ合う接点に

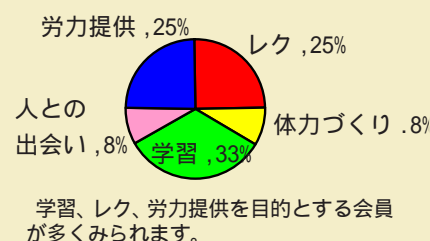
今期当会が重点的に取り組んでいるのがフィールドの散策路づくりです。散策路は会の活動の拠点となる広場と昨年道事業で完成したバリアフリー散策路をつなぐ約200mで、ルートを選定、ササの刈り払いから会手作りで作業を進めています。ルートは沢地形をまたいでおり、階段や橋梁部には廃材をリサイクルして使用しています。土木工事の経験者が基礎を担当し、メンバー皆で土木作業に汗を流しています。会では散策路を、「交流の森」を訪れた人が森と触れ合う接点と位置づけ、将来的にはルートを延長し、フィールド内のミズバショウの群生地まで周遊できる簡易な木道の設置も手がけたいと意気込んでいます。



階段づくり(2005年9月)。

会員の声から

参加目的は(複数回答2,N=12)?



活動への意気込みは?

「体力に応じて参加します」
 「森は全ての生命の母。大切にしなければ、あとは体力」
 「樹木とのふれあいを多くしたい。そのためには森の手入れは大事にしたい」
 「会の活動人数が不足している」

「交流の森」での活動の方向は?

「『交流の森』は、昆虫や鳥、キノコなども豊かです。こうした環境を活かしながら、イベントなどを企画したり、そのために必要な整備を進める計画です。特に子ども達には期待しており、森林体験を通じて、誰もがお世話になる『水』と『森』の関わりについて伝えていくことが、最重要課題と思っています(会長談)」

施設整備・草刈り・看板補修



北海道空知郡南富良野町

§ レディース100年の森 林業グループ

1991年、南富良野町森林組合が地元在住の女性を条件に公募した山林分譲への応募者を組織化して発足。北海道初の女性林業研究グループ。所有林整備や森林教育、地域交流など「山と森と人をつなぐ」をテーマに活動を展開。会員数10名(2005年度)

交流会に向けて環境整備

フィールド「レディース100年の森^{*1}」は、グループ共通の実習林として、会員皆で選木、枝打ち、遊歩道整備といった手入れ作業を進めています。その拠点施設となるのがログハウス「可楽待(からまつ)^{*2}」。室内学習や他団体との交流の場として利用するほか、作業の道具を収納しておくこともできます。今日は、翌週の十勝林業グループとの交流会に先だて、この「可楽待」周辺の整備を中心に作業を行います。

清掃班は、ログハウス
屋内の埃を掃き清め、
デッキ部分に厚く積
もったカラマツの落葉
を掃き出します。



ログハウス「可楽待(からまつ)」。

清掃は定期的に行っ
ていますが、1年間の埃
は結構なもの、マスクを
して念入りに取り除き
ます。

草刈班は、鎌で広場周
辺の草刈りに励みます。
あわせて、カラマツの落
枝を整理します。



広場から伸びる散策路を整備。

日程 : 2005年7月14日

日程・作業内容確認	10:00
移動	10:10
現地到着・作業開始	10:15
作業終了・昼食準備	11:30
昼食交流会	12:10
アンケート記入	13:10
後かたづけ	13:30
移動・解散	14:00

参加者13名(会員6、スタッフ4、ゲスト3)

当日の分担・配置

会員：清掃、草刈、看板補修、昼食準備
スタッフ：

南富良野町森林組合；事務局、日程確認
上川南部森づくりセンター；道具調達、
技術指導

使用した主な道具・物品

鎌、チェーンソー、清掃具(箒等)、ガン
タッカー、高枝打ち用梯子、間伐材

地域交流

「森林を育て、水資源や環境を守る」ことを共通のテーマに、当会は下流域の団体との共同作業に取り組み、交流を深めています。近年は、南富良野町を水源地とする滝川市の森林ボランティア「緑とエコ サポーターネット」との植樹、鶴川漁協女性部との「お魚殖やす植樹運動」等を実施しています。また、道内外の林業グループとの相互訪問を継続し、各地の取り組みについて学びあい、親睦を深めています。加えて各地の森林関連のフォーラムに出席して事例発表を行うなど、森林・林業の大切さと当会の実践を広く発信しています。これらは山と森と人をつなぐ「架け橋」の活動として、活動の1つの柱となっています。



愛媛県松山市ひめゆり林業
グループとの交流(2000年度)

* 1 34、37年生のカラマツ林12.6ha。10区画に分割され、会員は各自の所有林(1区画1~2ha)を持つ(56ページ参照)

* 2 地元のカラマツ材を使用。「カラマツ100年の大計の可能性を楽しく待つ」との意味を込めて命名。

チェーンソー担当は、ストックしてある防腐処理をした間伐材からドンコロをつくり、次々と会食用の椅子に仕上げます。枝に残った球果と幹の曲がりの風合いが面白い間伐材は、公共施設へのガーデニング*3で使用する、フラワーポットの支柱に使いそうです。

会発足当時は直径15cm程度だったフィールドのカラマツも、15年間の手入れを経て、現在は27cm程度までに成長しています。

昨年秋は、林内に各メンバーの所有林の境界を示す看板を設置。看板はトルペイントで作成した手作り作品です。冬を越して雪の重みなどで外れてしまった一部の看板を、補強してつけ直します。

林内には広葉樹が侵入していますが、生き物の豊かな森づくりを行うため、間伐時にはそうした侵入木を残す施業も試みています。山菜も豊かに見られ、アキタブキをメンバーで採取して漬け物用に試験的に出荷した経験もあります。



ガーデニングのイメージがふくらみます。



看板の設置で所有林への愛着も増してきます。

ジンギスカンを囲んで昼食会

例年、草刈り作業終了後のお楽しみは、ジンギスカン交流会です。講習会など行事の開催でお世話になっている町役場、森林の手入れの技術指導にあたる上川南部森づくりセンター、グループの事務局を務める町森林組合といった関係者を招待し、親睦を深めます。

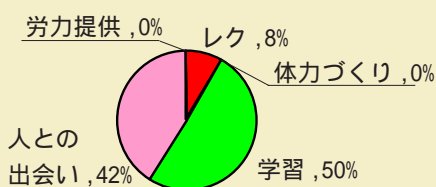
「黄金色の秋のカラマツ林を癒しの森に」、「大切に大径木に育て、将来は銘木づくりに取り組もう」といった「レディース100年の森」を活用するアイデアも飛び出します。女性の夢と堅実さを活かした当会の森づくりは、林業に新しい風を呼び込んでくれそうです。



移動式炭窯で焼いた炭を使用。

参加者の声から

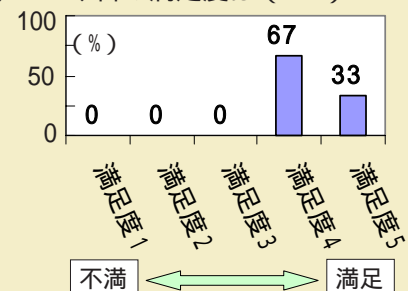
参加目的は（複数回答2,N=12）？



今日の目的達成度は（同左）？
〔5段階評価〕

項目	達成度	人数	(%)
レクリエーション	3	1	8
学習	3	3	25
	4	3	25
人との出会い	3	2	17
	4	1	8
合計	5	2	17
		12	100

今日の満足度は（N=6）？



「皆で山に親しみ、いつまでも仲良く交流したい」

「生物多様性保全や森林に生きる動物と人間のルールなども今後考えていきたい」

「いろいろ指導を受けて、自分の森林をより一層良くしていきたい」

当日は学習、人との出会いを目的とする参加者が多く、それらの目的では高い(4以上)達成感を感じた参加者も多かったこと、参加者全員が高い満足感を得たことがわかります。

目的達成度4以上比率：50%
当日満足度4以上比率：100%

*3 樹木や花を活かしたまちづくりを学んだ2000年度の海外研修での成果を地域へ普及。町民の好評を得たことで、ガーデニングの取り組みは、町商工会など他組織にも波及した。当会では町民対象のガーデニング講習会も企画。

フィールド案内・地ごしらえ



§ 多摩の森大自然塾 鳩ノ巣フィールド連絡協議会

2003年、都の森づくりイベント「多摩の森大自然塾」の1開催地「鳩ノ巣フィールド」を運営するために発足。運営参画の意志を持つ団体と個人によって構成され、当フィールドの活動方針、森林計画の策定といった運営の骨格部を担当する他、メンバーは指導者として各回のイベントのスタッフ役を務める。

フィールド案内で作業への理解をアップ

都の北西端に位置する奥多摩町は、四方をスギを中心とする森林に囲まれた山村です。都心からはJRで1時間半以上かかりますがフィールドは青梅線鳩ノ巣駅の目の前です。今日の作業は、来月に開催される植樹祭のための地ごしらえです。参加者は体験（初参加者など）と実践の2コースに班分けされており、体験コースでは、作業前に現地でフィールドの概要や山仕事について簡単なレクチャーを受講します。開塾式では、班長の指示に従うこと、休憩は適宜とって構わないこと、怪我のないようにといった注意事項があります。体操を終え、フィールドへ出発です。

フィールドは結構な急傾斜地です。体験コースの一行は班長らの先導で、当塾手作りの作業道を慎重に登ります。班長らから、薪炭林であった当地は拡大造林を機にスギ・ヒノキの造林地に変化したこと、手入れ不足で荒廃した森林は表土流出の危険があり、間伐などにより林内の光条件を改善して下草を生やす手入れが必要といった解説があります。

斜面を上がると2mほどの高さのネットを筒状に巻いた植林地が見えてきます。この一帯は昨春に森林所有者の理解を得て、コナラやイロハモミジ、ヤマブキなど、実がなったり開花や紅葉の美しい広葉樹を植栽した箇所です。ネットはシカの食害や角こすりを防除するための資材で、都の林業試験場の協力のもと導入されました。当フィールドでは、森林計画にうたう多様な森林を造成するため、こうした森林防除にも様々に知恵を絞っています。

斜面の中腹にある薬師堂では、地元の人と一緒にお祭りをしたり、年頭の活動日に作業の安全祈願をしています。



シカ防除ネット。



薬師堂。休憩地としての利用も。

日程（体験コース）：2004年2月15日

開塾式・準備運動	10:00
移動・フィールド案内	10:15
作業開始	11:20
昼食	12:05
作業再開	12:50
作業終了・移動	14:45
道具手入れ	14:50
アンケート記入・感想発表	15:00
閉塾式	15:20
解散・スタッフミーティング	15:30
スタッフ解散	15:40

参加者40名（参加者28、スタッフ11、町民1）

当日の分担・配置

参加者：体験 / 実践コース（各コース2班）
 スタッフ：
 統括責任者；挨拶、組織間連絡調整
 指導責任者；進行、班長・班長補助統括
 班長・班長補助；フィールド案内、班作業進行、安全・技術指導
 事務局；受付、アンケート集計

使用した主な道具・物品

鋸、鉋、かけや、ブラシ、洗剤、ウエス

* 1 25～70年生のスギ・ヒノキ人工林と皆伐跡地よりなる一般民有林で約10ha。今回作業した林分はスギの皆伐跡地約2ha。2002年度より地ごしらえと植栽を開始し、今年度の植樹祭では520本程の広葉樹の植栽を計画。

植樹祭にむけて残材を整理

植樹祭会場となる林分には、伐採後に放置されたスギの枝条が散乱しています。これを整理して植栽場所として整えるのが今日の作業です。まずは道具の扱い方の基本を学習します。班長から、鋸は刃の先2/3が、鉋は逆に刃の手前の2/3がよく切れること、鉋は必ず木を挟んで体の反対側で使うことといった解説があります。班長の実演に倣って、早速参加者は残材の山から枝条を鋸で切り出し、鉋で枝を払います。その表情は真剣そのものです。

黙々と手を動かす参加者に、班長らが「鋸はもっとゆっくり挽いていいですよ」、「自分の手に負える太さの枝を選んでくださいね」と声をかけます。短く整理した枝条は木杭で棚を作って等高線上に積み上げ、小枝や葉は植栽した苗の乾燥を防ぐカバーとして地表に残しておきます。フィールドには、「ジャリジャリ」と鋸を動かす音、「カンッ、カンッ」と木杭にかけやを振り下ろす音が響きます。下方の集落からは風に乗って鶏の鳴き声も聞こえてきます。

昼食を挟み、午後からは今日仕上げる目標を定め、全班が作業箇所を集中させて作業を続けます。上下の作業を避けて、参加者は横に広がり、左右の間隔を確かめながら作業を進めます。集めても集めても減らないように見えた残材の山も、マンパワーで徐々に片づいていきます。地元の林業家もチェーンソーを手に加勢に訪れ、ひときわフィールドが活気づきます。

「ピーッ」という笛の合図で作業は終了。「一日作業したら斜面が平らに見えてきたわー」という女性に、「慣れですねー」と一緒に作業していた事務局スタッフが答えます。

麓の駐車場に戻って道具の手入れです。フィールドを見上げると、今日の作業箇所がきれいに整理されているのがわかります。閉塾式では、地ごしらえに続いて行われる植樹、下刈り作業への参加のお誘いもあります。新たにつくる森の姿に夢がふくらむ一日でした。



刃は「スッ、スッ」とリズム良く動かすのがポイント。



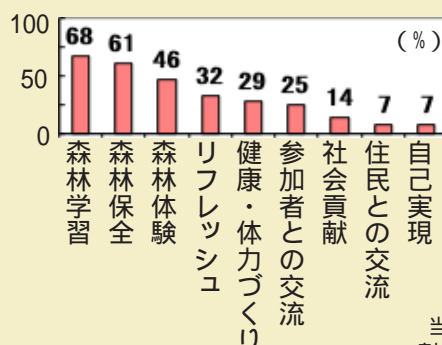
木杭に横木を渡して棚を作り、残材を集積します。



刃の松ヤニをきれいに取り除きます。

参加者の声から

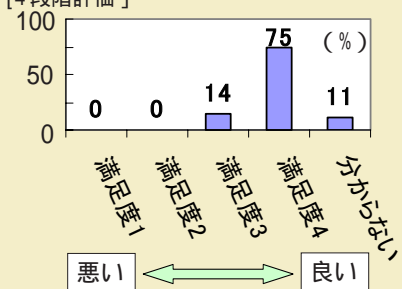
本イベントに参加して満足した点は（複数回答3,N=28）？



「初参加だったので、フィールド案内がありがたかった」
 「鉋の使い方などを改めて学び、自己流が直って良かった」
 「今度は植樹祭に参加したい」
 「作業が気持ちよかった」
 「当フィールドにまた参加したい」
 「参加者の交流がもっとほしい」

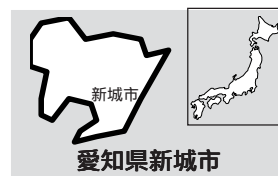
当日は森林学習と森林保全を行えたことに満足を感じた参加者が多かったこと、7割を超す参加者が当イベントを総合的にみて「良かった」としたことがわかります。

イベントの総合的評価は(N=28)？
 [4段階評価]



悪い ←→ 良い

間伐



愛知県新城市

§ NPO法人 穂の国森づくりの会

1997年、東三河豊川流域の市民、企業、行政が「水源の森」、「地域づくり」を求心力に参集して発足。「75万人(流域内総人口)の森づくり」をスローガンに各者が連携し、教育、政策提言、森林認証など、森を守り育て活かす活動を多様に実践する。会員数約800。

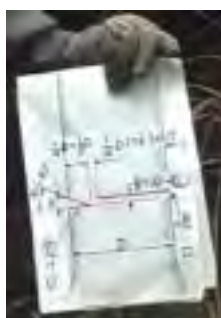
教育活動のためにフィールドを整備

静岡県境に位置する甚古山国有林のフィールド*1は、豊川流域南部の小学校に野外体験学習(下コラム)を提供するために利用している場所です。今日は、「間伐体験」のプログラムを補完するため、急傾斜地など小学生が作業しづらい部分の間伐を会でもって行い、林内の整備を進めます。道具小屋の前には、プリティフォレストクラブ*2のメンバーが集まりました。

朝の打ち合わせでは、作業内容を皆で確認し、経験の長いメンバーを解説役としてミニ伐倒教室を行います。教室では、模式図を用いて、受け口と追い口を入れる要領やツルの役割を復習します。また、「ツルを残さない伐倒や待避の遅れによって死亡事故の例がある」、「伐倒時は必ず合図をすること」、「かかり木処理で周囲に協力を求めるのは恥ずかしいことではない」と、安全作業の徹底についても強調します。打ち合わせの最後には初参加のメンバーの自己紹介もあります。皆でフィールドに移動します。



伐倒方法を復習。右端は解説役の寺島さん。



ツルは蝶つがいの役割をします。

日程 : 2004年12月19日

日程・作業内容確認	10:00
移動	10:20
現地到着・作業開始	10:35
移動	12:05
昼食・アンケート記入	12:15
移動	13:10
作業再開	13:30
作業終了・移動	15:00
後かたづけ・解散	

参加者10名

当日の分担・配置

会員：間伐
スタッフ：事務局；日程・環境掌握、救護

使用した主な道具・物品

鋸、鉋、チェンソー、ナタ、ロープ、フェリングレバー、トビ

森林教育活動*3：子ども達に森を学ぶ体験を

当会は、次代を担う子ども達に、森林の手入れの大切さや森林の素晴らしさ、生態系の仕組みなどを伝えるため、奥三河地域の小学校5年生を対象に、野外体験活動と屋内講義形式の訪問授業を実施しています。

野外体験活動では、豊川上流域の国有林2箇所を舞台に、愛知森林管理事務所とともに植樹、間伐などの林業体験、自然観察などのプログラムを提供。例年、教育委員会を通じて希望校を募集しますが、対応可能な件数(2003年実績9件)を上回る程の反響があります。



甚古山での間伐体験*4。

*1 該当林小班は約3ha。ヒノキ27年生。協定は締結せず、3年間で当地の作業を終えることを条件に利用。

*2 フィールドを固定して育林作業を行う会のサークル活動。会の移動型の育林作業のリピーターにより発足。

*3 68ページ参照。

*4 中部森林管理局名古屋分局HPより。

現場への道のりはなかなかの傾斜地です。チェーンソー、フェリンググレバーなどの道具をメンバーが手分けして運びます。現場は斜面下部が急傾斜、上部は比較的平坦な地形のため、上部を小学生の作業場所とし、今日の作業は下部から伐り進めることを確認します。

林内のヒノキは直径が15～20cmとあまり成長が良くありませんが、幹が太すぎないことが逆に好都合で、小学生の体験にも利用できる林分となっています。林内は愛知森林管理事務所の協力で事前に選木が終えてあり、メンバーはコンピを組み、鋸やチェーンソーを使って伐倒をすすめます。



白いテープは間伐対象木の印。

かかり木処理はロープワークで

混み合った林内では、鋸を入れた木は、周囲の木と枝が絡まり合ってなかなか倒れません。しかしそこは冷静に対処。メンバーはかかり木になった木の幹にロープで細い丸太を巻き付け、てこの原理を応用しながら、じわじわと少しずつ木を動かし、枝の絡まりを外していきます。幹が八割がた傾いたら、最後はマンパワーです。「そーれっ」というかけ声とともに、メンバー2人は幹を思い切り押し倒します。「ミシミシ…」という音と共にようやくヒノキが地面に倒れました。メンバーからは「今日は暑いねー」との声があがります。一部の材は利用しますが、間伐木はチェーンソーで玉切りをして、等高線に沿って揃えておきます。



てこの原理で幹をねじって徐々に移動させます。

休憩中や作業の合間に、メンバーからは「森林づくりのおもしろさは、木が倒れるときの爽快感」、「森に手を入れることで、土壌の流出を防ぎ、森の保水能力を高めたい」、「仲間とのやりとりも面白く、勉強になる」との声も聞くことができました。メンバーは様々な思いで活動に取り組んでいるようです。

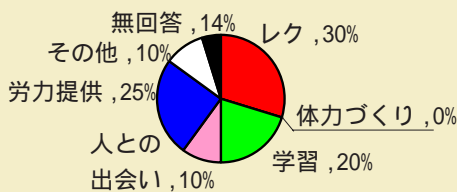


ツルがうまく働きました。

昼食をはさんで間伐作業は午後も継続し、フィールドに小学生を受け入れる準備が整えられました。

参加者の声から

参加目的は（複数回答2,N=20）？



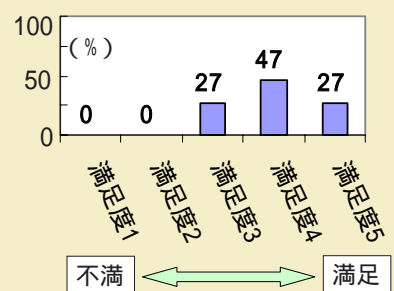
「この美しい日本の自然を守りたい」
 「自然と接することは非常に気分爽快で健康的」
 「参加者の幅と数を増やしたい」

レクと労力提供を目的とする回答者が多く、高い達成感を得た人はレク目的の人に多く、約7割の人が高い満足感を得たことがわかります。

今日の目的達成度は（同右）？
 [5段階評価]

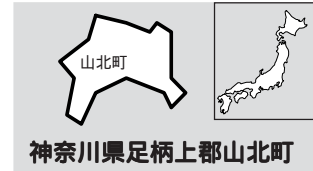
項目	達成度	人数	(%)
レクリエーション	3	2	10
	4	3	15
	5	1	5
	3	3	15
	5	1	5
学習	2	1	5
	3	1	5
	4	2	10
三河湾浄化等CO ₂ 問題	1	1	5
	2	1	5
無回答		1	5
合計		20	100

今日の満足度は（N=10）？



目的達成度4以上比率：35%
 当日満足度4以上比率：73%

間伐・枝打ち・薪割り



神奈川県足柄上郡山北町

§ 森林クラブ

1983年、育林体験や自然教育を行う市民サークルとして発足。「自分たちの森をつくりたい」と1985年より国有林の分収造林制度を利用して造林作業に取り組む。フィールド別に「下仁田」と「横浜/丹沢」の2部会があり、作業の傍ら、子どもキャンプなど森に親しむ活動を多様に展開。会員数75名(2003年度)。

造林したスギの手入れをすすめる

フィールド^{よぶく}世附国有林は、西丹沢の西端、静岡と山梨の県境近くに位置する自然豊かな森です。会は1986年に所管の旧営林署と分収造林契約を結びスギ・ヒノキ1.1haの造林を継続しています。

1日目の正午前、拠点施設「水の木小屋」には県内都市部や他県からマイカーやクラブ車を利用してメンバーが集合*1。昼食後のオリエンテーションでは、活動時は環境負荷を与えない生活と自己責任を心がけて欲しいといった案内やメンバーの自己紹介があります。この日の午後はスギ林の手入れを行います。滞在中のプログラムは基本的に参加が自由です。造林や小屋補修などの作業は全てメンバーの自発性に基づいて実行されています。

スギは植栽(密度3,000本/ha)後15年が経過し、枝打ちや間伐を行っています。メンバーは作業種別にグループに分かれ、間伐担当は3人が交代で伐倒を進めます。世話人(役員)で活動経験の長い網谷さんが、木同士が競争の状態にあること、曲がった木や細い木など形質の悪い木を伐採して残った木の成長を促す必要があるといった間伐の意義や伐倒の要領を説明します。

林内はなかなかの傾斜地です。伐倒方向を確認したメンバーは足場を確保して、まずは受け口切りから慎重に鋸を動かします。「もうすこし刃を平らにしてみよう」と網谷さん。今回は入会して1年未満の参加者が多く、基本を確かめながらマイペースで作業を進めます。6~7本の伐倒と玉切りを終えると、早くも2時間が過ぎていきます。2月とはいえ作業時に寒さは全く感じません。「ちょっと汗をかくくらいが森林浴にちょうど良いですね」と網谷さん。他のグループは、ムカデ梯子を用いて高さ4mまでの枝打ちを進めています。林内は随分見通しよく明るくなりました。

日程 : 2003年2月22日~23日

小屋到着・掃除	22日	11:40
昼食		12:00
オリエンテーション		12:25
準備・身支度		13:00
フィールドへ移動		13:30
作業(間伐・枝打ち)		13:50
小屋へ移動		15:55
夕食準備・夕食・入浴		16:10
就寝		23:00
朝食準備・朝食	23日	8:00
山の神参り		9:30
作業(薪づくり)		10:00
昼食準備・昼食		12:35
後片づけ・アンケート記入		14:25
掃除		15:25
小屋出発・解散		16:00

参加者9名

当日の分担・配置
 会員・参加者：間伐、枝打ち、薪づくり
 世話人：日程・環境掌握、オリエンテーション、会計
 使用した主な作業道具・物品
 鉋、鋸、梯子、マサカリ、ロープ



食堂にて自己紹介。



間伐の様子。

*1 「水の木小屋」は営林署の旧作業宿舎を会費で整備して借り受けている。造林地へは約2km。また、JR利用者のアクセスのため自動車を購入して会所有(クラブ車)とし、最寄り駅に駐車場を確保、フィールドとの往復に役立てている。

山の神にお参りして幸せを祈願

2日目は小屋のそばの小さな神社にお参りをします。お祀りされているのは山の神で知られる大山祇命おおやまつみのみことです。まずは塩で周囲を清め、社の扉を開けて御神酒とお赤飯をお供えます。この段取りは山の神研究を趣味としている佐藤さんによるもの。佐藤さんが大きな声で祝詞をあげる様子はちょっとした神事のような様子です。メンバーは健康や子供の受験の成功等々各自の望みを元気よく山の神にお願いします。最後は佐藤さんが「おおー、山の神よ、みんなの願いを聞いてくれ」と締めくくります。山の文化に触れる貴重な体験となりました。



祝詞をあげる佐藤さん。

使った薪を補充

午前中の作業は薪割りです。小屋では風呂とストーブの燃料に薪を使用しており、今回の滞りで使った分を補充します。地元から譲ってもらった廃材を鋸で切り、マサカリで二つ割にします。メンバーがマサカリをふるうと「カツッ、カツッ、パシッ」と小気味よい音と共に薪が真っ二つに。薪割りの技術はやはり経験がものをいいますが、経験皆無の若者（取材者）でも、メンバーの助言で徐々にマサカリを薪へと振り下ろせるようになります。刃が小口に食い込めばしめたもの。薪ごと刃を振り下ろせば100%薪は割れます。



薪割りはお手のもの。

メンバーが交代で腕を振るう自炊の昼食を済ませ、小屋の掃除を終えて活動は終了。今回も豊かな自然体験ができた滞在となりました。

水の木小屋の生活:豊かな自然を堪能

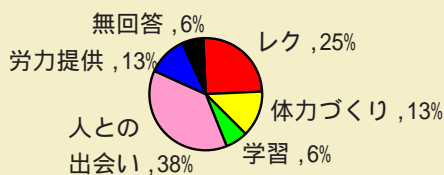
丹沢の活動の魅力の一つはその豊かな自然です。造林地の他、所々にブナなどの大径の広葉樹が生い茂り、豪快な滝が随所にあつて、富士の絶景が見られる峠も程近くです。小屋の飲料水は名水とされる丹沢のわき水を利用しています（水質検査済）。小屋付近に人家はなく、近所を気にすることなくイベントやバーベキューも存分に楽しめます。一方で、水源地で生活する責任として、なるべく汚水や汚染源となるゴミを出さない姿勢も求められます。そして小屋の生活を豊かにするものは、電化製品ではなく、自然の恵みとメンバーの知識や技術です。自然と自分との距離が近い水の木小屋の生活は、都市生活を振り返る刺激にあふれているといえるかもしれません。



わき水を貯水して不純物を沈殿させ、飲料水としています。

参加者の声から

参加目的は（複数回答 2, N=16）？



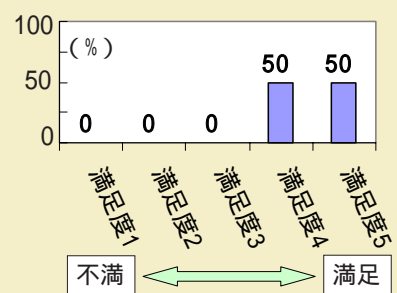
「長期的な活動を行うには、施設等の基盤整備に行政・民間支援が欠かせない」
「仲間と一緒に活発に活動してスキルアップを図りたい」

当日は人との出会いを目的とする参加者が最も多く、この目的での達成感も高いこと、全員が高い満足感を得たことがわかります。

今日の目的達成度は（同左）？
[5段階評価]

項目	達成度	人数	(%)
レク	3	1	6
	4	2	13
	5	1	6
	3	1	6
	5	1	6
学習	3	1	6
	4	3	19
	5	2	13
	3	2	13
	無回答	1	6
合計		16	100

今日の満足度は（N=8）？



目的達成度4以上比率：56%
当日満足度4以上比率：100%

施設整備・紅茶・石けんづくり



埼玉県神川村上阿久原

§ NPO法人 埼玉森林サポータークラブ

1997年、県民参加の森林づくりを推進する県の呼びかけに応じた有志により発足。奥山や平地林の整備の他、森林・林業への理解を広めるため、山村地域との交流イベントや森林文化の継承に取り組む。活動地は県内全域、富士山にも及び、複数箇所で活動を同時開催することも珍しくない。会員数約700。

イベントに向けて施設整備・紅茶づくり体験

朝8時30分、くるみ小屋(次ページコラム)にメンバーが集合します。メンバーの多くは県南部の都市住民ですが、片道2~3時間をかけて、県の北西端、群馬県に隣接する神川村まで月1回通ってきます。くるみ小屋のリーダー、小田村長らは前日から小屋に滞在し、草刈りや雨樋補修など整備を進めています。今日は来月開催する地元の子供達対象の「木工教室」の準備のため、周辺施設整備とプログラムの企画、そして紅茶づくりと石けんづくりに取り組みます。また、かねてから交流のある洋画家、東京の美大生らと合流し、10日ほど前に小屋周辺の山林内にある焼き物窯に入れた陶器作品の焼き上がりを確認します。

まずはストレッチ体操を兼ねた薪運びです。男性陣はかけ声宜しくストーブ用薪材をリレー式に作業小屋へ運搬します。子ども達を迎えるにあたっては、整理整頓が安全管理の第一歩。小屋周辺の枝条や残材をまとめ、不要物は焼却します。あわせて新しいトイレも設置します。残材の整理を終えた後は、会で力を入れているクラフト、編みガルの素材となるササなどを栽培する花壇作りです。間伐材をチェーンソーで切りそろえ柵状に組み立て、樹皮をむきます。小屋周辺の環境が次々と整えられていきます。

女性陣は茶摘みに出発です。小屋周辺の40年生ヒノキ林にはかつての茶畑の名残で茶が生えています。会ではこの茶木の活用を試み、紅茶づくりを始めました。茶葉は夏越しの葉が香りが高く紅茶向きで、朝のうちに枝先端部の今年新しく出た葉を選んで摘みます。こうして摘んだ茶葉は、風通しのよいところに陰干して、揉んで発酵させた後、地元の喫茶店からオープンを用意して乾燥させ、1日かかりで紅茶に仕上げます。

茶摘みと花壇作りが一段落し、メンバーが作業小屋で休憩しているところに、美大の一行が到着しました。



花壇となる柵の皮むき。



紅茶用の茶葉を摘みます。

日程 : 2004年9月18日

日程・作業内容確認	8:55
薪運び・周辺整備	9:20
茶摘み	9:45
休憩・美大一行到着	11:00
出窯	11:20
昼食・木工教室企画	12:30
作業再開	13:00
石けんづくり	13:30
道具手入れ・後かたづけ	14:00
アンケート記入	14:20
順次解散	14:50

参加者32名(会員17、美大関係者15)

当日の分担・配置

会員：施設環境整備、紅茶・石けんづくり
 役員：日程確認、進行
 美大関係者：窯出し先導

使用した主な道具・物品

施設整備；チェーンソー、皮むき、鋸、鉋
 紅茶づくり；茶葉、ガル、ポリ袋、揉み板、ボール、鍋、オープン
 石けんづくり；廃油、苛性ソーダ、水、バケツ、棒、杓子、漏斗、紙バック、計量カップ、ゴム手袋、マスク

美大生と一緒に陶器の出来映えを確認

当フィールドの所有者である浅見さんと連携して、芸術家とその卵達が柱を組み、煉瓦を積んで造った窯は7月に完成したばかり。会員もくるみ小屋建築で得たノウハウを活かして作業を手伝いました。先月には一緒に粘土で作品を作り、窯の火入れ式を実施しています。今日は窯を開け、初窯の記念作品の出来ばえを確認します。

「まだ窯が熱いよ！サウナみたい」

「わー、壊れて残骸ばかり」

「やったー、僕のはできてた！」

次々と窯から出てくる小鉢や皿といった作品の焼き上がりは様々で、自分の作品が見つかる歓声が上がります。オリジナルのマグカップやグラスは早速お昼の食卓で活躍します。



手作りの焼き物窯。



作品の出来映えは？



静かに液を型に流し込みます。

石けんづくりを体験

昼食の後は、石けんづくりです。これは小屋の廃水の環境負荷を考慮し、合成洗剤に替わる洗剤が欲しい、と企画したものです。水に溶かした苛性ソーダに、天ぷら油などの廃油を加え、20～30分根気よくかき混ぜます。メンバーはマスクとゴム手袋で完全装備。劇薬である苛性ソーダの取り扱いには注意が必要です。液がどろりとしてきたら、漏斗を使って紙パックなどの型に流し込みます。成型後1週間ほどで石けんは完成。軍手の洗濯などに重宝しそうです。

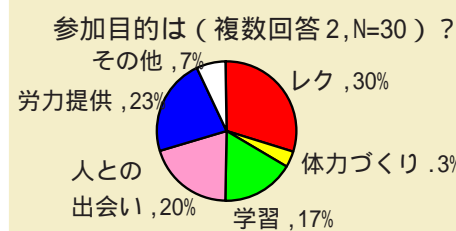
来月の木工教室は竹馬づくりを中心としたプログラムが発案され、滞在組のメンバーは今日も小屋に宿泊して、企画の準備を続けます。

くるみ小屋：本業を活かしたボランティア活動の展開

当フィールドの所有者で地元の林業家である浅見和夫さんの協力のもと、作業や地域交流の拠点として、フィールド内に会手づくりで建築した施設。浅見さんの林産加工の技術指導に加え、建築士や大工といった会員が本業で培った能力を総動員して、玄関フロアやテラス、クラフト展示棚など、外装、内装とも趣向を凝らした立派な小屋が整えられました。現在も風呂小屋の建築など、くるみ小屋の施設は充実し続けています。



参加者の声から



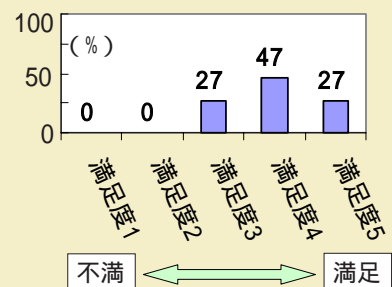
- 「森林の造成方法を学びたい」
- 「森林への理解を多くの人々に広めたい」
- 「活動に熱中する主人に連れられて参加。夫婦の時間を大切にしたい」

当日はレクを目的とする参加者が最も多く、約7割の回答者が高い達成感と満足感を得ていました。

今日の目的達成度は（同左）？
[5段階評価]

項目	達成度	人数	(%)
レク	5	1	3
	4	3	10
	3	5	17
	2	7	23
	1	3	10
体力づくり	5	2	7
	4	1	3
	3	2	7
	2	1	3
	1	3	10
学習	5	2	7
	4	3	10
	3	2	7
	2	1	3
	1	3	10
人との出会い	5	2	7
	4	3	10
	3	2	7
	2	1	3
	1	3	10
労力提供	5	1	3
	4	2	7
	3	2	7
	2	1	3
	1	3	10
夫婦の時間	5	1	3
	4	2	7
	3	2	7
	2	1	3
	1	3	10
森林理解促進	5	1	3
	4	2	7
	3	2	7
	2	1	3
	1	3	10
無回答	5	3	10
	4	1	3
	3	1	3
	2	1	3
	1	3	10
合計		30	100

今日の満足度は（N=15）？



目的達成度4以上比率：67%
当日満足度4以上比率：73%

拠点施設整備・クラフト



香川県高松市西植田町

§ NPO法人 どんぐりネットワーク

1994年、県事業「どんぐり銀行活動*1」の運営を支援する県民ボランティアを組織化して発足。1999年のNPO法人化を経て、当銀行活動の企画・運営支援を核に、森林づくり体験や森林の恵みを活かしたクラフト・食体験の提供、水源地域との交流などに取り組む。会員数236名（2002年度）。

台風通過後のどんぐり銀行活動をサポート

2004年10月20日高知県に上陸した台風23号は豪雨被害をもたらし、高松市北部に位置するドングリランド*2にも土砂崩れや林道の決壊など大きな被害が生じました。このため今回予定されていた森の文化祭（下コラム）はやむなく中止。しかし当日、この文化祭を準備し、また心底楽しみにしてきたメンバーが、拠点施設ドングリランドビジターセンターに集まりました。

当センターでは来館者に様々な体験プログラムを提供しています。今日は木の円盤を素材にした鳥のマスコットづくりです。木工担当メンバーが、「鉋を使うときは思い切って」、「目を入れると途端、人形が生きてきますよ」と要所で助言をしてくれます。鉋、小刀、木工用ボンドを使用して円盤の孤を活かしたパーツを組み合わせるだけで、15分ほどでかわいい人形が完成。こうした人形は持ち帰り時の破損の心配がなく、お土産にもぴったりです。余った素材の破片も、次のクラフト用に皆とっておきます。当日は文化祭の中止を承知でセンターへ遊びに来てくれる親子連れもあり、そうしたお客様へのプログラムもメンバーが対応します。



「鳥の体と尾をバランスさせて」



「森の動物園」シリーズ。

日程 : 2004年10月31日

集合・順次活動開始	10:00
参加者自己紹介	12:00
昼食・アンケート記入	12:15
作業再開・散策出発	12:50
キーホルダーづくり	14:45
後かたづけ	16:00
解散	16:30

参加者19名（内ゲスト3名、県庁スタッフ3名）

当日の分担・配置

木工指導、道具整理、棚製作、散策ガイド、キーホルダー作成

使用した主な道具・物品

丸鋸盤、鉋、小刀、木工用ボンド、鉋、鋸、金槌、木槌、ノミ、七輪、炭、焼き印型、円盤

森の文化祭

森林や木材等森林の恵みの利用に関わる活動をしている団体・機関等（2004年度18組織予定）が集まり、活動の集大成を出展する年一度のお祭り。どんぐり銀行活動の一環として香川県と当会が共催で実施し、お客さんは参加料をドングリの通貨で支払う仕組みです。公共交通と連結する臨時バス「どんぐり号」を運行するなどアクセスにも工夫。工作、野外料理、競技大会といった体験型のメニュー構成が好評で、親子連れを中心に4,500人（2003年度）もの集客がみられます。



「どんぐり銀行」HPより。

* 1 70ページ参照。

* 2 クヌギ、アベマキ、コナラを主体とする落葉広葉樹林が大半を占める県有林で31ha。県民参加の森林づくりのメインフィールド。2004年度より当地で行われる市民活動の管理と企画運営業務を当会が県より受託。

階下の雨天作業場と倉庫では、整理棚作りと収納した道具の整理が行われています。ビジターセンターは2002年に完成したばかり。手作りで内装を整える作業が続けられています。



2段組の棚をつくります。

今日の活動は曇天に始まり、午後には雨が降り出しました。しかし「ぜひドングリランドを歩きたい」という県外からの参加者のため、センター周辺の安全な箇所を散策するツアーが組まれました。

ランドの森には「こぶし坂」、「ドングリ銀座」といった、地形や植生にちなんだ地名がつけられています。地名となっている植物の葉や花、実を探すことは、散策の楽しみ方の1つです。今年の森の文化祭では、散策路の各所に10会場を配置し、スタンプを集めるウォークラリーが計画されていました。ランドの早期の復旧がまたれます。



苗畑でドングリを発芽させ、植栽できる大きさまで育てます。

ビジターセンター横の苗畑では、銀行に「貯金」されたドングリの一部が、後の「苗木払い出し」や植栽行事に向けて育てられています。

ドングリ君のキーホルダーは焼き印で

棚づくりを終えた雨天作業場では、木の円盤に焼き印をプリントする作業が行われました。円盤は来月のどんぐり銀行活動のイベントで使用するキーホルダーとなります。ケヤキ、ヒイラギ、ツバキの3種の樹種毎に、違った絵柄のドングリ君をプリントします。キャラクターは、絵本作家大滝玲子さんがデザインし、型はオリジナルのオーダー品です。「絵柄の線は焦がしすぎず、薄すぎず」、「結構難しいね」、「これは完璧にできた!」コツをつかんだメンバーによってドングリ君の円盤が次々量産されます。

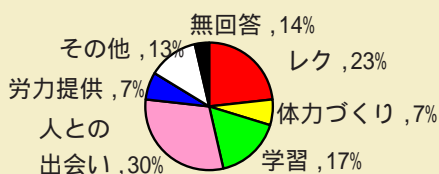


印は煙が出るくらいまで熱して。右から2番目が大滝さん。

文化祭の中止は残念でしたが、活動の現場ではメンバー達の熱意で今日もどんぐり銀行活動のサポートが着々と進められました。あらためて人の力の大切さを実感した一日となりました。

参加者の声から

参加目的は（複数回答2,N=30）？



その他の内容
 : 自然を守る : 本づくりの参考に
 : 森林に竹の家をつくり、パンプ-カエをやりたい
 : 森林づくりへの市民参加を支援

今日の目的達成度は（同右）？ 自由記載から
 [5段階評価]

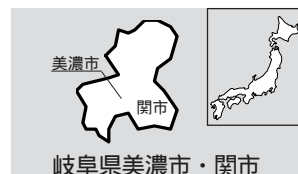
項目	達成度	人数	(%)
レクリエーション	3	2	7
	4	2	7
	5	2	7
体力づくり	2	1	3
	3	1	3
学習	2	1	3
	3	2	7
	4	1	3
人との出会い	3	2	7
	4	2	7
	5	6	20
労働力提供	2	2	7
	3	1	3
自然保護	1	2	7
本づくり	1	2	7
無回答	3	2	7
合計		30	100

「森づくりの作業をする人を増やしたい」
 「体力に合わせた作業をし、活動を長く続けたい」
 「参加者が活動の目的を十分理解し楽しみながら参加できる仕組みが大切」
 「台風被害の修復のために、すぐに人々が集い、できることをやり出す会のパワーがすごい」

目的達成度4以上比率：57%

当日は人との出会いを目的とする回答者が最多で、この目的で高い達成感を得た回答者も多く、全体でも約6割の回答者が高い達成感を得ていました。

岐阜県立森林文化アカデミー見学・ ふどうの森での架線運搬体験



§ 全国雑木林会議

雑木林の保全、環境教育など、雑木林に関わる市民団体の情報交換などを主目的とするネットワーク組織。1993年より、毎年一度開催地を変えて、市民の手作りの企画・運営によって大会を開催。今大会のテーマは「長良川で考える - 雑木林な流域づくり」。岐阜県が多様な森を舞台に流域単位の森づくりについて考える。

森林に関わる人材育成の専門機関を見学

雑木林会議初日のエクスカーションはあいにくの雨模様で始まりまして。参加者は傘を手に岐阜駅に集合、受付をすませてバスに乗り込みます。当エクスカーションでは「岐阜県の森づくり活動を体験」をテーマに、岐阜県立森林文化アカデミー（美濃市）の見学、ふどうの森^{*1}（関市）での作業体験が予定されています。なんとか天候が持ち直してほしいところです。

アカデミーに到着すると、まず校舎の木造建築に目を奪われます。校舎の各所に見られる格子状の壁には、接合部に工夫が凝らされ県産間伐材が活用されています。本校は2001年度に開校した森林・林業・林産に関わる専門・専修学校で、スペシャリストとジェネラリスト養成の2コース、各コース20人2年制の体制^{*2}をとっています。本校ではこうした少人数制で「プロジェクト教育^{*3}」など、実践型のカリキュラムで教育が行われ、新たな森林文化を提案、創造できる人材を育成しています。

学校概要の説明を頂いた後は施設見学です。学生ホールでは、学生の木工作品が展示されています。本棚や食器などの作品は手に取ることができ、参加者は木の手触りを感じたり、玩具を試してみたり。作品はディスプレイの工夫も見事です。

次は屋外へ出て、2004年度に学生が主体となって建築した「風の円居（まとい）」を見学します。これはワークショップを行うための約8畳の施設で、内部には囲炉裏状の座卓があり、車座になってくつろげる空間が作られています。



格子状の壁で囲まれた廊下。



「風の円居（まとい）」内部。

*1 生活環境保全林で約126ha。アカマツ・アベマキを中心とする二次林。「ふどうの森クラブ（次ページ）」はこのうち迫間地区大岩不動周辺の森林約9.5ha（所有は財産区・社寺・個人）で自然観察などの活動を展開し、うち約1haを整備対象地と設定して、マツタケ山の再生や棚田の管理、炭焼きなどの里山活動を行っている。

*2 この他、本校には森林・林業関係者対象の「短期技術研修」、一般対象の「生涯学習」の2部門がある。

*3 スペシャリスト養成科で行われる、地域に密着した実践活動（プロジェクト）による教育。例えば環境教育分野の学生は、地域の一中学校と連携して、中学1年生の1年間の総合学習を企画し、実際に授業を実施する。

日程 : 2005年10月8日

集合・移動	10:00
森林文化アカデミー見学	11:00
ふどうの森へ移動	12:25
昼食・ふどうの森クラブ紹介	13:05
フィールド案内	14:40
マツタケ山解説・架線運搬体験	15:40
移動・参加者自己紹介	16:20
解散	17:00

参加者28名（一般11、スタッフ:エクスカーション3・アカデミー4・ふどうの森クラブ10）

当日の分担・配置

参加者：見学、架線運搬体験
 スタッフ:エクスカーション担当；日程確認、進行、プログラム説明、組織間連絡調整
 岐阜県立森林文化アカデミー：学校概要説明
 ふどうの森クラブ：昼食交流会準備、架線運搬準備、会活動・フィールド説明

使用した主な道具・物品

熊手、剪定鋏（腐植層除去実演）、土嚢袋

ふどうの森で、架線運搬を体験

雨足が勢いを増す中、アカデミーを出発。10kmほどの道のりで、ふどうの森に到着です。昼食は「ふどうの森クラブ*4」との焼き肉交流会が企画されています。当会のメンバーは悪天候をものともせず、屋外に会場を設営して準備にあたってくれました。メニューには、会が栽培した黒米、シイタケも食材として加わり、会話が弾みます。採取した茶葉をあぶって煮出したお茶は、味わいのある優しい味がしました。このお茶は会で愛飲されています。

会の活動についてお話を頂いているうちに雨が止み、「ふどうの森めぐり」に出発です。5棟ある炭焼き小屋、シイタケ栽培と堆肥づくりの現場、トンボ池をスタッフが案内してくれます。

マツタケ山再生の現場（約50年生アカマツ林、約0.3ha）では、会が指導を受ける「岐阜県マツタケ研究会」の高井会長から、かつてこの山はマツタケの宝庫だったこと、そして「マツタケの再生には、林内の光条件を改善し、土壌上部のマツゴ（腐植層）を掻き出す整備が必要」といった解説があります。腐葉土としての商品価値もあるこのマツゴを、効率的に林外へ運搬する設備として当地に導入されたのが「じゃんじゃん索道*5」です。参加者は早速運搬を体験します。

「いくよー！」^{ふもと} 麓への合図とともにマツゴを詰めた土嚢袋から手を離すと、積荷は「ヒュー、シュルシュル…」と音を立てて索道を下降していきます。到着の様子を確認するために、一行は麓の広場に移動して、今度は下降する積荷を待ち受けます。

「ヒュー、ドーン（荷下ろし場で袋が落下する音）」、「うわあー！」
積荷の予想外の速度に歓声が上がります。束の間の体験でしたが、里山の産物の循環利用について理解を深めることができました。



この茶葉でおいしいお茶が飲めます。



マツタケ山再生の現場にて。



「いくよー！」

目指すは循環システムの構築：ふどうの森クラブ

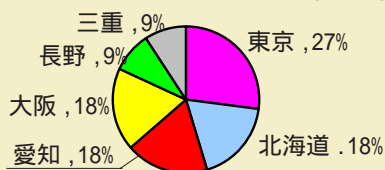
当会の活動方針の1つに「循環型整備」があります。活動で得られた産物を有効に活用して、他分野の整備に役立てようという地域内循環の取り組みで、具体的にはマツタケ山の整備で採取した落ち葉や枝条で堆肥をつくり棚田に供給したり、間引いた竹で炭を焼いたりします。また、炭焼きでできた粉炭や竹酢液は土壌改良剤などとしてマツタケ山や棚田へ供給しています。会では、まずはこうした活動場所内での循環システムを実現させ、さらに「水の循環」、「流域」などを意識した、より広域での取り組みに拡げていきたいと考えています。



炭焼き小屋にて（屋根は竹製）

参加者の声から

どちらから参加しましたか（N=11）？



全員が他県からの参加（但し岐阜出身者2名）で、アカデミー見学や架線運搬体験がよかったとの声が多く出ました。

今日の感想は（抜粋）？

「退職後にアカデミー入学を検討している。資料も沢山いただけよかった」
「アカデミーを見学して、こういう生き方もあると提示されてしまった格好。考えさせられる体験だった」

「マツタケのでる手入れの仕方など参考になることを教えてもらえてよかった」
「索道が見たくて参加した。結構簡単にできるようで、自分のフィールドでもやってみたいと思った」
「雨降りでも楽しめたのでよかった」

* 4 1998年度、県の里山林整備リーダー講座の受講生等を中心に発足。県下里山クラブの先駆的な存在。現会員数60名。

* 5 ワイヤロープの索とポリプロピレン製滑車を使用した簡易な索道。滑車のフック部分に荷を吊すと自重で下降し、山頂から約64m離れた麓の広場に運搬される仕組み。160kgの荷重に耐える。全国的には「ヤエン」の呼称で知られる。

下刈り・つる切り



東京都武蔵村山市

§ NPO法人 樹木・環境ネットワーク協会 ^{しゅう}聚

樹医らによる樹木保護活動を母体に、1995年メンバーを市民に拡げて発足。自然との調和を保つ社会づくりを目的に、生態系の正しい知識の普及の他、各地で雑木林など人の利用によって維持されてきた二次林の整備を行う。地元との連携を重視し、コミュニティの活性化にも力を入れる。会員数849(2002年度)。

コナラ林の萌芽更新区を手入れ

武蔵村山市は、狭山丘陵のふもとに位置し、立川市や埼玉県所沢市に隣接する人口6.8万人の都市です。当会は海道緑地保全地域^{かいどう}*1にて「武蔵野の森で学ぼう」の名称で雑木林の手入れなどの活動を展開しています。今日の作業はコナラの萌芽更新区の下刈りかつる切りです。昨日からの雨は集合時間までにおさまり、今日は一日曇天の中での活動となりそうです。また今日は、地元自治会からの参加が5名、初参加者2名が加わっています。打合せを終えてメンバーは早速対象林分に移動します。

C区(約0.3ha)は2000年度の皆伐後3年半が経過し、母樹のドングリから成長した実生は1.2m程、切り株から成長した萌芽枝は背丈を越す高さになっています。林業経験者のメンバーから、コナラの周囲1m程を鎌で刈り払うこと、コナラにからみつけたツル植物は根元を切り、木を傷めるのを避け無理に外さないことといったポイントが説明されます。鎌の安全な取り扱いを確認し、メンバーは横一列に並び一斉に前進して作業を進めます。

雨上がりの下刈り作業は、鎌を振るたびに葉の水しぶきが降りかかります。地面を這い長く伸びたツル植物を手繰る軍手は、すぐに泥で真っ黒になります。おまけに藪の中に隠れた蚊の群を追い払いながらの作業は、なかなか根気が必要です。

「毎年刈り続ければこのツルも少なくなるかな」

「なって欲しいねー」

「わぁ、サンショウのいい香り」

雨露にぬれた植物の色はひととき鮮やかで、腰を低くして作業をしていると、まるで緑のトンネルの中に入ったようです。あたりには、シャッ、シャッとメンバーが草を刈る音が響きます。



作業のポイントを解説。



鮮やかな緑の中、作業を進めます。

日程 : 2003年6月28日

集合・身支度・道具配布	10:00
挨拶・日程確認	10:15
C区作業	10:20
昼食	12:10
B区作業	13:00
ミーティング	14:00
アンケート記入	14:45
後かたづけ	14:50
解散	15:00

参加者14名(うちスタッフ1)

当日の分担・配置

参加者：つる切り
リーダー：作業・ミーティング進行・フィールド掌握

使用した主な道具・物品

鎌、鋸、剪定鋏

*1 都有林約8ha。皆伐などの施業は所管の東京都多摩環境保全事務所が実施。会では萌芽更新区を皆伐時期の古い順にA～D区と名づけ、区内の管理作業(次ページコラム)を行っている。

午後からは2002年度に皆伐されたB区に移動して同様の作業を続けます。B区の一部には、今年の春にC区から実生苗を移植しています。林内は午前中のC区と比べ、草の繁茂が少なく、作業は少時間で終わりそうです。植栽木の周りを丁寧に刈り払い、林内に見られるイヌツゲ、タラノキ、ノブドウやムラサキシキブといった植物も確認しあいながら作業を進めます。



作業の合間には植物観察も。

ミーティングで今後の活動を検討

作業後は活動予定や運営の懸案事項をメンバー皆で打合せます。こうしたミーティングはメンバーのまとまりをつくりフィールド活動の実行力を高めるために不可欠なものとして、月1回開催しています。話し合いでは、7～8月は外部講師を招いた植生の勉強会や調査などを集中的に行うことが決定。また、先日行った地元自治会に活動への参加を勧誘する説明会で協力的な反応が得られたこと、林内の野草の摘み取りや稚樹の踏みつけを防ぐ為に地元パトロールと連携してはどうかといった話題もあがります。最近の活動では、付近の住民から「今日もごろうさま」と声をかけていただけるような状況も生まれきています。今後も雑木林への関心と保全の輪を広げていくことを確認してミーティングは閉会、今日の活動は終了しました。



昼食や野外ミーティングは道具小屋脇の広場で行います。

武蔵野の森で学ぼう：武蔵野の雑木林の再生を目指す

当フィールドでは、薪炭林として利用される中で生物多様性を維持してきた、昔の武蔵野の雑木林を再生することを活動の目標にしています。今回のような作業のほか、間伐・枝打ち、萌芽枝や実生苗の間引き、稚樹の保護柵設置などの管理作業を行っています。また林床植生の経年変化や、落ち葉掻きの有無が植生に与える影響なども調査しています。雑木林を維持する地元コミュニティの役割にも注目しており、その入口として、樹名板の設置やドングリ拾いなどの交流イベントも開催しています。



植生調査の様子*2。

参加者の声から

参加目的は（複数回答 2, N=26）？



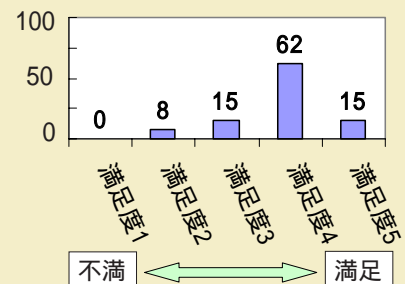
- 「交流の輪や参加者を増やしていきたい」
- 「森を環境学習の場に。地元の関心を高めることで、森でのマナー向上を期待したい」
- 「地元のやすらぎとなる森の姿を追求したい」

当日は学習を目的とする回答者が最多で、各目的の達成度、満足度とも4（中程度より高い）とする回答が最多でした。

今日の目的達成度は（同左）？
[5段階評価]

項目	達成度	人数	(%)	
レク	2	1	4	
	3	2	8	
	4	3	12	
	5	1	4	
	合計		7	27
学習	1	1	4	
	3	2	8	
	4	5	19	
	5	1	4	
	合計		9	35
人との出会い	2	2	8	
	4	3	12	
	5	1	4	
	合計		6	23
	労力提供	2	1	4
4		3	12	
5		1	4	
合計			5	19
合計			26	100

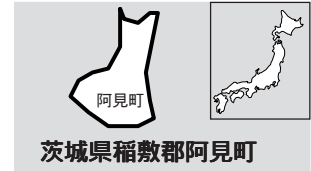
今日の満足度は（N=13）？



目的達成度4以上比率：65%
当日満足度4以上比率：77%

*2 会HP「武蔵野の森で学ぼう」より。

堆肥づくり・竹林間伐・炭焼き



茨城県稲敷郡阿見町

§ いばらき森林クラブ

1997年、県の森づくり体験会の参加者有志により発足。県内6ヶ所の固定フィールドにて、手入れ不足の針葉樹人工林の育林作業、里山整備と資源活用などを行う。キノコ栽培は部会をもち販売も行う。普及活動では2005年より県の後援で、会員らを講師に森林ボランティア育成講座を主催。会員数144(2002年度)。

放置された雑木林と竹林を手入れ

阿見町は霞ヶ浦の南岸に位置し、土浦市やつくば市に近接する人口4.7万人の町です。今日のフィールド、小池城址公園*1では1999年度より町、県、当会の三者協定に基づき森林整備が進められています。今日の作業は、堆肥づくり、竹林の間伐、炭焼き、草刈りなど盛りだくさんです。メンバーは各担当毎、グループに分かれて作業を進めます。

公園北側のクヌギ・コナラ林では、今日は町の仲介で地元のボーイスカウトが堆肥づくりに参加しています。メンバーの指導のもと、子ども達は熊手や箒で落ち葉を掻いてビニルシートに集め、木枠で囲んだ堆肥場へ運び入れます。

「あ！、カブトムシの幼虫だ」、「わー、ほんとにいたー！」

落ち葉の陰のカブトムシの幼虫の周りには、たちまち子どもたちの輪ができます。この林では落ち葉を利用した堆肥づくりを進めた結果、予想以上にカブトムシが養殖し、夏期は成虫、今の時期は幼虫が多数観察できるようになりました。また林床にはキツネノカミソリなどの野草も見られるようになっています。

竹林では間伐作業です。公園東側の約1ha程の傾斜地で、整備開始時には直径約7cm、高さ10～15mほどのマダケが足を踏み入れないほど繁茂していました。会では目標密度を5m²あたり1本として、形質の良い太い竹を残す間伐を進めています。

竹は受け口を作らずに桿を鋸で一気に切り倒します。竹は木と比べて軽いため扱いは楽ですが、竹林内が過密なため、かかり木になりやすく、押しでもしなるばかりでなかなか倒れません。地道な手作業が求められることに加えて、マダケの旺盛な繁殖力がネックとなり、竹林整備は会でも最も苦勞している作業です。

日程 : 2003年11月8日

日程・作業確認・作業開始	9:00
落ち葉掻き終了・焼き芋会	10:45
子ども達解散	11:15
昼食	11:45
作業再開	13:00
後かたづけ	14:40
アンケート記入	14:55
ミーティング	15:05
解散	15:15

参加者73名(会員16、町民3、ボーイスカウト・引率者50、県2、町2、)

当日の分担・配置

会員・町民：堆肥づくり指導、焼き芋会準備、竹林間伐、炭焼き、味噌汁等調理
ボーイスカウト：堆肥づくり、焼き芋会参加
スタッフ：

運営委員；フィールド統括

町；スカウトら町民参加仲介

県；運営支援

使用した主な道具・物品

刈り払い機、鎌、鋸、鉋、箒、熊手、ビニルシート、炭材、燃材、調理器具



落ち葉を集めて腐葉土を作ります。



伐採の終わった箇所(手前)とこれからの箇所(奥)。

*1 町有林約4ha。コナラやクヌギ、アカマツを主体とする林であったが、整備開始時には手入れ不良地、マツクイムシ被害地が広範囲に見られた。整備は県林試(当時)による「森林整備指針」をもとに実施(58ページ参照)。

刈り払い機担当は、公園中央の造林地周辺の草刈り作業です。ここはアカマツ林の枯損跡地で、2～3mの高さのアズマネザサが密生していました。会で継続的な刈り払いと野焼きを行った結果、3年ほどでアズマネザサは勢いを失い、代わって現在はセイタカアワダチソウなどの外来草種が侵入しています。1999年度に町民やボーイスカウトの参加を交えて150本のケヤキを植栽しており、夏期の活動は主にこの場所の草刈りが主となります。



アズマネザサの勢いは衰えました。

間伐竹は竹炭と竹酢液として活用

炭焼き担当は、間伐したマダケを活用して簡易製炭を行っています。リサイクル材料を活用した会手作りのドラム缶窯を使用し、煙突部分にペットボトルを設置して竹酢液も採取しています。竹は窯の大きさに切りそろえ、四つ割にして窯にぎっしりと詰め込みます。点火後1時間ほどで燃材から炭材へと火が移り、もくもくと煙が出て炭化が始まります。1回の製炭で60kg程の材料から約15kgの炭ができます。今日は作業を終えたボーイスカウトをいたわる焼き芋会の準備のため、メンバーは炭焼きの傍ら焼き芋づくりに大忙しです。



ドラム缶窯による簡易製炭。今日は焼き芋作りも大忙し。

昼食ではメンバーが準備した味噌汁と焼きシシャモを堪能し、午後からは炭焼き担当以外は竹林整備に集中して作業を続けます。整備5年目を迎え、当フィールドでは計画した森林整備はほぼ達成されつつあります。「全国育樹活動コンクール」(コラム参照)表彰式の報告もあり、地域と連携して森林づくりの輪を拡げていくことの大切さや活動の一層の充実を確認しあい、今日の活動は終了しました。

育樹活動で農林水産大臣賞受賞:「地道に弛まず」活動が評価

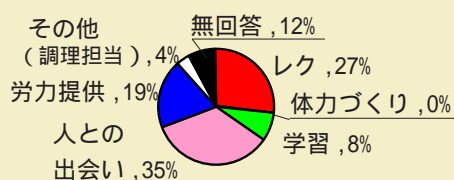
当会は当年度「全国育樹活動コンクール」団体の部で農林水産大臣賞を受賞、第27回全国育樹祭において表彰されました。小池城址公園の活動にみられるような地域と連携した森林整備の実践、県下全域での活動の展開など、これまでの実績が評価された結果といえます。表彰後、活動日に賞状と盾を手にしたメンバーは「やっていることは地道だけど、こうみると受賞はすごいことなんだな」としみじみ。「この勢いで若い会員には頑張ってもらいたい」との声もあがります。会は今後も新しい企画や新会員を増やして会を活性化させながら「地道に弛まず」をモットーに活動したいと意気込んでいます。



賞状と表彰盾。

参加者の声から

参加目的は(複数回答2, N=26)?



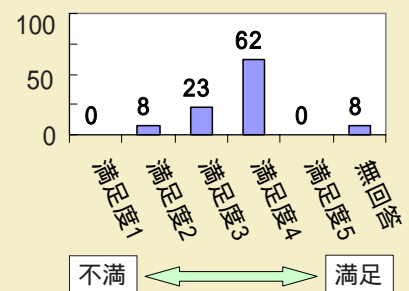
「里山や城跡などを残してフィールドを親子で楽しめる魅力ある公園に」
 「活動にメリハリをつけていきたい」
 「仕事始めに活動計画を検討するとよい」

当日は人との出会いとレクを目的とする参加者が多く、約7割の回答者が高い達成感を得ています。達成度の分布は満足度よりも高い傾向があります。

今日の目的達成度は(同左)? [5段階評価]

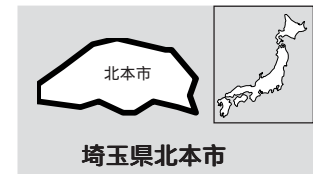
項目	達成度1	達成度2	達成度3	達成度4	達成度5	無回答	合計
人との出会い	3	4	4	1	15	4	27
レク	5	2	8	4	15	8	42
労力提供	4	4	1	4	15	4	36
学習	2	1	4	1	4	4	16
調理担当	3	1	4	1	4	4	17
無回答	4	1	4	1	4	4	16
合計	5	2	8	4	15	8	42
合計	3	2	8	4	15	4	42
合計	4	1	4	1	4	4	16
合計	4	3	12				19
合計	26		100				100

今日の満足度は(N=13)?



目的達成度4以上比率: 69%
 当日満足度4以上比率: 62%

草刈り・NPO 設立準備勉強会



§ 北本雑木林の会

1991年、管理放置やゴミの不法投棄で荒れる雑木林を保全したいと住民有志により発足。「緑のまちづくり」を理念に、所有者、(財)北本市公園緑地公社と雑木林管理協定を締結し、雑木林の清掃、草刈り等の手入れを行う。雑木林の魅力を伝えるイベント、保全の必要性を訴える啓発活動にも取り組む。会員数55名(2002年度)。

市街地に残る雑木林を手入れ

北本市は中山道の宿場町の歴史を持ち、武蔵野の雑木林としてかつて一帯が林に覆われていたそうです。1970年代からの急激な都市化により宅地開発がすすみ、現在の人口は約7万人、高崎線沿線のベッドタウンとなっています。今日は、この市街地に残された雑木林、10号林*1の草刈りと、勉強会を開催します。

今日は今期2回目の草刈りですが、エノコログサやツル植物のカナムグラといった草本が膝丈程まで伸び、林床を覆っています。昨年植栽した苗木の下刈りをするとともに、特定の草本の繁茂や不法投棄の誘因となる藪の形成を防ぐため、フィールド全体を刈り払います。メンバーはカマと刈り払い機の担当に分かれ、早速作業に取りかかります。

鎌の担当は、植栽した苗木の周りを丁寧に刈ります。あわせて苗木にからみつけたツルをたくり寄せて、枝を傷つけないようにカマで切り離します。カナムグラのツルには小さなトゲがあり作業はなかなかやっかいです。林床には所々ツルが山のようにかたまって繁茂した箇所があり、メンバーは片手でツルを引っ張り、掻き出すように鎌をふるいます。

刈り払い機担当は、フィールド全体を刈り進めます。刈り払い機3台のエンジン音が響き、地面には刈った草の小山がどんどん増えていきます。10号林では2000年度から4年間こうした草刈りを継続した結果、アズマネザサの勢いはほぼ収まり、これに対応してゴミの不法投棄も殆ど見られなくなりました。

中央の広場では、調理担当が昼食の豚汁の準備を進めています。野外料理は毎回継続しており、活動の楽しみの一つです。

日程 : 2003年10月19日

日程・作業確認・作業開始	10:00
小休止・挨拶	10:35
作業再開	10:40
昼食	12:10
NPO 設立準備勉強会	12:35
アンケート記入	14:10
道具手入れ・後かたづけ	14:25
解散	14:40

参加者8名

当日の分担・配置

今月の会長(輪番): 日程・作業分担確認
 会長(会代表): 勉強会議案提出
 会員: 草刈り、豚汁調理

使用した主な道具・物品

刈り払い機、鎌、熊手、調理器具、長机



苗木の下刈りを進めます。



ツルの山と格闘中です。

* 1 民有地0.17ha。「雑木林の管理協定」協定林の1つ(58ページ参照)。戦後に放置され、2000年度の手入れ開始当時はアズマネザサが繁茂し、大量のゴミが不法投棄されていた。キリ、クリ、サクラなど、残存する樹種よりかつては宅地と考えられる。2002年度、(財)北本市公園緑地公社から苗木の提供を受け、コナラとガマズミを20本植栽。

雑木林を守る手段として法人化を検討

豚汁とおにぎりで一息入れ、午後は草刈りを終えてすっきりとしたフィールドでNPO設立準備勉強会です。この勉強会は、将来のNPO法人化を視野に入れ、必要な準備や組織運営の課題を会員皆で検討するもので、月1回の頻度で行っています。

まず会長から、私有地である雑木林の転用や消失をとどめるには買い上げや借り上げ、所有者から寄付を受けるなどの方法があり、会がそうした主体になるためには法人格が必要なこと、この実現には人材や資金、人を集める魅力的な企画などが重要であるといった話題が提供されます。メンバーからは、意識だけではなく実際に資金を負担し、行動してくれる賛同者を増やさねばならないこと、まずはあまりお金や人手をかけないで、雑木林体験やピオトープづくりの支援など地域の環境教育に役割を果たすことで理解者を増やしていったらどうかといった意見が出ます。会をPRする企画としては、ガーデニング教室や写真展、スライド会、若い母子対象のクラフト塾などの案があがります。また、既に取り組んでいる雑木林コンサートや中学生対象の草刈り体験で緑の大切さや会をPRする部分をもっと充実させては、といった具体的な改善案もあがります。

1時間半程の討議を経て勉強会は終了。作業でさわやかな汗を流し、意見交換を終え、内容の濃い一日となりました。



汗をぬぐい、昼食の時間です。



お茶を片手に気楽な雰囲気、討議を進めます。

中学生にボランティア参加機会を提供：体験イベントから保全教室へ

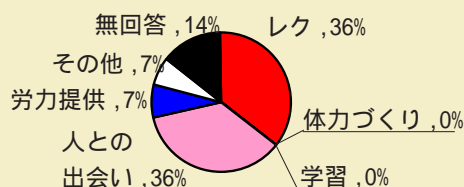
会は(財)北本市公園緑地公社との共催で、市内4校の中学生を対象に、草刈り体験のボランティア・プログラムを提供してきました。休日の自主参加のイベントでありながら200人以上の生徒が参加するなど盛況でしたが、継続10年目を節目に2004年度から、各回20名程の少人数制による年4回の「草刈り教室」、「のこぎり教室(倒木処理など)」に内容を一新しました。道具の扱いなどの基本をしっかり習得できる体制を整え、中学生にボランティア参加の意義を理解し達成感を味わってもらうことが狙いです。中学生が熱心に作業に取り組む姿は、指導にあたる会の会員にとっても大きな励みになっています^{*2}。



草刈り教室(2004年度)^{*2}。

参加者の声から

参加目的は(複数回答2,N=14)?



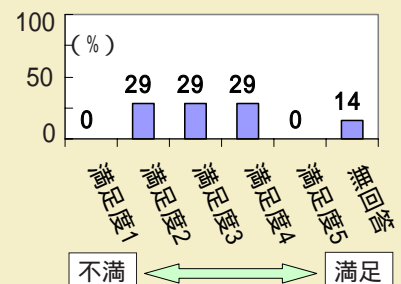
「粘り強く活動を継続することが大事」
 「コミュニティ、憩いの場として生物の豊かな林がほしい。今日のような話し合いの場をもっともつべき」
 「人材を集めて活動を拡大したい」

当日はレクと人との出会いを目的とする参加者が最も多く、参加者の2~3割が高い充足感を得ていました。勉強会に関連して組織運営に関する意見が多数でした。

今日の目的達成度は(同左)? [5段階評価]

項目	達成度	人数	(%)
レク	3	3	21
レク	4	2	14
人との出会い	3	4	29
人との出会い	4	1	7
労力提供	3	1	7
その他	3	1	7
無回答		2	14
合計		14	100

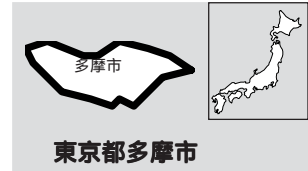
今日の満足度は(N=7)?



目的達成度4以上比率: 29%
 当日満足度4以上比率: 21%

*2 会HP「中学生雑木林保全ボランティア」より。

補植・棚田管理



東京都多摩市

§ 桜ヶ丘公園雑木林ボランティア

1991年、都立桜ヶ丘公園を管理する(財)東京都公園協会のボランティア募集に応じた市民有志によって発足。以来、都立公園における雑木林ボランティアの先駆的存在として、公園の雑木林と棚田の保全、里山の資源活用と文化伝承など活発な活動を展開。会員数74名(2004年度)。

皆伐更新地にコナラを補植

多摩市北東部の住宅地の中に位置する都立桜ヶ丘公園は、丘陵と谷間からなる約28haの公園です。会のフィールドは、この公園内の「こならの丘^{*1}」と棚田です。拠点施設「ボランティアルーム」では「本日の担当」をつとめるメンバーの司会で、活動内容を打ち合わせます。

こなら班^{*2}の今日の活動場所は、こならの丘L～N、Q～Sエリアです。コナラなどの上木の育成を重視し、下草を刈り取る薪炭林型の管理を行う区画です。当区画では1995年度に皆伐が行われ下刈りや除伐などをして萌芽更新を促していますが、加えて今日は、会が育ててきたコナラの苗木を補植します。「蒸散による苗木の枯死を防ぐために植栽前に苗木の細い枝を払うこと」、「根には土を付けたまま植え、しっかりと踏み固めること」といった補植作業のポイントを確認します。出席人数を勘案して午前中の植栽本数の目標を決め、作業に出発です。

苗木はイベントで使用するサツモイモと並んで、公園内の畑(会手作り約100m²)で養成されています。これらの苗木は「どんぐりの里親制度」によって育てられたものです。すなわち、会イベント「どんぐり祭り」に参加した子ども達の自宅でどんぐりを発芽させ、育ててもらいます。苗は次回のイベント時に子ども達と一緒に畑の苗床に植え替え、山出しできる大きさまで育ててこならの丘に植栽するという仕組みです。

メンバーは、スコップで苗木を次々と掘りとりませ

日程(こなら班) : 2005年2月12日

日程・作業内容確認	10:00
道具搬出・こならの丘へ移動	10:10
苗運搬・植栽作業	10:25
施設へ移動	11:55
昼食・アンケート記入	12:05
こならの丘へ移動	13:00
苗運搬・植栽・間伐材搬出	13:10
作業終了・施設へ移動	15:00
後かたづけ	15:10
ミーティング	15:35
解散	16:00

参加者23名(会員22、コーディネータ1)

当日の分担・配置

会員：こなら班；補植、間伐材搬出
 : 田んぼ班；畦補修、コナラ植栽
 味噌汁調理、ちらし印刷
 本日の担当：出欠確認、道具確認、進行、作業記録作成、寄稿者選定、施設の鍵管理
 コーディネータ：ミーティング出席、助言

使用した主な道具・物品

スコップ、唐鍬、剪定鋏



拠点施設で打ち合わせ。中央は「本日の担当」津村さん。



苗木は全部で65本あります。

*1 50年生コナラを主とする雑木林で約2ha。会では林地をグリッド(20m×20m)に分けてA～Sエリアと名付け、エリア毎に樹種の構成や林床の状態を把握し、目標とする林の姿を定めて管理作業を実施(61ページ)。

*2 会の作業には、林の維持管理と間伐材などの利用を行う「こなら班」、棚田の管理を行う「田んぼ班」がある。

苗木を運搬しながら作業エリアに到着です。補植する箇所は、赤いテープをつけたポールで事前にマーキングをしてあります。作業は2～3人でチームを組み、まずはスコップや鍬をふるって穴を掘ります。2月とはいえ、明るい日差しの中の作業は汗がにじんできます。苗木に盛った土を踏み固め、丹念に植え付けます。苗木の下枝は剪定鋏でカットします。

エリアには地面のあちこちにロープを張った方形の柵が作られています。この柵は、ドングリから発芽したコナラの稚樹を人の踏みつけや下刈り時の誤伐から防ぐための囲いです。

今日は午後も、この苗の堀取りと補植の作業を再度行い、植栽した苗木の南側の雑木を伐って日当たりを改善しました。また先月に間伐したコナラの玉切りを終えた材を、ほだ木用にキノコヤード*³に搬出しました。



マークした箇所に穴を掘ります。



鋏で下枝をカット。右のロープは芽生えた稚樹などを保護する囲い。

畦を補修しコナラを植栽

田んぼ班は、柵田にて畦の補修、隣接する地滑り跡地へのコナラ植栽といった整備作業を行いました。

柵田

約1000坪。休耕田に谷戸田の景観を復元するため、1998年に畦の確認・整形、水抜き等の作業を開始しました。これら復元作業による環境の変化は、柵田の植生、昆虫、水棲生物などの調査からも確認しています。谷戸田景観の基本要素として2003年より稲作も開始し、今期は6升ほどの米が収穫できました。



復元開始当時（左）と現在（右）。かつては2mを超す葎原。

フィールド活動をサポート

会の活動は屋外ばかりではありません。両班がフィールドで汗を流している間、広報物の印刷や昼食のお味噌汁づくりといった役割もメンバーが分担して行っています。今日は、会企画「炭焼き実演」開催を地元自治会にお知らせするちらし400部を印刷し終えました。

ミーティング

日程の最後に今日の活動を振り返ります。作業の進行状況、申し送り事項などをメンバーで確認し、本日の担当が活動記録*⁴を作成します。コーディネーターの同公園管理事務所所長を交え、「炭焼き実演」のPR、来年度の新会員募集についても話し合われました。



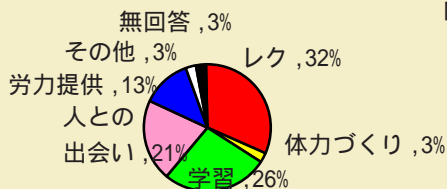
炭焼きをお知らせするちらし。煙や臭いに理解を求め、見学者も募集。

* 3 キノコ栽培実験区。コナラ、サクラなどの間伐材をほだ木に利用し、主にシイタケ、ナメコを植菌。

* 4 65 ページ参照。

参加者の声から

参加目的は（複数回答2,N=38）？



「思った以上に苗木の掘り起こしは大変だった」
 「参加人数が多くなっても気持ちが揃っているから作業も捗る。質的に良い活動は出来る」
 「久しぶりに参加して張りを得ることができた」

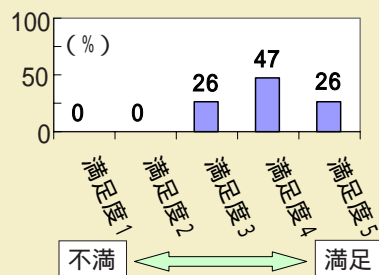
当日はレクを目的とする回答者が最も多く、約半数が高い達成感、約7割が高い満足感を得たことがわかります。

今日の目的達成度は（同右）？

[5段階評価]

項目	達成度	人数	(%)
レク	2	1	3
	3	3	8
	4	5	13
	5	2	5
	無回答	3	8
体力づくり	3	1	3
	4	5	13
	5	1	3
	無回答	3	8
	計	38	100

今日の満足度は（N=19）？



目的達成度4以上比率: 50%
 当日満足度4以上比率: 73%

会員へのインタビュー * 5

「会が継続してきた理由とは？」

指導者・リーダーを固定しない

「毎回担当を変えることで、特定の個人のわがままがでにくい構造になっている。そのことを皆が意識している」

「一人だけが主導権を握るのではなく、皆でわいわいしながらやってきたから」

「いい意味で平等で、内紛などが起きないシステムがある。かつて自分がボス的存在になりそうな時があったが、新メンバーの知識の不足は勉強して補えばいいのだから、後ろに引く様にした」

自主性が発揮されている

「各自が得意分野で立ち働き、全体として雑木林のためになることをやっている。自分が活動に対して役立っているという実感がある」

「指示待ちではなく、各自が考えて行動している。お互いに自分の知識や、技術を教え合うことが自然にできている」

「誰かに頼るのではなく、自分で考えてから行動しようとする人が多い」

こならの丘の存在

「目標となるフィールドがある」

「東京としては豊かな自然があり、生き物がいっぱいいる。毎年繰り返しの様な作業も、積み重ねることで、木の成長が実感できるようになる」

「雑木林に愛着があり、それが盛り上がり雑木林を再生していこうという気持ちが高まってきたから」

東京都の支援

「都が面倒をみているという安心感の他、ある程度財政的なバックアップもある。コーディネーターとも仲間の様につきあえている。『都が後援している団体』ということで都広報での募集案内を見た一般市民が入って来やすい」

「拠り所となるような施設があることが、きちんとした活動が続くベースになっている」

* 5 (倉本ら, 2004; 桜ヶ丘公園雑木林ボランティア, 2001) より抜粋、一部加筆。

2

運営ノウハウ紹介



道内団体の広報誌・会員募集ちらし

総説： 森林ボランティア活動を運営する

自分が企画者となって新しく団体をつくり、所属する団体を活性化させるにはどうしたらよいでしょうか。この章では道内外の活動事例をもとに、活動運営のノウハウについて紹介します。

組織運営の手順や留意点

1. 団体をつくる

まず、ともに活動する仲間として、活動に賛同する人を集めます（48ページ）。広報誌などの媒体を利用したり、会の意図する活動を体験できるイベントを開催して、その参加者に会への加入を呼びかけます。

また、活動には資金が必要です（52ページ）。会の発足後、すぐに必要になる費用として、怪我が起きた場合の保険料や事務費、森林整備に必要な備品・燃料費などがあります。こうした経費は、助成金や補助金などの獲得に必要な活動実績がないうちは、会費で賄われることが多いようです。鋸や鎌などの道具に関しては、そうした対応のある行政から借りたり、会員各自の責任でメンテナンスが行われるように個人での調達を原則にしている団体もあります。

そして、活動場所となる林地（フィールド）を探します（56ページ）。目当ての林地があるならば所有者を捜して活動場所としての利用の許可を依頼します。しかし一般的に、団体の実績が評価されないうちは、個人の森林所有者から林地利用の許可を得るのは難しいようです。適当な場所が見つからなければ、行政の林務や公園緑地などといった部署に相談して、林地を紹介してもらったり、国有林・公有林などの活用制度を利用する方法があります。そうした活用制度を利用する場合は、すでに団体が組織化されていること（林地の利用者が個人ではなく団体であること）が条件になる場合もありますので、図1の～や団体設立の順番は実際は流動的です。

以上の条件が整ったら、活動方針や運営体制などを決めて組織を固め、団体を設立します。

2. 活動を運営する

活動を進めるうちに、活動方針やメンバーが望む活動の姿が具体的にってきます。

活動では、他者の林地を利用する責任を果たすためにも、活動方針を反映させた森林整備計画や年間活動計画をつくり（PLAN）実践（DO）し、実践の成果や計画の達成度合いを振り返り、その振り返りの結果を次の計画に活かす（SEE）というサイクルで運営を行うことが大切です。

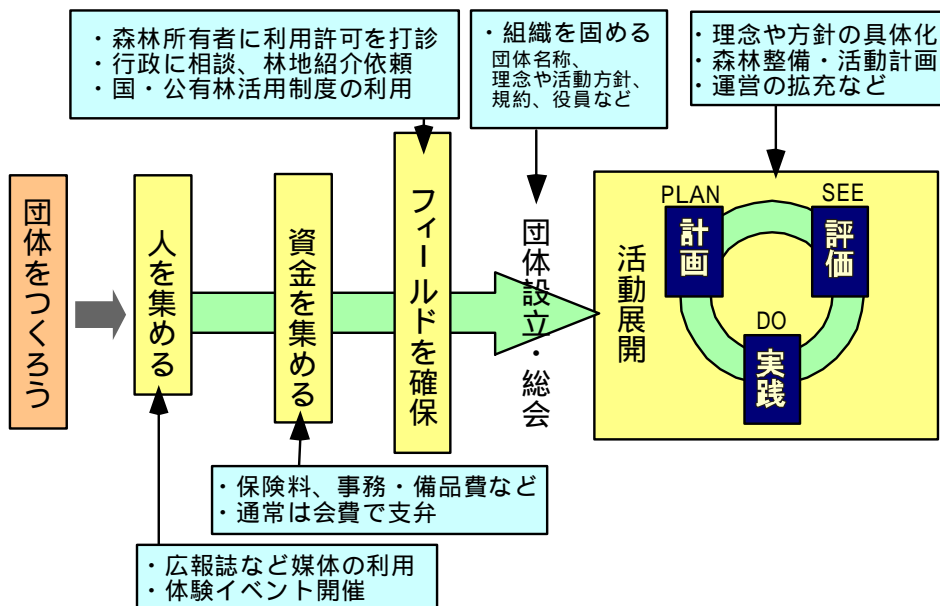


図1 森林ボランティア団体の組織化の手順と運営の留意点

活動運営の課題

既に活動を行っている団体はどのような課題を抱えているのでしょうか。2004年に林野庁が行った森林ボランティア団体へのアンケート調査では、森林づくり活動における課題の最多は「資金確保」で57%、次いで「参加者の確保」が49%と多数を占めました（図2）。

なおこの調査で対象とした団体は、法人格を持たない任意団体が76%を占めており、会員数は、「10～49人」が4割、森林づくり活動への年間総参加者は「100～499人」が4割と最多を占めました（図3～4）。また、活動資金の確保方法については、「会費」と「助成金」との回答が多く各6割を占めました（図5）*1。

団体の資金規模に関するデータについては、対象者は異なりますが、2002年に行われた東京都内の森林ボランティア団体へのアンケート調査（N=68）では、団体の予算規模は「30万円以下」が45%、「100万円以下」が71%（積算）を占めていました*2。また、1999年に行われた全国の森林ボランティア団体を対象としたアンケート調査（N=142）では、年間収入が「100万円未満」の団体は59%を占めました*3。

この章では上記の2つの課題の解決など、活動を運営するノウハウについて紹介します。

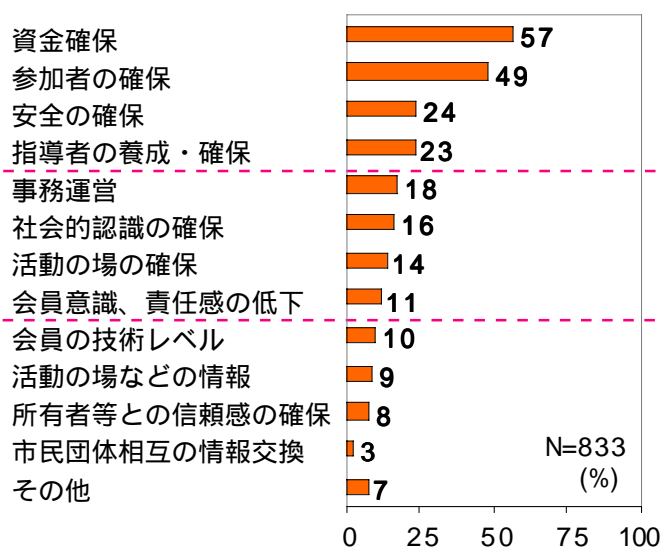


図2 森林づくり活動における課題（複数回答3）

:(林野庁,2004)より作成

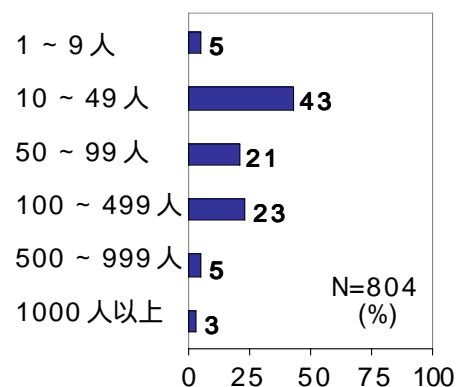


図3 会員数

:(林野庁,2004)より作成

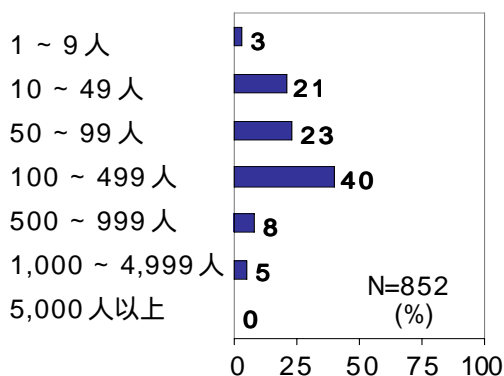


図4 森林づくり活動年間総参加者数

:(林野庁,2004)より作成

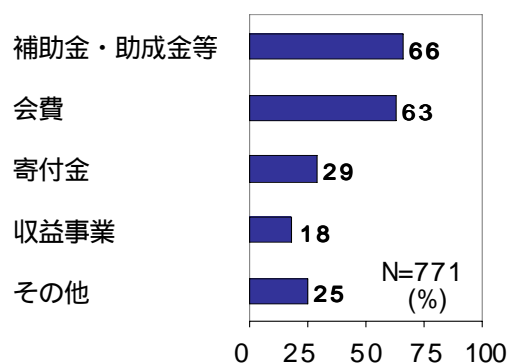


図5 資金確保方法（複数回答3）

:(林野庁,2004)より作成

* 1 (林野庁,2004)および2ページ*2参照。

* 2 (木俣,2003)

* 3 (上野ら,2002)

人を集める

「一緒に活動する仲間を増やしたい」、「たくさんの人に森林の大切さをPRしたい」等々、人を集めることは活動運営の主要課題です。そしてまた、組織を活性化したり、組織の窮地を乗り越える時も、頼りになるのはマンパワーともいえるでしょう。ここでは、会員や参加者を集めるノウハウについて紹介します。

会員を集める

道内外で森林ボランティアを行う19団体に会員募集方法について聞き取り調査を行い、特に有効な方法を把握するため、団体を知ったきっかけについて各団体の活動参加者へアンケート調査を行いました。

会員獲得には口コミが有効 両結果をまとめた表1をみると、16団体が会員募集をしており、会員獲得に最も有効との回答が最多だった方法は知人などを通じた勧誘・紹介（口コミ）でした。しかし一方で、表1の18団体（A～R）が募集に利用する媒体数と会員数には「媒体数が増せば会員数が増す」関係が見られず、口コミのみに頼らず、多くの媒体を併用したPRは会員増に効果があることがわかります。

自治体広報の利用 各種媒体のうち、有効との回答が最多だったのは自治体広報でした。メリットとしては掲載が無料であること、全戸配布であることがあげられました。但し、原稿の締め切りや字数制限、掲載記事の選抜があったり、増ページを伴う掲載は有料である場合などがあり、利用には事前の情報収集が大切です。広範囲の募集には都道府県や複数の市町村の広報を利用する方法もとられています。

表1 森林ボランティア団体の組織規模と会員募集方法

事例	活動年数(年)	法人格	会員数	フィールド活動回数(回/年)	活動参加人数(人/年)	勧誘紹介	媒体利用										計		
							ウェブ	自治体広報	マスコミ報道	行事企画・宣伝	行事参加・宣伝	新聞広告	ちらし	ポスター	回覧板	パンフレット設置			
A	7		849	148	905													5	事例2 36P参照
B	6		737	109	3,077													6	事例1 26P参照
C	6		698	73	1,834													5	
D	9		217	195	10,289													5	事例7 32P参照
E	5	-	151	57	981													5	事例3 38P参照
F	1	-	94	21	553													4	事例5 12P参照
G	2	-	90	11	140													1	
H	19	-	80	15	97													3	
I	10	-	73	41	1,006													2	
J	4	-	58	20	303													2	
K	12	-	55	27	341													4	事例4 40P参照
L	4	-	45	10	100													1	事例8 6P参照
M	50	-	44	2	28													0	
N	0	-	31	23	-													5	
O	9	-	20	20	228													0	
P	13	-	20	7	70													0	
Q	0	-	11	12	-													3	
R	13	-	10	11	52													1	
S	1	-	-	38	1,190													-	事例6 24P参照
計						16	11	10	7	7	6	4	2	3	1	1			
						8	0	5	0	2	0	1	0	0	0	0			

注1)活動年数は、データ年と発足年の差を示す。
 注2)会員数は個人と組織の合計値を示す。
 注3)事例Nと事例Qの活動回数は計画値。
 注4)は該当有り、は特に有効であることを示す。
 注5)事例Mと事例Pは会員制をとるが募集なし、事例Sは会員制をとらず参加者を公募。

[事例1]NPO法人 穂の国森づくりの会（表1-事例B）

勧誘による会員獲得 会員は、愛知県豊川流域の全17市町村や県・国の行政、商工会や農林業組合などの経済団体、市民で構成される。これら組織の会員化は、地域が一丸となる大切さを訴えるオルグ活動的な勧誘によって実現した。会費は受託事業収入に次いで会の主要財源である。個人会員は、各種媒体の利用の他、スタッフが様々な場で人物の意欲や関心をみて一本釣りで勧誘する。政策提言（写真1）が施策として実現するなど、会の実績が宣伝となる。

point! 理念や実績のPR



写真1 会の政策提言は、森林整備基金制度などの行政施策として実現

* 1 媒体数と会員数には有意な正の相関（ $r = 0.624$ 、 $p < 0.01$ ）が見られた。

[事例2]NPO法人 樹木・環境ネットワーク協会^{しゅう} 聚(表1-事例A)
勧誘・ちらし利用 事業の資格取得者^{*2}に、知識の実践の場として会への加入を勧める。そうした加入者はリーダーとして盛立て事務局がサポートする。また武蔵村山市のフィールドでは、地元の参加を得るため、地元自治会に出向き、会の主旨と活動内容を説明する会を開催している。また、参加者募集のちらしと年間計画表(写真2)を全世帯分700部印刷し、自治会に全戸配布を依頼している。その結果、子ども達のイベント参加の他、地元から年間延べ20人(2002年度参加者の16%)ほどの参加が得られるようになった。

point! 事業とのリンク、地元自治会へのPR

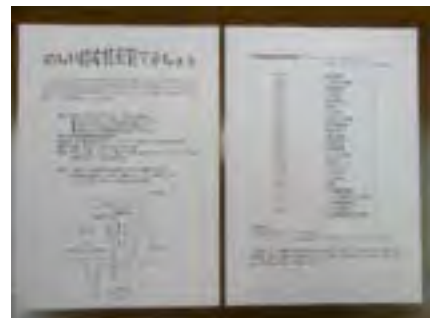


写真2 自治会に配布したB5版ちらし

[事例3]いばらき森林クラブ(表1-事例E)
講座生勧誘・新聞広告 発足時は、県の協力の下、県森林づくり体験会の登録者(約160人)を対象に募集案内をした。募集に40人が応じ、発足にふさわしい人数が効率的に確保できた。その後は、毎年2~3月(各人がアウトドアを計画する時期)、全国紙、地方紙、タウン紙といった県内の新聞社10社程に、会員募集記事の無償掲載を依頼する。例年3~4社は掲載してくれる(参考:写真3)。記事に応じた入会希望者には会の案内資料を送付する。

point! 層を絞った勧誘、新聞による広域PR



写真3 各紙に掲載された道内団体の記事。新聞社に掲載を依頼するのモ方法の一つ

[事例4]北本雑木林の会(表1-事例K)
勧誘・イベントでのPR 発足時は近所や知人達に「自分達の周りの緑地を守ろう、きれいにしよう」と呼びかけた。参加者募集のポスターを作業日の度に駅に掲示した。口コミも手伝い会員が増えた。発足4年目から雑木林と会のPRのためにフィールドで「雑木林コンサート(写真4)」を開催。林に音楽がこだましホールとは違う雰囲気を楽しめると好評を博し、2003年第6回コンサートの来場者は220人に達した。会場では入会案内ちらしを配布する。

point! ポスター、雑木林の活用



写真4 2004年第7回コンサート(会HPより)

[事例5]いしかり森林ボランティア「クマゲラ」(表1-事例F)
イベントでのPR 会員数は発足後1年余りで3.8倍(94人)に拡大した。会員増は会の方針が支持されていることに加え、イベントでのPRが効いている。キノコ・山菜教室などを2004年度は3回開催。参加者は市広報で公募する。また、集客の多い地元のイベントに出展(年5日)してクラフト体験などを提供する(写真5)。こうした場で活動に触れた人が会に加入してくれる。会員が110人(2005年6月)に達した現在、イベントで毎回加入者がいるわけではないが、継続することで会の知名度を上げ、応援者を増やすことが大切と考える。通常活動でも、実生苗木育成、積雪期の作業など話題性のある内容を盛り込んで、会員が楽しみながら続けられる活動の企画を心がける。

point! 地元イベント出展、話題づくり



写真5 当会のしおり作り体験ブース(2004年度石狩市市民文化祭)

*2 52ページ参照。

イベント参加者を集める

[事例6]多摩の森大自然塾(表1-事例0):

東京都主催・NPO法人森づくりフォーラム運営

HP・都広報利用 毎回、公募で参加者を募集する。有効な媒体は、ホームページ(HP)と都広報で、都内全域及び都外からの参加者がある。HPでは開催日、場所、作業内容などの案内のほか、画像と共にフィールド概要や活動報告を掲載する(図1)。都広報では、5.5cm×6cm程のスペースに簡単な募集案内のみを掲載し、詳細は往復はがきかE-mailで返信する。当日は閉会時の感想とアンケートによって参加者の満足度を把握すると共に、スタッフミーティングを行って毎回の活動を振り返り、よりよい運営を目指している。

point! 広範囲の募集、参加者の満足度把握



図1 希望の活動日、活動場所が選べ、オンラインで申し込みができる

[事例7]森の文化祭:

香川県・NPO法人どんぐりネットワーク(表1-事例D)共催

ポスター・ちらし利用 年間で最も集客のあるイベントで、参加者は親子連れを中心に4,500人(2003年度)に達する。開催はポスター(幼稚園、小学校、児童会館などに600枚掲示)、公共交通中吊り広告、ちらし(写真7)、県緑化情報誌、県のどんぐり銀行HPなどでPRする。会場は郊外の森林公園であるが、公共交通利用促進に取り組む団体との連携により、私鉄と連結する臨時バス「どんぐり号」を運行するなどアクセスにも配慮する。参加団体が出展するツル細工、木工作、野外料理といった豊富な体験型メニューが好評で、多くのリピーターが見られる。

point! 子どもへのPR、アクセス、体験型メニュー



写真7 ちらしとラリー用マップ

[事例8]芸術の森クリン・クリン・ウォーク:

カッコウの里を語る会(表1-事例L)主催

ポスターなどの利用 会員の参加の他、ポスター(コンビニ、バス停、芸術の森などに掲示:写真8)、環境系の市民活動支援組織(参考:写真9)のHPやメールニュース、全国紙、ミニコミ誌などによって参加者を公募する。森林の清掃(ゴミ拾い)作業というお楽しみ要素が少ないイベントであるが、2003年度の当行事では非会員である参加者が10人(約4割)見られた。ゴミ減量に取り組む市民団体の会員のグループでの参加が見られたほか、ポスターや口コミ、他団体のイベント時などの案内によって開催を知って参加した人が多かった。

point! ポスター、環境系市民団体への情報提供



写真8 ポスター(2003年度)

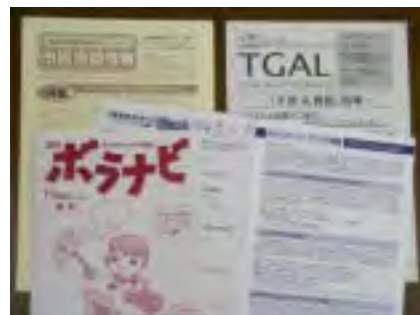


写真9 道内市民活動支援組織の広報誌(イベント情報の掲載受付あり)

トップに聞く！人を育てる：会員の自主性を高めるには？

森林ボランティア団体のトップの方々に、会員の自主性を促し「プログラムに乗って楽しむ人」を「運営を担いプログラムをつくり出す人」に変えていく方法についてお聞きしました。

Aさん（NPO法人専務理事）

意志を活動に反映 市民活動で森林づくりに取り組む人たちは、自分が好きなときに好きなことをやりたいから活動にやってきます。事務局が事業計画をつくったり、ノルマをつくったりすると、「それなら活動なんてやらないよ」という人が結構出てくるものです。会員の自主性や継続的な参加を促すためには、「自分の意志が活動に活かされる仕組みづくり」が大切です。

会員主導の年間計画 会では8つある固定フィールド毎に会員主導で年間計画を作っています。組織の総会では、フィールドのリーダーが中心となって、成果報告のプレゼンテーション（各フィールド10分程度）をしてもらいます。これが各フィールドにとっていい緊張感になっています。

認識づくり 会員主導の運営に変えていくためには、決め手となる方法があるわけではありません。事務局が何度でも「あなたたちのフィールドですよ」と伝え、「まず会員がどう活動したいのか」という意志があって、それをサポートするのが事務局の役割なのだ」とわかってもらいます。実際そこまでいくのは大変で、そうした認識ができるのに2年くらいかかりました。

リーダーの選出 リーダーの選出は、今までのところ一本釣りです。会員の中から任せられそうな人を事務局が選んで支援しています。次のリーダーは、その人が指名したり、なんとなく形ができて会員の一致で交代していけばよいと思います。

Bさん（NPO法人会長）

運営を分担 組織のトップには資質が必要です。いきなり数百人の会社の社長になれますか？

それと同じでボランティア組織の運営にも、経営力や資金力、人を動かす力、企画・交渉能力など様々な能力が必要です。しかし会では、これらをトップがワンマンで行うのではなく、16人いるリーダーと役割を分担することで運営を成立させています。

本業の経験を活かす 森林ボランティアに参加する人は、林業に対しては素人でも、社会人として職業を持ちそれぞれの分野で何十年も経験を積んでいます。学生も、学生ならではの環境、素養を持っています。人々のこうした経験を活かさない手はありません。手作業で行う森林の手入れ技術は、数年で獲得できるものです。むしろ、活動においては参加者をどう動かし、安全に留意しながらどう活動を企画・実行するかという力量が問われます。実際、会員の中には、企業の管理職の経験を持ち人の動かす方のうまい人、活動の幅を広げる様々な技術を持っている人がたくさんいます。こうした考え方をすれば、誰もがリーダーやその分野の指導者になれます。

リーダーの選出 リーダーの選出は苦勞している点です。立候補する人がいません。他薦で候補に挙がった人も、暗黙のルールとして、頼まれても3回は断りますね（笑）。シニア世代は特にそうです。やる気がないわけではなく、結果としては了解してくれるのですが、「会長がそこまでいうならばやってもいい」というところまで持っていくのが大変です。頼む方は熱心にねばり強く頭を下げるしかありません。

Cさん（NPO法人事務局長）

事務処理の後継者難 森林づくり活動のうち、面白いこと、楽しいことを企画する人手には困っていません。縁の下の力持ち的な事務処理役が問題です。私は自主的に無報酬で事務の仕事に力を入れてきましたが、後継者となってくれる人がいません。会員は皆が「大切な仕事だ」と評価をしてくれますが、名乗り出てくれるわけではありません。企画スタッフも皆、本業の合間にボランティアで活動をしています。それだけでも実際は手一杯で、できる範囲で協力するというスタンスを皆がとり続けると、事務処理の部門に人材が抜けてきます。事務処理には給料を支払うのが一番なのですが、今の組織の収支にはそうした余裕はありません。しかし少額であっても後継の担当者は有給にして、責任ある仕事をしてもらわなければならないと感じています。

活動資金を確保する

収入の財源には「会費」、「寄付金」、民間財団が提供する「助成金」、行政が提供する「補助金」、企業や行政等の事業を受託して得られる「受託事業収入」、自主事業から得られる「事業収入」などがあります。資金確保は組織運営の主要課題であり、各団体では調達の手法や資金源の間のバランスが様々に模索されています。

収入規模と資金調達方法

道内外で森林ボランティアを行なう14団体に、活動運営の収支について聞き取り調査を行いました。

収入の多い団体は法人格所有、受託事業・事業収入中心 表1より、収入が多額の団体を見ると、1千万円を越す団体はすべてNPO法人格を有し、受託事業や事業を主財源としています。支出も事業費が中心で、事業や事務処理のため有給の専従職員を雇用する場合があります。一方、収入が少額の団体では会費を主財源とする傾向が見られます。

収入額は活動回数、会員数と関係あり 表1の13団体(A~M)の収入額と組織規模の関係を見ると、「収入額が増せば活動回数、会員数が増す」¹⁾ことがわかり、収入額はその組織の実行力や組織規模と密接に関係していることが確認できます。活動年数にはそうした関係はなく、収入の確保には、組織が持つ経験の長さのみでは説明できないノウハウがあることが示唆されます。

表1 森林ボランティア団体の組織規模と収支

事例	活動年数(年)	法人格	会員数	有給専従職員	活動回数(回/年)	収入		支出	
						金額(万円/年)	主な内容	金額(万円/年)	主な内容
A	6		737		199	3,032	受託事業	2,986	事業費
B	7		849		180	2,715	事業	2,576	事業費
C	9		217		226	1,415	受託事業	1,144	事業費
D	9	-	20	-	23	163	森林整備受託	143	作業日当
E	5	-	151	-	62	97	助成金	60	備品費
F	19	-	80	-	28	80	会費	80	施設維持費
G	12	-	55	-	42	71	会費	11	イベント開催費
H	13	-	10	-	22	61	助成金	55	研修開催費
I	4	-	45	-	27	40	会費	10	行事開催費
J	50	-	44	-	7	40	事業・助成金	ND	ND
K	1	-	94	-	30	29	会費	28	備品費
L	4	-	58	-	22	28	会費・寄付金	25	備品費
M	1	-	31	-	27	9	会費	9	保険料
N	6		698		85	ND	会費・助成金	ND	広報・事務費

事例1 36P参照

事例3 32P参照

事例4

事例5 8P参照

事例2 30P参照

注1)活動年数は、データ年と発足年の差を示す。
注2)会員数は個人と組織の合計値を示す。
注3)活動回数はフィールド活動と屋内活動の合計を示す。
注4) NDはデータなしを示す。

[事例1]NPO法人 樹木・環境ネットワーク協会 聚(表1-事例B)

資金の適正配分 収入の内訳は、事業収入6割、会費収入3割、助成金・補助金収入1割である。この事業中心の構造は、資金配分の適正値として意識的に設定、達成している。すなわち、会費に依存すると会員の増減に活動が左右される。一方、助成金等の比率を高めると資金元とのつきあいに気骨が折れ、活動が下請け的になると判断。東京と大阪に事務所を構え、東京では常勤3人、非常勤2人の職員を雇用。

人材育成事業 当会では植物や自然環境・生態系の正しい知識の普及を目指しており、これらの知識の検定試験(資格認定)とその受験講座、テキスト販売等の事業を行う(写真1)。試験の検定委員には大学教授ら事業の意図に共感する著名人を起用し、宣伝はHPでの案内の他、公園事務所や生涯学習施設、アウトドアスポーツ店等にパンフレット設置を依頼。年間の事業実績は、検定試験応募者が3部門計で407人(合格率42~58%)、講座参加者182人(2002年度)。

point! 資金配分に目標設定、活動使命とニーズにかなう事業展開



写真1 資格取得者及び受験者対象のスクーリング(団体HPより)

*1 会員数、活動回数の項目で収入額との有意な正の相関(前者 $r = 0.963$ 、後者 $r = 0.895$ 、ともに $p < 0.001$)が見られた。活動年数と収入額は無相関。

[事例2]NPO法人 埼玉森林サポータークラブ(表1-事例N)

補助金獲得 財源は会費、助成金、委託事業収入など。事業体のような収入構造のビジョンはもたない。事業(仕事)ではなく、あくまで自発的な意志で各人ができることをやるというボランティア活動のよさを大切にしたいと考える。

2004年度、埼玉県より補助金150万円(国庫補助)を獲得した。当会は法人化を契機に2002年度より県の森林づくり体験講座(年約30回:写真2)を受託してきた。従来の事業受託に変わって当会主催で同様の講座を運営することが補助の要件である。補助は、事業受託の実績と活動の波及効果*2が評価された結果である。県の緑推委員会内に事務所を置き、スタッフは基本的に無給である。

point! 県事業受託、波及効果



写真2 森林づくり体験講座(2002年度)の様子(団体HPより)

[事例3]NPO法人 どんぐりネットワーク(表1-事例C)

県事業受託 活動の中心に香川県事業「どんぐり銀行活動」の支援を据え、収入の9割を事業受託収入が占める。1994年の発足以来、当会はボランティアとして銀行活動をサポートしながら、県下の森林ボランティア団体の中でも屈指の組織規模を整えてきた*3。1998年度の法人化によって、拠点フィールド内のビジターセンター(写真3)の運営、同フィールドでの市民活動の企画など、当銀行活動関連の多数の事業を受託できるようになった。常勤1人、非常勤2人の職員を雇用する他、多数の無給スタッフが活動を支える。

point! 経験蓄積、法人化



写真3 ドングリランドビジターセンターの運営などを受託

[事例4]南足柄地域育林隊(表1-事例D)

森林整備受託 収入のうち森林整備の受託収入が7割を占める。会の活動は、県施策「水源の森づくり」事業における「私有林公的管理・支援」、「県民参加による森林づくり」と関連している(図1)。

約20名の隊員は体力と育林技術、年間10日以上参加などを資格とし、(社)かながわ森林づくり公社*4主催の森林づくり講座のリピーターから抜擢される。男性隊員の7割は、刈り払い機又はチェーンソーの特別教育を修了している(2002年度)。受託契約は森林組合と森林所有者とで行われ、隊が作業を請け負う。作業時には組合職員が隊員の技術指導にあたる。隊員には作業日数に応じて交通費程度の活動経費が支弁される(有償ボランティア)。所有者の不安を払拭し、責任ある作業を行なうため、隊員は年度当初に出席可能な日数を森林組合に提出する。

point! 質の高い人材確保、公社・森林組合との連携

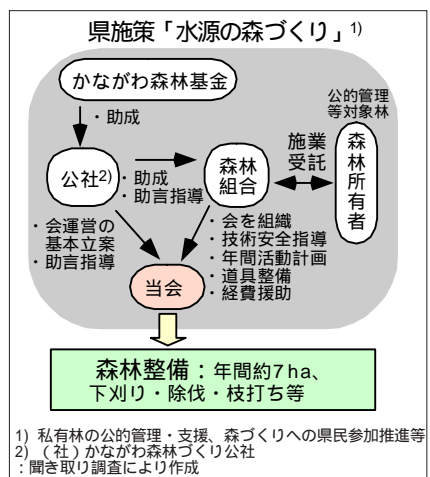


図1 森林整備実行の仕組み

*2 県下で森林づくりを行う約20団体の多くが一地域の特定フィールドで活動するのに対し、当会は県下全域で活動を展開する。審査において、県は、講座開催を通じて森林づくり活動が広範囲に拡大することを特に評価・期待して、当会への補助を決定した。

*3 例えば香川県下の森林づくりを实践する団体と個人のネットワーク(70ページ参照)に登録する13団体のうち、当団体の会員数は最多であり、現在なお唯一のNPO法人である(2005年度)。

*4 分収林事業などの他、「県民運動事業」部門を持ち、森林づくり体験講座の開講、指導者の育成などによって県施策を支援している。公社の地域育林隊への支援はこの一環である。

[事例5]間伐ボランティア「札幌ウッドィーズ」(表1-事例L)

助成金獲得 会費と寄付金による収入が主であったが、2005年度、アウトドア分野の基金に助成申請をして助成金50万円を獲得した(写真4~5)。その結果、当年度の収入額は計画時の約3倍に拡大した。

申請の受理は、森林の効用とその整備の重要性といった問題意識、森林整備を通じて当団体がアウトドア分野に貢献しうる効果を申請書で明快にPRできたことが評価されたと考える。申請書では、会の活動使命を整理するとともに、情報収集によって助成元の事業や価値観を把握して、自分達の会の事業と先方の助成主旨との一致をPRすることが重要である。

なお、申請の受理後、活動の視察に来訪した助成元のトップは、会の趣旨に賛同して会員となり、ともに作業で汗を流している。

point! 活動使命と助成主旨の一致



写真4 助成金で刈り払い機を購入



写真5 ササの刈り払いの様子

「全国雑木林会議'05 in 岐阜」*5での分科会討議から

分科会1(写真6)では「生き物の長期の営みを相手とする里山保全・整備において、活動を持続させるには何が必要か」といった問題設定で事例報告、討議が行なわれました。討議の結果、「活動を支えるのは人とお金」、「苦しいときには助けを求め、助けてもらえる関係(人の輪)をつくること」、「自己資金と助成金等のうまい(継続可能な)バランスをとること」といった見解が得られました。

表2 各団体の組織規模と収支

事例 番号	発足年	法人 格	会員 数 (人)	専従職 員数 (人)	収入		支出	
					金額 (万円/年)	主な内容	金額 (万円/年)	主な内容
6	1999		60	-	18~21	会費、生産物販売	13~21	通信・事務費
7	2000		42	-	39	生産物販売	29	備品費
8	2000		30	-	57	公園工事受託	30	資材費
9	2002		45	3	900	森林整備事業受託	890	事業費
10	2000		53	3~8	約5,000	自然体験支援事業	ND	ND

注) NDはデータなしを示す。



写真6 分科会1の会場の様子

1. 資金確保の手法：分科会事例発表から

[事例6]ふどうの森クラブ

会費収入と里山の生産物の販売 活動内容はマツタケ山再生、炭焼き、棚田管理、環境教育など。収入のうち会費が10万円、竹炭・竹酢液等の販売が6~8万円を占める。活動資金の自己調達を目標に、身の丈にあった収支計画を持つことが肝要と考える。生産物の販売は里山の産物の循環利用(図2)を意図に取り組み、今後の拡大にむけて生産物の品質を確保することが課題である。

point! 身の丈にあった収支計画



図2 里山の産物を循環させる

* 5 第13回全国雑木林会議岐阜大会実行委員会主催、2005年10/8~10/10に岐阜市ほか県内各所で開催。

* 6 図2~3は、分科会1の発表スライドをもとに作成。

[事例7]里山クラブ^{かに}可児

会員の能力を活かした生産物販売 活動内容は、二次林整備、炭焼き、棚田管理、親子森林教室の開催など。収入のうち生産物の販売が約9万円を占める。2002年度に拠点施設などの建築のため50万円の助成金を獲得したが、会計事務や報告等に事務局が疲弊。一方で施設建築を経験して会の雰囲気が盛り上がり、会員間に「(助成金には依存せず)自分達でものを作って売ろう」との気運が高まる。会員の能力と助成金で整備した施設を活用して、竹炭や竹酢液、ツル籠、シイタケ原木などをイベントなどで販売(図3)。販売収入は会費収入を上回っており、2005年度には2001年度時の3.5倍に達する見込みである。

point! 会員の能力・自発性活用

[事例8]文殊の森里山クラブ

自治体より公園階段補修工事を受託 活動内容は、二次林・竹林整備と林産物利用(炭焼きなど)、子ども対象イベント実施、フィールドである公園の管理など。収入のうち、公園内の木製階段補修(図4)の委託料が50万円を占める。受託した工事は臨時活動日を設けて対応する。会員に日当は支払わない。従来工事を受託してきた事業者は、当会の会長とは友人の間柄で、工事に必要な技術講習や資材の調達に協力頂くなど良好な関係が築けている。将来的には公園の指定管理者となることを目指したい。

point! 人脈、関係づくり

[事例9]NPO法人^{てま もり} 柚の杜学舎

行政等に事業提案をして事業受託 活動内容は、間伐など森林施業受託、市民ボランティア育成講習や市民参加による森林整備行事の運営など。行政、企業、森林所有者に対して事業提案をしながら、事業を受託する(図5)。収入は事業収入がほぼ100%。こうした受託事業中心の経営を行なうには、事業を提案できる企画力や専門性、森林・林業の専門家とのネットワーク、事業主との信頼関係等が必要である。また、例えば間伐の受託では、まず森林所有者と森林組合が契約を結び、森林組合から当団体が施業を受託する仕組みを作るなど、地元との協力関係づくりにも配慮している。

point! 企画力、ネットワーク

[事例10]NPO法人 メタセコイアの森の仲間たち

学校の体験活動を支援 活動内容は、小中高等学校の児童生徒が野外で行う自然体験活動の支援。年間約90校、延べ1.9万人にプログラムを提供する。収入は事業収入が約8割を占め、2004年度事業高は4,150万円。こうした実績は、学校側のニーズに応じて、幅広いプログラム(44種:図6)を提供して利用者の満足度を高めてきた成果である。他者が容易に参入できない分野を開拓して、ノウハウを蓄積することが事業型NPOの経営のコツでもある。

point! 企画力、差別化



図3 会員の力作を販売



図4 階段補修工事の様子

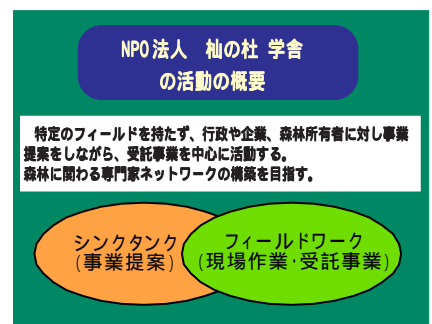


図5 提案した事業を現場で実践できる組織を志向



図6 地域の自然と文化を学ぶ多様な体験プログラム

フィールドを確保する

森林整備を始める際、最初の課題は活動場所の確保です。自分で林地を取得できれば最善ですが、それが難しければ、森林の所有者に利用を打診しなければなりません。ここでは継続的にフィールドを利用するための様々な仕組みや森林所有者との関係づくりについて紹介します。

林地を所有する

森林づくりを行うため一般の市民が林地を取得する例もみられます。林地取得や造林に対しては、森づくりセンターや森林組合に融資制度や補助金に関する情報提供、技術指導などのサポート体制があります。

[事例1]レディース100年の森 林業グループ*1

1991年度、南富良野町森林組合が「山づくりへの女性の積極的な参画」を目的として、年齢級カラマツ林約13haを10区画にして、町内に在住する20～45歳の女性を対象に分譲した。当会はこの林地取得者で構成される林業研究グループで、所有林を会共通の実習林として保育作業を行っている（写真1）。林地取得の資金（当時1区画120～200万円）については、会員は林業関連の公庫が設ける森林取得資金からの借入金を利用するなどした。分譲の条件は、女性の堅実さやねばり強さという特質、買主が主伐できる年齢ということから設定された。会員は主婦や自営業者など林業に関してはアマチュアであったが、当組合や上川南部森づくりセンターの支援を受けて木材生産のための整備を着実に進めると共に、様々な地域交流の場として所有林を活用している。



写真1 作業は実習形式で会員皆で実施 (2005年7月所有林にて)

point! 融資制度利用、グループ結成、サポート体制

他者の林地を利用する

他者の林地を利用するあたっては、国・公有林の活用制度を利用する方法、行政などの仲介者を変えるなどして森林所有者と協定やとりきめなどを結ぶ方法、所有者との信頼関係のみで林地を利用する方法などがあります。表1は、林地の活用制度や利用に関わる協定6事例に明記される内容のうち、団体に求められる役割や条件をまとめたもので、他者の林地を利用する場合に配慮すべき点がわかります。すなわち、事例では特に年間計画提出や活動実施報告(整備を約束通り実行する)事故などが起きた場合に責任をとる、立木や植栽木などの所有権放棄といった事項の記載が多く、これらの点に森林所有者の主要な不安があることがわかります。また、締結者の申し出や違反行為などによって協定などが無効になる場合も多く、団体の地位は不安定といえます。今後、こうした制度や協定のあり方を検討していくためにも、団体が実績を積み重ねることで、所有者の不安を解消し、社会からの信頼を高めていくことが大切です。

表1 林地利用に関わる協定などにおいて森林ボランティア団体に求められる役割

事例	目的 活用 整備・保全	林地所有別		団体に求められる役割・条件																
		行政 市町村 都道府県 国	個人	参加者調整	年間計画提出	所有者と計画協議	林内活動	林内活動	禁止事項	活動実施報告	計画困難時の作業委託	作業負担	事故等責任	傷害保険の加入等	山火事防止	立木所有権放棄	事業計画・区域外の動行禁止	無報酬	違反行為等に よる契約解除 協定破棄	
A		2																		
B		2																		
C		3																		
D		3																		
E		3																		
F		2																		

注)「目的」は、協定等設定の力点や主導者の違い(「活用」は森林所有者、「整備・保全」はその他)を示す。

札幌市HP、空知森づくりセンター業務資料、(フォレスト21連絡協議会、2000)、東京都業務資料、聞き取り調査により作成

* 1 22 ページ参照。

1. 国・公有林などの活用制度の利用

[事例2]札幌市都市環境緑地取得整備事業（表1-事例A）

市有林である都市環境緑地の一部（1区画3～39ha）を自然とのふれあいの場として登録団体に開放し、市民による積極的な森林保全活動の推進を図る事業（図1）。2005年4月現在11団体が登録し、育林作業、散策路設置、炭焼き、自然観察などを行っている。林地の利用期限は特に明示されない*2。

「森林と市民を結ぶ全国の集い北海道2003」の分科会では、当事業の登録団体から、表1の「立木等の所有権放棄」、すなわち間伐材が林外に持ち出せないことが課題として話題にあがった。札幌市からは「行政が特定の団体に利益を与えることが問題」との回答があり、これを踏まえ「材の対価を支払う方法がある」、「活動の公共性を示せば解決できるのでは」といった議論が行われた*3。

point ! 公共性、議論の場づくり

[事例3]みらいの森「ボランティアによる森づくり」（表1-事例B）

道有林とボランティア（団体または個人）の二者で協定を締結し、道有林での森林ボランティア活動を通じて、道民に林業・森林造成の意義を理解してもらい、道有林のPRを図る事業（図2）。道は活動地の提供の他、道具類の貸与や技術指導をして活動をサポートしている。江別市西野幌のフィールド（1.3ha）では、1999年に空知森づくりセンターと生活協同組合市民生協コープさっぽろの間で5年間の協定が締結された。生協内での助成の仕組みや道からの協定以外のサポートもあり、二者間には良好な関係が形成され、期間を延長して育林作業が継続されている*4。

point ! サポート体制

[事例4]「緑のボランティアの森」記念造成事業の実施に係る協定（表1-事例C）

1997年、（社）国土緑化推進機構（以下緑推）の記念事業、国民参加の森林づくり運動のモデル林造成のために、NPO法人森づくりフォーラム、東京営林局（当時）緑推の三者で締結された協定。神奈川県内の国有林（フォレスト21[さがみの森]:4.5ha）を造成地に、緑推の資金提供のもと、森づくりフォーラムが参加ボランティアの募集や調整を行い、参加する市民自らの計画によって森林の造成や利用を進める（図3）。施業計画や森林づくり活動の管理・運営の意志決定のため、協定締結三者の関係者による連絡協議会が設置されている。なお、さがみの森の活動は1999年に林野庁で推進する「ふれあいの森」制度の趣旨に適合する活動として登録された。

協定期間は5年間で以後1年ごと延長可能である。事例2と同様、市民が間伐材などを利用できないことが課題とされる*3。2002年の協定更新時には、活動地が林班全域（約19ha）に拡大され、環境教育の場をつくるための整備も進められている*5。

point ! 資金提供者の参画、計画段階からの連携

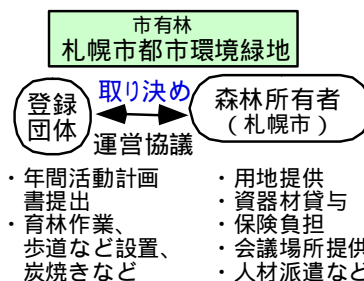


図1 「札幌市都市環境緑地」活用の仕組みの概要*2

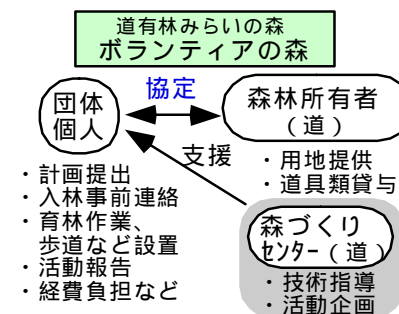


図2 「ボランティアによる森づくり」概要（網掛け部は協定には無記載）*4

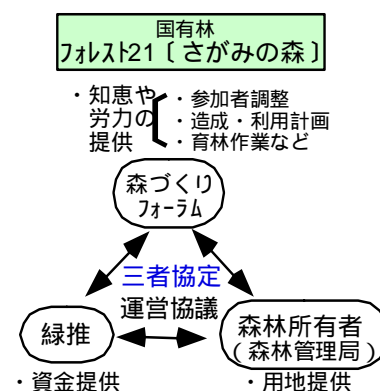


図3 「緑のボランティアの森」記念造成事業の実施の仕組み概要*5

*2 札幌市環境局みどりの推進部HP「森林ボランティア」より。

*3 第6分科会「私たちの森をつくる」（柿澤，2004）

*4 空知森づくりセンター業務資料。作業を実行するのはコープさっぽろ植樹みどりグループ（14ページ参照）。

*5 事例文頭から（フォレスト21連絡協議会，2000；NPO法人地球緑化センター，2005）を引用。

2. 町有林の整備協定

[事例5]阿見町小池城址公園森林整備に関する協定（表1-事例D）

1999年、森林所有者である阿見町、いばらき森林クラブ*6、茨城県の3者によって締結された、当公園（約4ha）の森林整備のための協定。支援事務として町は森林整備に関する広報や町民参加の促進など、県は技術指導や用具の貸与などの役割を担う（図4）。技術指導に関しては、県林業技術センター（旧県林試）が森林整備指針を作成した。指針では、同公園を植生の現況などから13区画に分け、区画別の作業計画が明示される。協定期間が満了した2004年、指針に示された整備は終了したが、当クラブの提言を受け、以後は同公園活用のための整備を継続され、町民ボランティアを養成する森林体験講座が開催されている。

当協定は、かねてより当クラブに活動場所を斡旋していた県が、放置林を抱える町と協議し、三者の役割を調整して設定したものの。県の仲介があり、整備が無償で進むなど町としてもメリットがあったため締結はスムーズであった。参加者の役割分担を明確にした森林整備事例として、当協定を模範とする三者協定が県下他地域でも締結されている。

point! 県の仲介、地元の担い手育成

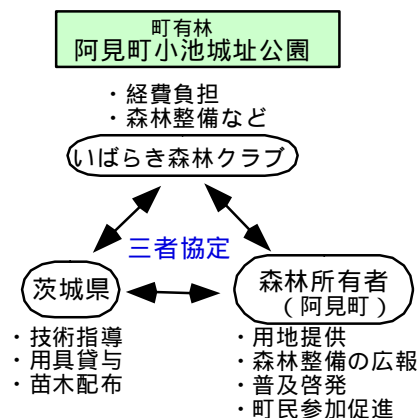


図4 「阿見町小池城址公園森林整備協定」の概要

3. 私有地・一般民有林の整備協定

[事例6]雑木林の管理協定（表1-事例E）

土地所有者（個人）、北本雑木林の会*7、（財）北本市公園緑地公社の3者が相互に緑地の重要性を認識して交流を深め、雑木林の保全に協力するための協定。所有者は雑木林を市民に開放し、遊びやくつろぎの場として提供することを許可し、会と公社は雑木林の整備作業にあたる（図5）。協定は3年ごとに更新する。

当協定は、会の依頼を受けた公社がひな形をつくり、会と関係のできていた土地所有者を交え三者の協議で策定された。公社には協定の信頼性を高める、お墨付きとしての役割が期待された。2000年に9名の所有者（面積0.06～0.64ha）と協定を締結したが、相続などを契機とする所有者の意志変更には逆らえず、2004年度までに2つの協定林が伐採、宅地化された。会では、常に転用の危機にある市街地の緑地の保全を今後どのように展開するかについて検討を重ねている。

所有者との関係づくり 近隣の住民にたずねて、藪化した雑木林の所有者を探すことから始め、所有者に「林をきれいにする代わりに子どもの遊び場として使わせて欲しい」と持ちかけた。所有者の反応は、「勝手に所有地に入られては困る」、「ただで林を整備してくれるなんて虫のいい話があるのか」といった警戒や驚きが主であった。しかし所有者側にも、高齢化などで林の管理に手が回らず、枝の張りだしや防犯の面から周囲の住民から苦情が出るなどの事情があり、会の申し出に応じる人が出てきた。そうした場所で整備を続ける中、「うちの林も手入れしてほしい」と所有者から依頼されるようになった。会が手がけた林は10ヶ所（所有者13名以上）に達し、活動に参加してくれる所有者もいる（写真2）。

point! 公社の仲介、転用

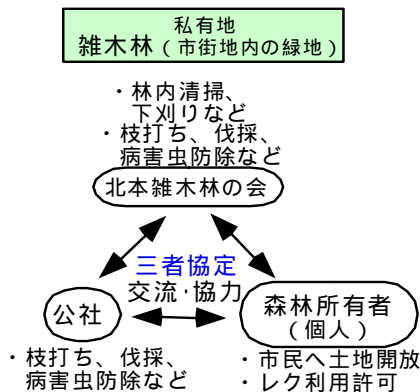


図5 「雑木林の管理協定」の概要



写真2 林の所有者を交えて作業やそば打ち体験を実施（北本雑木林の会 HP）

* 6 38 ページ参照。

* 7 40 ページ参照。

[事例7]「多摩の森・大自然塾」事業実施に係る協定（表1-事例F）

都事業「多摩の森・大自然塾」*8の受託者であるNPO法人森づくりフォーラムとその実施場所を提供する森林所有者（個人）の役割を定め、二者の連携を進めて、当事業の円滑な実施を図るもの。協定は、所有者に安心して林地を提供してもらえることに力点が置かれ、事業の参加者（ボランティア個人や団体）や参加者の調整役である森づくりフォーラムが果たす役割は、表1の事例中でも最も詳細に規定されている（図6）。なお、活動の資金は都からの受託料より拠出される。1年間の協定で期間終了後必要に応じて更新。

所有者との関係づくり 都の林務部署が森林組合などとのコネクションからフィールドを探し、森づくりフォーラムが協定を締結する。都事業に基づく協定であることから、締結には所有者から信頼が得られやすい。しかし、所有者ときちんとした話し合いをすること、良好な関係ができてもしっかりとした話し合いをすること、隣接する林地にも迷惑をかけないなどの配慮が必要である*3。

point ! 都の仲介、森林所有者の安心形成

4. 協定などを交わさずに所有者と関係をつくる

[事例8]NPO法人 埼玉森林サポータークラブ*9

会は埼玉県内外21カ所で森林ボランティア活動を展開し、うち固定型のフィールドが8カ所ある（2003年度）。発足当初、会のフィールドは国・公有林が多く、一般民有林が増えてきたのは会の実績が森林所有者から理解されるようになった発足6～7年目からである。

会では、ボランティア活動の持つゆるやかな性質や所有者の高齢化などから長期的な約束ができない、あいまいさをよとする山村文化を持つ地元に混乱を招く、などとして林地利用の協定や取り決めは交わしていない。所有者と関係をつくる際は、役場や森林組合を通じて依頼をし、所有者との話し合いで「山林を維持していく」意志を確認しあう。隣接する林地の所有者にも挨拶に行く。また地域の祭りに参加したり、老人会などと交流するなど、地元との関係づくりに力を入れる。山村の文化や技術を学び、森林の大切さ、木材を利用することの重要性を発信することに会の役割があるとする。

森林所有者の声：森林ボランティアには世論づくりを期待

Aさんは埼玉・群馬両県に約80haの山林を所有する。県の森林づくり体験講座（2002年より埼玉森林サポータークラブが事業受託）で技術指導を行うほか、当会に所有林をフィールドとして提供し、作業のノウハウを伝え、会と地元の交流の仲介役をしてきた（写真3）。

こうした協力の背景には「山村を維持するには行政の支援が必要」、「林業者だけでなく一般の人たちに林業や山村の実情を理解してもらねば」という問題意識がある。Aさんは所有林の整備を進める傍ら、地域の林業を立て直すために地元森林組合の活性化に取り組んできた。作業班の班長として技術の向上に取り組み、利用間伐に力を入れて「食べていける林業」を目指してきた。一方、組合の事業量を増やし地域の林業を維持するには、環境を保全する間伐への補助や森林整備に資金が環流する税制の導入など、公的資金の投入が必要と考える。

森林ボランティアには、「森林・林業の大切さを様々な場で発言して、そうした森林政策を後押しする世論を高めて欲しい」と期待する。

point ! 問題意識共有、信頼形成

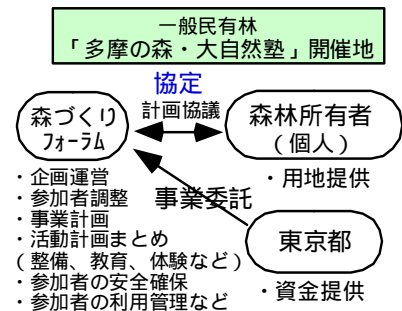


図6 「多摩の森・大自然塾事業実施協定」の概要*2



写真2「カタクリの花祭り」 地域交流の取り組みが、地元組織との共催行事として結実(神川町・神泉総合支所HPより)



写真3サポータークラブとのミーティング

* 8 24 ページ、66 ページ参照。

* 9 30 ページ参照。

森林の管理目標を決める

どのような森林を目指すのかによって森林の取り扱いが変わってきます。森林の管理目標を策定するだけでなく、掲げた目標をどういった作業によって達成するか具体的に読み解くことは、グループの力量が問われます。活動ではノウハウを持つ組織・機関との連携、調査とそのフィードバックといった方法が行われています。

針葉樹人工林で木材生産を目的とする場合

手入れ不足森林の間伐を行う場合など、生産目標に応じた森林の管理レベルを定め、間伐量を計画することが必要です。林業では既に生産目標が体系化されており、これを活用することができます。

[事例1] 施業体系図^{*1}を用いた間伐：
間伐ボランティア「札幌ウディーズ」^{*2}ほか

森林調査簿^{*3}、森林計画図^{*4}、空中写真等から林地の概況を把握。林分のうち平均的と思われる箇所を標準地をとり(写真1)、林木の樹高、胸高直径や欠点木などを毎木調査する。この結果を集計して1ha当たり立木本数、幹材積を計算する。林齢と上層高^{*5}より、その林分の地位を判定する。得られたデータを、施業体系図に当てはめ、間伐する林木の本数、サイズを決定する。

以上は、道の林業普及指導機関、石狩森づくりセンターの支援のもとに行われています。

point! 林業の既存知見の活用



写真1 標準地(33m x 30m等)設定のためコンパス測量を実施

里山林の保全を目的とする場合

旧薪炭林など長期間放置された広葉樹林を復元する場合、失われた生態系ではなく、現在の生態系を前提として、これをよく調べ、移行可能な生態系の中から目標を設定する方法が優れているとされます^{*6}。

[事例2] 旧薪炭林における順応的管理^{*7}：
桜ヶ丘公園雑木林ボランティア^{*8}

当会は、下記の理由から実体を伴わなくなった「こならの丘」^{*8}の旧植生管理計画^{*9}を、1998年度より会員の力で林分の現況や会の作業可能量に合致した内容へ見直す作業に取り組みました。

計画見直しのきっかけ

伐採計画変更による大量伐採、下刈り作業停止(伝統的管理手法採用・会の作業力不足)、アズマネザサの繁茂(写真2)



写真2 繁茂したアズマネザサ^{*9}

*1 収穫予測表や密度管理図をもとに地位別、仕立て方法別、伐期別に生産目標を表した図(北海道林業改良普及協会、発行年不明)

*2 8ページ参照。

*3 地域森林計画の樹立、実施のため、地況、林況等の事項について記載された帳簿。北海道では支庁、森づくりセンターに備えられ、関係市町村にも配布。

*4 森林計画の対象とする区域や林道、森林の種類などを明示した図面。

*5 樹高の高い林木の平均樹高。高い順に250(本/ha)相当の平均をとる。

*6 (倉本,2004)より。里山林については3ページ。



施業体系図^{*1}

主な対応策

1. データの収集

調査環境整備：図面づくり（測量、区画分け） 現地へ区画を示す杭打ち、樹木位置を図面にプロット

施業履歴把握：年度別伐採・下刈り実施面積

施業結果の検証：樹種別のひこばえの生存率・分布、ササの優占度

下刈り作業評価：履歴の異なる区画別の群落調査

林床植生把握：草花類のタイプ（草原生、森林生など）別分布

調査の結果、皆伐更新地では成長の早い樹種によってひこばえが被陰されコナラが枯死していること、放置の結果下刈りを重ねても野草が回復しない範囲ができたこと（図1）、下刈りの必要な面積が会の作業量を上回っていることなどが明らかになりました。

これらを受け、選択的な除伐やコナラの播種・補植、下刈りの作業日を増やし皆伐面積はさらに増やさないと必要だとわかりました。



図1 網掛け部は下刈りを重ねても野草が回復しない範囲*10

2. 情報共有、合意形成

会員対象アンケート：

活動内容について意見の掘り起こし、考えるきっかけづくり。

ワーキング活動：

簡単な調査を行い、上記調査結果をメンバーが実地に確認、納得する機会を設定。ワーキング活動の成果は「同報告（図2）」として会広報誌に掲載。

運営会議：

調査結果をふまえた管理作業の検討。2001年度からは「管理計画見直し」をテーマに取り上げ、繰り返し討議。

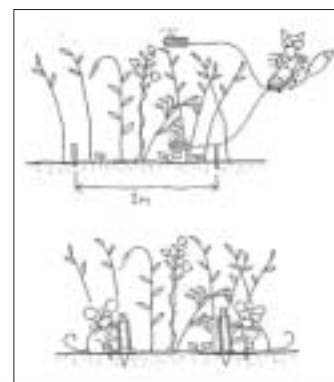


図2 ワーキング活動報告（抜粋）*11
調査手順をイラストで解説

これらのプロセスによって、「全体像と作業内容が参加者に非常にわかりやすくなってきた」、「（活動が）確実に前進している」*11とメンバーから高い評価が得られ、新計画づくりに着手する環境が整えられました。

3. 新管理目標・計画の策定

以上をふまえ、2003年度、林分を下記の5つの管理タイプに分けゾーニングしました（写真3）。管理の実行のため、会では年度毎に林分全体をモニタリングして、優先すべき作業を示した図面を作成しています。

育成型（薪炭林型）、保護型（雑木林型）、周辺樹木の被陰範囲（疎林型）、外周部下草刈り範囲（緩衝帯）、外周部垂高木層伐採範囲（緩衝帯）

point ! 徹底した調査（人材） 情報・熱意共有（仕組み）



写真3 新管理計画図。クリアファイルに入れ、活動日の度に活用

*7 複雑で正確な予測の難しい生態系管理にあたって、常に生物の状態をモニターして、その変化に柔軟に対応していく方法（勝川, 2004, 森本, 2001）。里山林の管理においても、目標とする自然の設定 管理作業 モニタリング 評価 目標の再検討といった、順応的管理の導入が課題となる（倉本, 2004）。

*8 42ページ、64ページ参照。

*9 1992年度にコンサルタントによって作成。「低木の生育を抑えた若齢落葉樹林」を目標とするもの。

*10（桜ヶ丘公園雑木林ボランティア, 2001）

*11（桜ヶ丘公園管理事務所, 2001）

情報を共有する

様々な人が集まり、人々の協力で成り立つグループ活動では、情報共有は取り組みのかなめです。ここでは「活動に参加する」、「チームワークをよくする」、「活動を計画し実行する」、「活動を振り返る」などといった局面でメンバーの情報共有を進めるために、どのような工夫が行われているか紹介します。

参加の土壌をつくる

不安を解消する、参加意欲を高める

活動当日、特に初参加者は新たな体験に期待する一方、「これから何をやるんだろう」、「自分は体力不足では」等々、様々な不安も感じているものです。活動を始める際は、参加者の不安を解消する情報や、フィールドの概要などを参加者に提供することが大切です。こうした情報共有の場を設けることは日程のスムーズな進行にも結びつきます。

[事例1] 開会式：NPO法人 埼玉森林サポータークラブ*1

会では活動のプログラム進行のためにスタッフ用の運営マニュアルを作成している。会は、2002年度より県の森林づくり体験講座(年約30回)を受託の経験も持つ。会では活動の参加者に、都市と山村の架け橋となって山村や林業の実情を世の中に伝える役割を期待している。このため、活動のプログラムはわかりやすさに主眼を置き、開会式では当日の流れをイメージできるような情報提供を心がけている(写真1-2)。

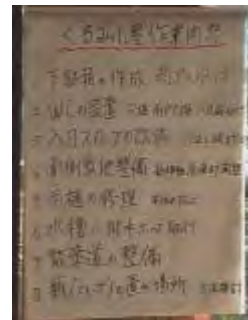
運営マニュアル(概要)*1

[開会準備]

事前：現地確認(林況、必要な道具・物品、作業難易度など把握)、参加者班分け、班長配置、関係者打ち合わせ、日程表作成
当日：駐車場誘導係・受付係配置、出席者点呼、班長ミーティング、救護係配置など

[開会式]

挨拶(司会、主催者、山林所有者、来賓等)、日程確認(現在までの進行報告、作業手順、担当分け、作業の優先順等)、安全確認(八子・道具等)、準備体操など



開会式(上写真1)と作業表(拠点施設整備：下写真2)アレンジはあるが開会式の骨格は左記マニュアルに基づく

[事例2] フィールド案内：多摩の森大自然塾鳩ノ巣フィールド*2

作業前に、初参加者の班(1班10名程度)に対して当日の作業林分とその周辺の林地を案内し、地形、植栽樹種、施業経過や今後の計画などを解説する。自分達が取り組む作業とフィールド全体(約10ha)の森林計画、ひいては地球温暖化防止といった地球レベルの環境保全との関連性を想起してもらい、参加者の参加意欲を高めることが主な狙いである。解説は、参加者が楽しめることに力点を置いた平易な内容で、解説者用に地図と対応した解説マニュアル(ポイントのみ記載)が作られている(図1)。班長が解説を務めるが、意欲あるリピーターを班長補助に配置して解説役を委ねる場合もある。マニュアル化によって、運営の役割分担も図っている。



フィールド(皆伐跡地)の解説ポイント
・伐採：切り株から元のスギ林をイメージ
・地拵え：植栽終了地との対比
・植栽：広葉樹である理由、シカ食害
・眼下の川堤防の石垣：集落の歴史等々

図1 林地・地形毎に解説事項を設定*3

point! 参加意欲の向上、マニュアルの有効活用

*1 30ページ参照。掲載した運営マニュアルは聞き取りと当ページの活動の観察をもとに構成。

*2 24ページ参照。

*3 多摩の森大自然塾鳩ノ巣フィールド連絡協議会資料より抜粋、加筆。

仲間意識を育てる

チームワークを発揮する下地として、共通の話題をつくり、仲間意識を育てます。広報誌などがその代表であり、ウェブページや電子掲示板、メーリングリストなどが活用されることもあります。内容は、活動報告の他、イベントや書籍紹介、会員のコラムなどさまざまです。多くの人が広報に関わることを目的に、活動報告などの執筆をリレー式に分担する例も見られます。また広報誌を発行する場合、「会に関わりたけれど活動には直接参加できない」といった人のために、購読会員の区分を設けているグループもあります。

[事例3]いしかり森林ボランティア「クマゲラ」*4:

HPを活用した情報共有

当会では2004年9月よりホームページ（HP）を開設している（図2）。開設当時、担当メンバー（専任1名）はHP管理には初学者であったが、平易に無料でHPの開設・運営ができるサービス*5を利用することで4ヶ月程の準備で開設を実現できた。開設後は、主に会員相互の情報交換のため、月2～3回ある活動日の度に内容を更新するなど新鮮なページづくりを心がけた。この結果、当会HPは翌年3月に「楽しいコミュサポHPコンテスト（札幌広域圏組合主催）」にて、総合的な完成度に優れていることを評価され、最優秀賞「札幌広域圏組合賞」を受賞した。

point ! 公共サービス利用、新鮮なページづくり



図2 活動報告ウェブページ

[事例4]NPO法人 埼玉森林サポータークラブ*1:

広報誌「サポータークラブ・コミュニケーション・ニュース」

A4モノクロ版8ページで年4回発行（図3）。各回のニュースは20人以上の会員の寄稿によって成り立ち、記事は県内各地で毎週のように開催されるフィールド活動の報告がメインである。参加を歓迎して、初参加者やしばらくぶりに参加した会員の人物紹介も行う。初心者から常連参加者まで、会員の様々な感性によるレポートが紙面を読み応えのあるものとしている。県内広範囲の異なるフィールドで活動を展開しながらも、ニュースの存在によって、会員共通の話題もできる。郷土埼玉の伝説や花暦の連載もあり、巻末に掲載する活動予定欄では、会員の家族や知人のゲスト参加も呼びかける。編集作業は、販売促進を本業とする会長をはじめ3名の担当による。

point ! 会員の寄稿、共通の話題



図3 会員の寄稿が満載のニュース

* 4 12ページ参照。

* 5 市民活動の活性化などを目的に札幌広域圏組合が提供（当組合HPより）。

合意を形成する

1. フィールドを調べて計画をつくる

活動の場とする森林をどのように整備し、利用していくかを計画するには、まずその森林の状況を調べ、その情報を活動する皆で共有しあうことが出発点となります。活動計画をつくる話し合いの場を有益なものにするためには、多くのメンバーの参加を得ること、個人のやりたさだけでなくフィールドの状況に基づいた議論を行えるよう工夫すること、意見を発表しやすい雰囲気をつくることなども大切です。

[事例5] 生き物マップづくり：ふどうの森クラブ*7

「ふどうの森生き物マップ(図4)」は、当会のフィールド「ふどうの森*7」に見られる昆虫類や鳥類、草本・木本植物などをまとめた地図である。活動開始(1998年)当初は、フィールドにどのような生物がいるかわからなかった。そこで、会では月2回ある活動のうち1回を自然観察会に充て、それと知らずに希少な植物を刈り取ったり生き物の生息場所を荒らしてしまわないように、フィールドの環境を調べながら森林の整備作業を進めることとした。自然観察会の成果は2001年に「同マップ」および植物の開花・結実暦、鳥類の観察暦などとしてとりまとめた。

会では、この成果をもとに会員で議論を重ね、フィールドの環境に合い、かつ会員がいいと思う森づくりを最大公約数的に意見集約して作業を進めている。

point! 地図作成、意見集約



図4 ふどうの森生き物マップ*9。

[事例6] 運営会議とワーキング活動：桜ヶ丘公園雑木林ボランティア*8

運営会議は毎月1回開催し、開設より12年目を迎えている。活動運営に関わりたい会員は誰でも参加でき平均9.8人/回が参加する(2004年度)。会議の開催日はワーキング活動などを組み合わせ、通常の作業日とは別枠として確保している。ワーキング活動では植生管理に関する簡単な調査を行い、その結果を運営の決定に役立てている。調査や討議の結果は会広報誌に掲載する。



写真3 ササ回復量調査*10

point! 調査結果の活用、意志決定

写真3は5～7月の各月に下刈りを行った区域に対して、10月に2m²ずつササを刈り、各区域毎のササの回復量を比較しています。

広報誌では、こうした結果に加え、野草の分布やササの密度、成長の草刈り時の踏みつけが林床植生に与える影響などを総合的に勘案して、下刈りを計画することが大切、と報告されています*10。

*7 34ページ参照。

*8 42ページ、60ページ参照。

*9 (雑木林研究会, 2004)より。但し本図は会員作成の地図(A2版)をもとにイラストレーターが作成。

*10 (桜ヶ丘公園管理事務所, 2002)。

*11 28ページ参照

2. 計画を実行する

計画を実行するため、誰もがフィールドや作業の現況をつかめるように、掲示や地図などを活用して情報を共有します。その分野に詳しい会員が欠席だったり、会員がしばらくぶりに参加した場合でも、活動を継続できる環境を整えます。

[事例7] 桜ヶ丘公園雑木林ボランティア*8

拠点施設内のボードに必要事項を記載し（写真4）、地図上に作業範囲を明記する（61ページ写真3）。

[事例8] 下刈り地図：森林クラブ横浜 / 丹沢*11

下刈りの進行状況を地図上に記録し、次の作業に引き継ぐ（写真5）。

point ! 誰もがわかる

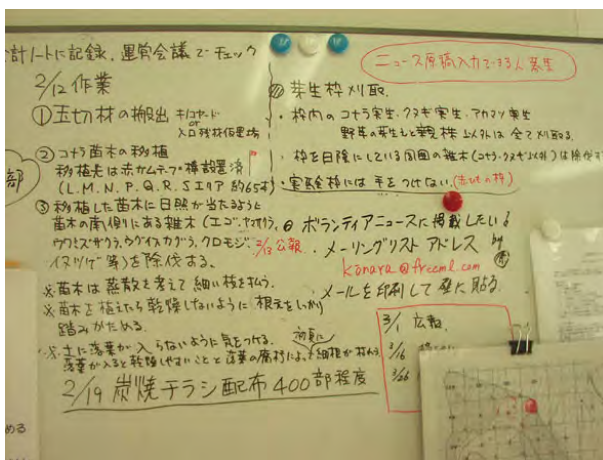


写真4 課題を掲示したボード

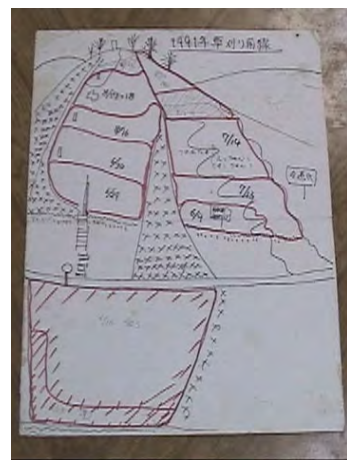


写真5 下刈り地図

3. 活動を振り返る

活動を記録し、引き継ぎ資料や計画に対する履行記録として共有します。

[事例9] 活動記録：いしかり森林ボランティア「クマゲラ」*4

当日の活動内容、日程進行のために参加者に呼びかけた内容、安全作業のための注意事項などを役員が作業票（図5）にまとめ、あわせて活動風景（画像）などを掲載した資料を作成している。これらは、フィールド所有者や技術指導にあたる行政機関への報告に使用するほか、組織の活動実績の記録として、現役員が交代した際の申し送り資料としての活用を想定している。

[事例10] 活動記録：桜ヶ丘公園雑木林ボランティア*8

日替わりの担当者が活動終了時に当日の実施内容、申し送り事項などを記録する。活動記録は、次の活動の取りかかりを円滑にするだけでなく、蓄積することで年間の作業量が把握でき、次期計画のための資料となる。当会には雑木林の管理作業以外にもイベントやクラフトなど活動に多様な要望を持つ会員がいる。これを前提に、組織としてバランスする作業可能性を見極めて、管理計画をつくる。例えば、作業人員不足から計画した範囲の下刈りの出来が荒くなった年は、作業量全体を調整の上、翌年の計画にその部分を補う作業を盛り込むなどといった具合である。

point ! 活動実績の資料化、次期計画への反映

本日の作業票 (7回) 「クマゲラ」				
日付	2005年7月30日(土) 天候はれ、曇り・小雨・晴・大雨			
本日の参加予定者	17名	本日の参加者	13名	
石巻センター	0名			
フィールド	石巻市	13名	28名	3名
種	リーダ：サブリーダー			
A	(5)	(5)	(9)	会員名(会員番号)
B	(5)	(17)	(11)	
C	(3)	(32)	(23)	(47)
D	(1)	(16)	(8)	
作業前基本確認				
作業前3分程度の各自による柔軟体操を行う。服装と持ち物を確認する。(機械使用の場合は特にシャツやズボンの襟は外に出さず中にしっかり入れる)				
本日の作業(午前)				
いしかりふるさと環境館スリーラインキャンプ2005に参加の子供たちと28名小鉢で伐採実践と削面作業で伐採した木の切り口を会員のノコを置して休ませ、棒でワルを利用してプランク遊びをさせる				
A・B・C・D班は子供たち23名程度を担当下さい(子供たちの参加予定9名)				
いつもと勝手に違います子供たちがケガのないように心配り下さい				
*スリーラインとは石巻、厚田、浜益を意味しています				
昼食の後高岡ふれあいセンターは全員移動します、ここへはもう戻りません				
本日の作業(午後)				
高岡ふれあいセンターで山林についての話の後パードールつくり、竹とんぼつくりの手伝いしながら子供たちと一緒にひと時楽しんで下さい				
作業終了 2:30分				
前回はあったヒヤリハット				
夏真っ盛りです熱中症に十分注意して下さい				
15分おき位に、小休憩に水分補給するようにして下さい				
気分が悪くなった時は作業を即中断して周りの方に伝えて下さい				
雑木作業では周囲の状況を確認して樹木の根は近くに人が置かないと思っても倒れるぞーの声かけを必ずして下さい				

図5 「クマゲラ」作業票

協力体制をつくる：協働

私たちが暮らす社会には「市民」、「企業」、「行政」の3つのセクターがあります。森林ボランティアを進めるにあたって、これらのセクターが協力しあうことで大きな成果が生まれます。NPOには市民セクター内の引き出し役（ファシリテーター）や異なるセクターの調整役（コーディネーター）の役割が期待されています。

協働が成立する仕掛け

ここでは、協働を「同じ目的のために複数の組織や個人が自主的に対等な立場で役割を果たすこと」とします。協働の価値は、単に連携する（連絡をとって一緒に物事をする）ことではなく、連携を通じて参画者それぞれの得意分野の能力が発揮され、単独では実現できない質の高い活動ができることにあります。参画者にとって役割の遂行には労力や投資が伴いますが、相応以上の成果が得られることが参画の動機付けになります*1。一方、関係者間でメリットや役割分担に不均衡が生じている状態は協働とはいえず、関係者に不満が生じ連携は長続きしません。協働のコーディネーターには、参画者の意欲を引き出したり、役割分担が対等に行われるように調整する役割が求められます。

イベント運営における協力体制

[事例1]「多摩の森・大自然塾」

1. 事業の運営における協力体制

NPOへの都事業委託 NPO法人森づくりフォーラム（以下フォーラム：次ペ - ジコラム）は都庁より森林づくり体験イベント「多摩の森・大自然塾」事業（参加者公募型年約40回開催）の運営を受託した。都は、NPOの柔軟性、機動性、ノウハウの蓄積などを評価し、また林務部署内の人材の不足を補うためNPOに事業委託をした。

複数の市民団体による運営 フォーラムは、「1組織の取り組みでは閉鎖的な運営になり、出口が自組織のフィールドの整備にとどまってしまう」という考えから、都内で森林関連で活動する市民団体に参画を呼びかけ、7団体（2002年当時）と協力して運営する体制をつくった。具体的には当事業のフィールド10カ所のうち、8カ所を7団体の固定フィールドで行い、各団体の進行で自組織の個性を活かしながらプログラム（人工林の手入れ）を実施してもらう（写真1～3）。開・閉塾式は全てのフィールドで共通の形式で行う。参加者の募集などの運営事務はフォーラムが担当する。

参画をアレンジする 当初、フォーラムと支援団体の関係は「顔見知り程度」であった。都事業に協力することで活動の幅が広がり「多摩の森林再生」、「広く都民に体験の場を提供」など自組織の理念や活動の公共性が示しやすくなる、イベントの開催で新会員獲得のチャンスが生まれる、他団体との交流や連携が進む、といったメリットを参画者が認識することで、協働による運営が成立した。フォーラムは、「お互いが良さを発揮する」、「当事業の枠組みを使って新しいものをつくる」というストーリーを示し、団体の参画をアレンジした。こうした役割は行政が行うと市民の理解や共感を得ることが難しく、運営者がNPOであったからこそ実現できた。



写真1 下刈り（奥多摩・栃寄）*2



写真2 間伐（青梅・吉野梅郷）*2



写真3 間伐材を利用した道づくり（檜原・遊学の森）*2

*1 協働の成立構造に関しては、齋藤（2003）は、2者では利害の拮抗により実行不可だった造林が、6者の農地造林事業として成立した例をもとに、経済学の「パレート改善」の概念を引き、「それぞれが手持ちのもの、有り余ったものを投入し、一人では得られないものを獲得している」と表現。

*2 「多摩の森・大自然塾」HPより。

2. フィールドの運営における協力体制

残りの2カ所のフィールドでは協議会を設置し、複数の団体や個人が運営に参画している。

鳩ノ巣フィールド連絡協議会 鳩ノ巣フィールド連絡協議会*3は、育林作業と自然解説という異分野を得意とする2団体の参画をフォーラムがアレンジして発足した。協議会は2003年に森林計画の策定から活動を開始した。各課題の原案作成に担当を決め、あらかじめ各団体内で作業した成果を協議会の場で議論するなど、支援団体のノウハウや得意分野を活かした企画運営を機能させている。協議会にはさらに2団体が自主的に参画し、当年度末には、活動運営に意欲ある個人など誰でも参加できる仕組みへ移行した。個人の参画の動機は「自分の関心にあった多様な森づくりが行われている（写真4）」、「作業をしたり、森林全体を観察したりいろいろな体験をしたい」など、当フィールドの多様な林況や森林計画、協議会が実施してきた企画の魅力に基づいている。

地元組織との関係 当協議会では、活動を継続的なものにするためには地元との連携や地元の活性化が必要との考えから、地元組織との関係づくりに力を入れている。活動で使用する施設の提供を受けるほか、自治会の協力を得て、郷土料理や野生生物とのつきあい方などの山村文化に触れたり、地域資源を発見するイベントなどを開催している（図1）。

森林所有者との関係 フィールドの所有者の姿勢は、現状では「自分では維持できないので管理を任せる」といったものである*4。「広葉樹の森林づくり」や「地域活性化」といった協議会の取り組みやその成果を示すことで、所有者の関心を喚起し、多目的な森林利用のあり方をとともに考えていく関係を創りたいとする*5。

協働を成立させるために事業が目指している、上記の参画者が当事業へ「投入するもの」と「獲得するもの」の設計図を表1に示した。実現していない内容も含まれており、現在はこの体制づくりの段階である。事業では、こうした構造を創り出すことで多様な主体の参画を進め、多摩の森林再生の取り組みを多様かつ継続的なものとしていくことが企図されている（2003年取材）。

表1 事業が目指す協働成立構造：鳩ノ巣フィールド

参画者	INPUT (投入物)	事業	OUTPUT (獲得物・効果)
都	資金	森林づくりイベント	都民参加森林づくりの推進、柔軟・多彩な行政サービス
森林所有者	林地		森林多目的利用
森づくりフォーラム	調整能力・知恵・労力		活動分野拡大、活動使命前進
支援団体	知恵・労力		活動分野拡大、会員獲得機会、活動の公共性
個人	知恵・労力		関心に合致した森林づくり
地元組織	施設・生活技術		地域の魅力再発見、活性化



写真4 2003年植樹祭では広葉樹10種以上、1,000本弱を植栽（鳩ノ巣）*2



図1 地元の山村文化を学ぶ講座*6

NPO法人 森づくりフォーラム

「森とともに暮らす社会」の創出を目的に、社会全体で森を創り、育てていくことを使命に活動。普及啓発、人材の育成、政策提言等を実施。ネットワーク組織として多様な主体の連携づくりにノウハウを蓄積する。

*3 24ページ参照。

*4 フィールド利用の仕組みは59ページ参照。

*5 事例1は、東京都、フォーラム、鳩ノ巣フィールド活動参加者への聞き取り調査によって構成。

*6 NPO法人森づくりフォーラムHPより。

流域内の森林・林業を活性化する

近年、流域を基本的単位として、関係者の協力のもと森林整備、木材の供給などを総合的に推進しようという取り組みがあります*7。こうした取り組みへNPOがどのような形で参画しているか紹介します。

[事例2] 東三河流域森林・林業活性化センター

1. 協力体制の枠組み

協議会へNPOが参画 東三河流域森林・林業活性化センターは、多様な森林整備、地域材の安定供給等、流域内の森林・林業をめぐる課題に取り組むため、行政、森林・林業関係団体などを委員(2004年度54名)とする協議会を設置している。協議会では、部会活動にてこれらの課題を解決する事業に取り組む。

一方、NPO法人穂の国森づくりの会(以下、穂の国)*8は東三河内の企業、経済団体、行政を会員として網羅する団体である。様々な組織が集まる場として協働の素地を仕掛けとして備え、会員の連携による事業の実施を志向している。穂の国は当センター協議会の協議委員を務め、全ての部会活動に参画する。



図2 森林の流域管理のイメージ*7

2. 教育活動における協力体制

森林環境教育事業 森林活用部会では、域内の小学校を対象に森林環境教育事業を実施している。森林環境教育は穂の国にとっても、自組織の活動の1つの柱である。穂の国は事業の元締め役となって、国や県の林務出先機関、木材加工団体、他のNPOなどとの連携をアレンジし、訪問授業と野外体験活動*8を実施する。

訪問授業では、授業テーマ毎、4つの組織・機関が講師を分担し、各自の得意分野の授業を行う(図3)。野外体験学習では、ふれあいの森制度の協定林などの国有林を活動場所に、愛知森林管理事務所が道具の供与、スタッフ対応などを行い、穂の国は準備の他、子ども達への指導や解説を受け持つ。150人など参加生徒数が多い中学校に対応する際は、同制度で近隣に協定林を持つ2つの市民団体と連携し、互いに活動場所と指導者を提供して行事を実施する。このように各者が手持ちの資源(人材・物品・場所など)を投入することで、単独では行い得ない規模の教育事業を実現させている(図4)。学校側も複数組織が教育に関わることで、多様な切り口から森林・林業について学べるメリットがある。

連携の契機と拡がり 森林環境教育における管理事務所と穂の国との連携は2000年からである。それ以前は管理事務所は単独で国有林を活用した森林環境教育を実施していたが、対応できる職員の不足のため実施件数は多くはなかった。教育を通じて国民参加の森林づくりを推進するという林野庁の施策とも合致し、森林活用部会への参画や穂の国との協力関係が成立した。2団体の参画は国有林のアレンジによるものであり、これを契機に3団体のネットワーク会議ができた。なお、この繋がりが発展して「第11回森林と市民を結ぶ全国の集い in あいち実行委員会」ができています。

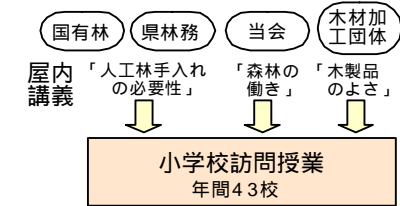


図3 訪問授業における協力体制(2003年度)

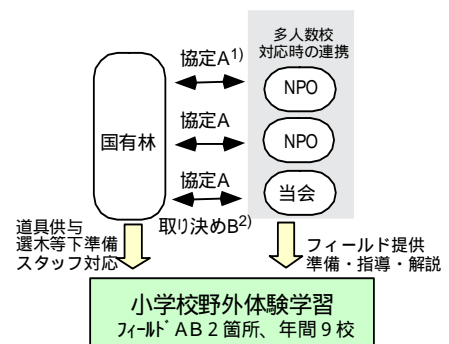


図4 野外体験学習における協力体制(2003年度)

- 1) ふれあいの森制度。網掛け部の3組織は近接する林地で各々活動を行う関係
- 2) 期限内作業終了を要件に林地利用

*7 「森林の流域管理システム」など(林野庁HPより)

*8 26ページ、48ページ参照。

2. 東三河環境認証材の認定制度

需要拡大部会は、行政の農林・住宅担当、木材加工・建築業関係者、森林・地域づくりに取り組むNPOなどより構成される。

NPOが認証機関を担当 事業の一つに「東三河環境認証材の認定制度の推進」がある。当制度は、東三河の森林のうち、環境に配慮した施業が行われている森林^{*9}から産出された木材を認証する制度である。消費者が「環境に配慮した近くの山の木材（認証材）」を使用することで、まずは身近な地域での物質（木材）循環を実現させ、地球温暖化防止につなげていこうとする構想に基づく。穂の国は、認証機関として適切に管理された森林（図5）の材の認定、「東三河環境認証材」を区別して扱える事業者の認定、そして認定された事業者から発行される伝票の管理を行う（図6）。
財源の確保が課題 当制度は、森林組合などの素材業者、流通・加工業者らが各自の利益に結びくものとして上記の構想に共感し、認定事業者となって、認証材の安定供給がなされること、消費者が認証材を選択的に消費することがキーとなっている。現在、事業はモニタリング期間にあり、図6の仕組みが作り上げられ、認証材を使用した一般住宅も試験的に建築され（写真5）認証材の普及啓発が進められている。2006年度からの本格運用に向け、認証のための手間（コスト）を支える財源の検討や、需要拡大のため消費者に対する補助金の支出を域内自治体などに打診しているところである（2004年取材）。



図5 認証森林を示すパネル^{*10}



写真5 東三河環境認証材を使用した家^{*11}

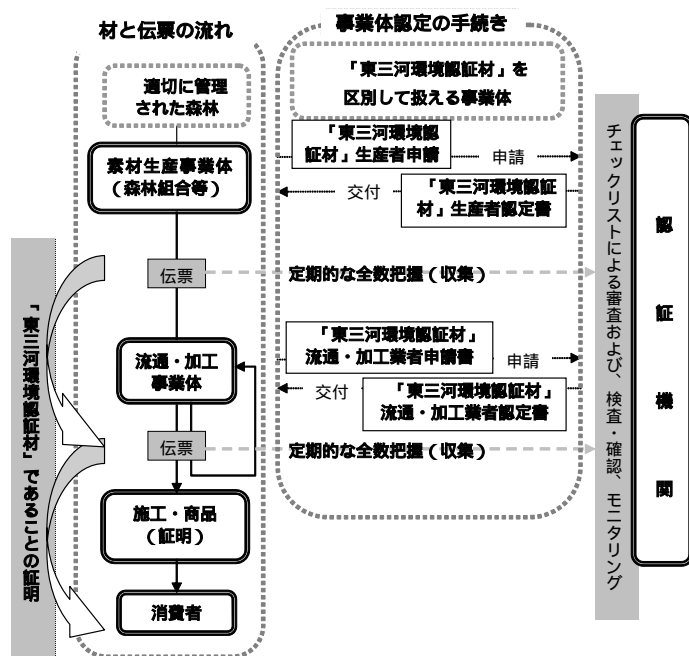


図6 東三河環境認証材の認証フロー^{*10}

*9 具体的な要件は、その土地に適した森林施業計画ができていて、施業計画に沿った、適切な育林のための施業が実施されていること、皆伐を実施する際には、事後に植林計画が具体化されていること（出典は*10）。

*10 「持続可能な森林経営のための勉強部屋」HPより。

*11 「イトコーの家」HPより。

森林保全・利用を進める行政施策

森林保全や市民による利用を進める施策には、イベントの開催など参加機会の提供、技術指導や人材育成、林地を利用する市民と土地所有者の仲介、林地の借り上げ、買い取りなどがあります。トラストなどによる買い取りは林地を確保する手法として最も確実ですが、埼玉県の場合では数十億円規模の資金が必要です。

1. イベント開催

[事例1] どんぐり銀行活動（香川県）

口座にどんぐりを預けると、森林関連のイベント情報の提供、緑化用の苗木、グッズの払い戻しが受けられる。また森林づくり行事に参加することで、グッズをもらうこともできる。どんぐり預金をきっかけに県民に森林づくり活動への積極的な参加を促すことを目的に、活動は県と県森林協会が事務局をつとめ、NPO法人どんぐりネットワークに運営を委託して実施する。県民からの資金支援も受け付ける（図1）。2003年度は都市部の子ども達を中心に約2,500人の預金者があり、一方苗木は269人に2,257本が払い戻された。活動フィールドは9カ所あり、間伐などの森林整備や炭焼き、クラフトや食体験などの活動が行われている（写真1）。

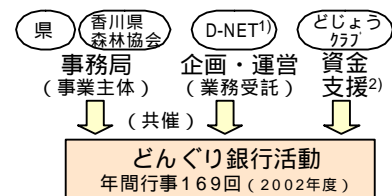


図1 どんぐり銀行活動実施の仕組み。
1) NPO法人どんぐりネットワーク
2) 他の財源は、県費、「みどりと水の森林基金」助成金



写真1 「交流の森づくり（高知県大川村）」（どんぐり銀行HPより）

2. 市民活動への技術・運営支援や人材育成

[事例2] 香川県森林ボランティア登録制度（KFVN）（香川県）

森林づくりに参加意欲のある個人・団体を登録し、情報誌送付、ヘルメットの貸与、フォレストースクール（後述）への参加資格認定、発足したばかりの団体への技術指導や組織運営、フィールド利用の助言などの支援を行う。登録者はどんぐり銀行活動ともリンクする森林づくり行事に参加したり、登録者同士で自主的な活動グループも結成できる。現在178人、9団体が登録（2004年度）。

[事例3] フォレストースクール（香川県）

県民参加の森林づくり運動のリーダー養成講座。入門から応用までの3レベルのカリキュラムが組み立てられ、各レベルに定められた必要単位を段階的に履修する。講義の内容は多岐にわたり、講師にはその分野の専門家を起用している（図2）。講座生は必要単位を2～3年かけて履修することも可能である。2005年度には全レベル（94単位以上）を履修した「かがわフォレスター」が誕生した。

入門レベルカリキュラム（抜粋、青字は講師）

- ：「森林作業技術 - 除伐・間伐」「チェーンソー・刈り払い機等の取り扱い」：**県林業技術専門員**
- ：「野外救急処置技術・安全対策の実際」：**日本赤十字社香川県支部救急法指導員**
- ：「話し方・コミュニケーションの方法と実際」：**コンサルティング企業社員**
- ：「森林の仕組みと生態系」：**広島大学教授**
- ：「県内主要樹木の特徴とその見分け方」：**県環境アドバイザー**
- ：「野外ゲーム・ネイチャーゲームの実践と指導」：**（社）ネイチャーゲーム協会香川県支部**

図2 スクールのカリキュラム



写真2 親子で里山を満喫*1

3. 林地利用仲介・支援

[事例4] 里山オーナー制度（香川県）

県の仲介のもと土地提供者（所有者）と借受者（オーナー）が契約を締結する。オーナーは所有者に一定の利用料（25,000円）を支払い、5年間1区画（約1,000㎡）の里山林を借り受ける。オーナーは所有者が指定する以外の木に関しては、自由に伐採し利用することができる（写真2）。なお、利用料は林地の巡回や境界の管理、共同施設などの維持管理に支出される。所有者の林地提供は「多くの人に自然への理解を深めてほしい」、「手入れ不足を改善したい」といった意思が動機となっている*1。

*1 香川県HP「里山オーナー制度」より。

[事例5] 町民の森指定制度（茨城県阿見町）

町の景観条例を受けてつくられた制度で、主に市街地内にある樹林地などを「町民の森」として指定し、自然を活かした公園整備などを行うものである。

若栗地区にはゴミの不法投棄などで荒れた私有林(約1ha)があり、付近の住民のグループが自発的に手入れを行っていた。所有者は高齢者でもあり「林地がきれいなるならば」とグループに手入れを任せていた。町はこの樹林地を「町民の森」に指定し、土地の所有者と使用貸借契約を結んで林地の利用を明確にし、住民グループとワークショップを行って整備計画を策定した。計画では里山の自然を生かし、子ども達が気軽に遊び場として利用できる「プレイパーク」を目指すこととした。また散策路や安全柵の設置などは町が行い、その他の森林整備はグループが行うといった役割分担も行った。グループは「阿見・里山ワンダーランドの会」として組織化され、ササ刈りなどの森林整備や林内の間伐材で長椅子を作製するなどの活動を展開している（写真3）。



写真3 参加者の様子*2

4. 協定林を一定期間保全整備し活用を促進

[事例6] 平地林整備事業（茨城県）

市町村と森林所有者との保全協定（二者協定）もしくは整備した平地林*3の活用者を加えた保全活用協定（三者協定）を8年以上結び、市町村が事業主体（1/2を県が補助）となり、下刈りや間伐、植栽、木柵など簡易防災施設の整備を行う。開発の進む平地林の保全、公益的機能に着目してつくられた事業で、協定期間中は森林整備と保全が図られる。保全活用協定では森林所有者は活用者による林地の多目的利用に協力する（図3）。2002年度は当事業で県内29市町村にて60haの整備が行われている。保全活用協定は5件の締結例があり、教育的な活用などが行われている。

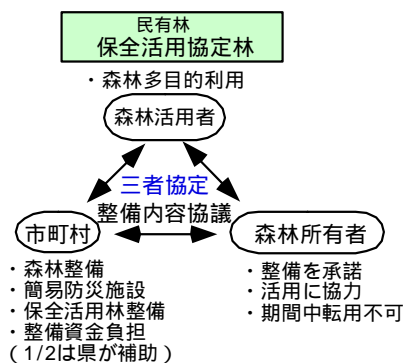


図3 平地林整備事業：保全活成型

5. 林地の買い取り（公有林化）

[事例7] 緑のトラスト運動（埼玉県）

県民からの寄附金を資金（さいたまみどりのトラスト基金）として土地や建物を取得したり、また、寄贈や遺贈を受けたりして、埼玉の優れた自然や貴重な歴史的環境を、県民共有の財産として未永く保全していこうという運動。埼玉県と（財）さいたま緑のトラスト協会が一体となって運動を進めている（図4）。2004年現在、7カ所（33.5ha）のトラスト保全地がある。保全地の整備は当協会が行うほか、下刈り、除伐など簡易な作業は自然観察をかねながら、協会が募集したスタッフやNPOがボランティアで取り組んでいる。また自然観察会の開催など、保全地はNPOの活動や地元の学校教育などで活用されている。

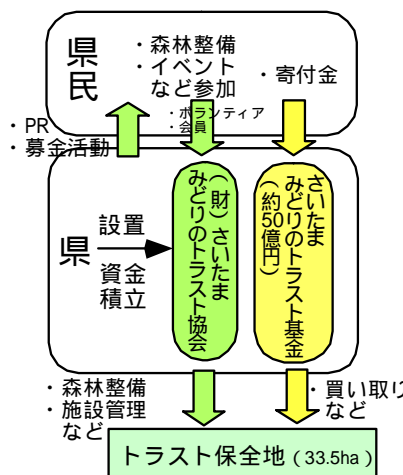


図4 緑のトラスト運動の仕組み (2004年度現在)

*2 茨城県HP「普及指導の現場から」より。

*3 平地林の定義は、標高150m以下で傾斜15度以下の地勢条件下に所在する森林。平地林面積が森林面積の70%以上を占める市町村を当事業の対象としている。

3

課題を発見する



「道民森づくりネットワークの集い」ポスターセッション（2005年）

より、参加目的として「人との出会い」、「レク」、「学習」が多い結果は、森林の手入れ作業を通じて自分の生活を豊かにするような効用を得たいという参加者の意識を示していると思われ*²。ゆえにこの結果はそうした観点から理解することが必要です。

満足度を高める方法としては、一般化は難しいですが、まずは「でみられた組織の長所を大切にすること、参加を継続する条件として多かった人間関係をよくしたり、負担なく参加できる環境を整えて、「自分の参加経験を増やしたい」と望む会員をサポートすることなどが大切でしょう。ここでは「参加者を増やす」が比較的多くみられましたが、別途行った事務局への聞き取り調査では、森林の手入れ作業のみの活動では参加者の増加に限度があること、参加者を増やすために行うレクなどの活動と森林づくり作業のバランスの取り方などに課題を感じている団体も多数みられました。

参加者に聞く：活動の魅力とは？

楽しみながら作業 若い頃は登山に熱中していました。ミドル世代になって若い頃よりは体力がダウンしてきて、なにか別に山にかかわることをやりたいと思って森林ボランティアに参加するようになりました。普段はマンション暮らしの会社員ですが、週末に都市近郊の山林で間伐などの手入れ作業をし、木の香りを嗅ぐとリフレッシュできます。作業でさわやかな汗を流し、チェーンソーの操作を学び、植物が子孫を残す工夫の凄さなどを発見するなど、新しい体験を楽しみながら活動に参加しています。

環境改善に貢献 地球温暖化防止につながる二酸化炭素の吸収源としての森林の効用に注目しており、活動への参加は微力ながら環境改善に貢献している自負があります。一方で作業で山にはいると心地よく、森の空気にすがすがしさを感ずります。作業後の爽快感も格別で、健康のためにも活動を続けています。

仲間との出会い 定年を迎えるまでは仕事人間で、30年も生活していながら地域の自然のことを何も知りませんでした。社会人向けのカレッジで団体を知り、活動に参加するようになりました。活動の魅力は仲間とのつきあいです。様々な特技や個性をもった人と触れ合うことができ、とても勉強になります。

人間関係・雰囲気よさ 会の雰囲気がとても前向きでリラックスできます。皆が会のために自発的に働く姿勢ができています。活動は、森林づくり作業だけではなくフィールドの地元と一緒に祭りをしたり、森林教室を開催したり、焼き物窯をつくって陶芸をしたりと様々です。企画があがると皆が「やろう、やろう」と盛り上がり役割分担をして作業を進めます。その結果として幅広い活動ができています。

代表者に聞く：会の継続のために心がけていることは？

「いばらき森林クラブ」代表

新企画・新会員を増やす 一般的に会員は入会して1年程は熱心に活動に参加してくれます。しかしある程度活動の様子をつかむと「もうわかった」と足が遠のくものです。活動に新鮮さを失わせないため、常に新しい課題に挑戦すること、新会員を増やし、会員の様々なアイデアを企画に反映させることを心がけています。細かなことですが、新会員がリラックスして参加できるよう、活動中にはなるべく声をかけるようにしています

達成感を高める 各回の活動の参加人数は15～20名がちょうどいいと思っています。10人以下だとやはりパワー不足です。活動するからにはパワーを感じたいものです。

一人が作業できる量はわずかですが、会の仲間を取り組めば結構な面積の作業ができ、それが達成感につながります。普通ならば森林所有者ではない都市住民が、山で木を伐ったりすることはできません。しかし仲間とともに活動することでそれができ、自分達も作業を楽しみながら社会からも評価されます。世の森林ボランティアを駆り立てる原動力はそのあたりにあるのではないかと思います。

「カッコウの里を語る会」事務局

会員の能力を活かす 会員の能力を活かしながら身の丈にあった目標で活動を行うことが大切です。会の長所は企画毎に会員が「これを引き受けるよ」と自発的に名乗り出る雰囲気ができていることです。ピラミッド構造の組織では、リーダー以外の会員は「指示待ち」で、リーダーが欠けたとたんに活動の勢いが失われてしまいます。また目標をあまり高く設定しすぎると、外部から専門家を呼ばなくては、など運営が大変になります。会では「地道に無理をせず、自分達の地域の森をつくっていく」というスタンスで、会員がその時々で指導者や担当者をつとめ、核になりあいます。そうした活動に満足をおくことも会の継続の理由かもしれません。

* 2 この意味で、森林ボランティアを労働力とする見方は、多数の参加者の意識とは合致するものではない。

参加者の満足度を高める活動とは2

森林ボランティアの参加者による活動評価では、総合満足度には「指導のわかりやすさ」や、「人との出会い」の達成度が特に影響していました。参加者の関心や能力を活かしながら、学習会や交流を深める活動を企画することが重要です。

参加者の満足度に影響する事項を明らかに

前ページに引き続き参加者の満足度を高める活動づくりのアイデアを得ることを目的に、石狩森づくりセンターが活動を支援、主催する森林ボランティア（5団体2講座、活動42回）の参加者609人にアンケート調査（図1、資料1）を行い、あわせて各活動日の参加人数や時間数について観察調査しました。活動内容は間伐、下刈りなどの人工林の整備で、当センターの支援から各組織のプログラムはほぼ均一です。アンケートのデータのうち、運営評価（6項目）についてはロジテックス回帰分析、参加目的達成度と森林ボランティア参加頻度、所属については数量化 類によって、それぞれ総合満足度に影響を与える事項を調べました。さらに活動参加頻度別総合満足度を集計し、実際に総合満足度が参加に関係しているかを調べました。観察によるデータはの結果を具体化するために使用しました。

「指導のわかりやすさ」が総合満足度に影響

集計の結果、総合満足度では満足度5が50%、運営評価では27～46%を占めました（図2）。

について、総合満足度が3以上で運営評価の全てに回答した554を対象とした^{*1}ところ、総合満足度に最も影響を与えていたのは「指導のわかりやすさ」でした（84ページ補：表1）。活動では当センターの職員ら林業技術者による指導が常に行われていますが、この「指導のわかりやすさ」について、特に学習会^{*2}があった活動の評価が高く現れました（図3）。さらに最適な学習会のあり方を明らかにするために、時間数、参加者1人あたりの指導者数と「指導のわかりやすさ」の評価の関係を調べました。その結果、評価は時間数や指導者数とは相関はなく、活動現場では参加者1人あたりの指導者数が0.1～0.2（平均0.18）人で、60～120（平均121.3）分の学習会が多く実施されていました（図4）。

1. 回答者の属性
所属（団体名など）、当活動参加頻度、森林ボランティア参加頻度
2. 参加目的
内容、目的達成度（5段階評価）
3. 運営評価（5段階評価）
山林の雰囲気、自宅からのアクセス、作業内容のよさ、作業のボリューム、指導のわかりやすさ、日程の流れ
4. 活動の総合満足度（5段階評価）

図1 アンケート調査項目

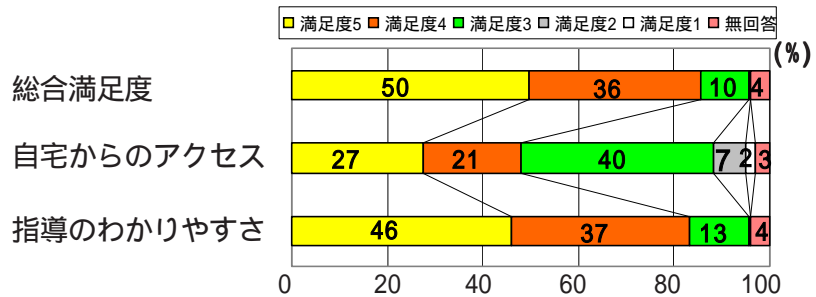


図2 参加者の活動評価結果（抜粋）：N=609

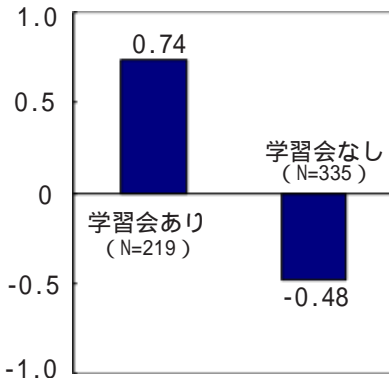


図3 「指導のわかりやすさ」評価

注1：数値は5段階評価のシグマ値
注2：t検定により「学習会あり」と「学習会なし」の平均値には差がある（ $P < 0.0001$ ）

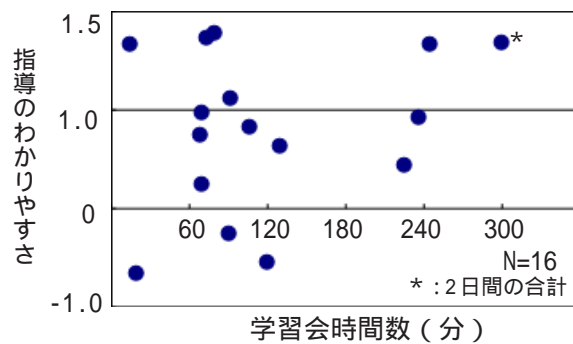


図4 学習会時間数と「指導のわかりやすさ」の関係

注1：縦軸は参加者の評価を活動各回で平均した数値
注2：学習会時間数には実技講習を含み、移動・休憩時間などは除く

* 1 で項目全てに回答した数は557。 の両分析では総合満足度2の回答3（609の0.5%）を除外した。

* 2 講師を設け特に技術や知識の習得を主眼としたプログラム。チェーンソーの取り扱い、測樹法や樹種学習など。

「人との出会い」の達成度が満足度に影響

参加目的の集計では、「学習」と「レク」の回答が多く（図5）、当日の活動によってこの目的が達成された度合いについては、前者では達成度4が、後者では達成度5が最多を占めました（図6）。

について、項目全てに回答した383を対象としました。総合満足度に最も影響を与えていた項目は「人との出会い」でした。「森林ボランティア参加頻度（他団体での活動も含む）」は、その人の森林ボランティア経験が満足度にどの程度影響するかを検討する項目でしたが、項目中影響力は最下位でした。「総合満足度5」の回答者の特徴は、「人との出会い」、「体力づくり」、「労力提供」などが「達成度5」であること、その人が「A」、「B」という特定の団体に所属することでした（84ページ補：図1）。

そこで「人との出会い」の影響を具体的に検討するため、総合満足度と各回の参加人数、休憩や昼食などの交流時間数、レクの有無との関係をみましたが、いずれも相関はありませんでした。

について、所属する組織・講座の年間活動数から回答者を3つのグループに分けました。参加頻度別の総合満足度は、年間活動数が「4～5回」と「1回」の2グループでは差がみられませんでした。が、「20回程度」のグループでは、「ほぼ毎回参加」の満足度は、「2回に1回位参加」、「初めて参加」よりも高く（図7）、リピーターを確保するために参加者の満足度を高める重要性を確認できました。

学習会、交流を深める企画を検討

この調査では、主に発足後4年未満の団体の活動や森林ボランティア養成講座を対象としました。より、参加者が「指導のわかりやすさ」を主な観点として活動の満足度を判断しており、かつ評価が非常に高いことは、今回対象とした活動の特色と考えられます*3。団体への当センターの支援は「活動が軌道に乗るまでの期間」とされ、今後は学習の成果を活かして各団体が自組織の中に指導者を育成していくことが大切です。

参加者の満足度を高める方法として、の結果より学習会の企画の他、でみられた様々な参加目的を満たす活動を工夫することが大切です。総合満足度への影響が高い「人との出会い」を満たす方法は、例えば参加者相互の親睦を深めるほか、新メンバーを積極的に増やしたり、森林所有者やフィールドの地元の人々、他団体との交流など様々です。あるいは、昼食時間などを利用して参加者の顔と名前をきちんと一致させるといった簡単な方法でも達成度は高まるかもしれません。で総合満足度5の評価には所属が影響していたことから、まずは自分達の活動の理念や持ち味を大切にすること、そして企画を提案しやすい雰囲気や機会をつくり、参加者の関心や能力を企画に反映させることが有効と思われます。

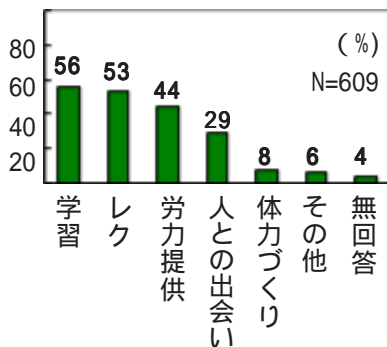


図5 参加者の参加目的 (複数回答2)

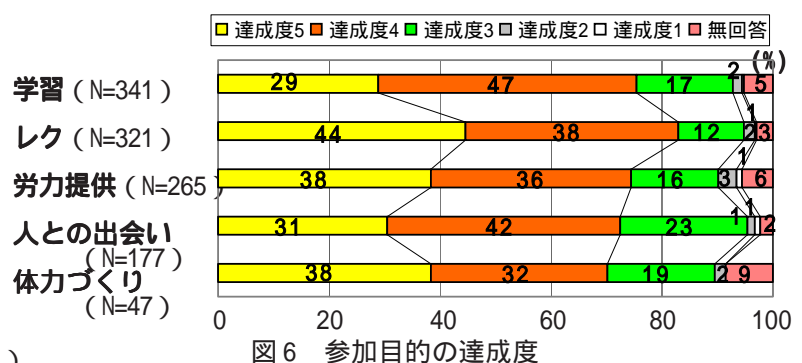


図6 参加目的の達成度

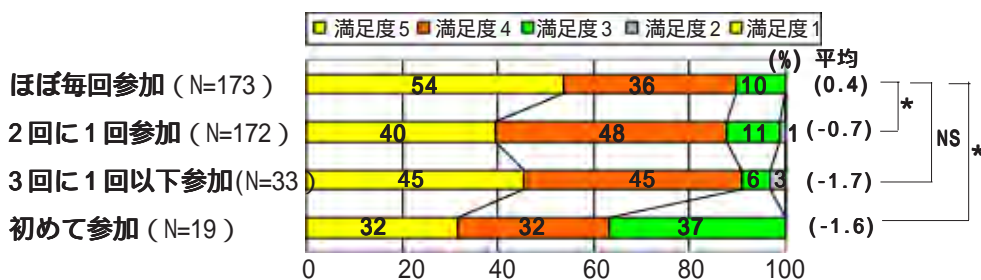


図7 参加頻度別総合満足度 (年20回程度開催)

注1: 全ての区分で満足度1の該当は0である

注2: 平均は5段階評価をシグマ値化した数値で大きいほど満足度が高い

注3: U検定より「ほぼ毎回」と「2回に1回」、「ほぼ毎回」と「初めて」の満足度の分布は差がある (p<0.05)

*3 東京都の森林づくり活動参加者対象のアンケート結果を用いて、類似する6項目で同様の解析を行ったところ、「総合評価」には「作業内容」の影響が最も高かった。

活動運営を評価する指標とは

森林ボランティアの運営スタッフによる活動評価では、「指導」、「交流」、「利便性」、「対話性」の4つが活動のできばえを測る上で重要な指標となっていました。特に「作業手順習得（指導）」、「リラックス（交流）」、「安全作業の周知（対話性）」などが運営の主要課題といえます。

スタッフの活動評価からチェックリストをつくる

森林ボランティアのスタッフはどのような観点で活動を運営しているのでしょうか。スタッフの視点を把握して活動のできばえを具体的に読み解けば、それを活動の改善に活かすことができます。そこで、評価事例を反映した簡便な活動チェックリストをつくることを目的に、森林ボランティアのスタッフにその日の活動を評価してもらうアンケート調査を行いました。質問項目は、森林ボランティアのマニュアル本や活動評価に関する過去のアンケート調査結果*1などから得られた25問（資料2）とし、因子分析を行って少数の尺度（因子）に集約させました。一方で因子の性質を知るために、先の25問についてスタッフに重要度をたずねるアンケート調査（資料3）を行いました。

項目は「指導」、「交流」など4つに集約

について、石狩支庁管内7団体全41回の活動を対象とし、延べ142人の回答が得られました。因子分析の結果、4つの因子が抽出されました（84ページ補：表2）。第1因子は「24 作業手順習得」、「23 指導提示工夫」などの負荷量が高く「指導」に関する因子としました。同様に第2因子は、「15 リラックス」、「16 会話が弾む」などが高く「交流」に関する因子とし、第3因子は、「1 アクセス軽負担」、「2 集合わかりやすさ」などが高く「利便性」に関する因子とし、第4因子は、「10 日程予定遂行」、「9 安全作業周知」、「21 作業成果実感」などが高く「対話性（対話により参加者を促し計画を実現する）」に関する因子としました。

■5よくあてはまる ■4少しあてはまる ■3どちらともいえない □2少しあてはまらない □1全くあてはまらない

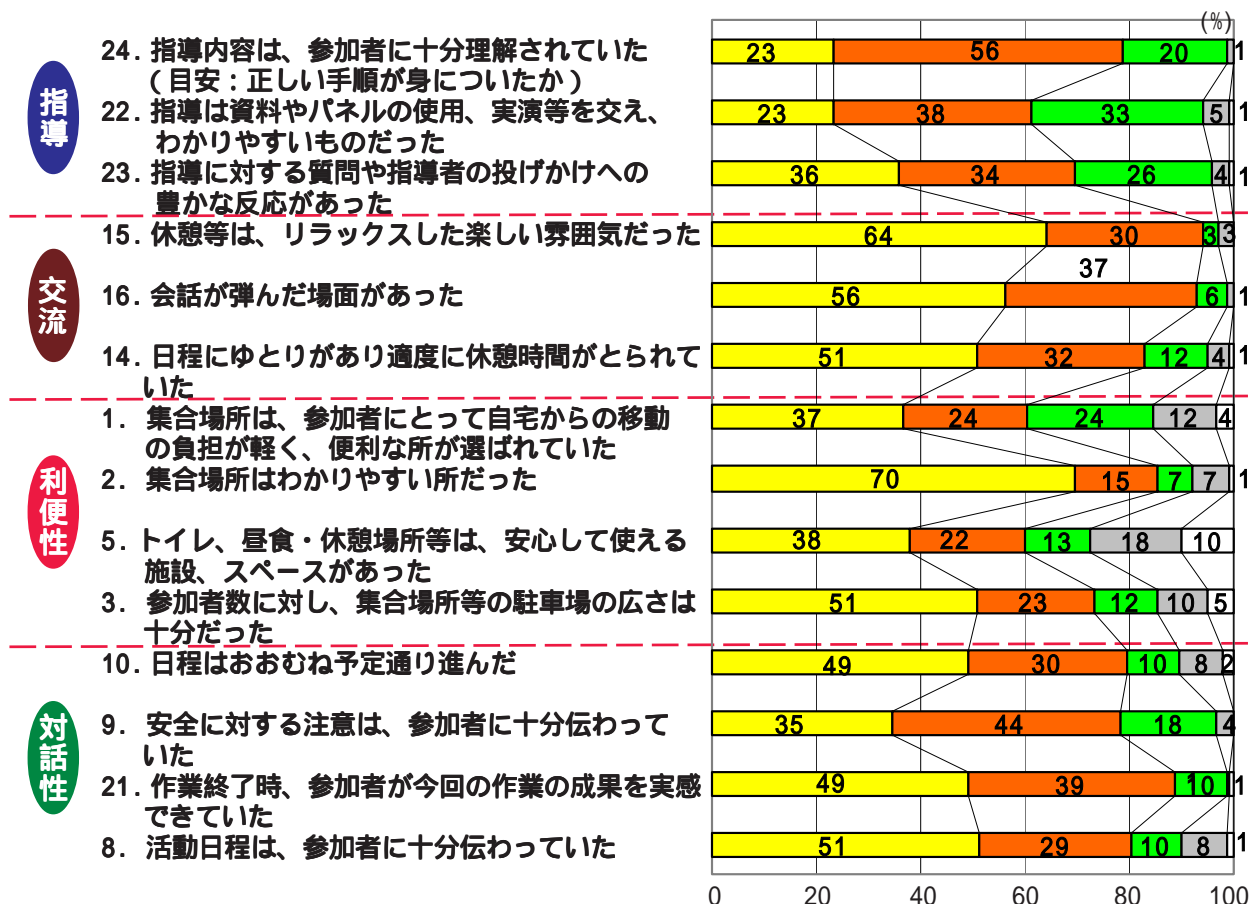


図1 森林づくり活動スタッフの活動評価結果 (N=142, 活動41回)

注：因子分析による解析。上部の因子ほど重要度が高く、また因子に属する質問項目は、上部の項目ほど各因子へのウェイトが高い。

これらの因子は第1～第4因子の順に活動の出来映えを測る上で重要な指標と考えられます。この尺度と大きく関わる14項目の回答結果を図1に示しました。この14項目はチェックリストとして使用できます。実際に41回(各回のデータはスタッフの回答を平均)の活動を評価したところ、「交流と利便性分野が高く、指導と対話性分野がやや低い(高低は相対評価)」事例が約7割を占めました。

対話性分野「安全作業の周知」などが主要課題

について、の主要な対象者である6人の回答が得られました。得られた4因子の重要度*2(活動運営上実現させる価値がどれくらいあるか)と実現度*3(当日どれほど実現できたか)を示したのが図2です。まず「利便性」は重要度と実現度の双方の値が4因子の中で最も低い分野となっています。これを具体的に理解するため、対応する質問項目(図3)をみると「1アクセス軽負担」、「5トイレ・休憩アメニティ」、「3駐車勝手よさ」の実現度が低いことがわかります。「1」は利用できる林地の立地に関わるためフィールドの設定時点からの配慮が必要ですが、例えば「5」は参加者とともに環境整備作業の一つとして取り組む*4、「3」は参加者間で駐車場所を分散させるなどの工夫によって、大きな負担を伴うことなく実現度を上げていくことができるかもしれません。

一方、図2において「対話性」は4因子の中で重要度が最も高いものの実現度が下位から2番目と低くなっています。同様に対応する質問項目(図3)をみると「9安全作業周知」、「8日程周知」が重要度が高いものの実現度が中程度に留まっています。これらは、同じ特性を持つ項目「24作業手順習得(指導)」、「15リラックス(交流)」とともに、活動運営上の主要課題として取り組むことが大切でしょう。

巻末に今回の調査で得られたチェックリストを掲載しました(資料4)。これを系口に「活動運営にはこういった留意点があるか」について議論を深め、自分達の組織にあった手法で活動を振り返り、よりよい活動づくりを目指していきましょう。

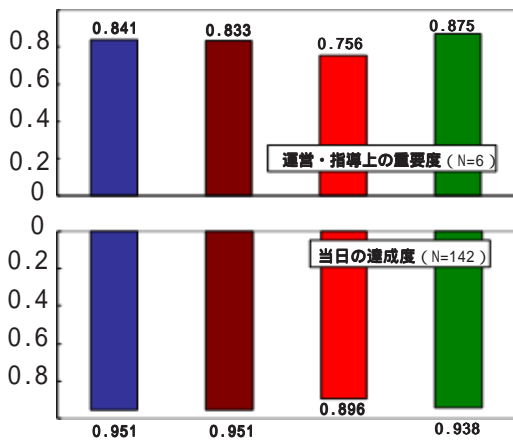


図2 4因子の重要度と実現度

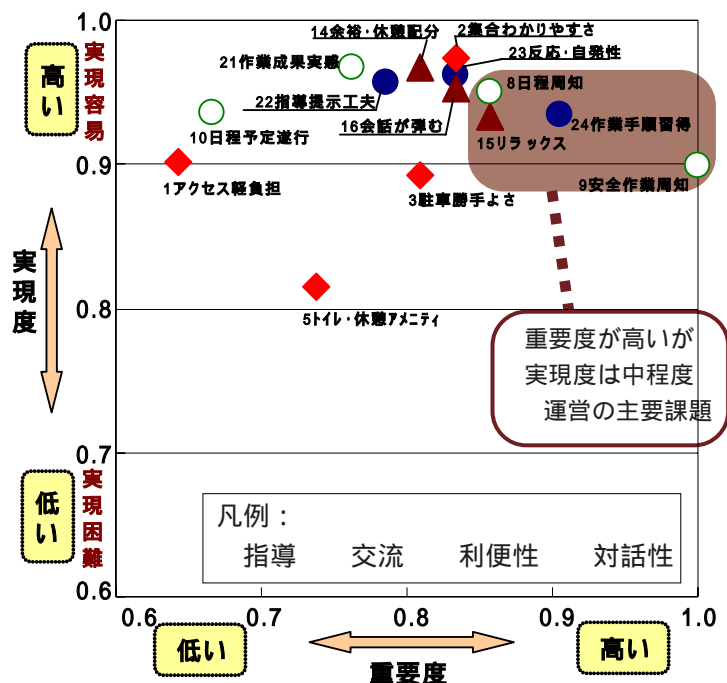


図3 14項目の重要度と実現度

*1 (羽鳥, 2001; 真柴, 2002, 2003; 木俣, 2003; 中川, 2004)

*2 7段階評価の結果を平均し、満点を1.0として調整した数値。

*3 5段階評価の結果をシグマ値に換算して平均し、満点を1.0として調整した数値。

*4 「休憩場所とトイレを確保」(真柴, 2002)

指導者に求められる技術とは

森林づくり行事の指導スタッフによる活動評価では、「作業目的を理解させる」などが総合的な指導のできばえを決める上で重要な技術とされていました。また指導力量や発揮される能力は、特にスタッフの所属や年齢に影響を受けており、活動の企画ではスタッフの多様な能力を活かす体制づくりが重要です。

スタッフの評価から指導技術の課題を明らかに

初心者の参加も含む森林ボランティア活動を盛りたてていくには、指導者の役割が重要です。指導者の技術に関する課題を明らかにして活動の質を向上させるアイデアを得ることを目的に、札幌南高等学校林整備行事^{*1}（2回）のスタッフ117人に対して、個人の属性と、指導のできばえを問う10項目に5段階で回答してもらったアンケート調査（資料5）を行いました。まず 指導技術の相互関係を把握するため、主成分分析を行って、10項目を少数の能力尺度にまとめ、個々の項目がその能力に果たす重要さの度合いを調べました。次に 指導力量と回答者の属性の関係を調べるため、数量化 類によって、年齢、所属・身分、当行事指導回数、森林ボランティア活動参加頻度（以下活動頻度）のうち、得られた能力尺度に特に影響を与える属性を明らかにした上で、属性別の主成分得点平均値を算出しました。

「作業目的を理解させる」などの重要度が高い

有効回答数は114で、10項目については、中程度より高い評価（「5よくあてはまる」、「4ややあてはまる」合計）が、項目毎66～88%を占めました（図1）。

では、10項目は2つの主成分に集約され、第1主成分は「総合指導力」、第2主成分は「ファシリテイト（意欲を引き出す）/技術伝達能力」と解釈できました。図2より、上部に位置する「10作業目的を理解させる」、「2手順・役割を周知させる」、「9作業手順を習得させる」などは、他の項目よりも総合指導力を決めるのに重要な役割を果たしていること、左側に位置しファシリテイト能力のウェイトが高い「4協力作業」、「8成果を実感させる」などは、これらに次いで役割が重要なこと、そして右側下部に位置する「7疑問を解消する」、「6模範的実演ができる」は技術伝達能力のウェイトが高いものの、総合指導力を決める上では比較的重視されていなかったことがわかりました（図2）。

- 3. 生徒から質問が出たり、スタッフ（あなた）の投げかけに豊かな反応が見られた
- 8. 作業終了時、生徒たちが今回の作業の成果を実感できていた



図1 活動評価結果（抜粋）:N=114
注：()内数値は「5よくあてはまる」、「4少しあてはまる」の合計値

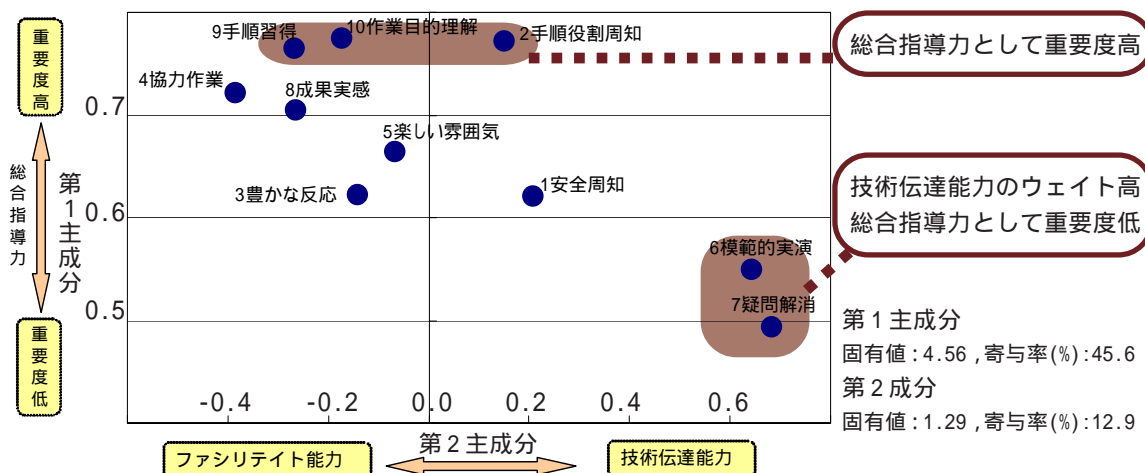


図1 評価項目の固有ベクトル

能力尺度にはスタッフの「所属・身分」「年齢」が影響

では、全問に回答しグループを受け持ち直接生徒を指導した93名を分析の対象としました²。数量化 類の結果、総合指導力には「所属・身分」が、ファシリテイト/技術伝達能力には「年齢」、「所属・身分」が特に大きな影響を与えていました。双方に影響が高かった「所属・身分」別の主成分得点平均値をみると、総合指導力について教員が最高で公務員が最下位であること、教員と公務員はファシリテイト能力が高く、林業技術者は技術伝達能力が高いこと、市民ボランティアはいずれの能力においても中間的な位置にあることがわかりました(図3)。

また森林ボランティア経験の効果をみるため活動頻度と総合指導力の関係を「所属・身分」別に調べたところ、他の3者がおおむね「活動頻度が高いほど総合指導力も高い」傾向が見られたのに対し、市民ボランティアでは逆に「活動頻度が高いほど総合指導力が低い」傾向が見られました(図4)。

スタッフの多様な能力を活かした活動づくりを

の結果より、指導の総合的なできばえに強く関わると意識される「10作業目的を理解させる」などは、指導の優先課題と扱うことが大切だといえそうです。一方、比較的重視されていなかった「7疑問を解消する」は、教授分野での主要課題とされる技術ながら、中程度より高い評価が「3豊かな反応」と並び最低で、他と比べ高度な技術と認識されていると思われます。これら技術相互の関係に配慮し、指導者同士のフォローやノウハウの共有によって、段階的な指導技術の向上が期待されます。

また、総合指導力とファシリテイト/技術伝達能力には、「所属・身分」や「年齢」が他の属性よりも大きく影響していた の結果から、指導力量や指導場面で発揮される能力は個人の経歴や社会経験によって異なることがわかります。これを加味し、活動の企画においては、異なる経験を持つスタッフの多様な能力を活かす体制(配置・役割分担)をつくるのが大切です。

また、年1回の当行事の他に活動経験を殆ど持たない教員の総合指導力が最高位であったり、市民において活動頻度が高いほど総合指導力が低い、つまりシビヤな評価がなされる傾向が見られたことは、個人によって目標の水準がまちまちであることを示していると思われます。例えば生徒に作業目的を理解させたり、作業手順を習得させるといった場面で、「今回の指導でどの程度の達成を目指すか」についてスタッフで事前に共有しあうことが、よりよい活動づくりにつながると考えられます。

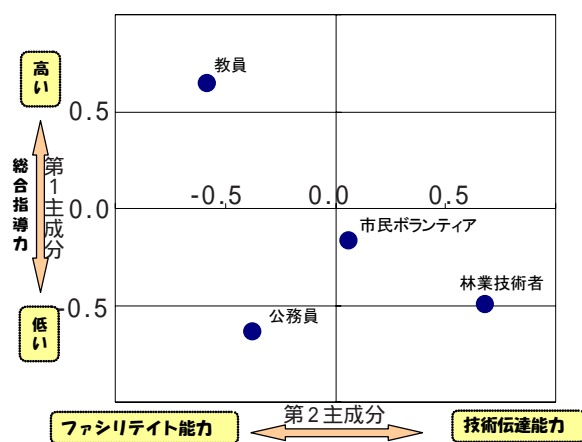


図3 所属・身分別主成分得点平均値

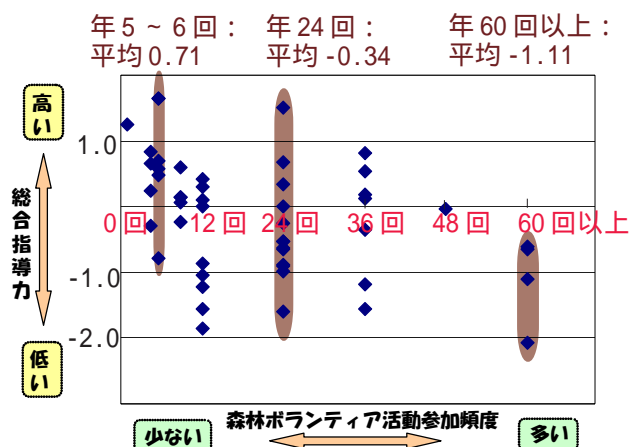


図4 市民ボランティアの総合指導力分布：N=50

注1) 林業技術者は森林組合と森づくりセンター職員、「公務員」はそれ以外の林務行政職員を示す。
注2) 図の左側からN=19, N=14, N=50, N=10である。

注：横軸は年間参加回数を間隔に変換して数直線に示してある。

* 1 18 ページ参照。

* 2 グループを担当せず巡回先のグループを評価した指導者は、グループ担当者より評価が高い傾向があり除外した。

森林所有者との連携を進めるには

森林所有者へのアンケート調査では、技術や責任能力など条件に応じて森林ボランティアを所有森林に受け入れてもよいという回答が5割強みられました。所有者と森林ボランティアの連携を進めるには、所有者への情報提供、ボランティアの技術や責任能力の向上、共同作業や交流会を糸口とした関係づくりなどが重要です。

森林ボランティアに対する森林所有者の意識を明らかに

森林ボランティアの実践には、活動場所の確保など、参加する市民と森林所有者との連携が不可欠です。所有者には自分の森林の整備を進める一方で、こうした市民活動への協力も期待されています。そこで、石狩、網走地方の森林所有者（個人2,698名）を対象に、郵送法によるアンケート調査を行い（図1、資料6）森林ボランティア（以下ボランティア）に対する期待や協力意向、数量化 類を用いて所有山林へのボランティア受け入れの意志に影響を及ぼす要因を明らかにし、ボランティアと所有者の連携をすすめるための課題について検討しました。

ボランティアを受け入れるには「信頼できる技術」を条件

506名から回答が得られ、有効回答数は483でした（回収率19%；発送未到達を除くと26%）。

1）について、まず最近5年間の森林手入れ状況は、「除伐・蔓切等をした」、「必要だが手入れなし」がほぼ同値で最多3割を占めました（図2）。次に、ボランティア*1への期待をたずねたところ、「やや期待している」が最も多く24%、ついで「期待している」が21%を占めました（図3）。さらにこの「期待あり」とした219人に、ボランティアに期待する役割についてたずねたところ、「森林・林業の大切さを伝える情報発信者として」が最も多く47%、ついで「森林・林業の理解者として」が26%を占めました。

また、ボランティアが所有森林を利用したいと希望した場合の対応については、最多は「条件に応じて受け入れる」で55%でした。これに「無条件で受け入れる」を加えた「受け入れ意志あり」は6割を占め、図2の「必要だが手入れをしていない」の3割を上回りました（図4）。

1. 所有森林手入れ状況
2. 森林ボランティアへの期待・内容
3. 所有森林への受け入れ
- 4.3 に関連する不安・条件
- 5.3 以外の協力内容
6. 個人の属性（3への影響解明に使用）
森林所在地、在村・不在村別、年齢、所有森林面積、人工林率、森林所有目的、最近5年間の施業有無、手入れ不足認識、自家労働力問題有無、今後の林業経営規模、地域森林管理支持、市民協議参加意志、ボランティア既知有無(13項目40カゴリ)

図1 アンケート調査項目

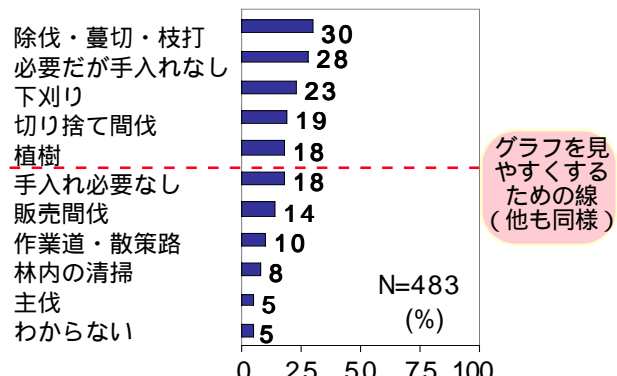


図2 所有森林手入れ状況 [複数回答可]

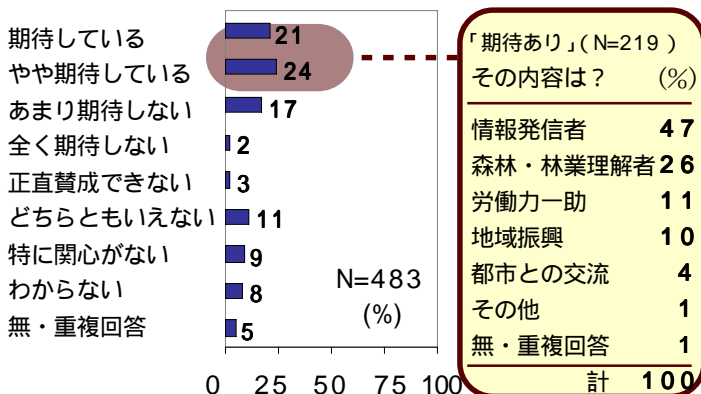


図3 森林ボランティアへの期待と内容

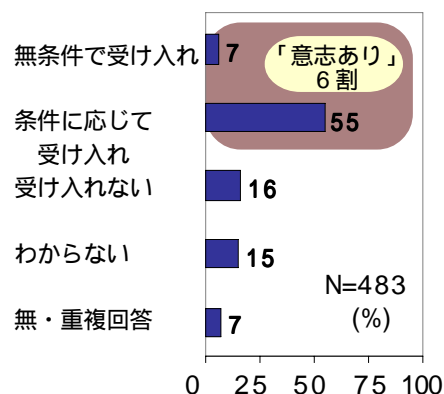


図4 所有森林へのボランティア受け入れ

*1 アンケートでは、森林ボランティアについて、無償で森林の手入れを行う市民グループであること、アマチュアであるが専門家の指導などを受けて技術を高め、地域の森林整備に役割を果たしている団体もあることを説明。

一方で、受け入れに「わからない」、ボランティアへの不信から「受け入れない」とした87人に、ボランティアへの不安についてたずねたところ、最多は「ボランティア情報不足」で43%、次いで「わからない」が多く39%でした(図5)。作業能力に関する不安は1割前後に留まり、ボランティアについての情報や判断材料不足を主要な不安とする回答が多いことがわかりました。

次に「条件に応じて受け入れる」とした273人にその条件についてたずねたところ、最多は「技術が信頼できること」で67%、次いで「火事や怪我が起きた時の責任能力」多く58%でした(図6)。

森林への受け入れ以外にできる協力としては、まず「特に協力したくない」は1割に留まりました。しかし最多は「わからない」で32%をしめ、次いで「一緒に作業に参加する」、「イベントに参加する」が各3割弱を占めました(図7)。

について、図1の3と6全てに回答した362人を、ボランティア受け入れに「意志あり」、「意志なし」、「わからない」の3グループに分けて分析した結果、受け入れ意志の有無には「市民協議参加意志^{*2}」の影響が最高でした。「意志あり」のグループの特徴は、「市民協議参加意志あり」、「既にボランティアに協力」といった地域森林管理(図8)へ積極姿勢、「過去5年間の施業が不明」といった経営意欲の低さ、「網走」、「林業目的で森林所有」といった林業との関連の強い回答などでした(84ページ補:図2)。

所有者への情報提供、ボランティアの技術向上などが課題

ボランティアと所有者の連携を進めるためには、所有者の不安として第一にボランティアについての情報不足があげられたことから、所有者への適切な情報提供が重要です。具体的には、ボランティア受け入れ意志の形成に特に地域森林管理への意向が影響していたことから、この考え方を下敷きに市民が森林整備に取り組む理由や背景を所有者に説明し、ボランティア活動の実例を伝えることが有効です。

またボランティア側には、受け入れ条件として多かった技術や責任能力の向上とともに、活動の成果を発信する努力も望まれます。一方、所有者側もボランティアを「情報発信者として期待する」ならば、自らの森林への思いや経営の実情についてボランティアに情報を伝達していく必要があるでしょう。両者の接点としては、受け入れ以外の協力として多かった、共同作業や交流会を糸口に信頼を徐々に形成し、協力関係へ結びつける道筋が重要と考えられます。

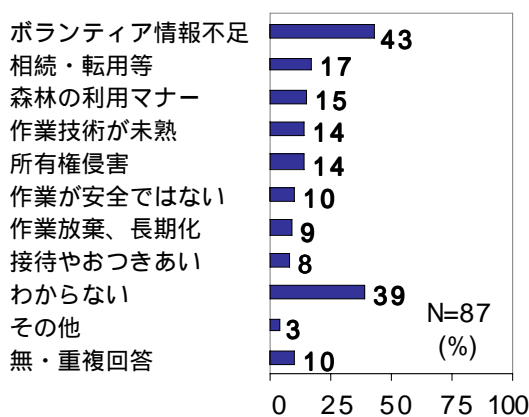


図5 ボランティア受け入れに対する不安 [複数回答 3]

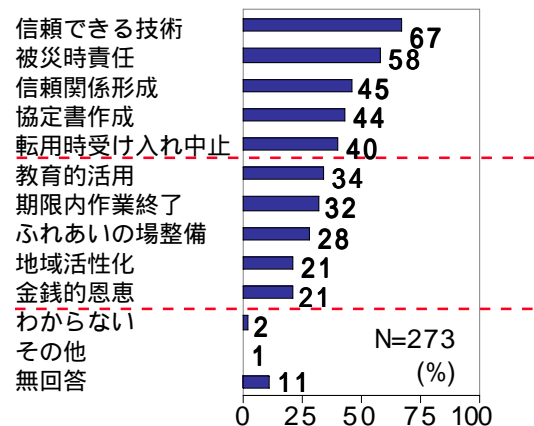


図6 ボランティア受け入れの条件 [複数回答可]

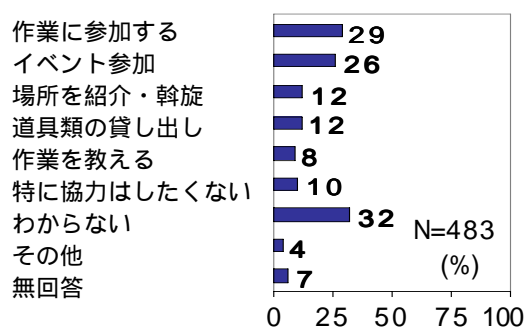


図7 受け入れ以外にできる協力 [複数回答可]

「地域みんなで森林を支えよう」：地域森林管理

森林は、飲み水などの水源をかん養したり、美しい景色をつくったり、地球温暖化を防止したりといった、さまざまな働きを持っており、多くの人とその恵みを受けています。

このため、近年、森林を所有者のものとするだけでなく、「社会の共有財産」としてとらえ、地域みんなで森林を守ったり、整備したりする「地域森林管理」という考え方が出てきています。

図8 地域森林管理の解説(アンケート本文より)

*2 アンケートでは、市民協議を「地域森林管理(図8)の計画づくりや意見をのべる場」と説明し、そうした場に森林所有者の立場で参加したいかをたずねた。

補足 多変量解析結果

補：表1 ロジティクス回帰分析結果

	指導のやりやすさ	作業内容のよさ	日程の流れ	作業のボリューム	山林雰囲気	自分のアタマ
標準化回帰係数	0.42***	0.24***	0.13***	0.12***	-	-

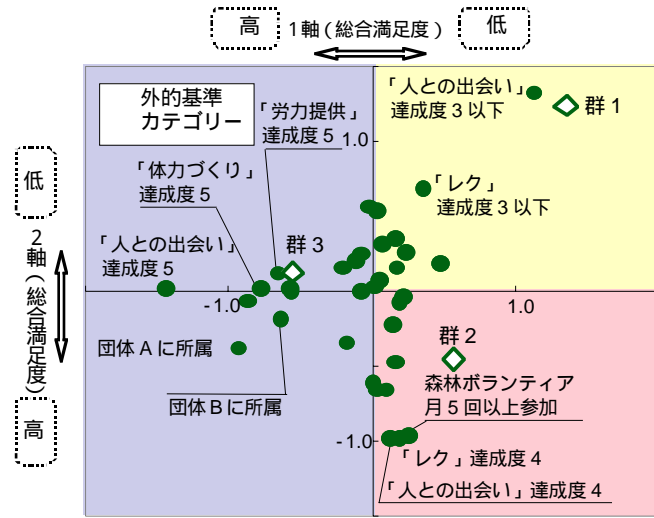
R²=0.46

注) 標準化係数をソフト変換して重回帰分析にステップカイズ法で変換した。 ***: 0.1%

補：表2 因子負荷量と因子寄与率

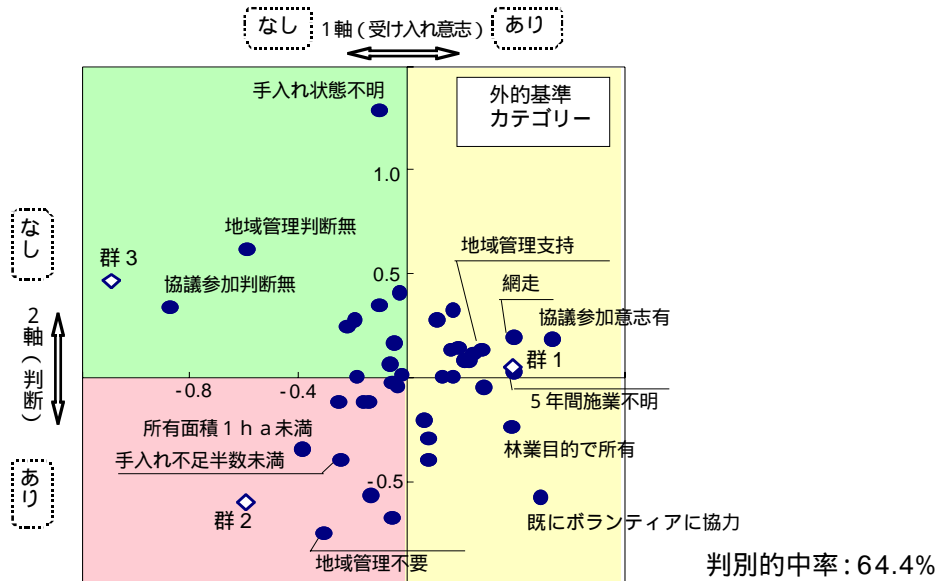
項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
	指導	交流	利便性	対話性	森林楽しさ
24時間学習	0.928	-0.008	0.039	0.024	0.031
22指示工夫	0.750	0.063	0.058	0.155	-0.052
23安心・自覚性	0.616	-0.001	-0.016	-0.117	0.071
19リラックス	-0.001	0.951	0.002	0.019	0.106
16会話中心	0.038	0.787	0.002	-0.032	0.098
14余裕・休憩	0.008	0.675	-0.009	0.093	0.037
17作業負担軽減	0.059	-0.021	0.828	0.047	-0.011
20安心・自覚性	0.022	0.020	0.537	-0.049	0.052
5 休憩の大切	0.069	0.028	0.501	0.111	-0.078
3 研修の良	0.028	0.044	0.483	0.080	-0.008
11 研修の進	-0.023	0.071	0.004	0.699	0.036
9 安全の守	0.378	0.007	0.060	0.586	0.063
21 成果実感	0.011	-0.067	0.113	0.571	0.141
8 研修の和	0.057	0.085	0.059	0.512	-0.052
12 季節感	0.017	0.146	-0.022	0.063	0.772
11 楽しさ	0.025	0.150	0.003	0.026	0.760
寄与率(%)	15.17	12.87	9.19	7.82	6.41

注) 25項目について因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行い、因子負荷が0.40以上の16項目を選出した。第5因子は項目数が2項目と少なかったことから本調査では尺度として使用していない。



補：図1 総合満足度に影響を与えるカテゴリー

注1) 数量化 類による分析。群1:総合満足度3 [黄](N=30),群2:同4 [赤](N=141),群3:同5 [青](N=212)。[]は関連する象限を示す。
注2) 各象限外縁部のカテゴリーほど外的基準への影響力が強く、該当するものみにラベルを記載した。



補：図2 ボランティア受け入れ意向に影響を与えるカテゴリー

注1) 数量化 類による分析。群1:受け入れ意志あり [黄](N=246),群2:同意志なし [赤](N=63),群3:わからない [緑](N=53)。[]は関連する象限を示す。
注2) 各象限外縁部のカテゴリーほど外的基準への影響力が強く、該当するものみにラベルを記載した。

資料1 森林ボランティア参加者アンケート調査票

アンケート調査にご協力をお願いいたします。 ※ 個別の結果が公表されることはありません。

まず、あなたのことについて教えてください

※ 当てはまる番号に○をつけてください。

- a. 性別は？ 1) 男性 2) 女性
 b. 年齢は？ 1)10代以下 2)20代 3)30代 4)40代 5)50代 6)60代 7)70代以上
 c. 職業は？ 1) 学生 2) 会社員 3) 公務員 4) 自営業（農業含む） 5) 団体職員
 6) パート・アルバイト 7) 主婦 8) 無職 9) その他（ ）
 d. ご住所は？ 1)石狩市（ ）：地区名 2)石狩市以外の市町村（ ）：市町村名

e. どのくらいひんぱんに参加していますか？

- 1) ほとんど毎回参加 2) 2回に1回位参加 3) 3回に1回位参加
 4) 年間に数回参加（3よりは少ないくらい） 5) 今回がはじめて

f. (この団体の活動と他団体での活動・研修会等を合わせた場合)

森林ボランティア活動(森林現場作業)へのあなたの参加頻度は？

最近の経験を
お答え下さい

- 1) 今回がはじめて 2) はじめてではないが年に3~4回以下の参加
 3) 年に5~6回位参加 4) 3)と5)の間
 5) 毎月1回(=年に12回)位参加 6) 毎月2回位参加 7) 毎月3回位参加
 8) 毎月4回位参加 9) 8)より多く参加 10) その他（ ）

問1

あなたが、この団体の活動に参加する目的はなんですか？

※ 特に、お考えに近いものを、**2つ**選んで、**□に番号をご記入ください**。

- 1) 地域の森林とふれあい、レクリエーションとして作業そのものを楽しむ
 2) アウトドア・スポーツとして、作業で体力づくりをする
 3) 学習の場として、森林の手入れの技術や森林に関する知識を身につける
 4) 人との出会いの場として、参加メンバーや地域の人と交流する
 5) 労働力を提供し、地域の森林づくりに役立つ
 6) その他（ ）

あなたの目的： ① □ と ② □

問2

今日の活動では、あなたが **問1** で選んだ2つの目的(①と②)は、どのくらい達成されたと思いますか？ 5段階評価でお答えください。

例えば、問1で、4)と5)を選んだ場合

- ①「4) 人との出会いの場として、参加メンバーや地域の人と交流する」は **達成度5** (十分達成)、
 ②「5) 労働力を提供し、地域の森林づくりに役立つ」は **達成度3** (中くらい達成) ならば、

記入例

問1での番号を記入して、達成度に○をつけます

- ① **4** については 1 2 3 4 **5**
 ② **5** については 1 2 **3** 4 5

回答欄

① □ については

1 2 3 4 5

② □ については

1 2 3 4 5

(未達成) (中くらい達成) (十分達成)

**裏面に
続きます**

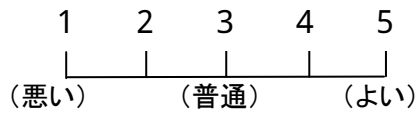
問3

今日の活動に対する満足度はどれくらいでしたか？

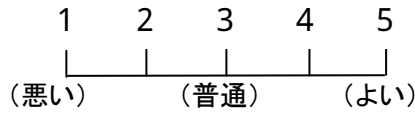
5段階評価でお答えください。

おもて面の **問2** と同様に、**あてはまる数字に○をつけてください。**

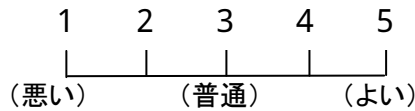
(1) 一帯の山林のたたずまい・雰囲気



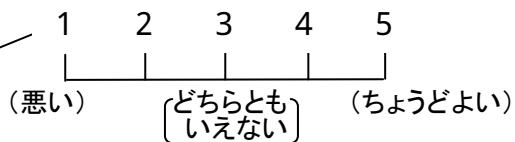
(2) 自宅から集合場所までの交通、
移動のしやすさ (アクセス)



(3) 森林作業の内容 (活動メニュー)
のよさ



(4) 作業のボリューム (時間・量)

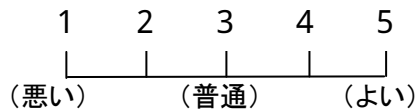


1 または 2 を選んだ方

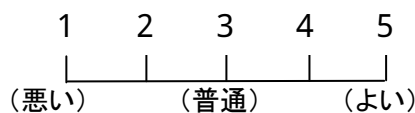
作業のボリュームは、① 自分には不足
② 自分には過多

①・②のどちらかに○をつけてください

(5) 指導内容のわかりやすさ



(6) 日程の流れ・段取りのよさ



(7) 今日の活動の総合的な満足度

**問4**

その他、今後の活動についてのお考え、今日の活動への感想など、
ご自由にご記入ください。



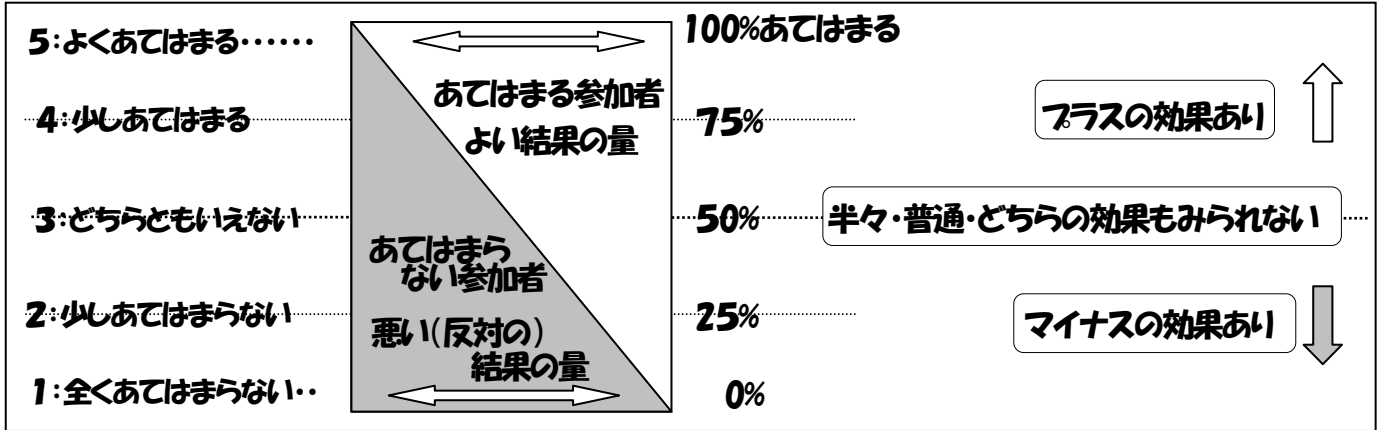
ご協力ありがとうございました。

北海道立林業試験場

資料2 森林ボランティア活動スタッフアンケート調査票

◆ 活動日： 月 日 () ◆ 団体名： ()
 ◆ 記入日： 月 日 ()

今回の活動について、口内の指標を参考に5段階評価でお答えください。



※ 問1～25の回答欄の当てはまる数字に○をつけてください。

○のつけ方は、「参加者全体にとってどうだったか(客観的な判断)」です。

回答欄

- | | 全く
あてはまらない | 少し
あてはまらない | どちらとも
いえない | 少し
あてはまる | よく
あてはまる |
|--|---------------|---------------|---------------|-------------|-------------|
| 問1 集合場所は、参加者にとって自宅からの移動の負担が軽く、便利な所が選ばれていた | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 問2 集合場所はわかりやすい所だった | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 問3 参加者数に対し、集合場所等の駐車場の広さは十分だった | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 問4 活動現場は、参加者にとって下車からの移動の負担が軽く、便利な所だった | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 問5 トイレ、昼食・休憩場所等は、安心して使える施設、スペースがあった(当日活動した場所を総合して) | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ----- | | | | | |
| 問6 作業現場の傾斜や林床は、作業しやすい状態だった | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 問7 作業は、参加者にとって体に負担をかけないボリュームだった | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 問8 活動日程は、参加者に十分伝わっていた | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 問9 安全に対する注意は、参加者に十分伝わっていた | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 問10 日程はおおむね予定通り進んだ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

〔全くあてはまらない〕〔少しあてはまらない〕〔どちらともいえぬ〕〔少しあてはまる〕〔よくあてはまる〕

問11 一帯の森林は、眺めや景色のよいところだった

1 2 3 4 5

問12 一帯の森林は、季節感がかんじられる場所だった

1 2 3 4 5

問13 一帯の森林は、鳥や昆虫、山野草など生物が豊かな場所だった

1 2 3 4 5

問14 日程にゆとりがあり、適度に休憩時間がとられていた

1 2 3 4 5

問15 休憩等は、リラックスした楽しい雰囲気だった

1 2 3 4 5

問16 会話が弾んだ場面があった

1 2 3 4 5

問17 協力し合ってグループ作業が行われていた

1 2 3 4 5

問18 作業は、参加者にとって体力を発散できるボリュームだった

1 2 3 4 5

問19 作業の種類・内容は、参加者の技術レベルに合っていた

1 2 3 4 5

問20 作業の種類・内容は、参加者の関心に合っていた

1 2 3 4 5

問21 作業終了時、参加者が今回の作業の成果を実感できていた

1 2 3 4 5

問22 指導は資料やパネルの使用、実演等を交え、わかりやすいものだった

1 2 3 4 5

問23 指導に対する質問や指導者の投げかけへの豊かな反応があった

1 2 3 4 5

問24 指導内容（技術・知識）は、参加者に十分理解されていた
（→目安：正しい手順が身についたか）

1 2 3 4 5

問25 作業の目的（必要性・意味）は、参加者に十分伝わっていた
（→目安：参加者が今日の経験を周囲に説明できるか）

1 2 3 4 5



(全く重要でない)
(かなり重要でない)
(やや重要でない)
(どちらともいえない)
(やや重要)
(かなり重要)
(非常に重要)

問16 参加者の会話が弾むこと

1 2 3 4 5 6 7

問17 協力し合ってグループ作業が行われること

1 2 3 4 5 6 7

問18 作業が、参加者にとって体力を発散できるボリュームであること

1 2 3 4 5 6 7

問19 作業の種類・内容が、参加者の技術レベルに合うこと
(参加者の技術レベルを知ること)

1 2 3 4 5 6 7

問20 作業の種類・内容が、参加者の関心に合うこと
(参加者の関心を知ること)

1 2 3 4 5 6 7

問21 作業終了時、参加者が今回の作業の成果を実感できること (話題にすること)

1 2 3 4 5 6 7

問22 資料やパネルの使用、実演等を交え、わかりやすく指導すること

1 2 3 4 5 6 7

問23 指導に対する質問や指導者の投げかけに豊かな反応があること (やりとりしやすい雰囲気を作ること)

1 2 3 4 5 6 7

問24 指導の結果、参加者に正しい作業手順・知識が身につくこと

1 2 3 4 5 6 7

問25 指導の結果、作業の目的が参加者に伝わること
(参加者がその日の経験を周囲にも説明できること)

1 2 3 4 5 6 7

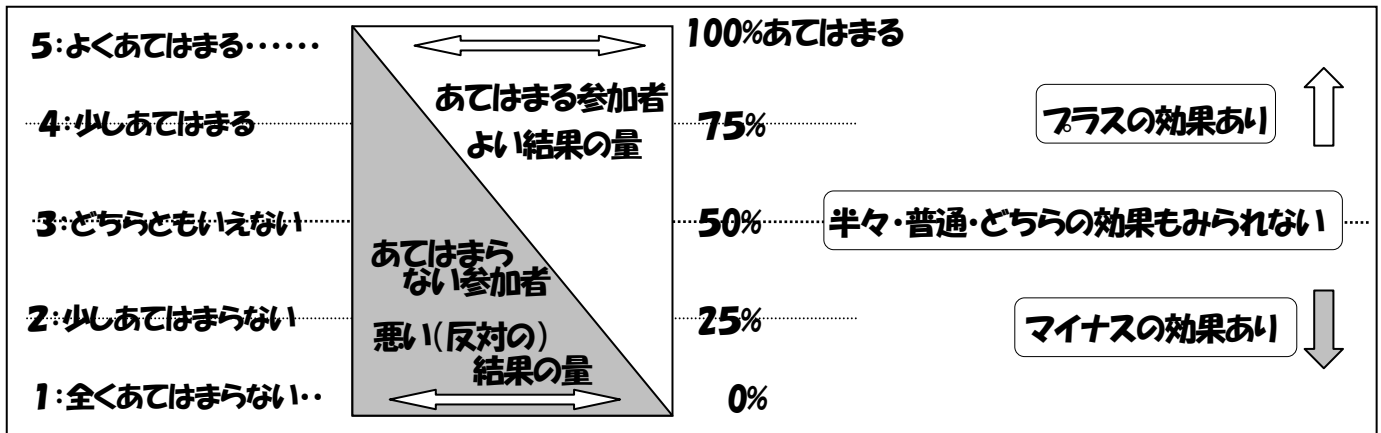
ご協力ありがとうございました。

北海道立林業試験場

資料4 森林ボランティア活動チェックリスト

◆ 活動日： 月 日 () ◆ 団体名： ()
 ◆ 記入日： 月 日 ()

今回の活動について、下記を参考に、問1～14の回答欄の当てはまる数字に○をつけてください。



※ ○のつけ方は、「参加者全体にとってどうだったか(客観的な判断)」です。

	回答欄					重要度
	(あてはまらない)	(あてはまらない)	(どちらともいえない)	(あてはまる)	(あてはまる)	
問1 指導内容(技術・知識)は、参加者に十分理解されていた(→目安:正しい手順が身についたか)	1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>
問2 指導は資料やパネルの使用、実演等を変え、わかりやすいものだった	1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>
問3 指導に対する質問や指導者の投げかけへの豊かな反応があった	1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>
問4 休憩等は、リラックスした楽しい雰囲気だった	1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>
問5 会話が弾んだ場面があった	1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>
問6 日程にゆとりがあり、適度に休憩時間がとられていた	1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>
問7 集合場所は、参加者にとって自宅からの移動の負担が軽く、便利な所が選ばれていた	1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>
問8 集合場所はわかりやすい所だった	1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>
問9 トイレ、昼食・休憩場所等は、安心して使える施設、スペースがあった(当日活動した場所を総合して)	1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>
問10 参加者数に対し、集合場所等の駐車場の広さは十分だった	1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>

重要度

(全くあてはまらない) (少しあてはまらない) (どちらともいえぬ) (少しあてはまる) (よくあてはまる)

問11 日程はおおむね予定通り進んだ

1 2 3 4 5 []

問12 安全に対する注意は、参加者に十分伝わっていた

1 2 3 4 5 []

問13 作業終了時、参加者が今回の作業の成果を実感できていた

1 2 3 4 5 []

問14 活動日程は、参加者に十分伝わっていた

1 2 3 4 5 []



チェックリストの活用方法

- ◇ 記載例に従って5段階評価で回答します。質問項目の分野は以下の通りです。評価の高い分野、低い分野はどこでしょうか？

問1～問3：「指導」 問4～問6：「交流」 問7～問10：「利便性」 問11～問14：「対話性」

- ◇ 「重要度」の欄に、5段階ないし7段階評価で各質問項目の重要度を記載します。7段階評価は、5段階評価では質問項目毎の違いが評価しづらい（メリハリのある評価がしづらい）場合に行います。

評価結果と重要度を掛け合わせた数値をその質問項目の「得点」とします。今度は、得点の高い分野、低い分野はどこでしょうか？

5段階/7段階評価

例

重要度 得点

問1 指導内容（技術・知識）は、参加者に十分理解されていた

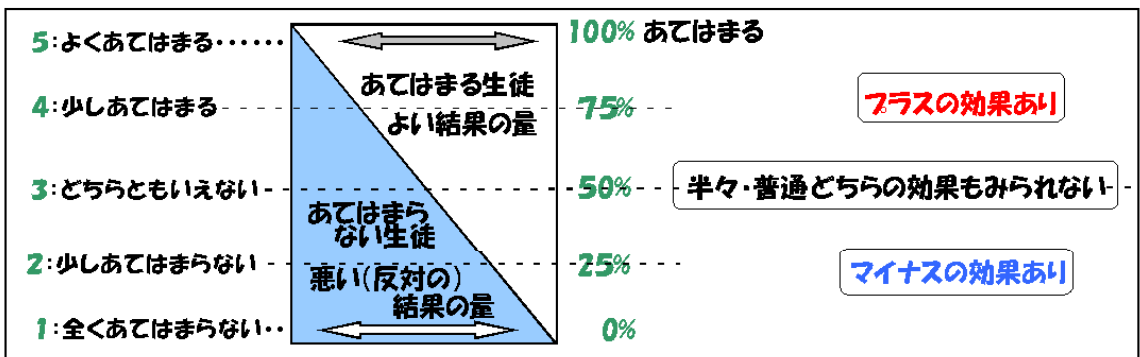
1 2 3 4 5 × 4 = 12

- ◇ 問1～14以外に、「指導」、「交流」、「利便性」、「対話性」の4分野に関連して、重要な項目があればチェックリストに加え、重要度の低いものは削除して構いません。
- ◇ 「指導」、「交流」、「利便性」、「対話性」の4分野にこだわらず、あなたの関係する組織にとって重要な項目があればチェックリストに加え、全体を調節します。
- ◆ 以上の手順でオリジナルのチェックリストをつくることができます。チェックリストは、スタッフが活動運営上の留意点を共有し、運営を活性化するための仕掛けです。当リストを土台にして、よりよい活動づくりを進めてください。

※ 当てはまる番号に○をつけてください。

- a. 性別は？ 1) 男性 2) 女性
- b. 年齢は？ 1) 10代以下 2) 20代 3) 30代 4) 40代 5) 50代 6) 60代 7) 70代以上
- c. 職業は？ 1) 学生 2) 会社員 3) 公務員 4) 教員 5) 自営業（農業含む） 6) 団体職員
7) パート・アルバイト 8) 主婦 9) 無職 10) その他（ ）
- d. 所属は？ 1) いしかりクワラ 2) 北広島メイプル 3) コーポ さっぽろ 4) 札幌ウディーズ
5) 当別ウカバ 6) 藻岩山きのご観察会 7) 札幌市森林組合 8) 南高（学校林）
9) 札幌市職員 10) 森づくりセンター 11) その他道職員
- e. あなたの森林ボランティア活動（森林現場作業、またはその実技指導）への参加頻度は？
1) 今回がはじめて 2) 数年に1回位参加 3) 年に1回位
4) 年に2回位 5) 年に3～4回位
6) 年に5～6回位 7) 6)と8)の間
8) 毎月1回（二年に12回）位参加 9) それより多く参加→ 毎月 回位参加
- f. 南高等学校林整備（定時制・全日制合わせて）への参加は？
1) 今回がはじめて 2) 経験あり→ 今回は 回目
- g. 今回の役割は？ 1) 担当グループあり 2) 担当グループなし（巡回指導）

問1 今回の活動について、次の指標を参考に5段階評価で、数字に○をつけてください。



生徒とのコミュニケーションについて

- (1) 安全（道具・伐倒木・ハチ他）に対する注意は、担当グループ内の生徒に十分伝わっていた
 (☆担当グループのなかった方は、自分が見聞き・関係した範囲でお答え下さい。以下同じ)
- (2) 作業手順・受け持ち（自分が何をしたらよいか）は、担当グループ内の生徒に十分伝わっていた
- (3) 生徒から質問がでたり、スタッフ（あなた）の投げかけに豊かな反応がみられた
- (4) 協力し合ってグループ作業が行われた
- (5) メンバー（生徒・スタッフ）が打ち解け、リラックスした楽しい雰囲気のある場面もあった

裏面に続きます

**資料6 市民参加による地域森林管理に関する意識調査
報告書：森林所有者アンケート調査結果**

2005年2月



目次



調査の概要	2
集計結果	4
問1 森林所在地について	4
問2 所有森林面積について	5
問3 所有人工林面積について	6
問4 所有森林の境界について	7
問5 森林所有目的について	8
問6 最近5年間の施業について	9
問7 森林手入れ状態について	10
問8 森林経営上の問題について	12
問9 今後の林業経営規模について	14
問10 地域森林管理について	15
問11 森林借り上げについて	16
問12 所有森林に対する借り上げ依頼について	17
問13 森林市民協議への参加について	18
問14 森林ボランティアへの認知について	19
問15 森林ボランティアへの評価について	20
問16 森林ボランティアへの期待内容について	21
他調査との比較Ⅰ	22
問17 森林ボランティアへの所有森林提供について	23
他調査との比較Ⅱ	24
問18 提供しない理由について	25
問19 森林ボランティアへの不安について	26
他調査との比較Ⅲ	26
問20 森林ボランティア受け入れ条件について	28
問21 森林ボランティアに依頼したい作業について	30
他調査との比較Ⅳ	31
問22 森林提供以外で森林ボランティアにできる協力について	32
他調査との比較Ⅴ	33
問23 自由回答から	34

調査の概要

目的

北海道では立場の異なる人々による「協働の森づくり」が、森林づくりの基本理念に掲げられています。こうした取り組みを今後とも盛りたてて行くには、例えば、活動場所の確保等のため、森林所有者と森林ボランティアグループの連携が大切です。そのため今回、森林ボランティアに対する森林所有者の意向を把握し、「協働の森づくり」をサポートする施策に反映するため、本調査を実施しました。

内容

調査の内容は以下の通りです。

- (1) 森林管理の現状、今後の管理の予定 ⇒ 問1～9
- (2) 地域森林管理に対する考え方 ⇒ 問10～13
- (3) 森林ボランティアに対する考え方 ⇒ 問14～22
- (4) 森林管理や森林ボランティアに関する意見 ⇒ 問23（自由回答）

設計

対象は以下の通りです。

石狩支庁ないし網走支庁管内に森林を所有する個人	2,698名
石狩支庁在村森林所有者（以下、石狩在村）	1,254名
石狩支庁不在村森林所有者（以下、石狩不在村）	644名
網走支庁在村森林所有者（以下、網走在村）	800名
石狩支庁管内に森林を所有する組織体	398組織
在村企業森林所有者（以下、在村企業）	194社
不在村企業森林所有者（以下、不在村企業）	189社
在村団体・学校等森林所有者（以下、在村団体）	15団体

抽出：「森林調査簿（石狩・網走支庁）」及び「札幌市森林組合員名簿」より、所有面積を観点とした層化無作為抽出

方法：郵送による多項目選択方式（一部記述を含む）

期間：平成15年12月下旬～平成16年1月中旬（一次調査：森林調査簿使用）

平成16年 6月下旬～同年7月下旬（二次調査：札幌市森林組合員名簿使用）

回収状況

主に「森林調査簿」の住所不備により、個人全体で759通、組織体全体で154通の未到達（未到達率：個人28.1%、組織体38.7%）が生じました。その内訳は、「宛所たすねあたりません」が全未到達数（913通）の64.3%を占めました。

回収は、個人全体で506（回収率18.8%、到達回収率26.1%）、組織体全体で97（回収率24.4%、到達回収率39.8%）得られました。

有効回答は、個人全体で483、組織体全体で79でした。なお無効回答のうち、「森林所有なし」との回答が、石狩在村で6件、同不在村で4件、網走で1件、在村企業で8件、不在村企業で7件ありました。

	発送数A	未到達数B	回収数C	回収率 C/A×100 (%)	到達回収率 C/(A-B) ×100 (%)	有効回答数
石狩在村①	1000	335	145	14.5	21.8	133
石狩在村②	254	2	61	24.0	24.2	60
石狩不在村①	632	300	98	15.5	29.5	91
石狩不在村②	12	0	1	8.3	8.3	1
網走	800	122	201	25.1	29.6	198
個人全体	2698	759	506	18.8	26.1	483
在村企業①	181	71	43	23.8	39.1	33
在村企業②	13	0	3	23.1	23.1	3
不在村企業①	187	83	41	21.9	39.4	34
不在村企業②	2	0	1	50.0	50.0	0
在村団体	15	0	9	60.0	60.0	9
組織体全体	398	154	97	24.4	39.8	79

注)①一次調査、②二次調査

回収内訳

個人

全体で性別は「男性」が約80%を占め、年齢は「70代以上」が約40%と最多でした。

職業は、全体では「農林漁業」と「無職」が多く各約30%を占めました。が、区分別に見ると石狩不在村では「無職」（約30%）に次いで「商業・サービス業」（約20%）が多い結果になりました。

区分	石狩在村		石狩不在村		網走在村		全体	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
性別								
男性	161	83.4	77	83.7	175	88.4	413	85.5
女性	29	15.0	15	16.3	21	10.6	65	13.5
無回答	3	1.6	0	0.0	2	1.0	5	1.0
年齢								
10代以下	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
20代	0	0.0	1	1.1	1	0.5	2	0.4
30代	3	1.6	0	0.0	3	1.5	6	1.2
40代	9	4.7	4	4.3	10	5.1	23	4.8
50代	30	15.5	14	15.2	42	21.2	86	17.8
60代	55	28.5	31	33.7	60	30.3	146	30.2
70代以上	86	44.6	39	42.4	72	36.4	197	40.8
無回答	10	5.2	3	3.3	10	5.1	23	4.8
職業								
農林漁業	75	38.9	8	8.7	78	39.4	161	33.3
製造・建設業	9	4.7	7	7.6	12	6.1	28	5.8
商業・サービス業	22	11.4	16	17.4	7	3.5	45	9.3
公務員	5	2.6	1	1.1	7	3.5	13	2.7
団体職員	2	1.0	1	1.1	11	5.6	14	2.9
自由業	9	4.7	9	9.8	9	4.5	27	5.6
主婦	4	2.1	11	12.0	6	3.0	21	4.3
無職	47	24.4	27	29.3	49	24.7	123	25.5
その他	9	4.7	8	8.7	9	4.5	26	5.4
無回答	11	5.7	4	4.3	10	5.1	25	5.2
全体	193	100.0	92	100.0	198	100.0	483	100.0

組織体

従業者数は、全体で「0～10人」が最多で約30%を占めました。

団体の会員・構成員は「50人未満」が約半数を占めました。

企業の業種に関しては、在村では「その他のサービス業」、不在村では「製造・建設業」が多く、団体の活動分野では、「学校教育」が過半数でした。

区分	在村企業		不在村企業		在村団体		全体	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
従業者数								
0～10人	8	22.2	11	32.4	3	33.3	22	27.8
10～20人	7	19.4	3	8.8	1	11.1	11	13.9
30～50人	6	16.7	4	11.8	1	11.1	11	13.9
50～100人	7	19.4	4	11.8	1	11.1	12	15.2
100～500人	7	19.4	6	17.6	0	0.0	13	16.5
500人以上	1	2.8	4	11.8	1	11.1	6	7.6
無回答	0	0.0	2	5.9	2	22.2	4	5.1
会員・構成員数								
0～10人					0	0.0	0	0.0
10～20人					2	22.2	2	22.2
30～50人					2	22.2	2	22.2
50～100人					0	0.0	0	0.0
100～500人					1	11.1	1	11.1
500人以上					0	0.0	0	0.0
無回答					4	44.4	4	44.4
業種 (複数回答)								
農林漁業	3	8.3	7	20.6			10	14.3
製造・建設業	8	22.2	10	29.4			18	25.7
小売・卸売業	1	2.8	4	11.8			5	7.1
不動産業	3	8.3	9	26.5			12	17.1
その他のサービス業	19	52.8	4	11.8			23	32.9
その他	2	5.6	5	14.7			7	10.0
活動分野 (複数回答)								
学校教育					5	55.6	5	55.6
宗教活動					2	22.2	2	22.2
財団運営					2	22.2	2	22.2
社会教育					1	11.1	1	11.1
全体	36	100.0	34	100.0	9	100.0	79	100.0

問1 森林の所在地はどちらですか（複数回答）。

石狩は札幌市（在村）、その他道内（不在村）、網走は美幌町が多い

石狩に関して、在村では札幌市、北広島市に森林を所有する個人、組織体が多く、不在村では石狩支庁管内以外の道内やその他道内、浜益村、千歳市に森林を所有する個人、組織体が多かったです。一方、網走では、当初より調査対象とした美幌町、紋別市、置戸町に森林を所有する個人が多かったです、この3市町の他、重複して網走支庁管内の他町村や、その他の道内に森林を所有している人も見られました。

石狩

問1 森林の所在地（複数回答）

	石狩在村 (N=193)		石狩不在村 (N=92)		在村企業 (N=36)		不在村企業 (N=34)		在村団体 (N=9)	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
札幌市	72	37.3	8	8.7	16	44.4	4	11.8	8	88.9
北広島市	35	18.1	5	5.4	11	30.6	4	11.8	2	22.2
当別町	23	11.9	12	13.0	2	5.6	1	2.9	0	0.0
厚田村	20	10.4	16	17.4	1	2.8	5	14.7	0	0.0
千歳市	16	8.3	17	18.5	6	16.7	6	17.6	0	0.0
浜益村	12	6.2	22	23.9	1	2.8	3	8.8	0	0.0
恵庭市	11	5.7	2	2.2	1	2.8	2	5.9	0	0.0
石狩市	3	1.6	6	6.5	2	5.6	0	0.0	0	0.0
江別市	1	0.5	1	1.1	1	2.8	0	0.0	0	0.0
新篠津村	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
その他の北海道内	10	5.2	23	25.0	4	11.1	19	55.9	0	0.0
北海道外	1	0.5	5	5.4	1	2.8	8	23.5	0	0.0
わからない	0	0.0	1	1.1	0	0.0	1	2.9	0	0.0

網走

問1 森林の所在地（複数回答）

	網走在村 (N=198)	
	(人)	(%)
美幌町	85	43.1
紋別市	58	29.4
置戸町	42	21.3
北見市	9	4.6
女満別町	6	3.0
端野町	6	3.0
訓子府町	5	2.5
留辺蘂町	5	2.5
湧別町	5	2.5
興部町	5	2.5
上湧別町	4	2.0
網走市	3	1.5
東藻琴村	3	1.5
滝上町	3	1.5
津別町	2	1.0
佐呂間町	1	0.5
生田原町	1	0.5
遠軽町	1	0.5
丸瀬布町	1	0.5
その他の北海道内	1	0.5

問2 所有している森林の面積は全部でどれぐらいですか。

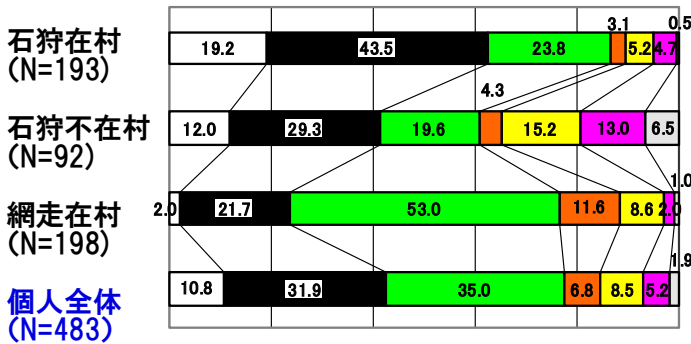
- 1 1ha未満
- 2 1~5ha未満
- 3 5~30ha未満
- 4 30~50ha未満
- 5 50ha以上
- 6 わからない

個人は「1~5ha」「5~30ha」、組織体は「50ha以上」が各3割

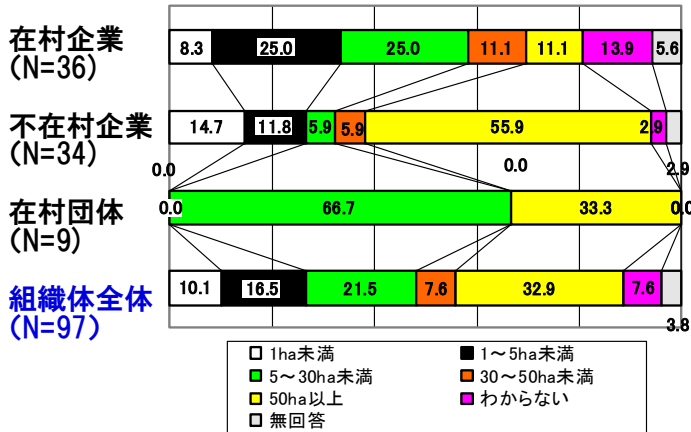
個人について、全体では「1~5ha未満」と「5~30ha未満」が各30%強と多い結果になりました。区分別に見ると石狩が網走と比べて所有面積が小さい傾向があることがわかります。

組織体について、全体では「50ha以上」が約33%と多い結果になり、区分別では、不在村企業と在村団体に所有面積の大きい傾向があることがわかります。

個人



組織体



問3 森林のうち人工林の面積は大体どのくらいですか。
 森林を複数の所にお持ちの場合は、合計した場合の人工林の比率をお答えください。

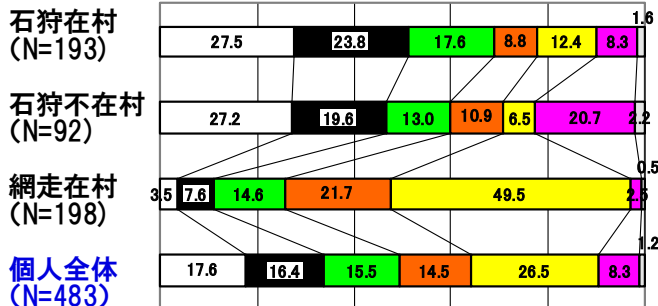
- 1 人工林は全くない(0%)
- 2 人工林が若干(0~20%未満)
- 3 人工林が半分未満(20~50%未満)
- 4 人工林が半分以上(50~80%未満)
- 5 殆ど全て(80~100%)が人工林である
- 6 わからない

個人は「人工林 8 割以上」、組織体は「人工林なし」「2 割未満」が各1/4

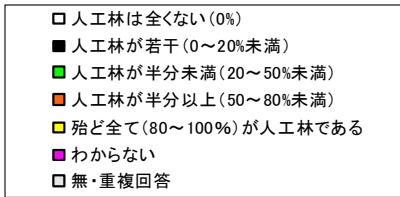
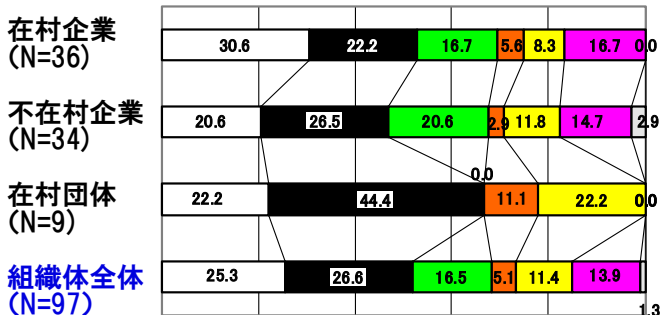
個人について、全体では、「殆ど全て(80~100%)が人工林である」が約27%と多い結果になりました。区分別にみると、石狩在村ではおよび不在村では、人工林比率が2割未満の人が約半数を占めるのに対し、網走在村では人工林比率が8割以上の人が約半数を占め、かつ人工林が多い人ほど人数が多い傾向があることがわかります。

組織体について、全体では「人工林は全くない(0%)」と「人工林が若干(0~20%未満)」が各約1/4と多い結果になりました。区分別にみると、在村企業では人工林を所有しない所有者が最多であることがわかります。

個人



組織体



問4 所有している森林の境界がわかりますか。

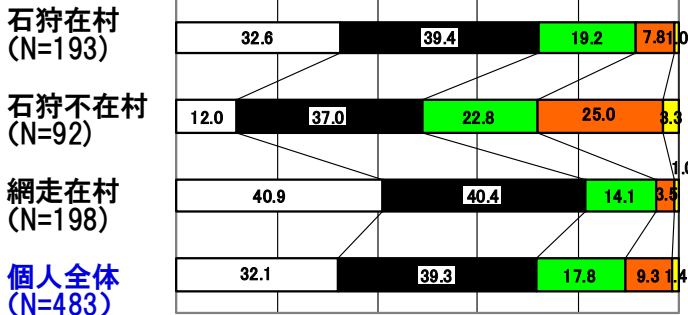
- 1 すべてわかる
- 2 大部分わかる
- 3 少しはわかる
- 4 全くわからない

個人・組織体とも「大部分・すべてわかる」が7割

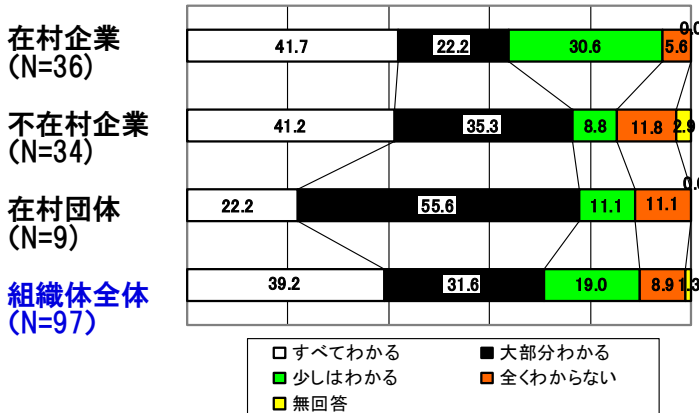
個人について、全体では「大部分わかる」が約39%、次いで「すべてわかる」が約32%と多い結果になりました。区分別にみると、網走では「すべてわかる」が「大部分わかる」と同等に約40%と多く、所有森林に対する認知度が高い人が多い傾向がわかります。

組織体について、全体では「すべてわかる」が約39%、次いで「大部分わかる」が約32%と多い結果になりました。区分別にみると、在村企業では「すべてわかる」に次いで「少しはわかる」が約31%と多く、所有森林に対する認知度が高い層とやや低い層が共存する傾向がわかります。

個人



組織体



問5 現在、森林をどのような目的で所有していますか。

個人

- 1 林業を行う場として
- 2 不動産の1つとして
- 3 子どもや孫に継がせる財産として
- 4 自然が好きなので自分の楽しみのため
- 5 自然環境や水資源の保全
- 6 相続などによってそのまま所有している
- 7 わからない
- 8 その他

組織体

- 1 林業を行う場として
- 2 扱い商品として
- 3 商品やサービスを提供する場として
- 4 不動産の1つとして
- 5 砂利などの資源採取
- 6 自然環境や水資源の保全
- 7 地域住民が森林とふれあう場を提供
- 8 会員・構成員が森林を利用する場を提供
- 9 贈与等によってそのまま所有している
- 10 わからない
- 9 その他

個人「相続等でそのまま」、組織体「不動産として」所有が各3割

個人について、全体では、「相続などによってそのまま所有している」が約32%、次いで「不動産の1つとして」が約23%と多い結果になりました。

組織体について、全体では「不動産の1つとして」が約27%と多い結果になりました。区分別に見ると、これに次いで在村企業では「商品やサービスを提供する場として」が多く、不在村企業では「林業を行う場として」が多い、在村団体は「不動産の1つとして」が皆無で回答が分散する（その他が過半数）など、それぞれ異なった傾向がみとめられました。

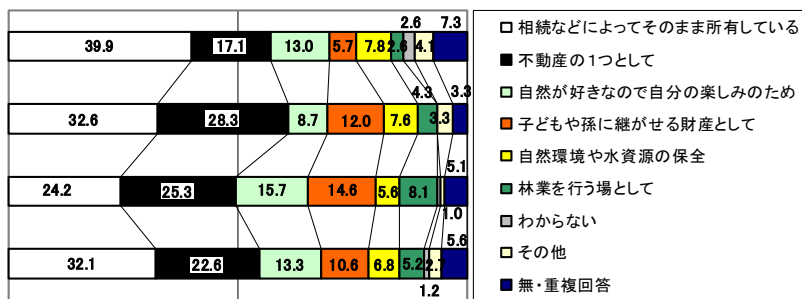
個人

石狩在村
(N=193)

石狩不在村
(N=92)

網走在村
(N=198)

個人全体
(N=483)



- 相続などによってそのまま所有している
- 不動産の1つとして
- 自然が好きなので自分の楽しみのため
- 子どもや孫に継がせる財産として
- 自然環境や水資源の保全
- 林業を行う場として
- わからない
- その他
- 無・重複回答

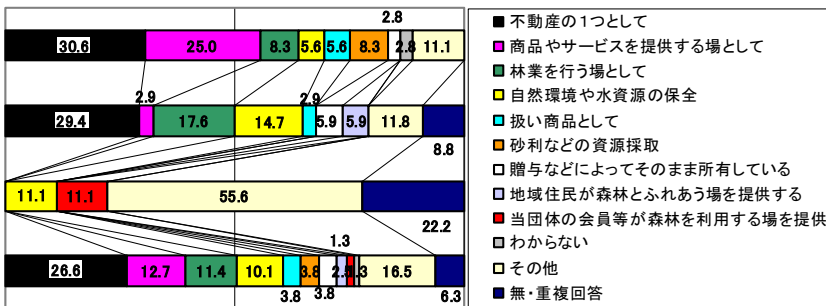
組織体

在村企業
(N=36)

不在村企業
(N=34)

在村団体
(N=9)

組織体全体
(N=97)



- 不動産の1つとして
- 商品やサービスを提供する場として
- 林業を行う場として
- 自然環境や水資源の保全
- 扱い商品として
- 砂利などの資源採取
- 贈与などによってそのまま所有している
- 地域住民が森林とふれあう場を提供する
- 当団体の会員等が森林を利用する場を提供
- わからない
- その他
- 無・重複回答

注) 個人・組織体とも全体での該当比率が高い順に選択肢を並べ替えた。該当なし(0.0%)については記載を省略。

問6 最近5年間で、所有している森林では、次のような手入れを行いましたか。
ご自分で行ったもの、人に頼んだものも含めて、お答えください（複数回答）。

- | | |
|---------------|---------------------|
| 1 植樹 | 7 簡易な作業道、散策路などをつける |
| 2 下草刈り | 8 林内の清掃 |
| 3 除伐・つるきり・枝打ち | 9 手入れの必要は感じるが行っていない |
| 4 切り捨て間伐 | 10 手入れは必要ないので行っていない |
| 5 販売間伐 | 11 わからない |
| 6 主伐 | |

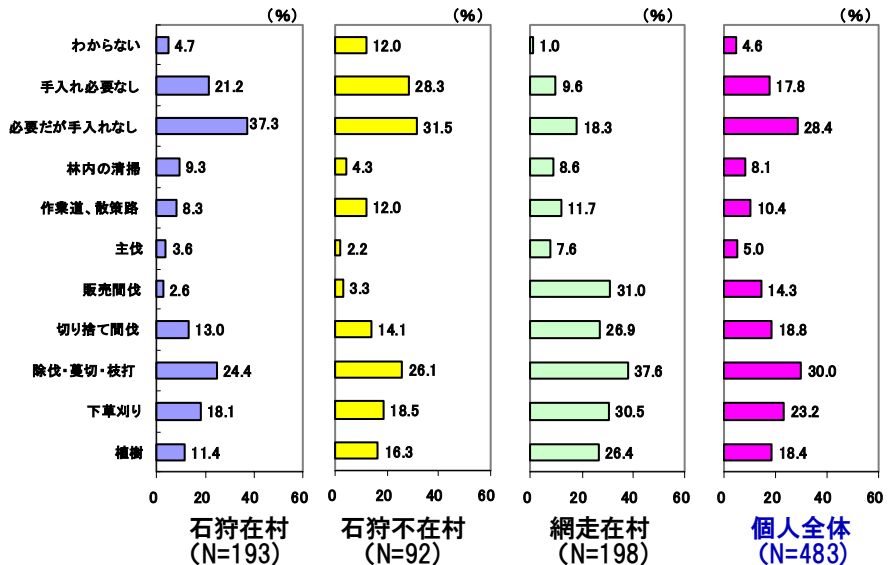
個人「除伐・つるきり等」「必要だが手入れしていない」が各約3割

個人は、全体では「除伐・つるきり・枝打ち」「手入れの必要は感じるが行っていない」が多く各約30%を占めました。上位の選択肢を区別にみると、石狩不在村では「手入れなし（選択肢9,10）」の2者が特に多く、一方、網走在村では「販売間伐」等何らかの施業をしたとの回答が多いといった傾向がわかります。

組織体は、全体では「下草刈り」が多く約43%、次いで「除伐・つるきり・枝打ち」が約34%を占めました。区別では、在村企業ではこれらに加え「手入れは必要ないので行っていない」も約31%と多いことがわかります。

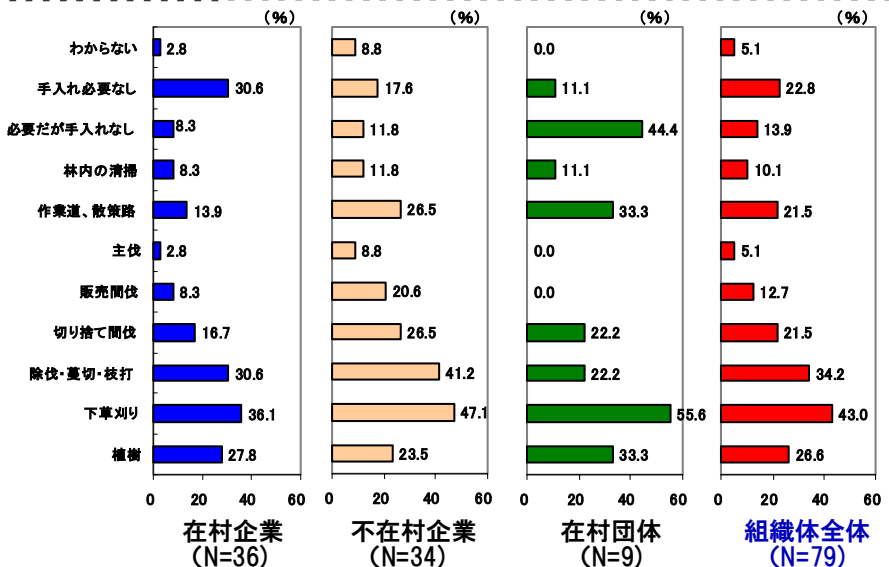
個人

(複数回答)



組織体

(複数回答)



問7 所有している森林の手入れ状態についてどのようにお考えですか。

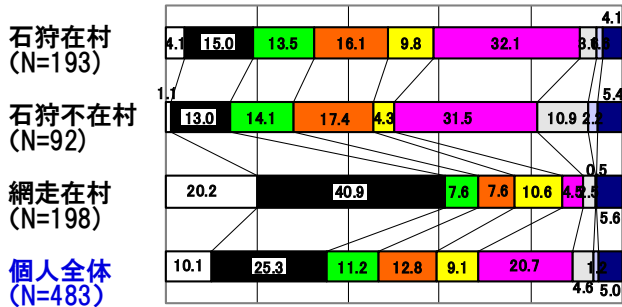
- 1 森林面積のほぼ全てで手入れが行き届いている
- 2 全てではないが、手入れが行き届いている森林の方が多い
- 3 手入れ不足や放置森林の方が多い
- 4 森林面積の全てが放置森林である
- 5 「手入れの行き届いた森林」と「手入れ不足・放置森林」が半々くらい
- 6 手入れは全くしていないが、特に問題があるとは思わない
- 7 わからない
- 8 その他

手入れ「皆無だが問題なし（石狩）」、「行き届いている方（網走）」が多い

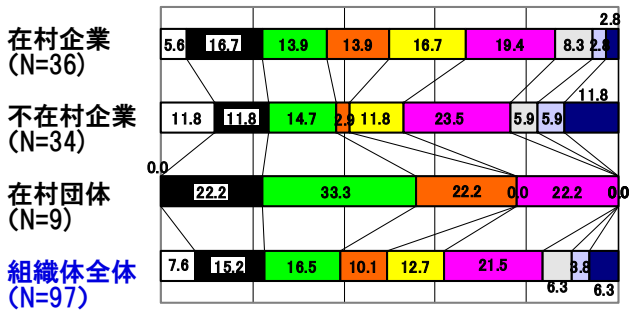
個人は、全体では「全てではないが、手入れが行き届いている森林の方が多い」が多く約25%を占めました。区分別にみると、石狩在村および不在村では、「手入れは全くしていないが、特に問題があるとは思わない」が最多である一方、網走在村では、「全てではないが、手入れが行き届いている森林の方が多い」が最多と、手入れに対する意識の違いがあらわれました。

組織体は、全体では「手入れは全くしていないが、特に問題があるとは思わない」が多く約22%を占めました。

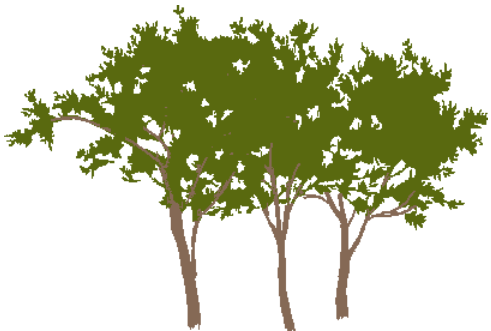
個人



組織体



- 森林面積のほぼ全てで手入れが行き届いている
- 全てではないが、手入れが行き届いている森林の方が多い
- 手入れ不足や放置森林の方が多い
- 森林面積の全てが放置森林である
- 「手入れの行き届いた森林」と「手入れ不足・放置森林」が半々くらい
- 手入れは全くしていないが、特に問題があるとは思わない
- わからない
- その他
- 無・重複回答



問8 森林の手入れや経営上での問題点があれば、当てはまるものをお答えください。
(複数回答3)

個人

- 1 採算が合わず、手入れのために人を雇う資金が不足している
- 2 自家の労働力が不足している
- 3 自家の労働者が高齢化している
- 4 後継者がいない
- 5 森林面積が小さい
- 6 林道が少なく、現地に行けない
- 7 固定資産税が高い
- 8 相続税が高い
- 9 特に問題はない
- 10 わからない
- 11 その他

組織体

- 1 採算が合わず、手入れのために人を雇う資金が不足している
- 2 作業を行える自組織内の従業者が不足している
- 3 作業を行える自組織内の従業者が高齢化している
- 4 森林面積が小さい
- 5 林道が少なく、現地に行けない
- 6 固定資産税が高い
- 7 森林をふれあいの場などとして地域に開放したいが、ノウハウが不足している
- 8 特に問題はない
- 9 わからない
- 10 その他

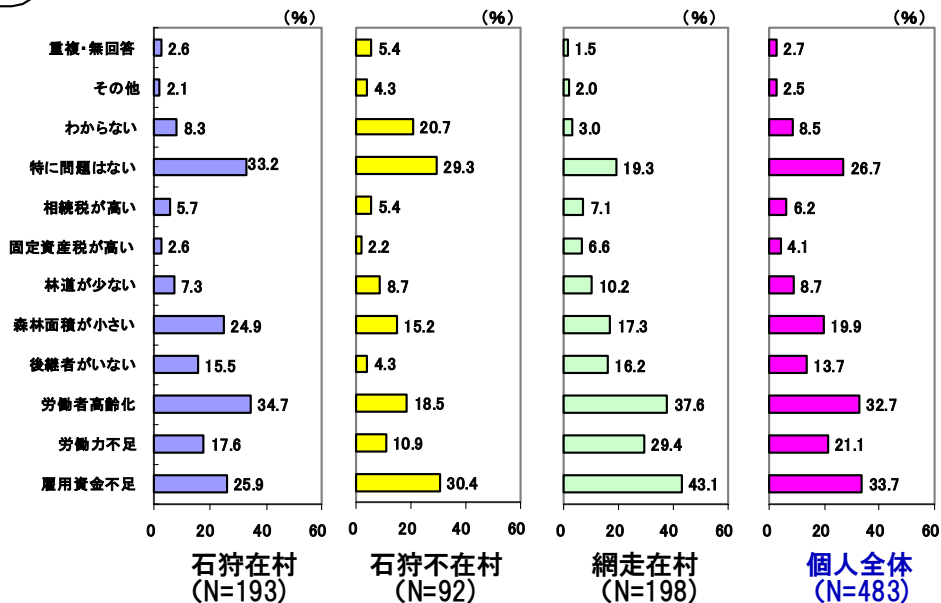
個人「雇用資金不足」「労働力高齢化」各3割、石狩は「問題なし」も多い

個人は、全体では「採算が合わず、手入れのために人を雇う資金が不足している」と「自家の労働者が高齢化している」が多く各30%強を占めました。上位を区分別にみると、石狩では「特に問題はない」とする比率も30%前後と多いことがわかります。

組織体は、全体では「特に問題はない」が多く約48%を占め、次いで「採算が合わず、手入れのために人を雇う資金が不足している」が約22%と多い結果になりました。

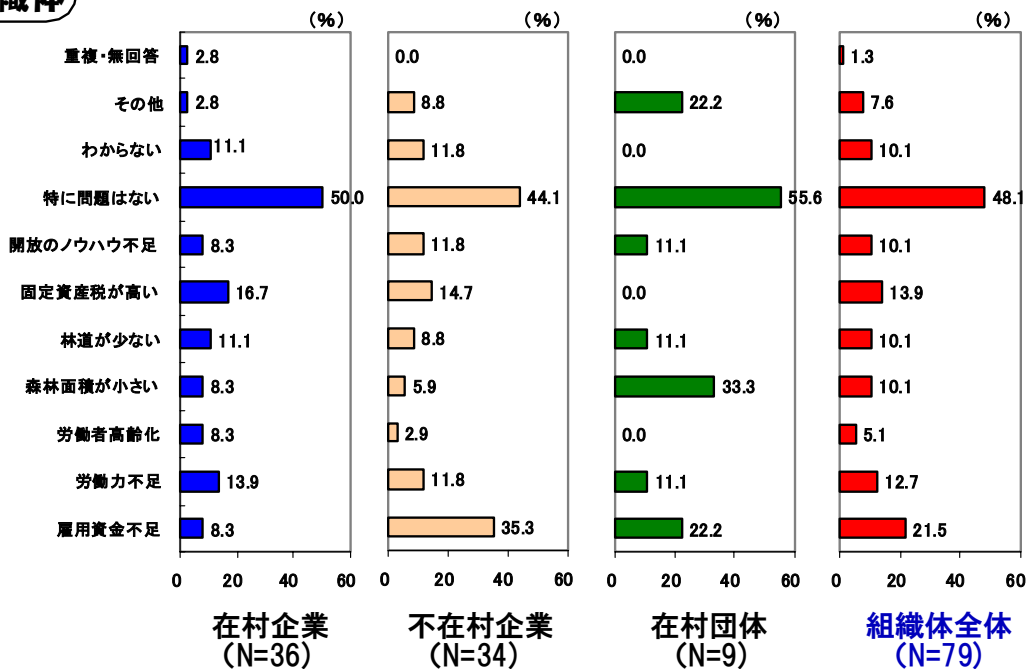
個人

(複数回答3)



組織体

(複数回答3)



問9 今後の林業経営（森林での林産物の生産・販売）の規模について、どのようにお考えですか。

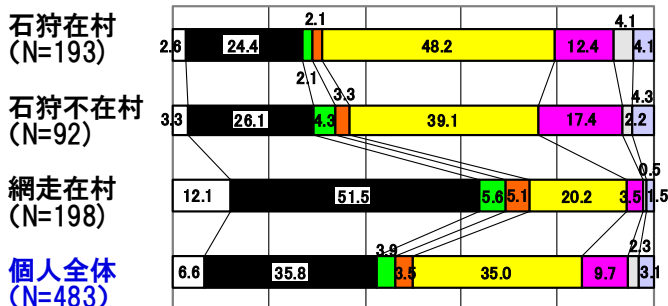
- 1 拡大したい
- 2 現状を維持したい
- 3 縮小したい
- 4 林業経営自体をやめたい
- 5 現在、林業経営はしていない
- 6 わからない
- 7 その他

林業経営「現在していない（石狩）」、「現状維持（網走）」が多い

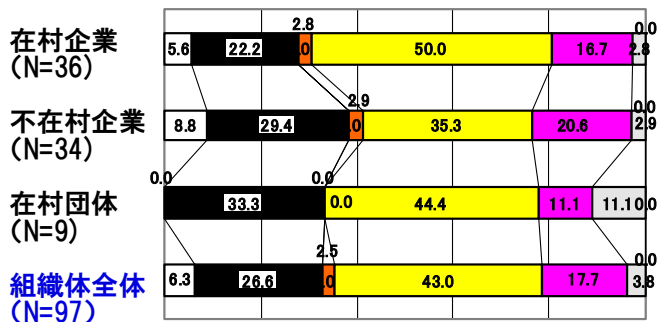
個人は、全体では「現状を維持したい」と「現在、林業経営はしていない」が多く35～36%を占めました。区別では、石狩では「現在、林業経営はしていない」が最多である一方、網走では「現状を維持したい」が最多であり、「拡大したい」という回答も約1割見られました。このように林業経営の現況や今後の意向は地域によって異なる傾向が見られます。

組織体は、全体では「現在、林業経営はしていない」が多く約43%を占めました。

個人



組織体



- 拡大したい
- 現状を維持したい
- 縮小したい
- 林業経営自体をやめたい
- 現在、林業経営はしていない
- わからない
- その他
- 無・重複回答

問10 「地域森林管理*」という考え方をふまえて、本州の自治体の中には、住民全世帯の負担や企業、団体等の寄付によって森林を守るための基金をつくり、これを財源にして、水源地域の私有林の手入れを行っているところもあります。このような方法についてどう思いますか。

- 1 地域全体で森林を支えるという内容なので、よい方法である
- 2 内容はともかく、その地域が森林について考えて納得して決めたという点で、よい方法である
- 3 基金をつくってまで森林を守る必要はない
- 4 森林はあくまで所有者の努力や判断によって守るべき
- 5 わからない
- 6 その他

「よい方法」6割、組織体は「わからない」も2割

個人は、全体では「地域全体で森林を支えるという内容なので、よい方法である」と「内容はともかく、その地域が森林について考えて納得して決めたという点で、よい方法である」が多く各30%前後を占めました。

組織体は、全体では「地域全体で森林を支えるという内容なので、よい方法である」が多く約41%でした。ついで「内容はともかく、その地域が森林について考えて納得して決めたという点で、よい方法である」と「わからない」とが各20%弱を占めました。区分別にみると、不在村企業で前者（方法としてよい）が、在村企業と在村団体で後者（わからない）が多く、より上位にあることがわかります。

「よい方法（選択肢1,2）」とする回答は、個人、組織体とも全体で60%弱を占めました。

個人

石狩在村 (N=193)

石狩不在村 (N=92)

網走在村 (N=198)

個人全体 (N=483)

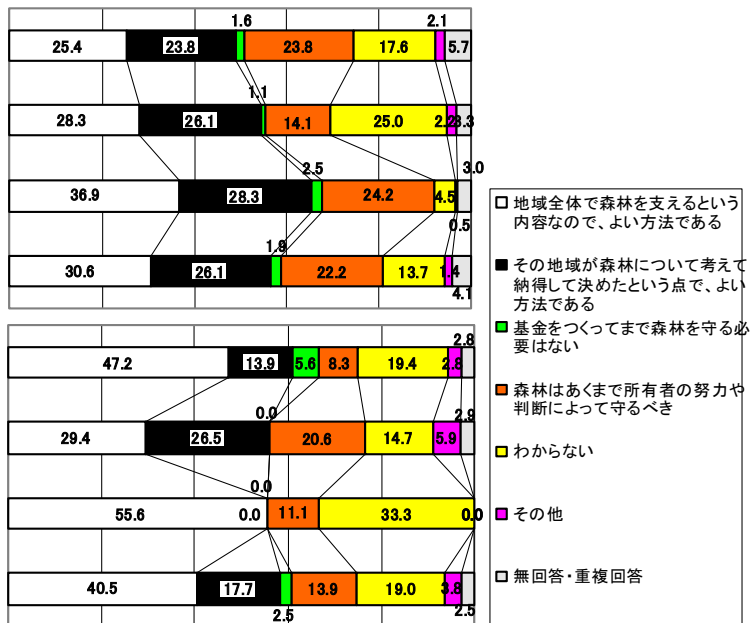
組織体

在村企業 (N=36)

不在村企業 (N=34)

在村団体 (N=9)

組織体全体 (N=97)



*「地域みんなで森林を支えよう」:地域森林管理

森林は、飲み水などの水源をかん養したり、美しい景色をつくったり、地球温暖化を防止したりといった、さまざまな働きを持っており、多くの人がその恵みを受けています。このため、近年、森林を、所有者のものとするだけでなく、「社会の共有財産」としてとらえ、地域みんなで森林を守ったり、整備したりする「地域森林管理」という考え方が出てきています。

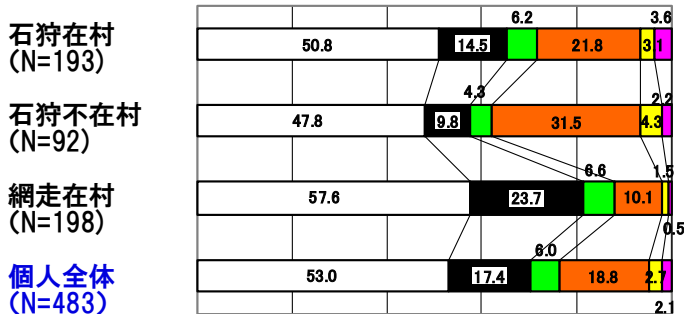
問11 北海道の自治体でも、森林を所有者から借り、地域の森林として確保した上で、散策路などをつくって住民が利用できるようにしているところもあります。このような方法（内容）についてどう思いますか。

- 1 森林を利用しながら残していくためによい方法である
- 2 借りるよりも、他の方法で、森林を残すことを考えるべき
- 3 借りてまで森林を残す必要はない
- 4 わからない
- 5 その他

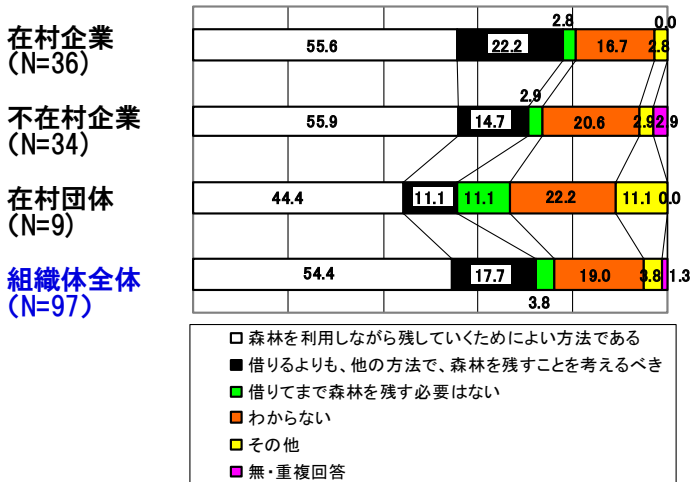
個人・組織体の約半数が「よい方法」

個人・企業とも、全体では「森林を利用しながら残していくためによい方法である」が多く50%強を占めました。また次いで、「わからない」と「借りるよりも、他の方法で、森林を残すことを考えるべき」が各20%弱と多い結果になりました。区分別にみると、石狩在村、石狩不在村、不在村企業、在村団体で前者（わからない）がより上位に、在村企業と網走在村で後者（他の方法で残す）が多く、より上位にあることがわかります。

個人



組織体



- 森林を利用しながら残していくためによい方法である
- 借りるよりも、他の方法で、森林を残すことを考えるべき
- 借りてまで森林を残す必要はない
- わからない
- その他
- 無・重複回答

問12 自治体などから所有している森林を借りたいという依頼があった場合に、どのように対応しますか。

- 1 無条件で、森林を貸し出す
- 2 貸し出しの期間や賃貸料、行われる整備内容など条件に応じて、当方に利益があれば貸し出す
- 3 直接当方に利益はないにしても、地域に利益があれば貸し出す
- 4 貸し出しは考えていない
- 5 面積や立地など、当方の森林の状況では、貸し出しはあまり考えられない
- 6 わからない
- 7 その他

「当方に利益があれば貸し出し可」が3割

個人は、全体では「貸し出しの期間や賃貸料、行われる整備内容など条件に応じて、当方に利益があれば貸し出す」が多く約31%を占めました。区分別に見ると、石狩在村では「面積や立地など、自分の森林の状況では、貸し出しはあまり考えられない」が最多で、これ（当方に利益があれば貸し出し可）をのしていることがわかります。

組織体でも、全体では「貸し出しの期間や賃貸料、行われる整備内容など条件に応じて、当方に利益があれば貸し出す」が多く約28%を占めました。

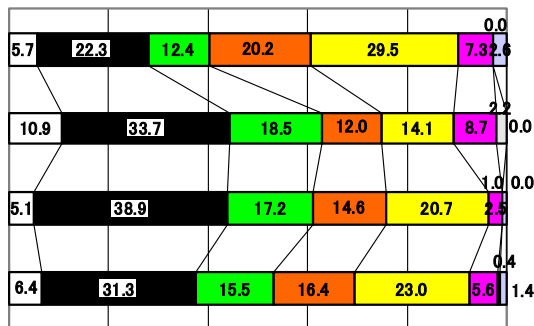
個人

石狩在村 (N=193)

石狩不在村 (N=92)

網走在村 (N=198)

個人全体 (N=483)



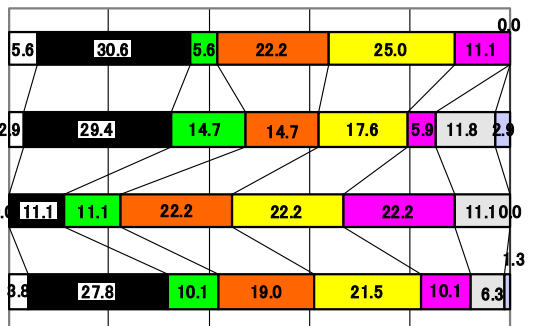
組織体

在村企業 (N=36)

不在村企業 (N=34)

在村団体 (N=9)

組織体全体 (N=97)



- 無条件で森林を貸し出す
- 条件に応じて、当方に利益があれば貸し出す
- 直接当方に利益はないにしても、地域に利益があれば貸し出す
- 貸し出しは考えていない
- 自分の森林の状況では、貸し出しはあまり考えられない
- わからない
- その他
- 無回答・重複回答

問13

地域森林管理の出発点として、最近、自治体内の森林をどのように守ったり、整備・活用していくかについて、地域の人々が参加して、計画をつくったり、意見を述べたりする取り組みが始められています。

そうした場では、住民やその地域に森林を所有している個人・企業・団体、森林ボランティア、森林・林業の専門家、都市計画や観光・商工関係者など、さまざまな立場の人の参加が望まれています。

あなたは、こうした取り組みについてどのように思いますか。

- 1 そうした取り組みに参画し、森林所有者としての考えを述べたい
- 2 そうした場へは直接参加できないが、文章やアンケートなどで考えを伝えたい
- 3 取り組みの経過について、情報だけ欲しい
- 4 取り組みの主旨は理解できるが、自分としては特に関わりを持ちたくない
- 5 そのような取り組みは、正直なところ賛成できない
- 6 特に関心はない（賛成でも反対でもない）
- 7 わからない
- 8 その他

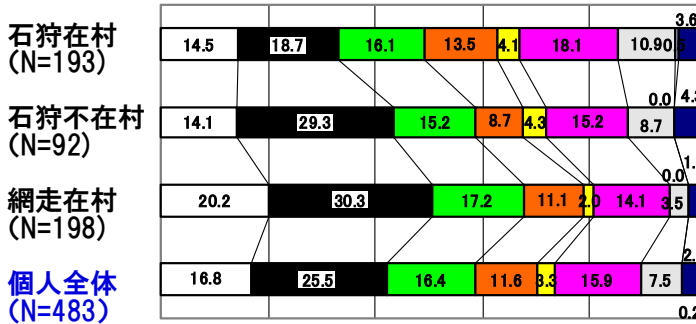
市民協議へは個人 4 割、組織体 3 割が参加意志あり

個人は、全体では「そうした場へは直接参加できないが、文章やアンケートなどで考えを伝えたい」が多く約26%を占めました。

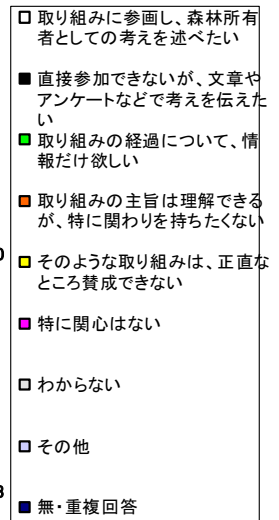
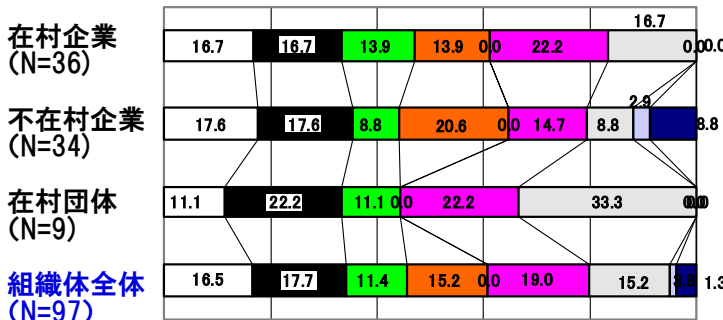
組織体では、全体では「特に関心はない」、「そうした場へは直接参加できないが、文章やアンケートなどで考えを伝えたい」、「そうした取り組みに参画し、森林所有者としての考えを述べたい」の3者が多く各20%弱を占めました。

上記の市民協議に対して、直接的な参加意思（選択肢1）と間接的な参加意思（選択肢2）を示す回答を合計すると、個人では全体の約42%、組織体では全体の約34%が何らかの参加意志を持っていることがわかります。

個人



組織体



問14 森林ボランティアを知っていましたか。

- 1 すでに活動に協力したり、一緒に参加したことがある
- 2 聞いたことはある
- 3 今回初めて知った

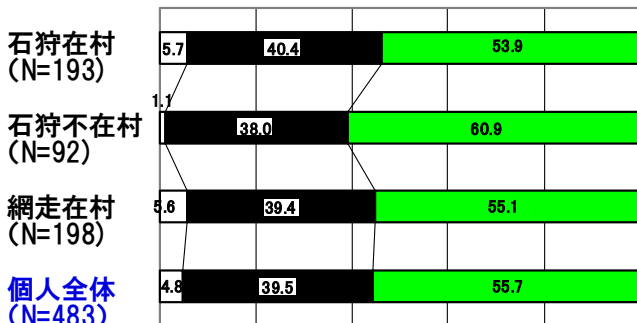
個人6割、組織体5割が、森林ボランティア「今回初めて知った」

個人は、全体では「今回初めて知った」が多く約56%を占めました。

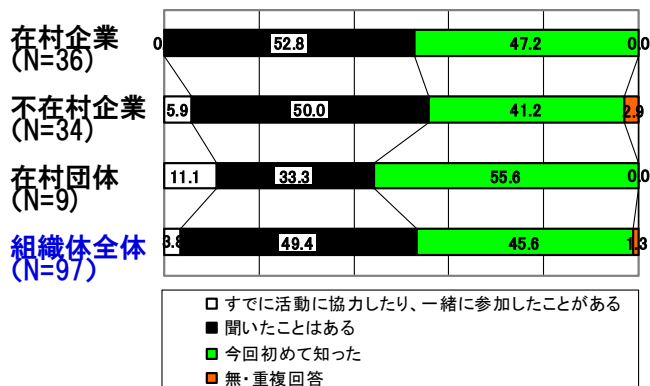
組織体でも、全体では「今回初めて知った」が多く約46%を占めました。

このように森林ボランティアへの認知が高いとはいえない中であっても、「すでに活動に協力したり、一緒に参加したことがある」とする回答も、個人全体で約5%、企業全体で約4%みられました。

個人



組織体



森林ボランティアってなに？

森林ボランティアは、無償で森林の手入れを行う市民グループです。メンバーは一般の市民であり、手入れの技術に関しては、基本的にアマチュアですが、林業技術者の指導等を受けながら技術を高めて、木のない土地に植樹をしたり、手入れ不足森林の間伐・枝打ちをするなど、地域の森林整備に役割を果たしている団体もあります。

現在、このような森林ボランティアは急増しており、全国で約1,200団体、北海道にも約120団体ある（※）とされています。



問15 森林ボランティアの活動について、一般的にどう思いますか、

- 1 期待している
- 2 やや期待している
- 3 あまり期待しない
- 4 全く期待しない
- 5 正直なところ賛成できない
- 6 どちらともいえない
- 7 特に関心がない
- 8 わからない

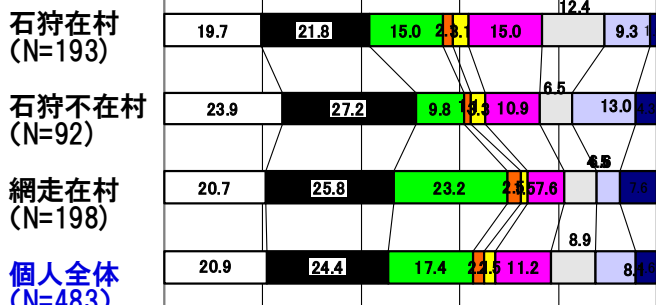
森林ボランティアに対し、約4割が「期待あり」

個人は、全体では「やや期待している」が多く約24%を占めました。

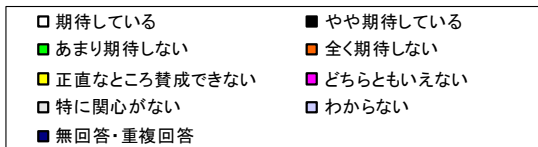
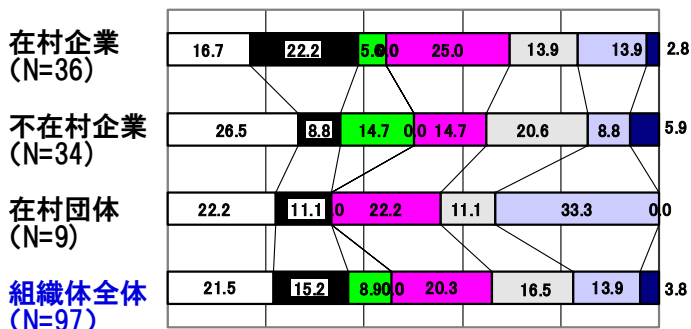
組織体では、全体では「期待している」と「どちらともいえない」が多く各約20%を占めました。区分別に見ると、在村企業では「どちらともいえない」が最多、不在村企業では「期待している」が最多、在村団体は「わからない」が最多と、それぞれ評価の傾向が異なることがわかります。

「やや期待している」と「期待している」を加えた、森林ボランティアに何らかの「期待あり」とする回答は、全体で個人では約45%、組織体では約37%という結果になりました。

個人



組織体



問16 森林ボランティアにどのような面で特に期待しますか。

(前問で「期待している」、「やや期待している」とした人のみ回答)

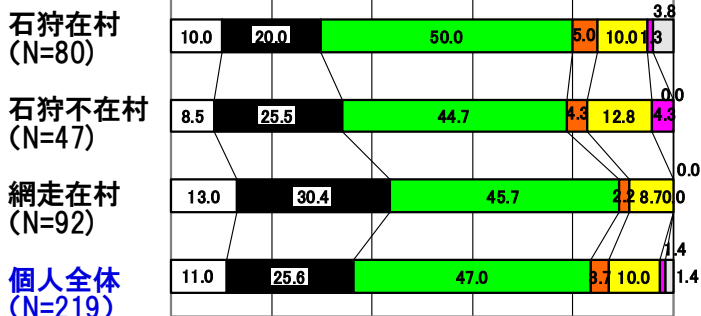
- 1 労働力の一助として
- 2 森林・林業の理解者として
- 3 森林・林業の大切さを社会に伝える情報発信者として
- 4 都市部の住民との交流の一環として
- 5 森林を活用した新たなビジネス（地域振興）の一環として
- 6 その他

森林・林業に関する普及啓発分野で、森林ボランティアに期待

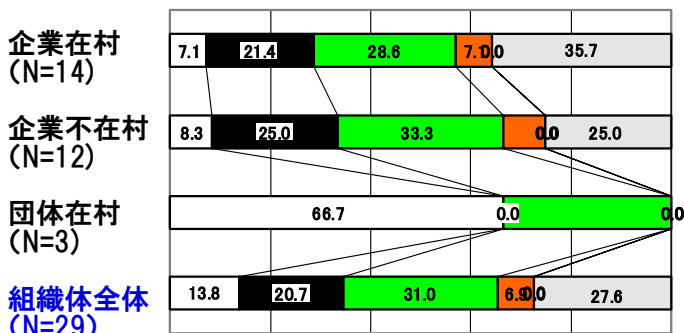
個人・組織体とも、全体では「森林・林業の大切さを社会に伝える情報発信者として」が多く、個人で47%、組織体で約31%を占めました。次いで多いのは、同様に個人・組織体とも、「森林・林業の理解者として」という結果になりました。

一方、「労働力の一助として」とする回答は、個人・組織体とも全体で1割程度と比較的少なく、森林ボランティアに対しては、労働力としての期待よりもむしろ上記のような森林・林業に関する普及啓発の主体（担い手）や客体（受け手）としての期待が大きいことがわかりました。

個人



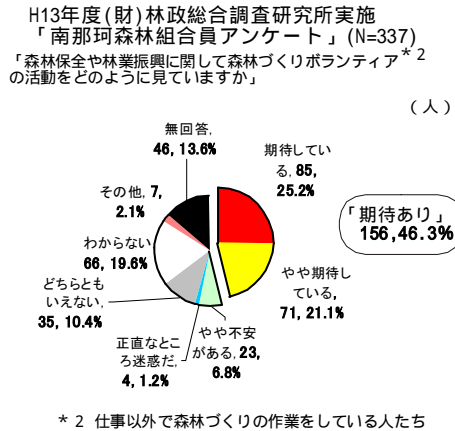
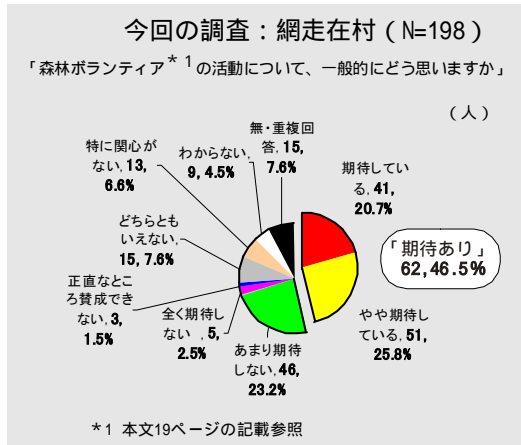
組織体



- 労働力の一助として
- 森林・林業の理解者として
- 森林・林業の大切さを社会に伝える情報発信者として
- 都市部の住民との交流の一環として
- ビジネス（地域振興）の一環として
- その他
- 無回答・重複回答

他調査との比較

森林ボランティアへの評価について：林業地データとの比較



選択肢が若干異なりますが、今回の調査では「期待あり」とする回答は、南那珂地域の結果とほぼ同等の比率が得られました。

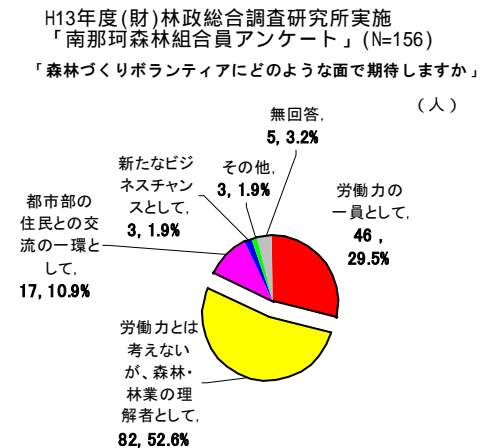
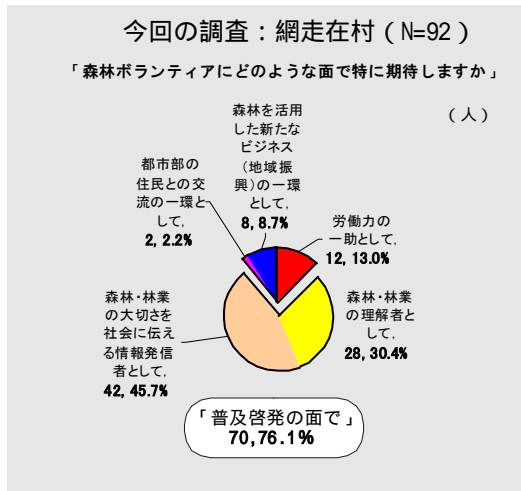
また他の選択肢を大まかに比較すると、今回の調査では「あまり・全く期待しない」、「賛成できない」を合計したボランティアに対する否定的な評価は3割弱となり、南那珂地域の回答比率(否定的評価が1割弱)を上回っていることもわかります。

宮崎県南那珂地域：
森林面積6.5万ha、森林率78%、
弁甲材で有名な鉄肥林業地を形成。

林業地であること、アンケート回答者の約96%が同地域内居住者であることから今回の調査の「網走在村」のデータと比較

森林ボランティアへの期待内容：林業地データとの比較

(①で「期待している」、「やや期待している」とした人のみ回答)



選択肢が若干異なりますが、今回の調査では「森林・林業の理解者として」が約30%、「森林・林業の大切さを社会に伝える情報発信者として」が約46%を占め、この2者を普及啓発の面での期待として合計すると8割弱に達し、南那珂地域の結果(普及啓発面が約半数)を大きく上回る回答が得られたことがわかります。

また他の選択肢をみると、今回の調査では南那珂地域の回答比率と比べ「都市部との交流」としての期待が約1/5、「労働力」としての期待が約1/2と少なくなっています。

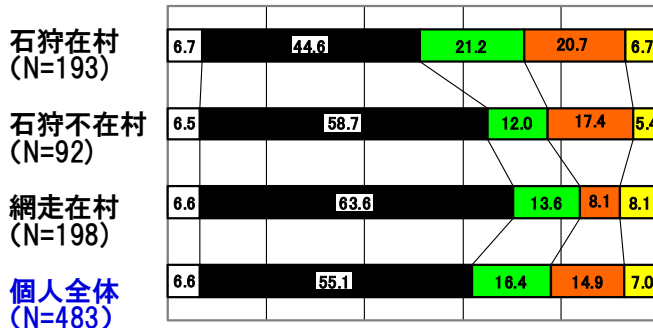
問17 森林ボランティアが所有している森林を利用したいと希望した場合、どうしますか。すでに活動に協力している場合も、ご経験をふまえてご回答ください。

- 1 無条件で提供する
- 2 条件に応じて、納得がいけば提供する
- 3 提供しない
- 4 わからない

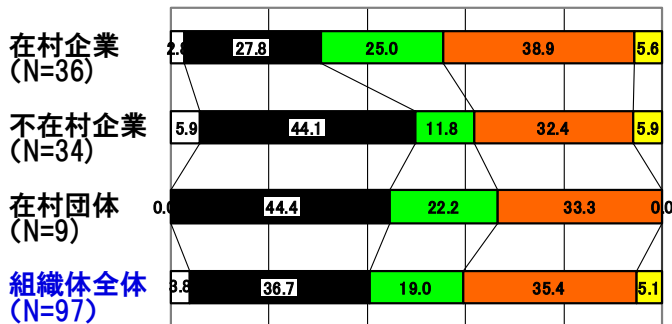
「条件に応じて提供可」個人5割、組織体は「わからない」も同値4割

個人・組織体とも、全体では「条件に応じて、納得がいけば提供する」が多く、個人で約55%、組織体で約37%を占めました。また、組織体ではほぼ同値で「わからない」も多い結果となり、区分別にみると、在村企業では「わからない」が最多であることがわかります。

個人



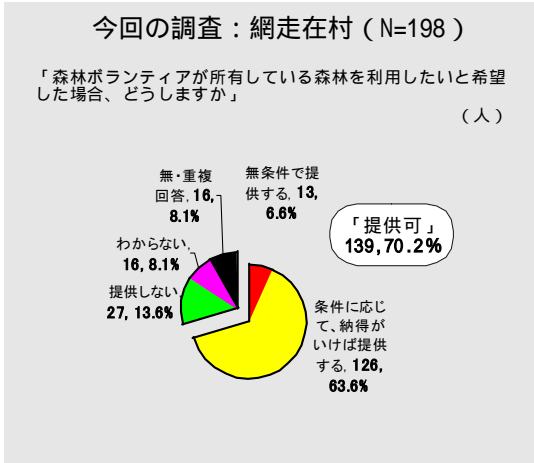
組織体



- 無条件で提供する
- 条件に応じて、納得がいけば提供する
- 提供しない
- わからない
- 無回答・重複回答

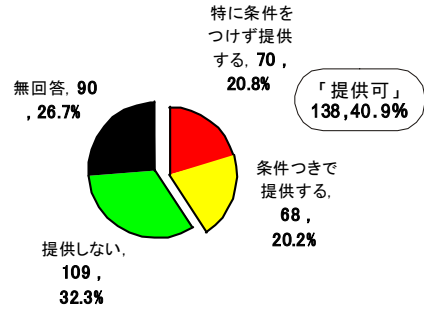
他調査との比較

-1 森林ボランティアへの所有森林提供について：林業地データとの比較



H13年度(財)林政総合調査研究所実施
「南那珂森林組合員アンケート」(N=337)

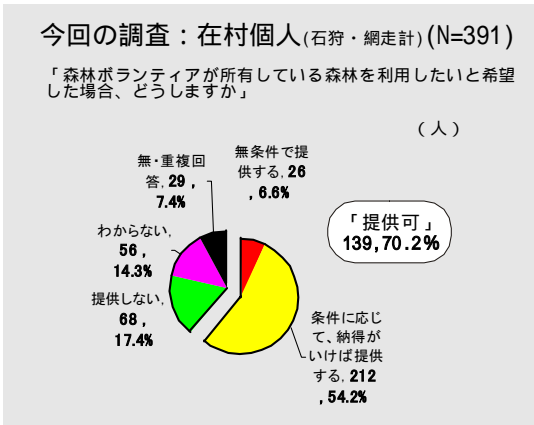
「森林づくりボランティアが活動の場としてあなたの森林を利用したいと希望してきた場合どうしますか」 (人)



選択肢が若干異なりますが、今回の調査では「無条件で提供可」とする回答は南那珂地域の約1/3と少なかったものの、これに「条件つきで提供可」を加えた「提供可」の比率は7割に達し、南那珂地域の結果（提供可が4割）を大きく上回りました。

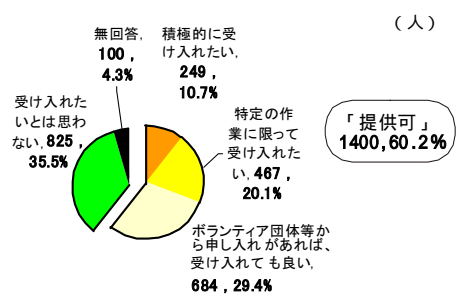
また他の選択肢をみると、今回の調査では「提供しない」の回答比率は、南那珂地域の約1/2と少ないことがわかります。南那珂地域の結果は無回答が全体の1/4以上を占めており、当アンケートの選択肢のいずれかを選ぶことに困難を感じた回答者が多かったことが推測されます。

-2 森林ボランティアへの所有森林提供について：全国データとの比較



H14年度農林水産省実施
「林業生産活動等に関する意向調査」(N=2,325)

「近年、森林ボランティア活動が盛んになってきていますが、保有する山林の森林整備(林業作業等)において、今後、森林ボランティア活動を受け入れたいと思いますか」 (人)



選択肢が異なり比較しづらいですが、今回の調査では「提供可」の比率は7割に達し、全国での結果（提供可が6割）をやや上回りました。

また他の選択肢をみると、今回の調査では「提供しない」の回答比率は、全国での結果の約1/2と少ないことがわかります。

「林業生産活動等に関する意向調査」
対象：所有面積20ha以上の林家。
(所有森林の主な所在地が居住都道府県外の林家を除く)

今回の調査の「石狩在村」「網走在村」を合計したデータと比較
但し両調査の所有面積規模の相違には留意が必要

問18 提供しない理由はなんですか。(前問で「提供しない」とした人のみ回答)

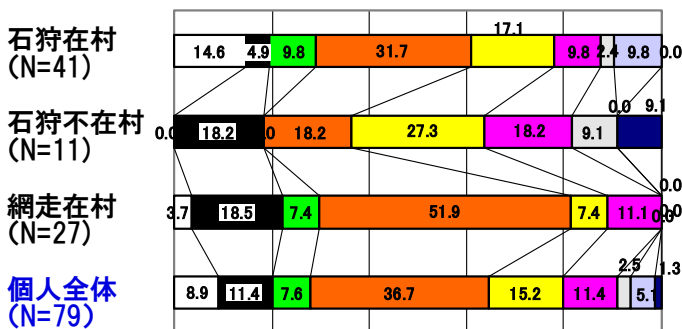
- 1 ボランティアに期待はあるが、自分の森林は、林齢やアクセス（林道の整備状況や交通）などの点で適当ではない
- 2 ボランティアに期待はあるが、自分の森林の提供は不安が大きい
- 3 ボランティアにはそもそもあまり信頼がおけない
- 4 現状で森林の手入れは、十分間に合っている
- 5 森林の手入れ自体に関心がない
- 6 森林以外への転用を考えている
- 7 わからない
- 8 その他

「手入れが間に合っているので提供しない」個人4割、組織体3割

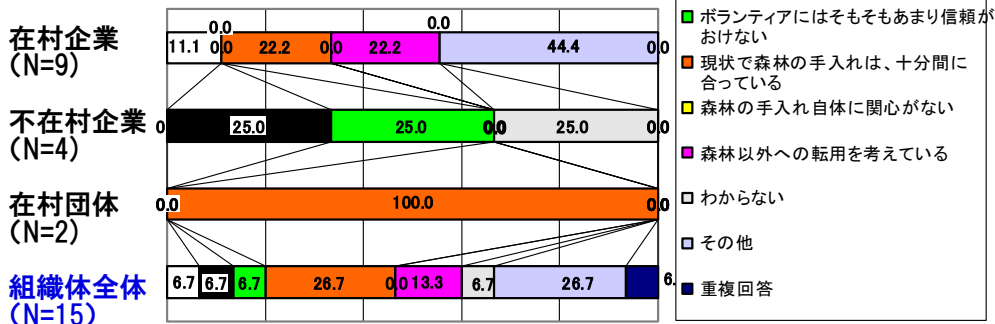
個人は、全体では「現状で森林の手入れは、十分間に合っている」が多く約37%、次いで「森林の手入れ自体に関心がない」が多く約15%を占めました。上位を区分別に見ると、石狩不在村では「森林の手入れ自体に関心がない」が最多となっていること、網走在村では「ボランティアに期待はあるが、自分の森林の提供は不安が大きい」が約19%と多く2位に入っていることがわかります。

組織体では、全体では「現状で森林の手入れは、十分間に合っている」と「わからない」が多く各約27%を占めました。

個人



組織体



- 期待はあるが、当方の森林は適当ではない
- 期待はあるが、当方の森林の提供は不安が大きい
- ボランティアにはそもそもあまり信頼がおけない
- 現状で森林の手入れは、十分間に合っている
- 森林の手入れ自体に関心がない
- 森林以外への転用を考えている
- わからない
- その他
- 重複回答

問19 森林ボランティアに対して、どのようなことに不安や問題を感じますか。

(問17で「わからない」、問18で「ボランティアに期待はあるが、自分の森林の提供は不安が大きい」、「ボランティアにはそもそもあまり信頼がおけない」とした人のみ回答：複数回答3)

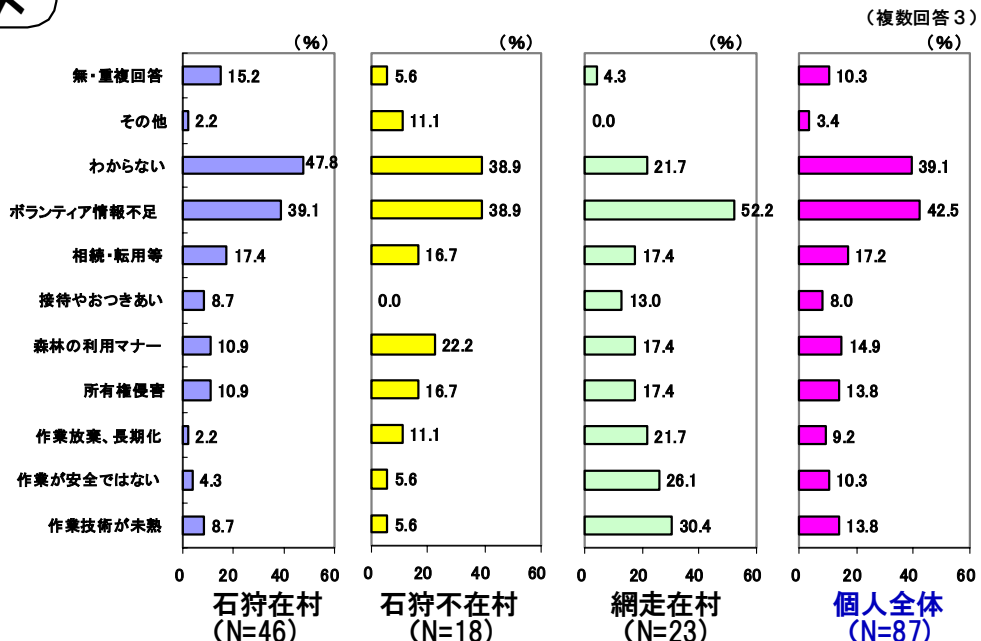
- 1 作業技術が未熟で、作業を頼んでも森林が逆に荒れてしまうのではないかと
- 2 作業が、安全に行われていないのではないかと
- 3 頼んだ作業を途中で放棄したり、作業が長期にわたってしまうのではないかと
- 4 森林を利用させているうちに、所有権まで侵害されるのではないかと
- 5 ゴミや火の始末など、森林を利用するマナーが守られないのではないかと
- 6 受け入れる上での接待やおつきあいなどに気を使わなければいけないのではないかと
- 7 相続、転用、不動産の整理等が起きた場合など、受け入れを続けることができるか約束できない
- 8 情報が不足していて、ボランティアについて、そもそもよくわからない
- 9 わからない
- 10 その他

「情報不足に不安」4割、組織体は「転用等の際に問題」も4割

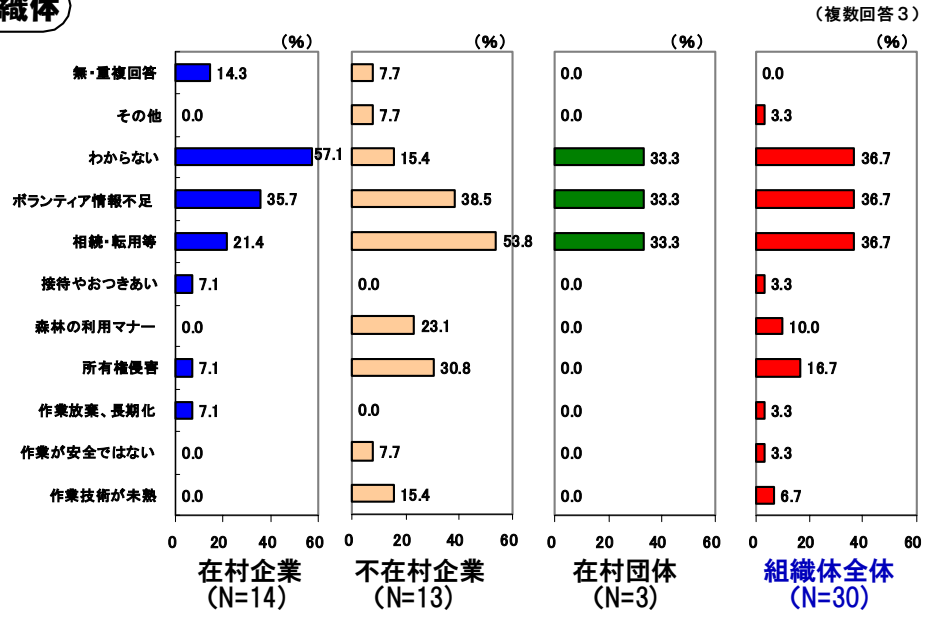
個人は、全体では「情報が不足していて、ボランティアについて、そもそもよくわからない」、次いで「わからない」が多く各40%前後を占めました。上位を区別に見ると、石狩在村では「わからない」が最多であること、網走在村では「作業技術が未熟で、作業を頼んでも森林が逆に荒れてしまうのではないかと」と不安を感じる人が約30%と多く2位に入っていることがわかります。

組織体では、全体では「相続、転用、不動産の整理等が起きた場合など、受け入れを続けることができるか約束できない」、「情報が不足していて、ボランティアについて、そもそもよくわからない」、「わからない」の3者が多く、各約37%を占めました。区別に見ると、在村企業で「わからない」が単独最多、不在村企業で「相続、転用、不動産の整理等が起きた場合など、受け入れを続けることができるか約束できない」といった違いがあることがわかります。

個人

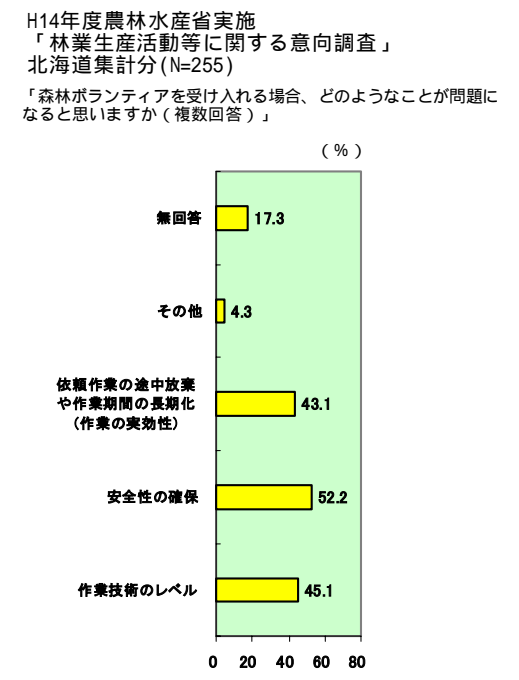
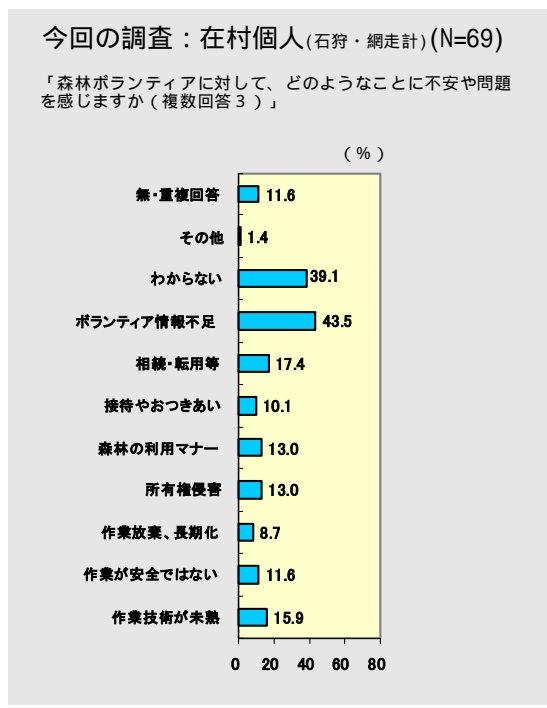


組織体



他調査との比較

森林ボランティアへの森林提供にあたっての不安：道内データとの比較



農林水産省の調査結果では、ボランティアの作業能力に対する不安が多数を占めています。回答形式と選択肢が異なり比較しづらいですが、今回の調査では、そうした作業能力よりもボランティアの存在そのものに対する情報の不足の方が主要な不安である、と多数の人が認識していたことがわかりました。

問20

仮に、森林ボランティアを受け入れられるとした場合、どのような条件が必要だと思いますか。（問17で「条件に応じて、納得がいけば提供する」、問18で「ボランティアに期待はあるが、自分の森林は適当ではない」とした人のみ回答：複数回答）

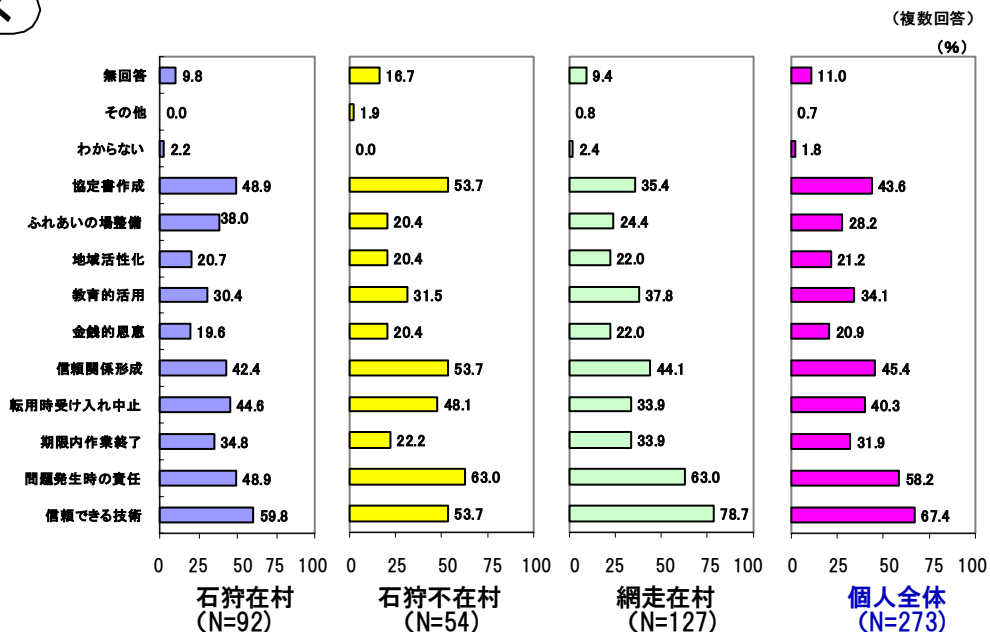
- 1 技術者による指導・監督などがあることで、信頼できる技術で作業が行われること
- 2 火事や怪我等の問題が起きた場合に、先方が責任をもてること
- 3 あらかじめ作業目標などが決められており、期限内に終了すること
- 4 転用などの必要が生じた場合は、ボランティアの受け入れを中止できること
- 5 信頼できる相手かどうか互いに確認でき、信頼関係が十分につくられること
- 6 林地の賃貸料など、自分に金銭的な恩恵があること
- 7 森林・林業について学ぶ場として、効果的に活用されること
- 8 交流の拠点として、人やお金が集まることで地域が活性化すること
- 9 地域の子どもたちが遊びながら森林にふれあえるような整備が行われること
- 10 必要な条件を記載した正式な「協定書（書面）」がつくられること
- 11 わからない
- 12 その他

個人は「信頼できる技術」、組織体は「被災時の責任」「信頼形成」が各7割

個人は、全体では「技術者による指導・監督などがあることで、信頼できる技術で作業が行われること」が多く約67%、次いで「火事や怪我等の問題が起きた場合に、先方が責任をもてること」が多く約58%を占めました。上位を区分別に見ると、石狩在村・不在村では「必要な条件を記載した正式な「協定書（書面）」がつくられること」も50%前後とこれらに次いで多いことがわかります。

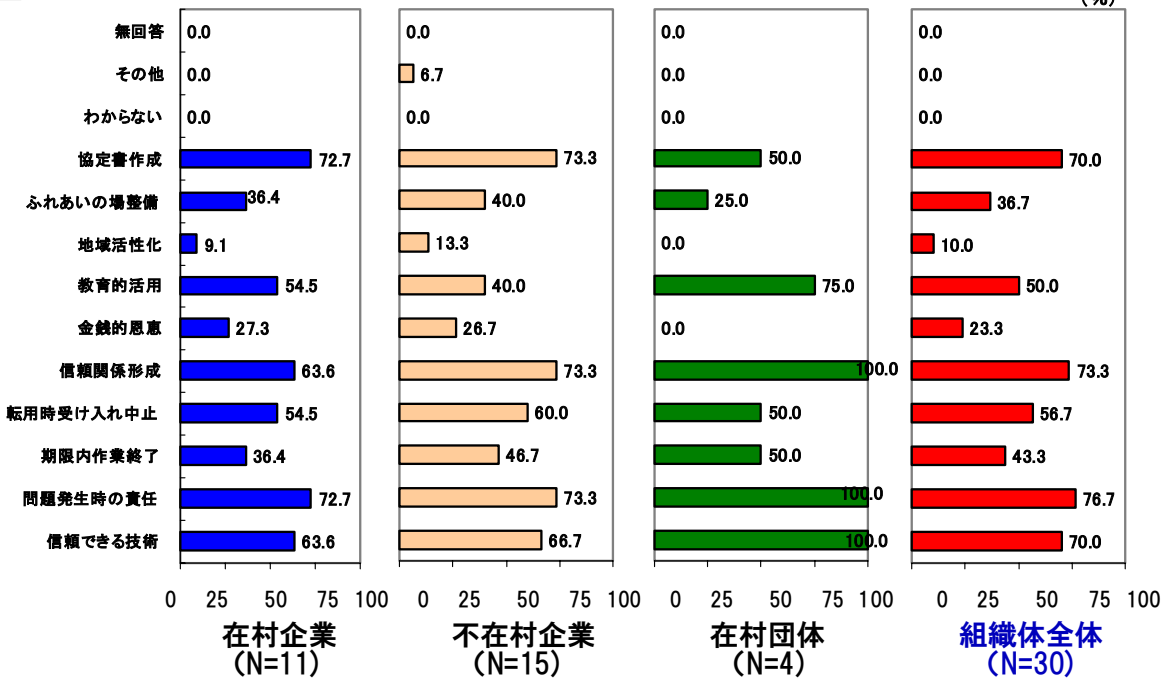
組織体では、全体では「火事や怪我等の問題が起きた場合に、先方が責任をもてること」、「信頼できる相手かどうか互いに確認でき、信頼関係が十分につくられること」が多く、各70%を超えました。

個人



(複数回答)

組織体



問21 所有森林では、森林ボランティアにどのような作業を依頼したいと思いますか。
 問18で「ボランティアに期待はあるが、自分の森林は提供するのに適当ではない」
 を選んだ方は、一般的にボランティアが取り組む作業としてよいと思うものをお答え
 ください。

(上記の他、問17で「無条件で提供する」、「条件に応じて、納得がいけば提供する」とした人のみ回答：複数回答)

- | | | |
|--------------------|------------------|-----------|
| 1 植林 | 2 下草刈り | 3 除伐・つるきり |
| 4 枝打ち | 5 間伐 | 6 地ごしらえ |
| 7 林内の清掃や見回り | 8 作業のための歩道や散策路整備 | |
| 9 長期協定による森林整備全般の作業 | 10 わからない | 11 その他 |

「除伐・つるきり」等、作業種を限って手入れを希望

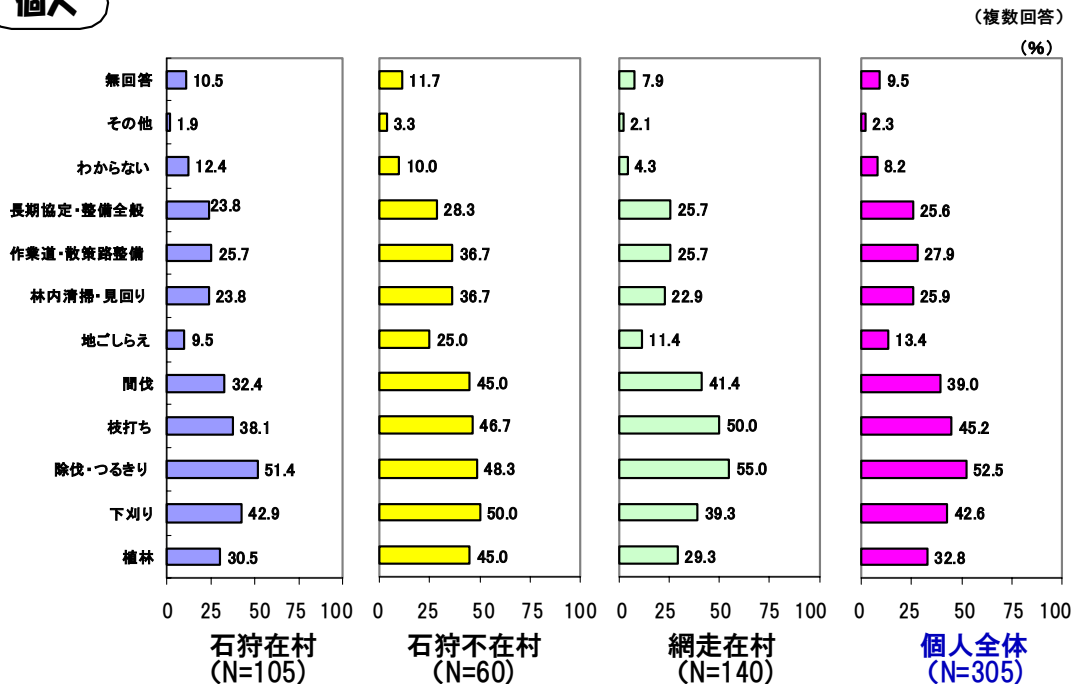
個人は、全体では「除伐・つるきり」が多く約53%、次いで「枝打ち」が多く約45%を占めました。

組織体では、全体では「除伐・つるきり」と「林内の清掃や見回り」が多く、各約42%を占めました。

また、「長期協定による森林整備全般の作業」は個人で約26%、組織体で約21%を占めるに留まり、所有者には比較的短期間に作業種を限って手入れを依頼したいと望む傾向があることがわかりました。

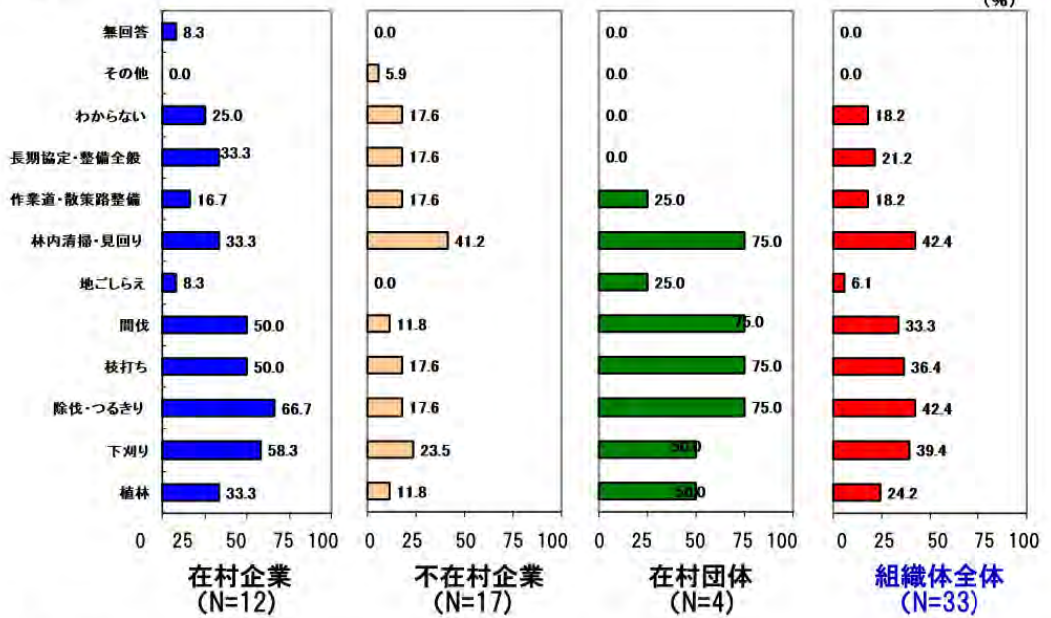
なお、問18で「ボランティアに期待はあるが、自分の森林は林齢やアクセス等の点で提供するのに適当ではない」を選択して本問に回答した数は、個人は全体の2.3%（7件）、組織体は3.0%（1件）でした。

個人



組織体

(複数回答)
(%)



他調査との比較IV

⑤ 森林ボランティアに依頼したい作業：全国データとの比較

今回の調査：在村個人 (石狩・網走計) (N=245)

H14年度農林水産省実施
「林業生産活動等に関する意向調査」(N=1,399)

「所有森林では、森林ボランティアにどのような作業を依頼したいと思いますか (複数回答)」

「森林ボランティアにはどのような作業を依頼したいと思いますか (複数回答)」



今回の調査では、全国での結果と比べ各作業を依頼したいとする回答がやや少ない傾向 (間伐、枝打ち、下刈りで約2/3など) が見られます。長期協定による森林整備全般的な作業を依頼したいとする回答は、全国とほぼ同程度の比率が得られたことがわかります。

問22 森林の提供以外で、森林ボランティアに協力できるとしたら、どのような協力ができますか（複数回答）。

個人

- 1 講師として作業を教える
- 2 作業と一緒に参加する
- 3 道具類の貸し出し
- 4 所有者同士のつきあいなどを利用して、ボランティアが利用可能な場所を紹介・斡旋する
- 5 交流会などイベントに参加する
- 6 特に協力はしたくない
- 7 わからない
- 8 その他

組織体

- 1 従業者を講師として派遣して、作業を教える
- 2 従業者と一緒に作業に参加させる
- 3 会員・構成員に呼びかけ、一緒に作業に参加してもらう
- 4 道具類の貸し出し
- 5 森林所有者同士、団体同士のつきあいなどを利用して、ボランティアが利用可能な場所を紹介・斡旋する
- 6 従業者を交流会などイベントに参加させる
- 7 会員・構成員に呼びかけ、交流会などイベントに参加してもらう
- 8 寄付など資金協力
- 9 特に協力はしたくない
- 10 わからない
- 11 その他

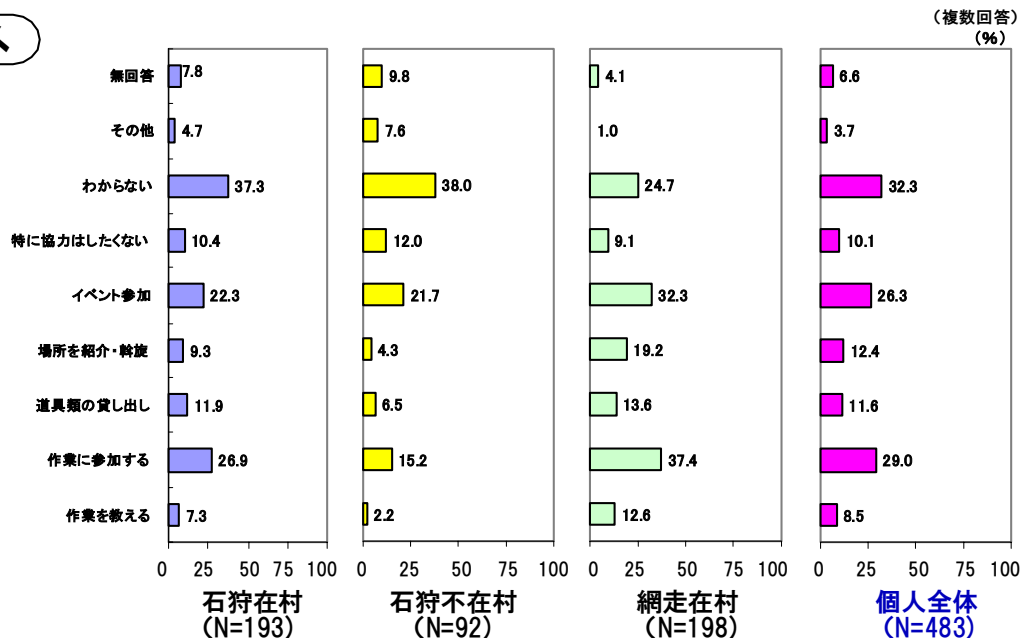
協力意志はあるものの、協力の方法は「わからない」が多い

個人は、全体では「わからない」、「作業と一緒に参加する」、「交流会などイベントに参加する」が多く各30%前後を占めました。上位を区分別にみると、石狩在村・不在村で「わからない」が単独最多であり、一方網走在村では「作業と一緒に参加する」が最多であるといった違いがみとめられます。

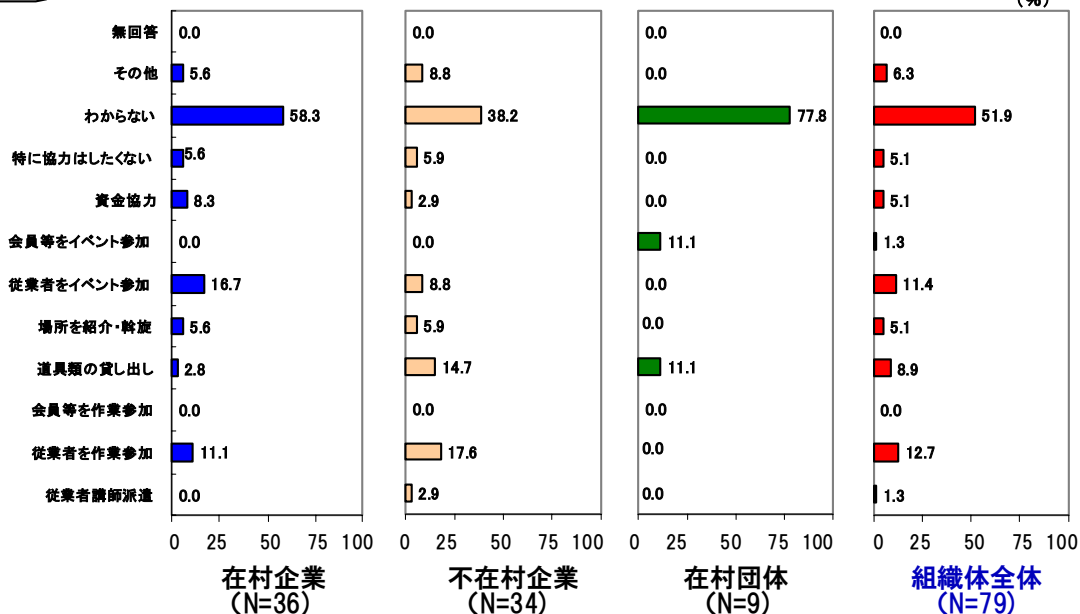
組織体では、全体では「わからない」が抜きん出て多く約52%を占めました。

個人・組織体とも「特に協力はしたくない」は全体の1割程度に留まりました。

個人

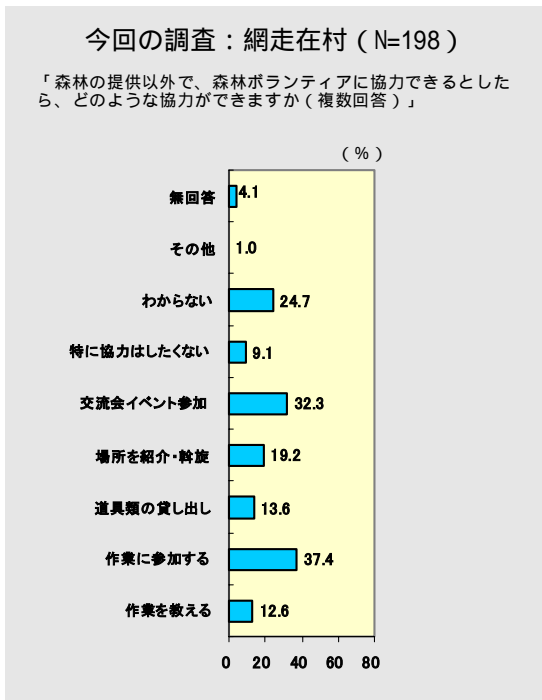


組織体



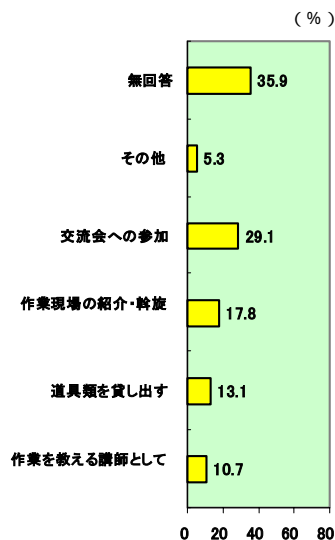
他調査との比較

森林提供以外で森林ボランティアにできる協力について



H13年度(財)林政総合調査研究所実施
「南那珂森林組合員アンケート」(N=337)

「林地提供以外に、森林ボランティアに協力する場合、どのような協力ができますか (複数回答)」



技術や物品、人脈等何らかの資源の提供よりも、作業やイベントに共に参加するといった「交流」の形で回答が多数であった今回の調査結果は、南那珂地域の結果とほぼ同じ傾向であることがわかります。

情報提供・交流

- ・森林ボランティアというのは、始めて知った。もう少し、CM等でアピールするのはいいのではないかと(網走、40代、団体職員)。
- ・森林管理や森林ボランティアに関してまったくわからないので、おしえてほしい(石狩在村、40代、団体職員)。
- ・ボランティアによる森林管理は良い方法と思うが活動の具体的な例を紹介し理解を深めては(石狩在村企業、恵庭市、その他のサービス業)。
- ・交流会等に参加したい(網走、70代、農林漁業)。

森林ボランティアへの期待

- ・高齢化により、森林管理などボランティアに依頼出来れば以後安心です(網走、70代、無職)。
- ・森林は一個人だけのものではなく国の貴重な財産と心得ており、豊かな森林を保護育成する事は大切。森林ボランティアの考え方、内容が今一つ分からないので一概に結論は出せないが、今後に期待したい(石狩不在村、60代、商業・サービス業)。
- ・森林管理は自然を大切にすることで大変重要な事です。どうか、森林ボランティアを組織化して、私有地だけでなく全ての山を管理する必要が来ている様に思います(石狩在村、60代、自由業)。
- ・当法人の山林は、すでに市民の森としてお貸ししています(石狩不在村企業、千葉県柏市、社会教育関係団体)。

所有権侵害に不安

- ・山林は農地の周りに位置しているので、基本的には農地として利用したい。条件的に無理なところは再利用を考えてもいいが、他人が集まるようになると制約を受けるので面倒。例えば自然保護だとか所有権を侵害するような事を言うてくる(石狩在村、60代、農林漁業)。
- ・ナショナルトラストAと云う団体が一口500円で基金集めをしているようです。私の土地には小鳥のエサ台、リスのエサ等も設置してあります。私には連絡もなく承知した覚えもありません。これは森林ボランティアとは違うのでしょうか。その団体の資料では私のところは買い上げ最優先地域となっております(石狩不在村、60代、無職)。

森林ボランティアの技術

- ・私の森林は、森林組合と長期施業委託契約を締結しています。森林ボランティアのリーダーは専門知識を修得して活動してほしい(石狩在村、70代、農林漁業)。
- ・林業はボランティア的遊び半分では出来ないの、森林管理はプロに任すべきです(石狩在村、60代、農林漁業)。
- ・ボランティアの一時的な気持ちでは木が育つとは思えないので、30年～50年をかけて育てていく気持ちでやらなければいけないと思います(石狩不在村、70代、農林漁業)。
- ・技術などの点でボランティアにはあまり期待をしていない(石狩在村、70代、農林漁業)。
- ・森林ボランティアだけでは難しいので、森林組合の技術者の協力の上、参加するとよい(網走、60代、農林漁業)。
- ・林業マンとしての知識や技術、そして忍耐と体力は、何年もの苛酷な体験を通して身につけるものです。そう言う意味では、森林の保育、管理を森林ボランティアに期待するのは基本的に困難ではないかと思えます。しかし、ボランティアを通して森林への理解を深めてもらうことはとても意義があります。森林・林業の現状と原因を広く知ってもらい、有効な対策を講じるための知恵を出し合うべきでしょう(網走、50代、公務員)。

教育などに活用したい

- ・環境学習・森林育成の重要な場として提供し、奉仕したい。林業経営が成功するような環境整備を国の為の奉仕を行えるようにする法的・財政的整備が必要である(石狩在村、70代以上、無職)
- ・住宅地の中にある林なので、固定資産税・相続税もばかにならず、いつまで持ち続けられるか不安もある。下刈等、アルバイトの方をお願いしてやっているが、地元の子供達に解放して自然に親しんでもらう機会が多くなればとも思っている(石狩在村、60代、商業・サービス業)。

引用文献

- フォレスト21連絡協議会 .2000. フォレスト21[さがみの森]: 森林ボランティアによる新しい森づくりへの挑戦 .95p.
- 羽鳥孝明 .2001. 遊ぶ! レジャー林業: 都市から見える森林がある . 日本林業調査会 .189p.
- 林善茂, 紺谷憲夫 .1980. 北海道の生業: 農林業 . 林業 .126-179.
- 北海道立林業試験場 .2004. 2004年台風被害に関する調査速報 . 光珠内季報 .137: 1-12.
- 北海道林業改良普及協会 . - 間伐: カラマツ編 . 北海道立林業試験場監修 .21p.
- 北海道林業改良普及協会 .2001. 森林林業木材基本用語の解説 .152p.
- 柿澤宏昭 .2004. 第6分科会私たちの森をつくる: 森林利用者と所有者のあり方 . 森林と市民を結ぶ全国の集い北海道実行委員会 . 地域に根ざした: 森とヒトとのおつきあい . 森林と市民を結ぶ全国の集い北海道2003報告書 .131-143.
- 勝川俊雄 .2004. 順応的管理とは何か?: 趣旨説明に代えて . 東京大学海洋研究所共同利用シンポジウム . 順応的管理の理論と実践 .<http://cod.ori.u-tokyo.ac.jp/~kaiseki/ja/doc/abstract041105.pdf>
- 木俣知大 .2003. 第2章第3~4節「市民参加の森づくり活動」の社会的効果, 「市民参加の森づくり団体」の社会的効果 . 林野庁 . 森林の保健・文化・教育的利用の効果等に関する調査報告書 .102-142.
- 倉本 宣 .2004. 市民による里山の維持管理 . 森林科学 42: 10-17.
- 倉本 宣, 永井敬子 .2002. 桜ヶ丘公園雑木林ボランティアの活動と組織に対する意識 . ランドスケープ研究 .65-5: 455-460.
- 真柴孝司 .2002. 森づくりワークブック: 人工林編 . 全国林業改良普及協会 .195p.
- 真柴孝司 .2003. 森づくりワークブック: 雑木林編 . 全国林業改良普及協会 .190p.
- 文部科学省 .1993. 育林 . 実教出版 .324p
- 森本幸裕 .2001. 生き物の視点 . 森本幸裕, 亀山章 . ミティゲーション: 自然環境の保全・復元技術 .104-110.
- 長坂 有 .1999. 河畔林や水辺草本の役割とは . 北海道・北海道立林業試験場監修 . 治山技術者のための森林整備技術マニュアル .52-53.
- 長坂 有 .2002. 魚は森へ何を運び、森は何を返すか? 北海道林業改良普及協会 . 平成13年度森づくり活動発表報告集 .66-67.
- 中川重年 .2004. 森づくりテキストブック: 市民による里山林・人工林管理マニュアル . 山と溪谷社 .223p.
- NPO法人地球緑化センター .2005. 第15分科会: 森づくりにおける行政と推進団体の役割 . 第10回森林と市民を結ぶ全国の集い報告書: 森とともに創るこれからの社会 . 第10回森林と市民を結ぶ全国の集い実行委員会 .62-64.
- 岡恒一, 吉川浩之, 箱崎陽一 .2005. 札幌南高校の学校林活動: 総合的な学習の時間の中で . 北海道生物教育会誌 .27:26-30.
- 桜ヶ丘公園管理事務所 .2002. 平成13年度桜ヶ丘公園雑木林ボランティア活動記録集 .174p.
- 桜ヶ丘公園雑木林ボランティア .2001. 雑木林の再生: ボランティア10年の歩み .226p.
- 齋藤和彦 .2003. 第7章漁民の森づくり活動の展開について . 山本信次 . 森林ボランティア論 . 日本林業調査会 .159-182.
- (社)国土緑化推進機構 .1998. 森林ボランティアの風: 新たなネットワークづくりに向けて . 日本林業調査会 .251p. 東京農工大学 .1987. 林業実務必携 . 朝倉書店 .607p.
- 林野庁 .2004. 森林づくり活動についてのアンケート集計結果 .22p.
- 労働省 .1998. 伐木作業安全衛生必携 . 林材業労災防止協会 .202p.
- 上野圭司, 山本信次 .2002. 森林ボランティア団体の実態とNPO法人化の動向 . 東北森林科学会誌 .7(1): 1-11. 柳沼武彦 .1993. 木を植えて魚を殖やす . 家の光協会 .253p.
- 柳沼武彦 .1999. 森はすべて魚つき林 . 北斗出版 .246p.
- 雑木林研究会 .2004. ふどうの森クラブ . 東海版行ってみようよ! 森の学校 . 風媒社 .130-133.

第1章に掲載した団体のHP

いばらき森林クラブ <http://www10.ocn.ne.jp/~shinrin/>
いしかり森林ボランティア「クマゲラ」 <http://www.community.sapporocdc.jp/comsup/kumagera/>
北広島森林ボランティア「メイプル」 <http://www.geocities.jp/morigreen2001/>
北本雑木林の会 <http://www2.tba.t-com.ne.jp/zoukibayashi/index.htm>
北の里山の会 <http://park17.wakwak.com/~kitanosatoyama/>
NPO法人 どんぐりネットワーク <http://www.dx.sakura.ne.jp/%7Edonguri/>
NPO法人 穂の国森づくりの会 <http://www.honokuni.org/>
NPO法人 樹木・環境ネットワーク協会 聚 <http://www.shu.or.jp/Home/HomeTop.html>
NPO法人 埼玉森林サポータークラブ <http://www.supporter-club.org/>
森林クラブ 横浜/丹沢 http://www.geocities.jp/shinrin_club1983/
多摩の森・大自然塾 <http://www.moridukuri.jp/daishizenjuku/>

その他の引用ウェブページ

第58回全国植樹祭 <http://www.pref.hokkaido.jp/srinmu/syokujusai/>
フォレスト21 [さがみの森] http://www.jca.apc.org/morizukuri/sagami/sagami_frm.htm
北海道立林業試験場「2004年台風18号被害に関する調査速報」
<http://www.hfri.bibai.hokkaido.jp/news/t18sokuhou/sokuhoutop.htm>
茨城県「普及指導の現場から」
<http://www.pref.ibaraki.jp/bukyoku/nourin/ringyo/fukyu/mini46-60/fukyu55.htm>
「イトコーの家」 http://www.itoko.co.jp/ho_gal006.html
「持続可能な森林経営のための勉強部屋」
homepage2.nifty.com/fujiwara_studyroom/sinrin/mikawa&WM/gaiyou.doc
http://homepage2.nifty.com/fujiwara_studyroom/sinrin/toyohasi/ninsyokijun.files/frame.htm#slide0007.htm
香川県「どんぐり銀行」 <http://www.pref.kagawa.jp/rinmu/donguri/index.htm>
香川県「里山オーナー制度」 <http://www.pref.kagawa.jp/midoriseibi/satoyama/index.htm>
神川町・神泉総合支所
http://www.vill.kamiizumi.saitama.jp/cgi-bin/odb-get.exe?WIT_template=AC020000&Cc=7d521709252b026
国土交通省都市・地域整備局地方整備課「地域づくり事例集：北海道漁協女性部連絡協議会」
http://www.chiikidukuri.net/hokokusyo/02tiikidukuri_hakken2/23_sapporo.pdf
NPO法人森づくりフォーラム www.jca.apc.org/morizukuri/pages/jimotogaku031004.doc
札幌市環境局みどりの推進部「森林ボランティア」
<http://www.city.sapporo.jp/ryokuka/midori/volunteer/index.html>
札幌広域圏組合 <http://www.community.sapporocdc.jp/comsup/>
札幌市南区芸術の森地区町内会連合会「芸森昔話」
<http://www.galaxy.city.sapporo.jp/minami/geijutsunomori/mukashi/mukashi01.html>
中部森林管理局名古屋分局 http://www.kokuyurin.maff.go.jp/action/nagoya/nago_15_7.html
林野庁「森林の流域管理システム」 <http://www.rinya.maff.go.jp/seisaku/sesakusyukai/ryuiki/>

謝辞

本書を作成するにあたって、森林ボランティアに取り組む団体、および森林ボランティア支援や森林保全を担当する行政機関、公社、森林組合の皆様から多大なるご協力を頂きました。以下にお名前を掲載し、深くお礼申し上げます。

調査協力

いしかり森林ボランティア「クマゲラ」	網走西部森づくりセンター
石狩湾漁業協同組合女性部厚田地区	網走東部森づくりセンター
いばらき森林クラブ	阿見町経済建設部経済課農林係
NPO 法人 埼玉森林サポータークラブ	阿見町都市開発部都市計画課
NPO 法人 樹木・環境ネットワーク協会 聚	石狩森づくりセンター
NPO 法人 どんぐりネットワーク	茨城県県南地方総合事務所土浦林業指導所
NPO 法人 穂の国森づくりの会	茨城県農林水産部林政課
NPO 法人 森づくりフォーラム	香川県環境森林部みどり整備課
カッコウの里を語る会	上川南部森づくりセンター
間伐ボランティア「札幌ウッディーズ」	上川南部森づくりセンター富良野事務所
北の里山の会	北本市まちづくり推進部都市計画課
北広島森林ボランティア「メイプル」	埼玉県農林部森づくり課
北本雑木林の会	埼玉県環境防災部みどり自然課
コープさっぽろ 植樹みどりグループ	財団法人北本市公園緑地公社
桜ヶ丘公園雑木林ボランティア	桜ヶ丘公園管理事務所
森林クラブ 横浜 / 丹沢	札幌市森林組合
空知森林サポーターの会	社団法人かながわ森林づくり公社
第13回全国雑木林会議 '05inぎふ	空知森づくりセンター
多摩の森大自然塾 鳩ノ巣フィールド連絡協議会	中部森林管理局愛知森林管理事務所
ふどうの森クラブ	東京都産業労働局農林水産部林務課
北海道札幌南高等学校	東京都環境局自然環境部緑環境課
南足柄地域育林隊	豊橋市企画部企画課
レディース100年の森 林業グループ	東三河農林水産事務所林務課
	北海道水産林務部森林環境室森林活用課
	南富良野町森林組合

協働の森づくり
「道民参画による森林づくり活動運営支援システムの開発」報告書
平成 18 年 3 月発行

編集・発行
北海道立林業試験場 森林環境部 保健機能科
〒 079-0198 美唄市光珠内町東山
TEL 0126-63-4164 FAX 0126-63-4166